

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(20)

東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT間)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

まち だ ぼり い せき
町 田 堀 遺 跡 2

(鹿屋市串良町)

2018年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



町田掘遺跡遠景（南東から）



古墳時代 土器集合

序 文

鹿屋市串良町に所在する町田堀遺跡は、東九州自動車道の建設に伴い、平成 25～28 年度にかけて発掘調査が実施された遺跡です。

本遺跡の調査報告書については、平成 27 年度に平成 25 年度の記録を刊行しました。今回の報告書は平成 26～28 年度分の調査記録になります。

町田堀遺跡では、平成 25 年度に縄文時代後期から古代までの遺構や遺物が発見されました。特に、縄文時代後期の堅穴住居跡や埋設土器、ヒスイ製の垂飾品や石刀、古墳時代における南九州特有の墓である地下式横穴墓が 88 基発見されるなど、貴重な資料の発見は大いに注目されました。

平成 26～28 年度の調査でも、同様な時代の遺構や遺物が発見され、遺跡の広がりが確認されました。また、縄文時代早期の遺構・遺物も新たに発見され、本遺跡の年代がさらにさかのぼることが判明しました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

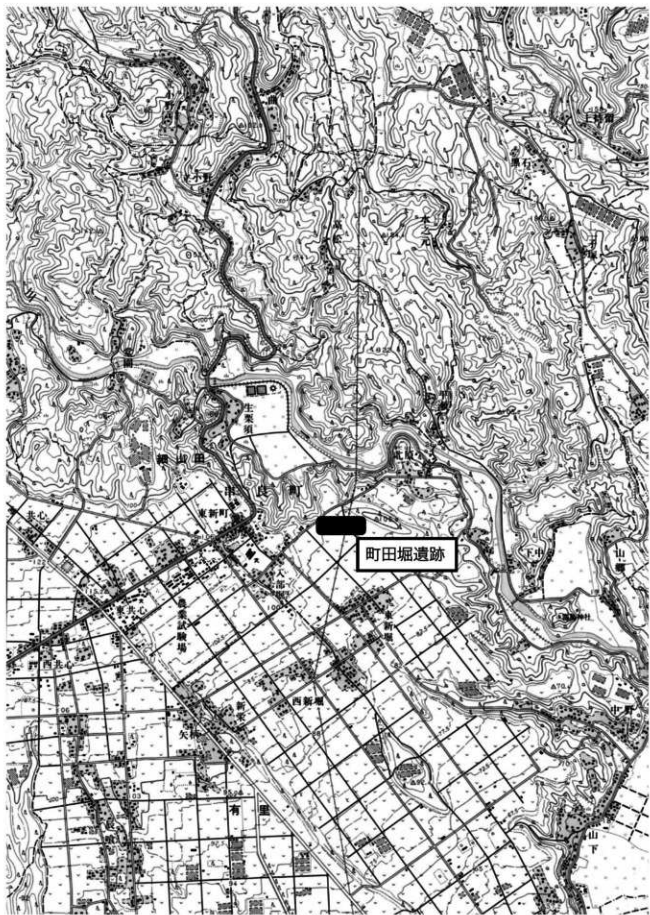
最後になりましたが、本県の埋蔵文化財保護のために御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、調査中に御指導いただいた先生方、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 前迫 亮一

報告書抄録

ふりがな	まちだほりいせき に							
書名	町田堀遺跡 2							
副書名	東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編集者名	繁昌正幸 樋口めぐみ							
編集機関	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-70-0574 FAX0995-70-0576							
発行年月	2018年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
まちだほりいせき 町田堀遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやくしんら ちよう 鹿屋市串良 町 ほそやまだ 畑山田	46203	203-300	31° 26' 41"	130° 55' 55"	事前調査 2014. 8. 01 ～2014. 11. 28 本調査 2015. 6. 03 ～2014. 1. 28 2014. 8. 04 ～2014. 10. 28 2015. 12. 11 ～2016. 2. 25 2016. 5. 15 ～2017. 2. 24	17.515	東九州自動車道 (志布志IC～鹿 屋串良JCT間) 建設に伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
町田堀遺跡	散布地	縄文時代 早期	集石遺構		中原式土器、下割釜式土器、窯ノ神式土器、打製石斧、磨石			
	集落 散布地	縄文時代 後期	堅穴住居跡、埋設土器、石器集積遺構、土坑		中岳Ⅱ式土器、打製石斧、打製石鏃、剥片石器、管玉、磨石			
	散布地	縄文時代 晩期			入佐式土器、黒川式土器			
	集落 散布地	弥生時代	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑		矧目突帯文土器、入来式土器、山ノ口式土器、中津野式土器、磨製石鏃			
	地下式横 穴墓群 散布地	古墳時代	地下式横穴墓、溝、土器破砕祭祀(空間)遺構		刀子、東原式土器			
	散布地	古代以降 および時 代不詳	掘立柱建物跡、道跡		土師器(甕・坏)			
要約	<p>町田堀遺跡は、標高90mの笠野原台地の北縁辺部に位置し、遺跡の北側と東側を串良川が蛇行して流れる。本遺跡は縄文時代早期から古代にかけての複合遺跡である。</p> <p>縄文時代早期は集石遺構が多く検出され、中原式土器や下割釜式土器などが出土した。縄文時代後期は堅穴住居跡が4軒、埋設土器が3基検出され、住居跡からは中岳Ⅱ式土器が出土している。縄文時代晩期は遺構は検出されなかったが、遺物が少量出土した。弥生時代では、堅穴住居跡が2軒と掘立柱建物跡が1棟検出された。1軒の住居跡からは後期終末期に位置けられている中津野式土器が出土した。古墳時代では、南九州特有の地下式横穴墓が4基検出され、過年度の調査と併せて92基の地下式横穴墓となった。町田堀遺跡では南九州で初めて円形周溝を伴う例が確認され、大隅地域や南九州の古墳時代の在り方を考える上で貴重な資料といえる。時代は不詳であるが、掘立柱建物跡が5棟検出され、そのうちの4棟は2間×2間の総柱建物である。</p>							



町田堀遺跡位置図 (1/25,000)

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道(志布志IC～鹿屋串良JCT間)建設に伴う町田堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、平成25年～28年度にかけて、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 4 整理・報告書作成事業は、平成26～29年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 5 本書は平成26～28年度に発掘調査を実施した成果の記録である。
- 6 掲載遺物の番号は通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の遺物番号は一致する。
- 7 検出された竪穴住居跡は縄文時代4軒、弥生時代2軒、掘立柱建物跡は弥生時代1棟、時代不詳5棟であるが、発掘調査時の番号を各時代の住居跡番号及び掘立柱建物跡番号に変更して掲載した。
- 8 地下式横穴墓は4基検出され、発掘調査時は発見された順に番号を付したが、本報告書では番号を付し直して掲載することとした。
- 9 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。土器は1/3を基本とするが、大型の埋設土器や二重口縁壺等は1/4とした。石器は小型の石鏃等は原寸、石斧等は1/3、大型の石皿等は1/4とした。
- 10 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 11 遺物注記で用いた遺跡記号は「マチ」である。
- 12 本書で用いた方位は全て磁北である。
- 13 発掘作業における写真撮影は調査担当者が行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。
- 14 平成26年度の発掘調査は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託した。
- 15 遺構の実測図作成・遺物分布図作成及びデジタルトレースの一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行った。
- 16 出土遺物の実測・拓本・トレースは、繁昌・樋口が整理作業員と協力して行った。また、石器の実測は、大成エンジニアリング株式会社に委託したほか、繁昌が整理作業員と協力して行った。
- 17 出土遺物の写真撮影は辻明啓・吉岡康弘が行った。
- 18 金属製品(鉄器)の保存処理は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの武安雅之が行い、実測・トレースは、樋口が整理作業員と協力して行った。
- 19 本報告書に係る年代測定及び種実・樹種同定の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

20 本書の編集は、整理作業員の協力を得て繁昌・樋口が行った。執筆の担当は以下のとおりである。

- 第1章 樋口
- 第2章 樋口
- 第3章 樋口、繁昌
- 第4章 第1節 樋口
第2節 繁昌
第3節-1 樋口
-2～6 繁昌
- 第5章-1～3 株式会社パレオ・ラボ
-4 武安
- 第6章 繁昌

- 21 出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。
- 22 遺物出土のドット図は縄文早期のもののみ作成した。V層より上位はゴボウ栽培のためのトレンチャー等による擾乱が著しく、遺物の残存状況が良くなかったために作成しなかった。

凡 例

銅掛け

赤色顔料：
丹塗り土器：

煤の付着：
焦げの付着：

黒 斑：

遺構断面：
調査範囲：
時代別範囲

遺構の略号(観察表で使用)

S I：竪穴住居跡
S J：埋設土器
S T：地下式横穴墓
S K：土坑
P：ピット(柱穴)

遺構名

- 第180図 ()なし：本報告書掲載
()あり：2016年3月刊の報告書掲載
- 第181図 ゴシック体：本報告書掲載
明朝体：2016年3月刊の報告書掲載

目 次

巻頭図版
序 文
報告書抄録
例言・凡例

第1章 発掘調査の経過	1	第2節 層序について	18
第1節 調査に至るまでの経緯	1	第4章 発掘調査の成果	30
第2節 事前調査	1	第1節 縄文時代早期の調査	30
第3節 本調査の経過	1	第2節 縄文時代後・晩期の調査	65
第4節 整理作業・報告書作成	3	第3節 弥生時代の調査	107
第2章 遺跡の位置と環境	6	第4節 古墳時代の調査	126
第1節 地理的環境	6	第5節 II層の調査	159
第2節 歴史的環境	6	第6節 II層ほか出土の石器	184
第3節 東九州自動車道関連の遺跡	8	第5章 自然科学分析	215
第4節 遺跡及び遺跡周辺の地形	8	第1節 放射性炭素年代測定	215
第3章 発掘調査の方法と層序	16	第2節 町田堀遺跡から出土した炭化種実	218
第1節 発掘調査の方法	16	第3節 町田堀遺跡出土炭化材の樹種同定	221
		第4節 町田堀遺跡出土の赤色顔料について	224
		第6章 総括	226
		写真図版	239

挿図目次

第1図 年度別調査範囲図	5	第24図 縄文早期5号集石遺構・出土遺物	37
第2図 周辺遺跡位置図	9	第25図 縄文早期6号集石遺構・出土遺物	38
第3図 東九州自動車道関連遺跡	11	第26図 縄文早期7号集石遺構	38
第4図 町田堀遺跡調査範囲図	17	第27図 縄文早期8号集石遺構	39
第5図 標準土層図	18	第28図 縄文早期9号集石遺構・出土遺物	40
第6図 土層断面図1	19	第29図 縄文早期10号集石遺構・出土遺物	40
第7図 土層断面図2	20	第30図 縄文早期11号集石遺構・出土遺物	41
第8図 土層断面図3	21	第31図 縄文早期12号集石遺構・出土遺物	42
第9図 土層断面図4	22	第32図 縄文早期13号集石遺構・出土遺物	43
第10図 土層断面図5	23	第33図 縄文早期14号集石遺構・出土遺物	44
第11図 土層断面図6	24	第34図 縄文早期15号集石遺構	44
第12図 土層断面図7	25	第35図 縄文早期16号・17号・18号集石遺構	45
第13図 土層断面図8	26	第36図 縄文早期19号集石遺構・出土遺物	46
第14図 土層断面図9	27	第37図 縄文早期20号集石遺構	47
第15図 土層断面図10	28	第38図 縄文早期の土器1	48
第16図 土層断面図11	29	第39図 縄文早期の土器2	49
第17図 縄文時代早期集石遺構位置図	31	第40図 縄文早期の土器3	50
第18図 IX層上面カウンター図	32	第41図 縄文早期の土器4	51
第19図 縄文早期遺物ドット図	33	第42図 縄文早期の土器5	52
第20図 縄文早期1号集石遺構・出土遺物	34	第43図 縄文早期の土器6	53
第21図 縄文早期2号集石遺構・出土遺物	35	第44図 縄文早期の土器7	54
第22図 縄文早期3号集石遺構・出土遺物	36	第45図 縄文早期の土器8	55
第23図 縄文早期4号集石遺構・出土遺物	37	第46図 VI層出土の石器1	56

第 47 図	Ⅷ層出土の石器 2	57	第 95 図	弥生時代遺構位置図	108
第 48 図	Ⅷ層出土の石器 3	58	第 96 図	1号竪穴住居跡 1	109
第 49 図	Ⅷ層出土の石器 4	59	第 97 図	1号竪穴住居跡 2	110
第 50 図	Ⅷ層出土の石器 5	60	第 98 図	1号竪穴住居跡出土土器 1	111
第 51 図	Ⅷ層出土の石器 6	61	第 99 図	1号・2号竪穴住居跡出土土器 2・石器	112
第 52 図	Ⅷ層出土の石器 7	62	第 100 図	2号竪穴住居跡	113
第 53 図	Ⅷ層出土の石器 8	63	第 101 図	1号掘立柱建物跡	114
第 54 図	Ⅵ層出土の石器	64	第 102 図	弥生土坑 1号	115
第 55 図	V層上面コンター図	66	第 103 図	遺物集中域・出土土器	116
第 56 図	縄文時代後期遺構位置図	67	第 104 図	遺物集中域出土土器・石器	117
第 57 図	縄文後期 1号竪穴住居跡	68	第 105 図	弥生時代の土器 1	119
第 58 図	縄文後期 1号竪穴住居跡出土土器	69	第 106 図	弥生時代の土器 2	120
第 59 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器 1	70	第 107 図	弥生時代の土器 3	121
第 60 図	縄文後期 1号竪穴住居跡出土土器 2	71	第 108 図	弥生時代の土器 4	122
第 61 図	縄文後期 2号竪穴住居跡	72	第 109 図	弥生時代の土器 5	123
第 62 図	縄文後期 2号竪穴住居跡出土土器	73	第 110 図	弥生時代の土器 6	124
第 63 図	縄文後期 2号竪穴住居跡出土土器	74	第 111 図	土製勾玉	125
第 64 図	縄文後期 3号竪穴住居跡	76	第 112 図	古墳時代遺構位置図	127
第 65 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器 1	77	第 113 図	第 2 地点検出遺構図	128
第 66 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器 2	78	第 114 図	1号地下式横穴墓・出土の鉄器	129
第 67 図	縄文後期 3号竪穴住居跡出土土器	79	第 115 図	2号地下式横穴墓・出土遺物	130
第 68 図	縄文後期 4号竪穴住居跡・出土土器	80	第 116 図	3号地下式横穴墓	131
第 69 図	1号埋設土器・出土土器・石器	81	第 117 図	4号地下式横穴墓・出土遺物	132
第 70 図	2号埋設土器	82	第 118 図	1号溝・4号溝	133
第 71 図	2号埋設土器・出土土器	83	第 119 図	1号溝・4号溝遺物出土状況	135
第 72 図	3号埋設土器・出土土器	84	第 120 図	2号溝	136
第 73 図	縄文後期土坑 1・出土遺物	86	第 121 図	2号溝遺物出土状況	137
第 74 図	縄文後期土坑 2	87	第 122 図	3号溝	138
第 75 図	縄文後期土坑 3	88	第 123 図	3号溝遺物出土状況	139
第 76 図	縄文後期土坑 4・出土遺物	89	第 124 図	1号溝出土の土器	140
第 77 図	縄文後期土坑 5・出土遺物	90	第 125 図	2号溝出土の土器 1	140
第 78 図	縄文後期土坑 6・出土遺物	91	第 126 図	2号溝出土の土器 2	141
第 79 図	縄文後期土坑 7	92	第 127 図	3号溝出土の土器	142
第 80 図	石器集積遺構	93	第 128 図	土器破砕祭祀遺構	143
第 81 図	石器集積遺構出土土器 1	94	第 129 図	土器破砕祭祀遺構内出土遺物 1	144
第 82 図	石器集積遺構出土土器 2	95	第 130 図	土器破砕祭祀遺構内出土遺物 2	145
第 83 図	遺物集中域 1	96	第 131 図	土器破砕祭祀遺構内出土遺物 3	146
第 84 図	遺物集中域 1 出土土器	97	第 132 図	古墳時代の土器 1	148
第 85 図	遺物集中域 1 出土土器	98	第 133 図	古墳時代の土器 2	149
第 86 図	遺物集中域 2・出土土器	98	第 134 図	古墳時代の土器 3	150
第 87 図	縄文後・晩期の土器 1	99	第 135 図	古墳時代の土器 4	151
第 88 図	縄文後・晩期の土器 2	100	第 136 図	古墳時代の土器 5	152
第 89 図	縄文後・晩期の土器 3	101	第 137 図	古墳時代の土器 6	154
第 90 図	縄文後・晩期の土器 4	102	第 138 図	古墳時代の土器 7	155
第 91 図	縄文後・晩期の土器 5	103	第 139 図	古墳時代の土器 8	156
第 92 図	縄文後・晩期の土器 6	104	第 140 図	古墳時代の土器 9	157
第 93 図	縄文後・晩期の土器 7	105	第 141 図	古墳時代の土器 10	158
第 94 図	縄文後・晩期の土器 8・土製加工品	106	第 142 図	Ⅱ層遺構位置図	161

第143図	掘立柱建物跡計測図1(柱穴の規模).....163	第163図	V層出土の石器.....184
第144図	掘立柱建物跡計測図2(柱間の距離).....164	第164図	IV層出土の石器.....185
第145図	1号掘立柱建物跡.....166	第165図	II層出土の石器1.....186
第146図	1号掘立柱建物跡のビット内遺物.....167	第166図	II層出土の石器2.....187
第147図	2号掘立柱建物跡・ビット内遺物.....168	第167図	II層出土の石器3.....188
第148図	2号掘立柱建物跡のビット内遺物.....169	第168図	II層出土の石器4.....189
第149図	3号掘立柱建物跡.....170	第169図	II層出土の石器5.....190
第150図	3号掘立柱建物跡のビット内遺物.....171	第170図	II層出土の石器6.....191
第151図	4号掘立柱建物跡.....171	第171図	II層出土の石器7.....192
第152図	4号掘立柱建物跡のビット内遺物1.....172	第172図	II層出土の石器8.....193
第153図	4号掘立柱建物跡のビット内遺物2.....173	第173図	II層出土の石器9.....194
第154図	4号掘立柱建物跡のビット内遺物3.....174	第174図	II層出土の石器10.....195
第155図	5号掘立柱建物跡・ビット内遺物.....175	第175図	II層出土の石器11.....196
第156図	ビット内出土の遺物1.....178	第176図	II層出土の石器12.....197
第157図	ビット内出土の遺物2.....179	第177図	II層出土の石器13.....198
第158図	ビット内出土の遺物3.....180	第178図	時期別変遷図.....230
第159図	ビット内出土の遺物4.....181	第179図	遺跡の残存範囲図.....232
第160図	ビット内出土の遺物5.....182	第180図	縄文時代後期検出主要遺構図.....235
第161図	1号道跡.....183	第181図	古墳時代墓域全体図.....237
第162図	古代以降の出土遺物.....183		

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表.....10	第14表	古墳時代土器観察表.....207
第2表	志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡.....12	第15表	古代土師器・須恵器観察表.....209
第3表	縄文後期土坑観察表.....92	第16表	弥生時代表飾品観察表.....209
第4表	各掘立柱建物跡の柱穴深さ及び柱穴間距離.....165	第17表	縄文時代早期石器観察表.....210
第5表	ビット観察表.....177	第18表	縄文時代後・晩期遺構内出土石器観察表.....211
第6表	縄文時代早期遺構内出土土器観察表.....199	第19表	弥生時代遺構内出土土器観察表.....212
第7表	縄文時代後期遺構内出土土器観察表.....199	第20表	古墳時代遺構内出土土器観察表.....212
第8表	弥生時代遺構内出土土器観察表.....200	第21表	II層遺構内出土土器観察表.....212
第9表	古墳時代遺構内出土土器観察表.....200	第22表	V層出土の石器観察表.....212
第10表	II層遺構内出土土器観察表.....201	第23表	IV層出土の石器観察表.....213
第11表	縄文時代早期土器観察表.....202	第24表	II層他出土の石器観察表.....213
第12表	縄文時代後・晩期土器観察表.....203	第25表	古墳時代遺構内出土鉄器観察表.....214
第13表	弥生時代土器観察表.....205		

図版目次

巻頭図版1	町田堀遺跡遠景(南東から).....241	図版3	縄文時代早期の遺構 3.....241
巻頭図版2	古墳時代土器集合.....241	①16号集石, ②17号集石, ③18号集石, ④19号集石	
図版1	縄文時代早期の遺構 1.....239	⑤20号集石, ⑥B-4遺物出土状況	
①1号集石, ②4号集石, ③5号集石		⑦D-4遺物出土状況, ⑧A-4遺物出土状況	
④6号集石, ⑤2号集石, ⑥3号集石		図版4	縄文時代後期の遺構 1.....242
図版2	縄文時代早期の遺構 2.....240	縄文後期1号堅穴住居跡	
①7号集石, ②9号集石, ③10号集石, ④11号集石		図版5	縄文時代後期の遺構 2.....243
⑤12号集石, ⑥13号集石, ⑦14号集石, ⑧15号集石		①～③2号堅穴住居跡, ④・⑤3号堅穴住居跡	
		⑥・⑦4号堅穴住居跡	

図版 6 縄文時代後期の遺構 3	244
①～③ 1号埋設土器, ④～⑥ 2号埋設土器	
図版 7 縄文時代後期の遺構 4	245
①～③ 3号埋設土器, ④・⑤ 土坑 1号	
⑥・⑦ 土坑 2号	
図版 8 縄文時代後期の遺構 5	246
①～④ 土坑 3号, ⑤・⑥ 土坑 4号, ⑦ 土坑 5号	
⑧ 土坑 7号	
図版 9 縄文時代後期の遺構 6	247
①・② 土坑 11号, ③・④ 土坑 15号, ⑤・⑥ 土坑 17号	
⑦・⑧ 土坑 18号	
図版 10 弥生時代の遺構 1	248
①～④ 1号竪穴住居跡	
図版 11 弥生時代の遺構 2	249
① 2号竪穴住居跡, ② 1号堀立柱建物跡	
③～⑤ 土坑 1号, ⑥・⑦ 遺物集中域	
図版 12 古墳時代の遺構 1	250
①～③ 1号地下式横穴墓, ④・⑤ 2号地下式横穴墓	
⑥・⑦ 3号地下式横穴墓	
図版 13 古墳時代の遺構 2	251
①～③ 4号地下式横穴墓, ④ 土器破砕祭祀遺構	
⑤・⑥ 2号溝遺構	
図版 14 II層検出の遺構	252
①・② 1号掘立柱建物跡, ③ 2号掘立柱建物跡	
④ 3号掘立柱建物跡, ⑤ 4号掘立柱建物跡	
⑦・⑧ 5号掘立柱建物跡	
図版 15	253
縄文時代の遺物 1 (後期・遺構)	
図版 16	254
縄文時代の遺物 2 (早期・遺構)	
図版 17	255
縄文時代の遺物 3 (早期・包含層)	
図版 18	256
縄文時代の遺物 4 (早期・包含層)	
図版 19	257
縄文時代の遺物 5 (早期・包含層)	
図版 20	258
縄文時代の遺物 6 (早期・包含層)	
図版 21	259

縄文時代の遺物 7 (後期・遺構)	260
図版 22	260
縄文時代の遺物 8 (後期・遺構)	
図版 23	261
縄文時代の遺物 9 (後期・遺構)	
図版 24	262
縄文時代の遺構 10 (後期・遺構)	
図版 25	263
縄文時代の遺物 11 (後期・包含層)	
図版 26	264
縄文時代の遺物 12 (後期・包含層)	
図版 27	265
縄文時代の遺物 13 (後期・包含層)	
図版 28	266
縄文時代の遺物 14 (後・晩期・包含層)	
図版 29	267
弥生時代の遺物 1 (遺構)	
図版 30	268
弥生時代の遺物 2 (遺構)	
図版 31	269
弥生時代の遺物 3 (包含層)	
図版 32	270
弥生時代の遺物 4 (包含層)	
図版 33	271
古墳時代の遺物 1 (遺構)	
図版 34	272
古墳時代の遺物 2 (遺構)	
図版 35	273
古墳時代の遺物 3 (遺構・包含層)	
図版 36	274
古墳時代の遺物 4 (包含層)	
図版 37	275
古墳時代の遺物 5 (包含層)	
図版 38	276
古墳時代の遺物 6 (包含層)	
図版 39	277
II層出土の石器 1	
図版 40	278
II層出土の石器 2	

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は東九州自動車道（志布志IC～末吉財部IC）建設を計画し、当該事業区間における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会を行った。

これを受けて、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」という。）は平成12年2月志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、50か所の遺跡（総表面積 854,100㎡）の存在が判明した。この分布調査の結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という。）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化や、道路建設工事計画に伴い、遺跡についてもより密な把握が求められることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお、志布志IC～鹿屋串良JCT間については、平成14年4月に再度分布調査を実施し、遺跡の総表面積を289,000㎡と報告した。

その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県へ再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きているということになった。また、日本道路公団からの再委託は曾於弥五郎ICまでで終了し、曾於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

なお、平成21年度までの当該区間の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を受けて、鹿児島県教育委員会が県内遺跡事前調査事業として実施することとした。

平成24年度の県内遺跡事前調査事業として、東九州

自動車建設に係る確認調査が町田堀遺跡の他に3遺跡を対象として実施された。町田堀遺跡では縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物包含層が確認され、弥生時代の住居跡や古墳時代の地下式横穴墓等の遺構も確認された。

近年、東九州自動車等の国道建設事業等の増加に伴い、埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ、その対応が困難な状況となりつつあった。そこで、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年に設立し、国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

また、事業の効率化を図るために平成24年度から発掘調査の支援業務を民間調査組織へ委託することとなり、平成25年度から埋文調査センターが発足するにあたり「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」を策定し、それに基づき、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ発掘調査の委託を行った。平成26年度には、株式会社埋蔵文化財サポートシステムへ整理作業支援業務を委託した。平成27年度には、国際文化財株式会社へ整理作業及び報告書作成作業支援業務を委託した。平成27年度・平成28年度は埋文調査センターで発掘調査及び整理作業、平成29年度は報告書作成作業を行った。

第2節 事前調査

期間 平成24年8月1日～平成24年11月28日

調査体制

調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 寺田 仁志
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 新小田 譲 次長 井ノ上秀文 調査第一課長 堂込 秀人 調査第一課第二調査係長 大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 吉岡 康弘 文化財研究員 今村 結記
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主査 下堂蘭晴美

第3節 本調査の経過

本調査は、平成25年6月3日～平成26年1月28日、

平成26年8月4日～10月28日、平成27年12月11日～平成28年2月25日、平成28年5月15日～平成29年2月24日の期間実施した。各調査の調査体制等詳細については、以下のとおりである。なお、ここでは本書の対象である平成26～28年度の経過について述べることにする。

調査体制（平成26年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
 総務課長兼係長 山方 直幸
 調査課長 八木澤一郎
 調査第一係長 中村 和美
 調査担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
 文化財専門員 平木場秀男
 * 大岩本博之
 文化財調査員 下田代清海
 * 榑垣 友裕
 * 勝田 裕介
 事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
 主 査 岡村 信吾

調査の経過

平成26年度は、A～F-1～5区、B～F-6～8区、D～F-9～11区、F～G-11～12区の調査を行った。調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成26年8月

A～F-1～5区：表土剥ぎ・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。V層上面コンター図作成。B～F-6～8区：Ⅲ層上面コンター図作成。F～G-11～12区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。遺物取り上げ。遺構配置図作成。

平成26年9月

A～F-1～5区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の堅坑検出。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・V層上面遺構検出。

平成26年10月

A～F-1～5区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の調査。D～E-9～11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・V層上面遺構検出。

記録保存調査を終了する。

調査体制（平成27年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
 総務課長兼係長 有村 貢
 八木澤一郎
 調査第一係長 中村 和美
 調査担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
 文化財専門員 三垣 恵一
 文化財調査員 下田代清海
 * 宮田 大之
 事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
 主 査 荒瀬 勝己

調査の経過

平成27年度は、A～F-1～8区、F・G-10・11区の調査を埋文調査センターが行い、遺構実測の一部を、(株)バスコに委託した。

調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年12月

A～F-1～8区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F・G-10・11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。

平成28年1月

A～F-1～8区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の堅坑検出掘り下げ。F・G-10・11区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・V層上面遺構検出。

平成28年2月

A～F-1～8区：Ⅱ層掘り下げ。B～F-6～8区：表土剥ぎ・地下式横穴墓の調査。D～E-9～11区：表土剥ぎ・Ⅱ層掘り下げ。F～G-11～12区：Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ層上面遺構検出。Ⅲ・Ⅳ層掘削・V層上面遺構検出。

記録保存調査を終了する。

調査体制（平成28年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
 総務課長兼係長 有村 貢
 調査課長 八木澤一郎

	調査第二係長	宗岡 克英
調査担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員	吉岡 康弘
	＊	立神 倫史
	＊	石畑 浩一
	文化財専門員	平 美典
	＊	徳永 愛雄
	文化財調査員	大坪 啓子
	＊	中村 有希
事務担当	(公財)埋蔵文化財調査センター	
	主 査	荒瀬 勝己
現地指導	元(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員	中村 耕治

調査の経過

調査を実施するにあたり、遺跡全体を道路や畦畔により区分し、西から調査区を設定した。G-100区・I-2区、H-1-3、I-2-3区、A-D-3-8区、F-I-17-19区、E-F-9-13区の調査を行った。調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成28年5月

環境整備、A-D-3-7区：Ⅷ～Ⅹ層掘り下げ。遺構精査・遺構検出。

平成28年6月

B-D-3-7区：Ⅷ～Ⅹ層掘り下げ。Ⅹ層遺構検出・実測・遺物取り上げ。土坑検出・Ⅹ層上面コンター図作成。

平成28年7月

H・J-2-3区、F・G-1区：Ⅱ～Ⅲ層掘り下げ。市道部分G-J-1-3区：表土剥ぎ・遺物取り上げ。

平成28年8月

H-1区土器集中遺構検出。実測・遺物取り上げ。G-I-1-3、98-100区：Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取り上げ・Ⅴ層上面コンター図作成。G-I-18-20区：Ⅱ層掘り下げ・遺構精査。

平成28年9月

G-100区遺構検出。実測・写真撮影。G-I-1-3区：Ⅷ層掘り下げ。Ⅹ層上面遺構精査・土層断面図作成・Ⅹ層上面コンター図作成・撤収作業。F-I-17-19区養生。

平成29年1月

環境整備、荷物搬入。F・G・H-17-20区：掘り下げ。I-19区地下式横穴墓検出。写真撮影・実測・Ⅱ層掘り下げ。遺構検出・遺物取り上げ。

平成29年2月

G・H・I-19区：遺構検出。写真撮影・実測。E・F-9-12区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。土層断面図作成。

記録保存調査を終了する。

第4節 整理作業・報告書作成

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成28年度に整理作業のみを、平成29年度には報告書刊行に向けた作業を、いずれも(公財)埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作成体制(平成28年度)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	(公財)埋蔵文化財調査センター センター長 堂込 秀人
調査企画	(公財)埋蔵文化財調査センター 総務課長兼係長 有村 貢 調査課長 八木澤一郎
調査第二係長	宗岡 克英
整理担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 文化財専門員 繁昌 正幸 文化財調査員 新屋敷久美子
事務担当	(公財)埋蔵文化財調査センター 主 査 荒瀬 勝己

作業の経過

平成28年7月

土器・石器水洗い。石器実測委託準備。土器接合・復元。

平成28年8月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。図面整理。石器実測委託。

平成28年9月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。図面整理。遺構配置図トレース。

平成28年10月

土器・石器水洗い、注記。分類・接合。遺構配置図トレース。

平成28年11月

遺構内遺物確認。土器・石器水洗い、分類・接合。石器実測委託確認。

平成28年12月

遺構内遺物確認。土器実測、復元。石器実測委託確認。

平成29年1月

図面整理。遺構内遺物確認。土器実測、復元。石器実測委託確認。

平成29年2月

図面整理。遺構内遺物確認。土器実測、復元。

平成29年3月

図面・遺物整理、仮収納。

作成体制（平成29年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査総括 (公財)埋蔵文化財調査センター
センター長 前迫 亮一
調査企画 (公財)埋蔵文化財調査センター
総務課長兼係長 中村伸一郎
調査課長 中原 一成
調査第二係長 岩澤 和徳
整理担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
文化財専門員 繁昌 正幸
文化財調査員 樋口めぐみ
事務担当 (公財)埋蔵文化財調査センター
主 査 荒瀬 勝巳

作業の経過

平成29年4月

土器・石器水洗い、注記、分類・接合。遺構図・土層断面図確認。原稿執筆・編集。

平成29年5月

土器・石器水洗い、分類・接合。土器実測、拓本、石器実測、土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年6月

土器実測、拓本、石器実測、土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年7月

土器実測・トレース。石器実測・トレース。土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図作成。遺物出土状況図作成。原稿執筆・編集。

平成29年8月

土器実測・トレース。石器実測・トレース。土器復元。遺物観察表作成。遺構配置図確認。遺物出土状況図確認。原稿執筆・編集。

平成29年9月

遺物・遺構トレース確認、遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト。土器復元。原稿執筆・編集。写真撮影。

平成29年10月

遺物・遺構トレース確認、遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト仮貼り。土器復元。原稿執筆・編集。写真撮影。

平成29年11月

遺物・遺構トレース確認、遺物観察表確認。遺構・遺物レイアウト本貼り。土器復元。原稿執筆・編集。写真

撮影。

平成29年12月

校正。遺物・遺構トレース確認、遺物観察表確認。原稿執筆・編集。

平成30年1月

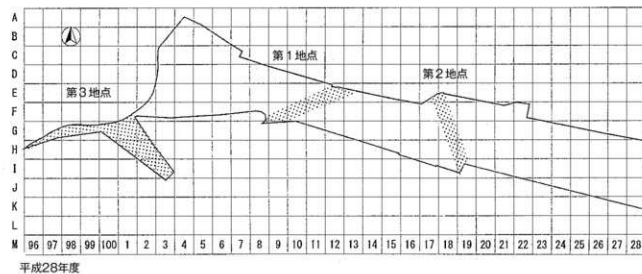
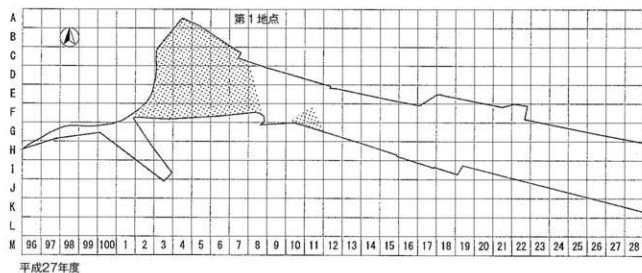
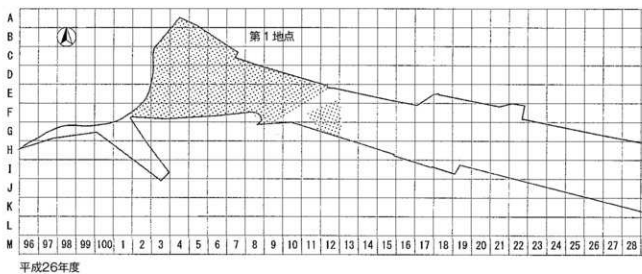
校正。遺物収納準備。

平成30年2月

遺物収納。

平成30年3月

図面収納。報告書納品。



第1図 年度別調査範囲図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

鹿屋市串良町は、大隅半島東南部のほぼ中央に位置し、東には肝属郡東串良町、南には肝属川を隔てて肝属郡肝付町、西には鹿屋市東原町、旭原町、笠之原町、北東は立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。

鹿屋市が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西方向の山地が北部と南部にあり、その間を丘陵や台地及び低地等から構成され、地質は大部分がシラスやボラ等の火山灰土壌である。

東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県側に突き出した形で北から南へ延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119 m)で中生層の地質からなっている。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み、南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳等の標高500~600 m級の山々、南部の大麓柄岳(1,236.8 m)を主峰とする横岳・御岳等の1,000 m級の山からなる山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

先述したように、東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布したシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が、堆積直後から現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や、原面がほとんど浸食されずに残った広大な台地となっている。

一方、低地には、高隈山地や鰐塚山等を水源とする大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾等に注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また、何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は、東西に6.5km、南北に13kmの狭長で北部の山地中央部の台地と南部の低地に大別されるが山地は少なく、大部分は笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「黒二ガ」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており、広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ、それによる沖積地が広がり、約695haの水田地帯を形成している。また、北部には低い丘陵性の山地が存在するが、町域に占める割合は少ない。

町田堀遺跡は、この串良町の北東部に位置し、笠野原

台地の縁辺部に位置する。当遺跡の北及び東側を串良川が蛇行しながら南流する。

第2節 歴史的環境(周辺の遺跡を中心に)

串良町では、昭和36年度と昭和50~52年度に分布調査が行われ、数多くの遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地となった。現在までに、詳細分布調査及び確認調査により、それらの遺跡の範囲が確定しつつある。また、串良町における遺跡の大半は、笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになっている。ここでは、町田堀遺跡周辺の主要な遺跡を中心としながら、近隣市町の遺跡も含め時代別に紹介する。東九州自動車道開通遺跡については、第1章第3節において記すことにする。

1 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は本遺跡周辺の二子塚A遺跡において旧石器時代の可能性のある剥片が数点出土しているほか、本遺跡からやや離れるが国道220号鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西九尾遺跡・榎崎A遺跡・榎崎B遺跡でナイフ形石器文化期-細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

2 縄文時代

早期の遺跡としては田原道ノ上遺跡・益根遺跡・下堀遺跡・古園遺跡・石籠遺跡・十三塚遺跡等があげられる。本遺跡より東に2km離れた益根遺跡では、早期の竪穴住居跡2軒、連穴土坑16基、集石遺構85基、土坑160基が検出されている。竪穴住居跡の埋土に板高起層の軽石(P13)がレンズ状に堆積していることから霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。田原道ノ上遺跡は早期の竪穴住居跡21軒、連穴土坑40基、集石遺構192基、石器製作跡5基が検出されている。早期中葉の石板式土器を主体とし、早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の集落として貴重な遺跡である。下堀遺跡では集石遺構13基が検出され、前式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器等が出土している。古園遺跡では、早期の石板式土器に比定される山形波状口縁をもった貝殻条痕文の円筒土器が確認されている。石籠遺跡では、遺構は縄文時代早期の集石遺構と土坑が検出された。また、隣接する十三塚遺跡では縄文時代早期の石板式土器等が出土している。前期の遺跡としては、神野牧遺跡・石籠遺跡などがあげられる。神野牧遺跡では集石遺構3基が検出され、曾畑式土器・深浦式土器等が出土している。石籠遺跡では、深さ10cmの落ち込みの中に、磨石・敲石5個と角礫1個の上に約20cmの大きさの五角形状の板石が乗った状態で検出された集積遺構1基、曾畑式土器・轟式土器

が出土している。

中期の遺跡としては、前谷遺跡・岩崎遺跡などがあげられる。前谷遺跡では竪穴住居跡5軒（方形3軒・円形2軒）及び集石遺構1基などが検出され、春日式土器が出土している。後・晩期の遺跡としては、釜ヶ宇都遺跡・二子塚B遺跡・ホンドンガ遺跡・十三塚遺跡・柿木段遺跡などがあげられる。ホンドンガ遺跡では、後期の市来式土器に比定できる土器、石甕、打製石斧等の遺物が確認されており、十三塚遺跡では凹線文土器・市来式土器・三万田式土器や晩期の黒川式土器が出土している。牧山遺跡では西平式土器・中岳I式・II式土器などが出土し、後期のピットにおいて、遺物が環状に集中する範囲の内側から同心円状に検出されており、環状集落を呈していたと考えられる。晩期の遺構としては、宮下遺跡・柿木段遺跡などがあげられる。宮下遺跡では黒川式土器・夜白式土器並行の刻目突帯文土器・組織裏土器（平織り）が出土している。柿木段遺跡では晩期の落とし穴・土坑のほか、石斧埋納遺構が検出されている。

3 弥生時代

本県全体として言えることであるが、大隅半島においても前期の遺跡はわずかで、確認できる遺跡も規模としては小さく、分布状況も散発的である。そのような中において、先述した宮下遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にあたる遺跡と思われ、その意味でも貴重と言える。

上述のように、前期の遺跡は当遺跡から東に約10km離れた大崎町沢目遺跡や天神段遺跡などがあげられるなど、わずかしこ確認されていない。中期以降の遺跡としては、吉ヶ崎遺跡・西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益畑遺跡・田原迫ノ上遺跡等多くの遺跡があげられる。吉ヶ崎遺跡では、中期の竪穴住居跡が3軒確認されており、特に1号住居跡はベッド状の遺構をもち、床面には焼土や炭化物が多く見られたことから、焼失した家屋と考えられている。そのために、甕形土器・壺形土器の完形品が各4点と磨製石鎌・磨製石斧等が竪穴住居跡の床面から発見されており、1軒の住居で使われていた道具の構成を考えると上で貴重な資料といえる。下堀遺跡では竪穴住居跡7軒が検出され、土製勾玉も出土している。石籠遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが山ノ口式土器等が出土している。十三塚遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡が8軒検出されており、方形や花弁形等に分類されている。竪穴住居跡内からは、壺形土器や壺形土器のほかに、棒状叩貝・磨製石鎌・鉄鎌等が出土している。また、掘立柱建物跡が3棟と土坑7基が検出されている。田原迫ノ上遺跡では、竪穴住居跡31軒や掘立柱建物跡40棟（そのうち、棟特柱を持つ掘立柱建物跡が2棟）と柱穴列が6列検出され、山ノ口式土器と多くの土製加工品も出土している。調査区外に延

びる大型建物跡と考えられる柱穴列は、協議により、現地にそのまま保存されることとなった。

4 古墳時代

大隅半島、特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群や塚崎古墳群、横瀬古墳をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また、南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域でもある。

町田堀遺跡の周辺には、立小野堀遺跡・牧山遺跡・上小原古墳群・下堀遺跡・岡崎古墳群等が存在する。立小野堀遺跡では約190基の地下式横穴墓と鉄剣や鉄鎌等数多くの副葬品が出土している。副葬品の中の青銅鈴は環鈴の転用品で、国内最古級のものであることが判明した。上小原古墳群では、前方後円墳1基と円墳20基、それに地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓では赤彩された軽石製石棺をもつものや、大型で支室床面に粘土床をもつものが確認されている。岡崎古墳群は、18基の高塚墳と数基の地下式横穴墓が確認されているが、同じ台地上に高塚墳と地下式横穴墓が存在しており、4号墳・16号墳・17号墳・18号墳では高塚墳の周溝内に竪柱を据って造られた地下式横穴墓が複数基確認されている。岡崎古墳群では、18号墳の2号地下式横穴墓で確認された須臾器が、愛媛県伊予市の市場南組産産と考えられるものであった。また、鉄鋌・U字型銅片・鏃子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物のほか、琉球列島のイモガイ製貝銅等により、広域交流を積極的に進めていたことが想定されている。下堀遺跡では須臾器が出土した竪穴住居跡や溝状遺構のほか、地下式横穴墓5基が確認されており、地下式横穴墓2号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また、地下式横穴墓周辺からは高坏や埴が意図的に置かれたような状態で見えられ、祭祀遺構の可能性が考えられる。

集落遺跡としては、小牧遺跡・川久保遺跡があげられる。小牧遺跡では一般的な竪穴住居跡9軒のほか、花弁形住居跡2軒が検出されている。また、甕形集落遺構8基も確認された。川久保遺跡では竪穴住居跡27軒（うち、鍛冶関連の建物跡と考えられるもの2軒）が検出され、鉄滓・輪の羽口等が出土している。中でも、輪の羽口は高坏脚部の転用品ばかりでなく、専用の羽口として作られた可能性があるものも出土している。

5 古代及び中世以降

稲村城跡・下堀遺跡・柿木段遺跡・十三塚遺跡があげられる。岡崎古墳群とは甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は、16基の近世墓のほか、土師器・青白磁・染付・備前焼・東播焼等が確認されている。下堀遺跡では土坑墓・畑の畝跡・溝状遺構のほか、多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い鍛冶炉も検出されている。柿木段遺跡では古代のカマド跡・溝状遺構・古道、中世から近世にかけてのものと考えられる溝状遺構・道跡・

土坑が検出された。十三塚遺跡では古道跡が8条検出されており、陶磁器片の出土から近世以降のものである可能性が考えられている。

第3節 東九州自動車道関連の遺跡

東九州自動車道については、平成26年度に鹿屋申良JCTから加治木JCTまでの間が開通している。現在、志布志ICから鹿屋申良JCTまでの間で、工事や埋蔵文化財の発掘調査が行われている。

埋蔵文化財の調査は、平成20年度から石籠遺跡・十三塚遺跡が開始され、第3図及び第2表にあるように平成28年度までに23遺跡の調査が行われている。

田石器時代の遺跡としては、荒園遺跡・永吉天神段遺跡と牧山遺跡の3遺跡がある。現在調査中の小牧遺跡や川久保遺跡からも確認された。荒園遺跡では、細石器文化期の細石刃・畦原型細石核が出土している。永吉天神段遺跡ではナイフ形石器や尖頭器が出土している。

多くの遺跡で見られているのが縄文時代に関する情報である。縄文時代早期では堅穴住居跡・連穴土坑・礫の集積遺構・落とし穴・石器製作跡等の遺構から、集落跡として認知されている田原道ノ上遺跡をはじめ18遺跡が確認されている。縄文時代早期の遺物は、石坂式・塞ノ神式等早期中葉から後葉の時期のものが多く、前平式土器等早期前半の遺物が出土する遺跡は数少ない。大隅半島ではアカホヤ火山灰の堆積が厚く、その下位にある縄文時代早期の遺物は保存状態がよいものが多く、土器では復元可能な個体も多く出土している。

縄文時代前期・中期・後期の遺跡は少ないが、牧山遺跡からは竊式土器の埋設遺構が検出されている。京の塚遺跡では中期前半の深浦式土器が多量に出土し、近畿系・瀬戸内系の土器も見られる。また、土坑も数多く検出されている。田原道ノ上遺跡では、池田軽石層直上から曾畑式土器が出土している。

縄文時代後期では町田堀遺跡で後期後半の中岳Ⅱ式が出土し、平成25年度調査では堅穴住居跡3軒も検出されている。1軒の堅穴住居跡からは石刃が出土し、話題となった。牧山遺跡からは西平式土器・市来式土器・丸尾式土器が出土し、田原道ノ上遺跡からは指宿式土器・市来式土器、京の塚遺跡からは辛川式土器・丸尾式土器・西平式土器・中岳Ⅱ式土器がそれぞれ出土している。

縄文時代晩期では、黒川式土器が十三塚遺跡・立小野堀遺跡・田原道ノ上遺跡・川久保遺跡・京の塚遺跡等から出土している。

弥生時代では多くの遺跡で中期の山ノ口式土器が出土し、石籠遺跡・田原道ノ上遺跡・永吉天神段遺跡で堅穴住居跡が多く検出され、集落を形成している状況が確認されている。永吉天神段遺跡では円形周溝溝を中心とした土坑群も発見されている。土坑墓には鉄鏃を副葬す

る墓もある。また、数は少ないが町田堀遺跡・川久保遺跡・荒園遺跡でも堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代では立小野堀遺跡・町田堀遺跡で多くの地下式横穴墓が発見され、副葬品も鉄器をはじめ豊富な状況である。堅穴住居跡は川久保遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡で検出されている。川久保遺跡では鍛冶工房跡が発見され、それに伴う遺物も出土している。荒園遺跡では焼失家屋も検出された。

古代・中世は遺跡の数は少ないが、永吉天神段遺跡で中世の土坑墓が検出され銅鏡や滑石製石鍋も出土している。川久保遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出されている。

第4節 遺跡及び遺跡周辺の地形

町田堀遺跡は笠野原台地の中央部東側の端部に位置しており、遺跡を中央とした地域としては北側及び西側は傾斜面となっており、南側は平坦である。

標高約90mのほぼ平坦な台地であるが、北側にはおおそ東西方向に延びる、比高差約20mほどの小さな丘陵がある。

小丘陵の北側には2段ほどの河岸段丘が見られ、段丘と段丘の狭い段丘には申良川と並行するように家屋が所在する。

町田堀遺跡は小さな丘陵の南側に広がる遺跡と考えられ、北側はこの小丘陵まで、西側は崖端部までと想定されるものの、東側及び南側の境界は不明といわざるを得ない。それは、北及び西側は遺跡の広がりや丘陵又は崖によって遮断されるが、東及び南側は平坦な台地がある程度延びることによって明確な境界を見いだすことができないからである。

ただ、大まかには、東の端は平成25年度の調査によって遺構や遺物の密度が急激に薄くなる。北側の小丘陵の中央部付近ではないかと考えられる。

しかし、南側は発掘調査で境界の所在を示すような遺構・遺物密度の急激な減少は見られなかったことから、不明といわざるを得ない。

遺跡の調査は、この町田堀遺跡の北側の小丘陵と西側の崖端部に囲まれた範囲を、幅約30～50mほどで設定された東九州自動車道の計画路線に沿って行われた。

調査に入る前の地形は、若干南側に向けて傾斜が見られるもの、台地特有の平坦な地形を呈しており、調査を行った段階でも層序が欠失するようなことはなく、極めて整然とした堆積状況を示しており、大隅半島で広範囲に見られる黒ニガと呼ばれる黒色土が幾層にも厚く堆積している地域と言える。

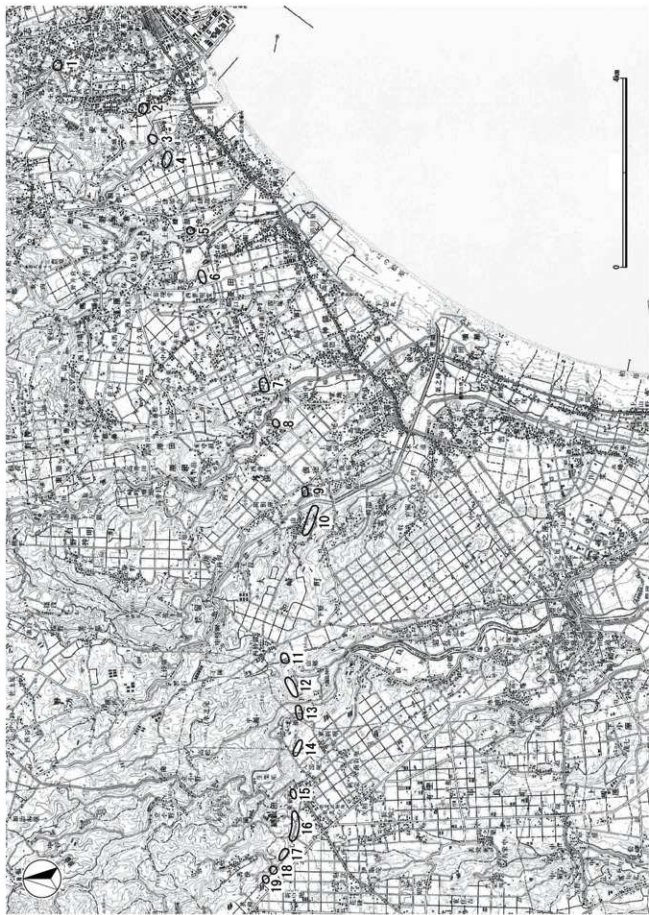
ただ、調査区の場合によっては、各層の堆積状況に違いが見られ、そのことから下部の地形は異なっているところも見られた。



第2図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田ア7ゴ山	台地	弥生、古墳	本報告書
2	遠見ヶ丘遺跡	曾於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野A・B遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文(後)、弥生	
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚A遺跡	曾於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器、縄文(早・晩)、弥生、古墳	平成11年度本調査
7	二子塚B遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文、弥生	
8	二子塚C遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	山腹緩斜面	弥生(中・後)	
9	大佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方大佐土原	台地	弥生(中)	
10	佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方4715-2	台地	縄文、古墳	
11	和山城跡	曾於郡大崎町持留	扇状地	弥生、古墳、中世	別称「山ノ城」、城跡の正確な場所は不明、推定
12	川上神社遺跡	曾於郡大崎町持留中持留	台地	縄文(後)	
13	持留牧遺跡	曾於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文、古墳	平成9年度農政分布調査
14	茶木遺跡	曾於郡大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	京の塚遺跡	曾於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文(早～晩)	平成25～27年度本調査
16	細山田段遺跡	曾於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文(後・晩)、弥生(前)、古墳	平成8年度農政分布調査、平成11年度農政分布調査で拡大
17	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	洞窟	縄文、弥生	
18	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
19	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
20	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	縄文、弥生、古墳	平成27～29年度本調査
21	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	台地	縄文、弥生	平成26～29年度本調査
22	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
23	北原墓地遷移古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世(鎌倉末)	
24	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	中世(南北朝)	
25	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	中世	
26	生栗渠遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
27	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生、古墳	平成11年度分布調査、平成12年度試掘調査、平成25～29年度本調査
28	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生、古墳	
29	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
30	是ヶ追遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ追	台地	縄文、弥生	
31	瓜々良寺遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良寺	台地	弥生	平成12年度本調査
32	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文、弥生	
33	伊場遺跡	鹿屋市串良町有里伊場	台地	弥生	
34	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生、古墳	
35	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
36	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
37	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
38	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
39	下原遺跡	曾於郡大崎町持留	台地	縄文(後)、弥生、古墳	
40	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
41	上市ノ岡古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	



第3図 東九州自動車・通勤運送路

第2表 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

(遺跡の番号は、第3図の番号と対応する)

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	見瀬	志布志市志布志町志布志台地上 標高約70m	H25年度 H28年度 終了 ※H25年度は 埋文センター 調査	作業中	縄文前期	土坑	細石刃、ナイフ形石器、ハンマーストーン
					縄文前・中期	落とし穴、土坑	—
					縄文後・晩期	溝状遺構	滑石縄文・丸尾式・西平式・中岳Ⅱ式土器、磨石、最石
					縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は細石刃並びにナイフ形石器文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比べ石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴は2基で、底部に杖跡は確認できなかったが全体形状から想定した。		
2	安良	志布志市志布志町安楽台地上 標高約45m	H28年度 H29年度 調査中	作業中	縄文早・後期		納骨式・西平式土器
					弥生中期		山ノ口式・須賀式土器
					古墳時代	溝状遺構	折貫式土器、須恵器
					古代		土師器、須恵器
3	小牧古墳群	志布志市志布志町安楽台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	作業中	旧石器	—	細石刃、細石刃、ナイフ形石器
					縄文草創期	集石遺構	黒曜石剥片、土器片、磨石、最石、石皿
					縄文早期	集石遺構	吉田式・妙見・天道ノ尾式・塞ノ神A式・塞ノ神B式・苦浜式土器、耳栓、石鏡、磨石、異形石器
					弥生	—	弥生土器、石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心とした旧石器時代、縄文草創期も出土した複合遺跡。縄文早期の集石は検出層によって構成の大きさに差が見られる。また、塞ノ神式土器の壱形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では墳跡を含め古墳は確認されていない。							
4	次五	志布志市有明町野井倉台地縁辺部 標高約50m	H27年度 終了	H27年度 終了	旧石器	—	蛙屋型細石刃、細石刃、剥片
					縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石遺構、磨石集積遺構	前平式・加栗山式・吉田式・礼ノ元貫類・石版式・中原Ⅴ式・下洞式・塞ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神B式土器、打製・磨製石鏡、石鏡、局部磨製石斧
					旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期は、前業に該当する遺構や遺物を多く発見した。既知の当該期遺跡と同様、被熱破砕層が多数に出土した。		
					縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡。遺構では縄文時代早期の集石遺構、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器、石器、石鏡、磨石・最石のほか、須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鏡片、鉄製品、鉄斧		
5	木森	志布志市有明町野井倉河岸段丘 標高約30m	H26年度 調査中	作業中	縄文早期	集石遺構	前平式・加栗山式・吉田式・下洞式・押型文土器、石鏡、石鏡、磨石・最石
					中世	掘立柱建物跡	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鏡片、鉄製品、鉄斧
					縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡。遺構では縄文時代早期の集石遺構、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器、石器、石鏡、磨石・最石のほか、須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鏡片、鉄製品等が出土している。		
					縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡。遺構では縄文時代早期の掘立柱建物跡、連穴土坑、集石遺構、落とし穴、弥生時代の掘立柱建物跡、古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物では縄文時代早期の土器、打製石斧、環状石斧、トロトロ石器等をはじめ、弥生時代から中・近世の遺物が出土している。また、魔界カルデア噴火に伴う噴砂層も確認されている。		
6	春日畑	志布志市有明町蓬原河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 調査中	作業中	縄文早期	掘立柱建物跡、連穴土坑、集石遺構、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式・加栗山式・石版式・下洞式・塞ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神式土器、打製石鏡、打製・環状石斧、トロトロ石器、磨石、石皿、最石、穿孔円鏝
					弥生	掘立柱建物跡	山ノ口式土器
					古墳	溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑、棒状集積遺構	壱（折貫式・東原式土器）、壱、埴、高坏、須恵器高坏、棒状鏝、磨製石鏡片
					古代～中世	焼土跡、掘立柱建物跡、土坑墓、掘立柱建物跡、櫛列	土師器（埴、壱、鏡）
近世	古道、溝状遺構、土坑、遺物集中	陶器、磁器					

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
7	稲荷堀 平良上-C	曾於郡大崎町 栗田 台地上 標高約 50 m	県教委文化財課の試掘調査により、本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
		曾於郡大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 26 年度 H 27 年度 終了	H 28 年度 終了	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、埋設土器、チップ集中	吉田式・石坂式・下割釜式・押型文・平橋式土器、石鏡、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核、フレーク、チップ
8	宮庭	曾於郡大崎町 井俣 台地上 標高約 40 m	H 27 年度 調査中	—	旧石器	—	石核、円礫、フレーク、チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡。遺構では竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、土坑が検出されている。遺物では、縄文時代早期の土器、石鏡、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う噴砂層も確認されている。	縄文早期	集石遺構、土坑、土器集中	加葉山式・小牧 3 A・下割釜式・巻ノ丸式・押型文・平橋式・塞ノ神式土器、打製石鏡、磨石、チップ		
9	花園	曾於郡大崎町 飯宿 台地縁辺部 標高約 50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 調査中	H 28 年度 (第 1 地点) 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刀・水晶刮片
		※ H 24 年度は埋文センター調査	縄文早期	素材刮片(頁岩)遺構、集石遺構、チップ、剥片集中区、土坑	前平式・吉田式・加葉山式・下割釜式・押型文・手向山式・平橋式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器、壺形土器、石皿、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ		
10	永吉天神塚	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	縄文早期	ブロック、礎群	矢頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
		※ H 24 年度は埋文センター調査	縄文前期	—	前平式・吉田式・加葉山式・手向山式・下割釜式・押型文・平橋式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器、石鏡、石匙、石斧、磨石、敲石、石皿、フレーク、チップ		
10	永吉天神塚	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	縄文後期	—	岩崎上層式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式・黒川式・朝日突帯文土器、管玉、打製石斧
10	永吉天神塚	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	弥生	竪穴住居跡、円形周溝墓、土坑墓群、掘立柱建物跡、土坑	入来式・山ノ口式・黒髪式土器、鉄鏡、磨製石鏡、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式土器、須恵器
10	永吉天神塚	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	古墳	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、湖州六花鏡、磁石、石塔、古銭
10	永吉天神塚	曾於郡大崎町 水吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高 30～50 m	H 24 年度 H 25 年度 H 26 年度 H 27 年度 終了	H 27 年度 (第 1 地点) H 28 年度 (第 2 地点 1) 作業中	近世	近世墓	段塚焼、発付、寛永通宝、石臼
					縄文時代早期から古墳時代を中心とする複合遺跡。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片栗研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の痕跡も確認されている。	近世以降	帯状硬化面

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
11	京の塚	曾部郡大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H 25年度 H 26年度 H 27年度 終了	作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式・下割釜式・中原式・押型文・塞ノ神式土器、打製石鏡、石杖
					縄文前期～ 中期初頭	土坑、土器集中	曽部式・深溝式・大炭山式・鷹島式・船元式土器、打製石鏡、石匙、石皿、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、敲石、石皿、石杖、フレーク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世まで含む複合遺跡。縄文中期では、200基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深溝式土器、近畿地方の大炭山式土器や鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地との交流の一端が明らかとなった。							
12	小牧	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約60m	H 27年度 H 28年度 H 29年度 調査中	作業中	旧石器	—	細石刃、フレーク、チップ
					縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石遺構	前平式・吉田式・石坂式、下割釜式・平格式・朱須文土器、石匙、磨石、石皿
					縄文前期	—	曽部式土器、深溝式土器、磨石
					縄文後期	竪穴住居跡、伏見石皿立石遺構、石斧集積遺構、集石遺構、土坑	阿高式系・岩崎上層式・指宿式・市来式土器、石鏡、横刃型石器、打製石斧、磨石、石皿、大珠
					縄文晩期	—	人佐式・黒川式・剣日突帯文土器
					弥生中期	—	人來式・山ノ口式土器、砥石
					古墳	竪穴住居跡、礎集積、土器跡、土坑	東原式・辻堂塚式・布留系土器、須恵器、鉄鏡、鉄製品、敲石、勾玉、軽石加工品
古代	土坑	土師器（壺・杯）、須恵器短頸壺					
中世以降	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、焼土塊	土師器（杯）、白磁、青磁、石鏡、輪の羽口					
旧石器時代から中世までの複合遺跡。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。このほか、古墳時代の花卉形住居跡を伴う集落や中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺に遺跡を含めて、良川沿岸における人間活動の変遷を断片的に追うことができる遺跡である。							
13	川久保	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H 26年度 H 27年度 H 28年度 H 29年度 調査中	作業中	旧石器	礫群	獣原型細石杖、ナイフ形石器、剥片尖頭器
					縄文早期	集石遺構、土坑	前平式・加栗山式・吉田式・倉園B式・石坂式・下割釜式・押型文・塞ノ神式土器、石鏡、打製石斧、石皿
					縄文前期	集石遺構	轟式・曾部式土器、磨製石斧
					縄文晩期	集石遺構	黒川式・剣日突帯文土器
					弥生中期	竪穴建物跡	高橋式・下城式・山ノ口式土器
					古墳	竪穴住居跡、鍛冶関連建物跡、竪穴状遺構、古道跡	笹貫式土器、輪形羽口、高環脚転用輪形羽口、鉄鏡、鉄斧、勾玉、管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器
中世	掘立柱建物跡、古道跡、溝状遺構	青磁、白磁、瓦器碗					
旧石器時代から中世までの複合遺跡。特に古墳時代では、集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺構を伴う遺構が多数発見されているほか、専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
14	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 古地緑辺部 H 27年度 H 28年度 標高約90m 終了	H 27年度 (1) H 29年度 (2) 本報告書	縄文早期	集石遺構	下割釜式・塞ノ神式土器	
				縄文後期	竪穴住居跡、埋設土器、溝と土坑、土坑、石斧集積遺構	中居Ⅱ式土器、石刀、打製・磨製石斧、石鏡、ヒスイ製歯輪、小玉、勾玉、管玉	
				縄文晩期	—	剣日突帯文、黒川式土器	
				弥生中期	竪穴住居跡	山ノ口式、人來式土器、土製勾玉	
				古墳	竪穴建物跡、地下式横穴墓、円形周溝墓、溝状遺構	成川式土器（壺・高杯・埴）、人骨、鉄剣、鉄鏡、刀子、鈎、異形石器	
				古代	焼土跡、古道	土師器、須恵器	
縄文時代早期から古代までの複合遺跡。古墳時代では地下式横穴墓が92基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野塚遺跡や下堀遺跡等との類似性が想定され、高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の竪穴住居跡から、榎原文を施す完全な石刀が出土している。							

番号	遺跡名	所在地・立地	調査年度	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
15	牧山	鹿屋市串良町 福山田 台地縁辺部 標高約110m	H 25年度 H 26年度 H 27年度 H 28年度 H 29年度 調査中	H 28年度 (A地点1) 作業中	縄文前期	—	—
					縄文中期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石遺構、石器製作跡	吉田式・石坂式・下溝釜式・辻タイプ・桑ノ丸式・押型文土器、石鏡、石瓦、スクレイパー、磨石、剥片、チップ
					縄文後期	埋設土器（溝式）	溝式・条痕文土器
					縄文後期	土坑、落とし穴状遺構、埋設土器、石器集中部	市来式・西平式・丸尾式・太郎道式・三方田式・中倍式土器、打製・磨製石斧、磨石、剥片、石核、台石、石冠
					縄文晩期	土坑	人佐式・則日突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、打製・磨製石斧、磨製・打製石鏡、磨石、敲石、石皿、青銅製
					中・近世	古道跡	青磁、白磁、薩摩焼
<p>縄文時代から中世にかけての複合遺跡。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群（300～400個）が環状に発見されたのが注目される。また、同時期の複数の埋設土器と、石冠も1点出土している。</p>							
16	田原道ノ上	鹿屋市串良町 福山田 台地縁辺部 標高約120m	H 22年度 H 23年度 H 24年度 H 25年度 H 26年度 調査中 ※ H 22～24は埋文センター調査	H 26年度 (1) H 28年度 (2) 作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石遺構、落とし穴、土坑、石器製作跡	前平式・吉田式・會田B式・石坂式・下溝釜式・辻タイプ・桑ノ丸式・中原式・押型文・手向山式・平柄式・塞ノ柄式土器、石核、石鏡、石瓦、磨石、敲石、石皿、打製石斧
					縄文後期	落とし穴、埋集積	指筒式・市来式土器、石鏡、磨石
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡、大型建物跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式・中溝式土器、掘凹線文系帯、土製勾玉、鉄器、磨製石鏡、石瓦、敲石、敲石、台石
					古墳時代以降	溝状遺構、竪穴遺構	土師器陶、薩摩焼
<p>縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした複合遺跡。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形や円形の大形竪穴住居跡、機持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物群、柱穴列や円形・方形の周溝など、大隅平高中央部での当時の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。また、大型建物跡の可能性が高い遺構の一部が現地に保存されたことは特筆される。このほか、縄文時代早期では竪穴住居跡20軒、連穴土坑40基など、集落を想定させる遺構が多数発見されていることも注目される。</p>							
17	立小野尾	鹿屋市串良町 福山田 台地縁辺部 標高約125m	H 22年度 H 23年度 H 24年度 H 26年度 調査中 ※ H 22～24は埋文センター調査	H 28年度 (1) 作業中	縄文前・中期	—	浜浦式土器
					縄文後期	—	指筒式・西平式・市来式土器
					弥生中期	—	山ノ口式土器
					古墳	地下式横穴墓、土坑墓、溝状遺構	成川式土器、須恵器、鉄器（刀・剣・槍・鏃・刀子・鏃等）、青銅鈴、人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
<p>縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されたことである。玄室には鉄鏡や鉄剣等の鉄器、青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、これだけ多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、個別研究のみならず九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。</p>							
18	十三塚	鹿屋市串良町 福山田 台地上 標高約140m	H 20年度 H 21年度 終了 ※埋文センター調査	H 22年度 終了	縄文早期	—	石坂式土器
					縄文後期	—	伊弉文・市来式・三方田式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	山ノ口式土器、土製勾玉、打製・磨製石鏡、棒状器具、鉄鏡
					古墳時代	土坑	成川式土器
<p>弥生時代中期を中心とする遺跡。花卉形・方形・円形に分類された竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡（鹿屋市王子町）や前畑遺跡（同市郷之原町）等と同時期の集落跡と考えられている。また、集石遺構が竪穴住居跡内から発見されている。また、7号住居跡の埋土内から、松木瀬遺跡（南さつま市金峰町）や永吉天神段遺跡（曾於郡大崎町）から出土した鉄鏡と類似する無蓋の鉄鏡が出土した。</p>							
19	石籠	鹿屋市串良町 福山田 台地上 標高約140m	H 20年度 H 21年度 終了 ※埋文センター調査	H 22年度 終了	縄文早期	集石遺構、土坑	岩木式・前平式・志風淵式・石坂式・平柄式・貝殻条痕文・鎌石橋式・溝式土器、打製石鏡、磨石、敲石
					弥生中期	—	山ノ口式、須賀式土器
<p>縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡。鎌石橋式土器が1個体と溝式土器が2個体出土し、両型器が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。</p>							

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

1 発掘調査の方法

町田堀遺跡の発掘調査は、平成25年度から平成28年度まで4年間に渡り実施した。調査対象表面積は12,790㎡、調査対象延面積は31,970㎡であった。

調査区は道路や畦畔により調査区1～調査区4まで区分した。グリッドは座標値(X=-172350, Y=-6460)を起点として磁北に合わせて設定し、10m単位で北からA・B・C……区、西から1・2・3……区とした。また、1区の西側の現道部分にも遺跡が広がることが想定されたことから協議を行い、調査対象とした。そのため、1区より西側は、100、99、……区として95区までを設定した。

発掘調査は、基本的に重機で表土剥ぎを行った後、平成24年度の確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力による掘削を行い、遺物や遺構の検出に努めた。遺物の取り上げ及び、一部の遺構実測については平板実測またはトータルステーションを用いて行った。また、地形測量、まとまった土器については、手測り実測を行った。遺構実測や写真撮影を適宜行った。竪穴住居跡については、中央に十字の土層観察用ベルトを残し掘り下げ、遺物はトータルステーションによる点上げと手測り実測を併用した。土坑については半載し完掘まで慎重に調査した。集石遺構については、検出時の礫を平面・見通し断面の2面で実測した後、礫を取り上げ掘り込みの有無の精査を行った。地下式横穴墓については、土層断面の実測を行いながら、竪坑の1/4掘り下げ、1/2掘り下げを行った後発掘した。玄室については、流入土や天井落盤土のある墓は土層の主軸断面を実測後、慎重に土砂除去を実施した。V層（アカホヤ層）下位については、各調査区共にトレンチを設定し下層確認調査を行った。

2 遺構の認定について

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本書掲載の遺構の認定の状況は以下のとおりである。

ア 竪穴住居跡・土坑

規模、埋土、壁の立ち上がり状況や床面（底面）の状況などで総合的に判断した結果、6軒（縄文時代後期2軒、弥生時代2軒）を竪穴住居跡、それよりも規模の小さなものを土坑と認定した。

イ 集石遺構

周辺の遺物出土状況や礫破片、チップ等の広がり範囲を総合的に判断し、また、礫が同一平面上に複数個並ぶので、火熱を受けていたり、内部の埋土中に木炭粒がみられるものを検討して20基を集石遺構と認定した。

ウ 地下式横穴墓

竪穴の下部に玄室を持つ遺構を検討し、残存状態の良くないものも含めて4基を地下式横穴墓と認定した。

エ 掘立柱建物跡

直径20～30cm程度を主とする小規模な円形で、ほぼ垂直に掘られた柱穴（状ピット）が規模や向きを描いて並ぶものを検討し、6棟を掘立柱建物跡と認定した。

オ 土器破砕祭祀遺構

古墳時代の土器が地下式横穴墓の周辺で粉々に破壊されて検出された遺構で、復元作業によりほぼ完形品として復元できたものを、幕前祭祀が行われた可能性がある遺構として認定した。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

平成28年度

平成28年度は発掘調査を並行して実施したことから、発掘現場から搬入された遺物の水洗い・注記を行うとともに、平成27年度までに整理作業を行った遺物も含めて、分類や土器の接合等の作業を行った。石器の実測は大成エンジニアリング株式会社に委託した。

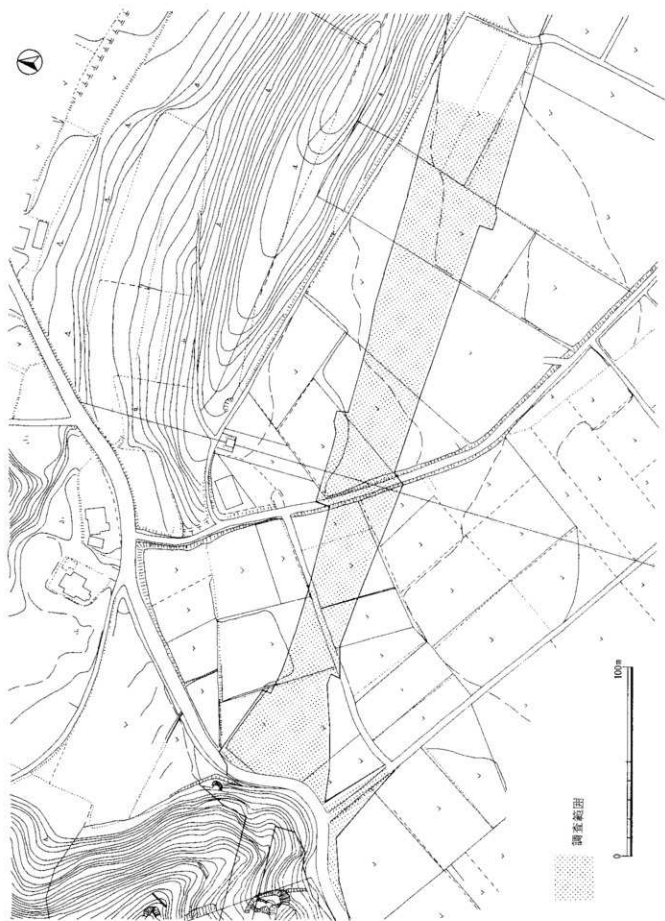
平成29年度

平成29年度は、過年度までの整理作業を基に、土器・石器の実測・トレース、遺物のレイアウト、遺構図作成、写真撮影等、報告書刊行に向け整理作業を行った。また、石器の実測を大成エンジニアリング株式会社に委託したほか、炭素による年代測定や種実・樹種同定の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

4 出土遺物の分類について

(1) 土器類についての分類

出土した遺物については、Ⅶ層出土のものは時代を縄文時代早期として確定して分類できたものの、Ⅱ層出土のものは、新旧の遺物が混在した状況であったことから層位としての分別は困難であった。そのため、水洗い作業が終わった段階で、土器の文様や調整などから時代・時期を分けるとともに型式分類を行った。



第4図 町田堀遺跡調査範囲図

(2) 石器類についての分類

石器についても土器類の分類と同様に考えて分類を行った。Ⅵ・Ⅶ層出土のものは縄文時代早期として分類

したが、Ⅱ層出土のものは時代の特定が困難であったことから、Ⅱ層出土の石器として総合的に扱うこととした。

第2節 層序について

町田堀遺跡の基本土層及び遺物・遺構の年代を把握する手がかりの一つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I層：灰黒色土（耕作土）、白色軽石・混在。

Ⅱ層：黒色土で層厚が90cmを越す所もある。色調の変化でa・b・cに細分される。

Ⅱa層：黒色土（主に弥生時代・古墳時代の包含層）

Ⅱb層：黒褐色土（縄文時代後期～晩期の包含層）

Ⅱc層：黒色土、粘性が強い

Ⅲ層：白色軽石層で、2～5cmの堆積である。（池田カルデラ起源、約6,500年前）

Ⅳ層：暗茶褐色土、やや硬質

V層：黄橙色火山灰土で鬼界カルデラ起源である。上層が火山灰土、下層が軽石である。a・bに細分される。

Va層：黄橙色火山灰土（鬼界カルデラ起源：アカホヤ火山灰、約7,300年前）

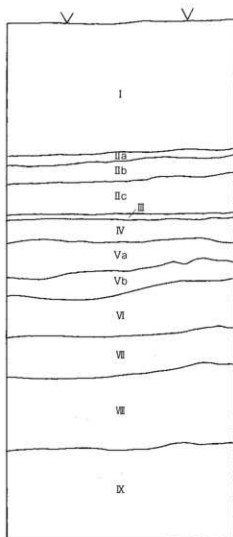
Vb層：黄橙色軽石（鬼界カルデラ起源の軽石）

Ⅵ層：黒褐色土（黄色バミスを少量含む）

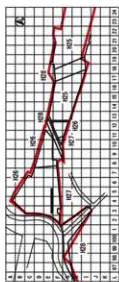
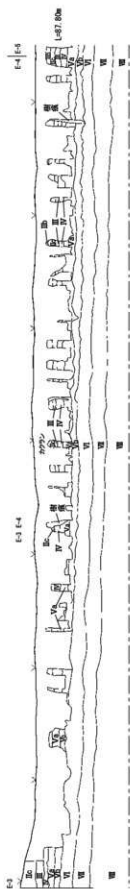
Ⅶ層：暗茶褐色土（黄色バミスを多量含む）

Ⅷ層：黄白色火山灰土（桜島起源の薩摩火山灰）

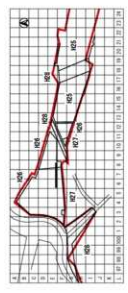
Ⅸ層：茶褐色粘質土



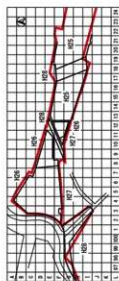
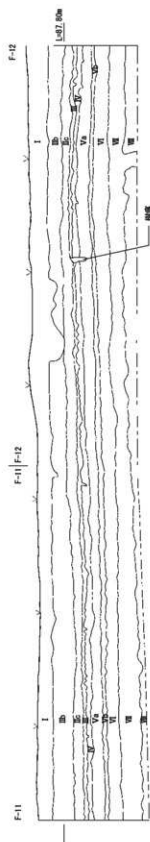
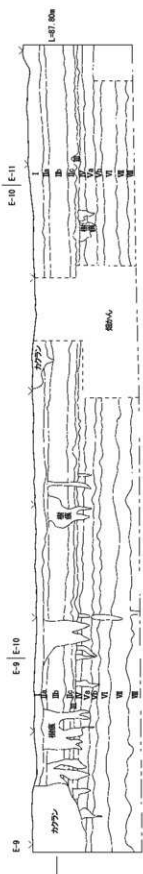
第5図 標準土層図



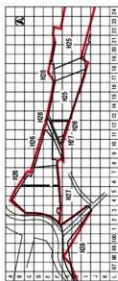
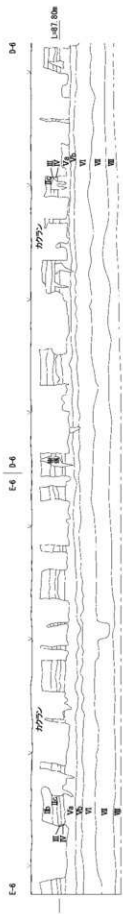
第6图 土层断面图1



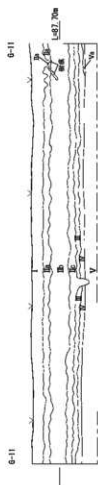
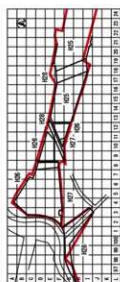
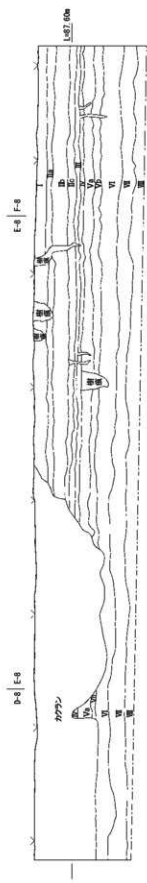
第7図 土層断面図2



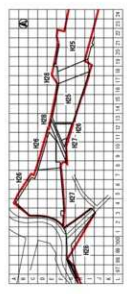
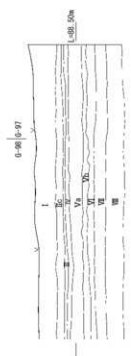
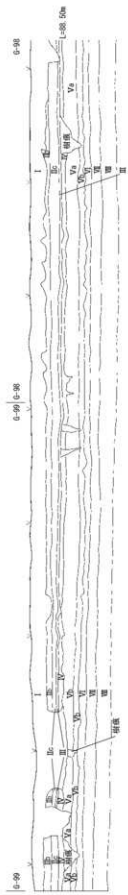
第8圖 土層断面図3



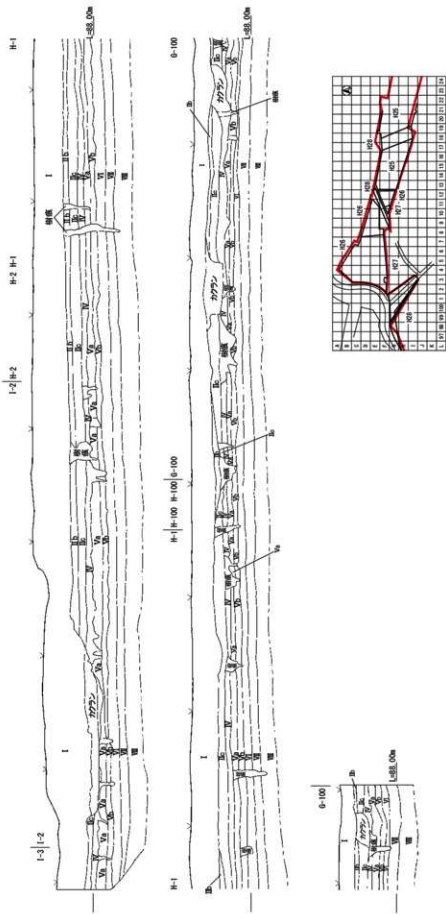
第9図 土層断面図4



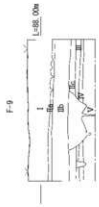
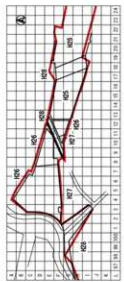
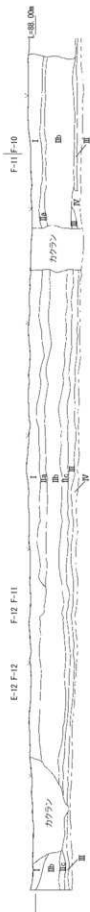
第10図 土層断面図5



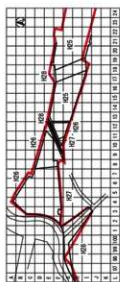
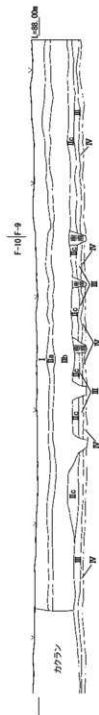
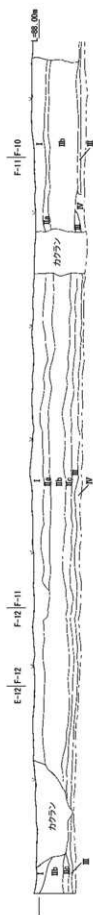
第11図 土層断面図6



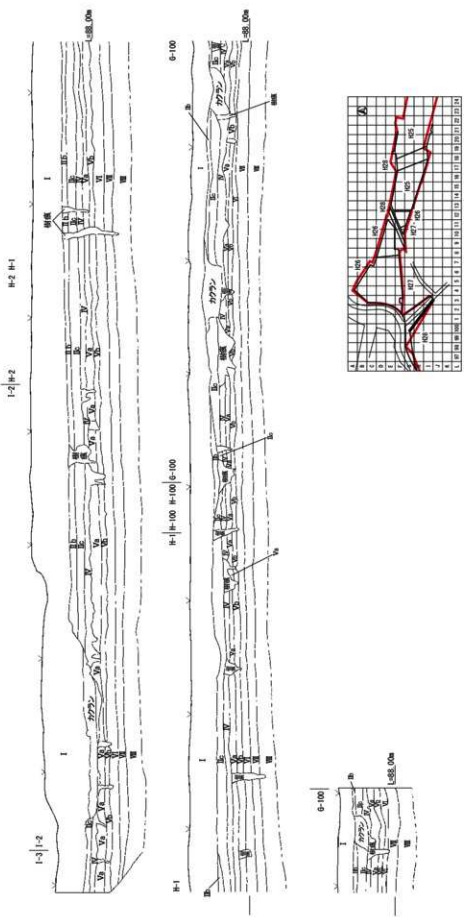
第 12 図 土層断面図 7



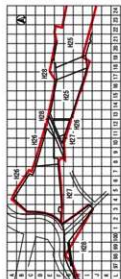
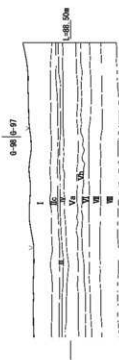
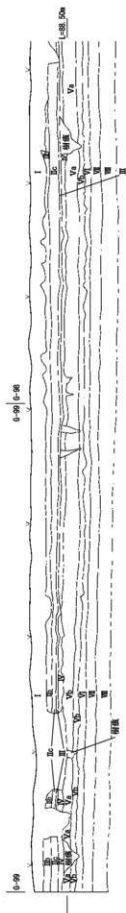
第13図 土層断面図8



第14図 土層断面図9



第 15 图 土层断面图 10



第16图 土层断面图 11

第4章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代早期の調査

縄文時代の調査は、VI層・VII層を包含層とする早期の調査と、II層を包含層とする後期・晩期の調査に分けられることから、それぞれに記載することとする。

平成26年度に調査を行った第1地点の下層確認調査によって、2～8区に縄文時代早期の遺物が確認されたことから、翌平成27年度に本格調査を行った。

また、平成28年度に市道の取り付け部分の第3地点にも早期の層が広がることが想定されたことから協議を行い、調査を行った結果、遺物及び遺構が検出された。

ただ、8区から東側にも確認トレンチを入れて調査を行ったが、遺物の広がりには確認されていない。

1 遺構（集石遺構）（第17・18図）

第1地点からは、集石遺構が17基検出された。ほかに、小型の円形ないし楕円形を中心とするピット状のものも検出されたが、建物の跡と認定するにはまともに欠けるものがほとんどで、ピットとして認定することには躊躇を覚えるものであった。また、当該地は樹木を植栽していた経歴もあることから、木の根の可能性のあるものもあり、そのことからピットとしての遺構認定は留保せざるを得ない状況であった。ただ、記録として残すために、明らかに樹痕と考えられるものは除外したうえで実測を行った。

第3地点からも集石遺構が3基確認された。

地形の復元のために、IX層上面でコンターを記録した。

第1地点では、西側が高く、全体的に東側にかけて下っているほか、北側には直径5m程の凹みが見られ、南側は直径10m程の大規模な凹みとなっている。そのことから、北東側にかけては馬の背状の鞍部となっている。

遺構は、17基の集石遺構が調査区の北側に偏って集中しているほか、南側では適度な間隔を持ちながら散らばっていると言える。

地形的には、北側のほぼ中央部に5m程度の凹みが見られることから、この凹みを取り囲むような状況で、凹みの北側にまとまって集石遺構が所在しているように感じられる。

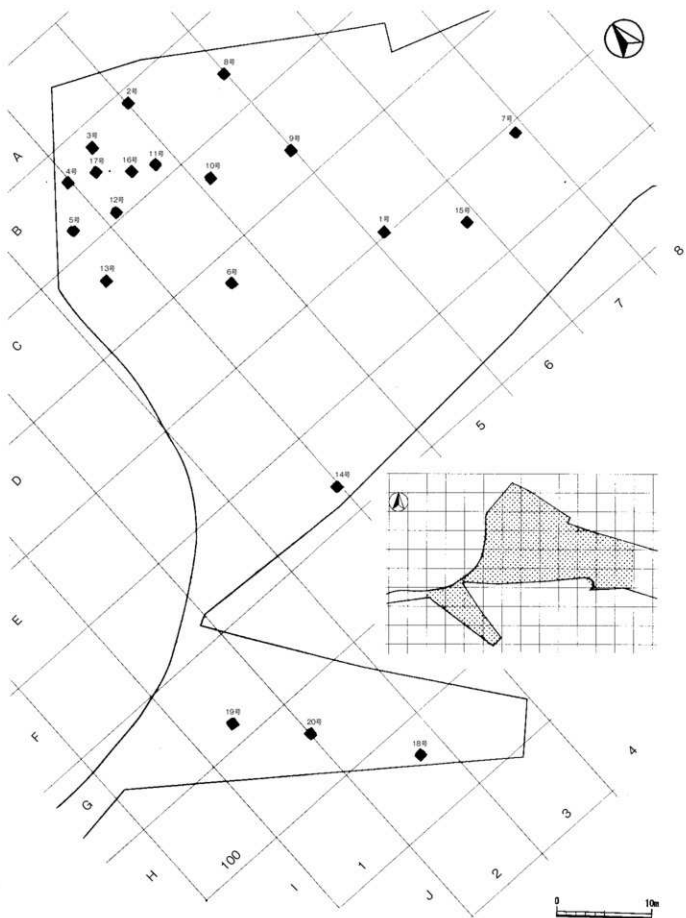
また、馬の背状になった部分の中央には集石遺構は見られないことから、道路などとして使用されていた可能性も考えられる。

さらに、南側の大きな凹みには集石遺構は見られないことから、この凹みの北側に展開する疎らな集石遺構は、凹みを避けた状況で設定されたことが考えられる。

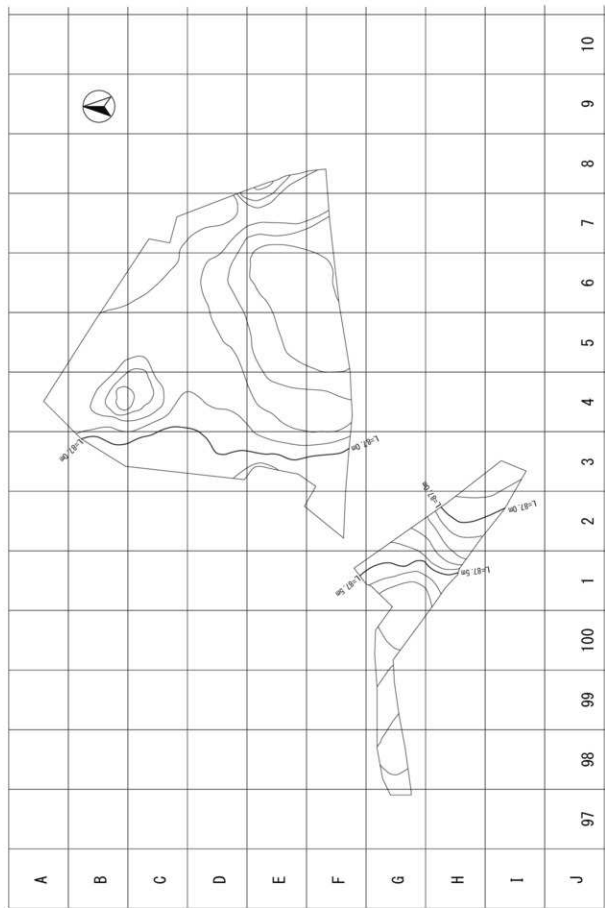
第2地点では、逆V字状となっている調査区のほぼ中央部を最高所として、西側及び南東側にかけて徐々に下がっている。

3基の集石遺構は最も高い部分を選るようにして、南東側に、見かけ上は列状に位置している。集石遺構が西側に見られないのは、調査区の北側がすぐに急峻な斜面となることからと考えられる。

以下、それぞれの集石遺構について述べてゆく。

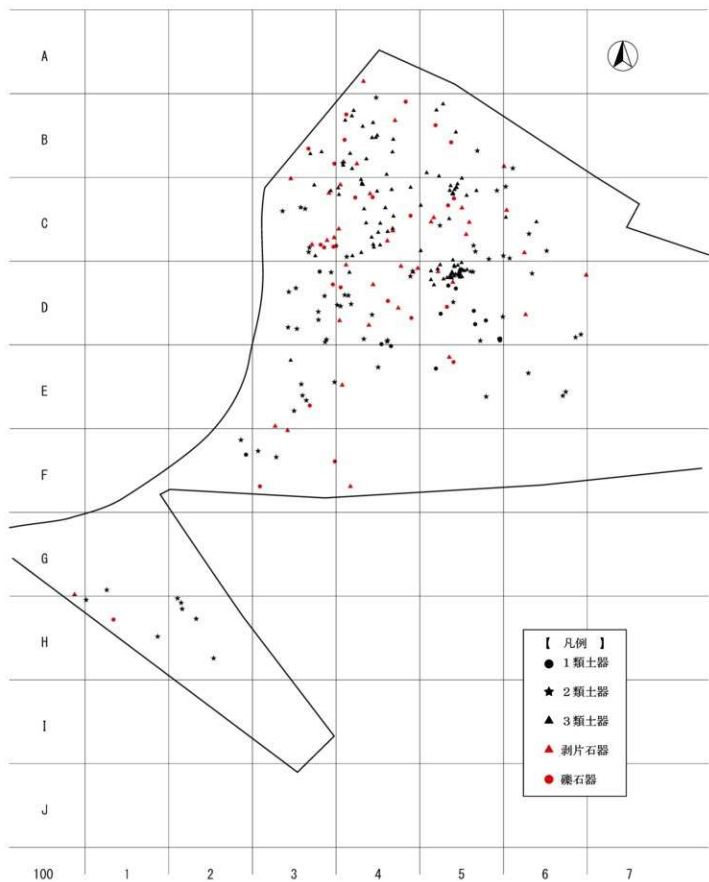


第 17 図 縄文時代早期集石遺構位置図



1 グリッドは 10m×10m

第 18 図 丘陵上面コンター図



第19図 縄文早期遺物ドット図

集石遺構 (第20～37図 1～33)

1号集石遺構 (第20図 1)

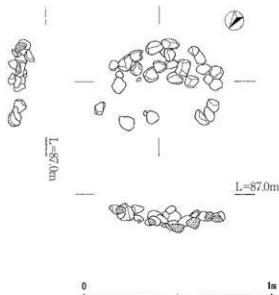
D・E-6区で検出された。50cm×70cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は196個である。礫の総重量は5,885g、平均重量は196g、被熱により赤化、破砕したとみられる礫は1点である。構成礫の中から、平滑な器面上に刻線状の傷が見られる礫(1)が1点見つかった。砂岩製で、磨面が凹面を呈することから砥石の破片とみられる。

2号集石遺構 (第21図 2～7)

B-4・5区で検出された。320cm×370cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は144個である。礫の総重量は21,397g、平均重量は148g、被熱により赤化、破砕したとみられる礫は、全体の2割ほどある。集石の中から、土器が21点出土したが、その多くは小片だったので、その内6点(2～7)を図化した。5点が深鉢の胴部で1点が底部である。

3号集石遺構 (第22図 8～11)

B-4区で検出された。250cm×430cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は225個である。礫の総重量は30,664g、平均重量は136gである。構成礫は安山岩と砂岩の円礫が多く、被熱を帯びた痕跡の残る礫は少ない。集石遺構の中から、土器が7点、石器が1点出土した。土器は小片が多かったが、その内3点(8～10)と石器1点(11)を図化した。土器はいずれも深鉢の胴部であるが、早期土器の分類に当てはまる特徴は観察できなかった。石器は粗面の安山岩製の磨石である。若干歪んでいるが、円形に近い自然礫を用いている。上面を磨り面として使用している。



4号集石遺構 (第23図 12)

B-3・4区で検出された。135cm×245cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は46個である。礫の総重量は4,280g、平均重量は95gとやや小さめの礫が多い。安山岩で熱を帯び破砕したと考えられる礫が5点見られる。集石遺構の中から、土器が6点、石器のチップが3点出土した。土器は小片が多かったが、その内1点(12)のみ図化した。深鉢の胴部ではあるが、土器の分類には至らなかった。

5号集石遺構 (第24図 13)

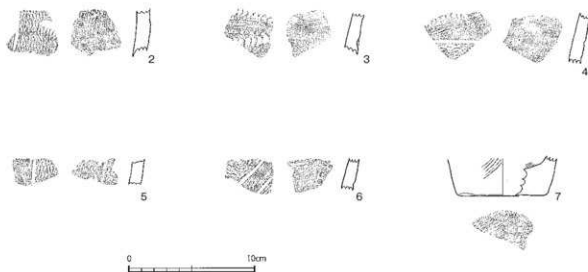
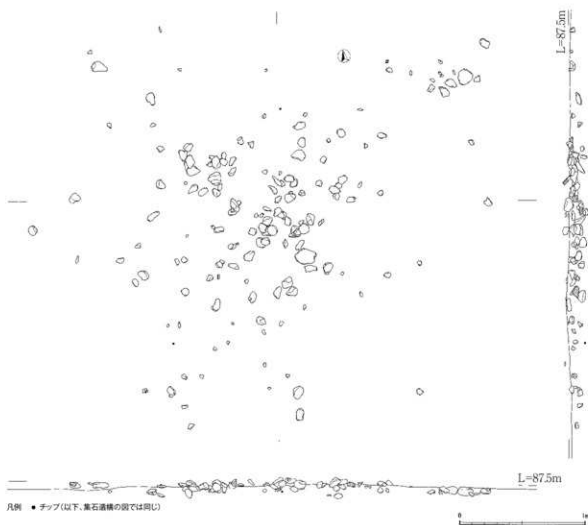
B-3区で検出された。120cm×175cmの範囲に広がる。礫の重なりから、掘り込みの可能性もあったが、明確な掘り込みは確認できなかった。構成礫数は36個である。礫の総重量は10,035g、平均重量は279gである。拳大以上の礫が6点あるが、その内3点は中心部より外れる。集石遺構内より磨・敲石1点、チャート、安山岩のチップが3点出土した。その内、安山岩の磨・敲石(13)を図化した。上下の平滑な面を磨石として使用した可能性が高い。

6号集石遺構 (第25図 14)

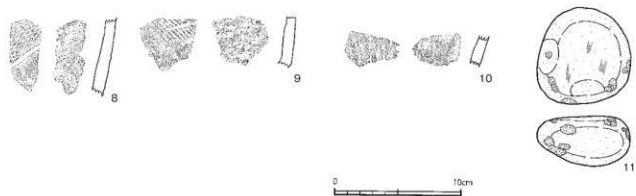
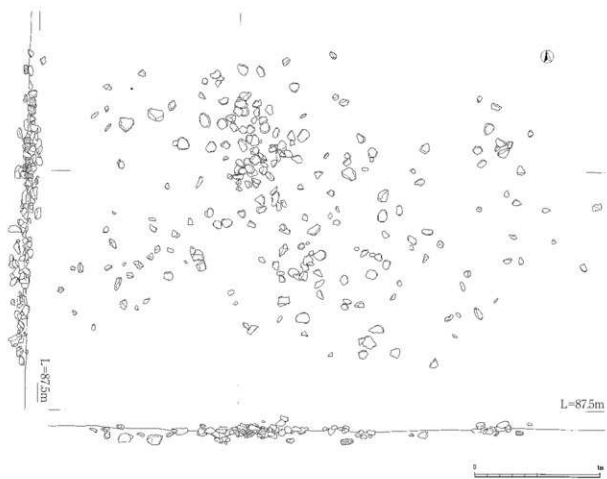
D-4区で検出された。198cm×252cmの範囲に広く散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は44個である。礫の総重量は8,210g、平均重量は182gである。構成礫には、破砕した砂岩が多い。集石遺構からは土器が1点、チップが2点出土したが、土器1点(14)を図化した。



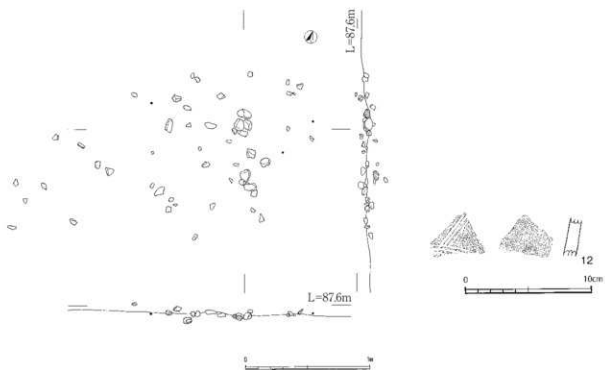
第20図 縄文早期1号集石遺構・出土遺物



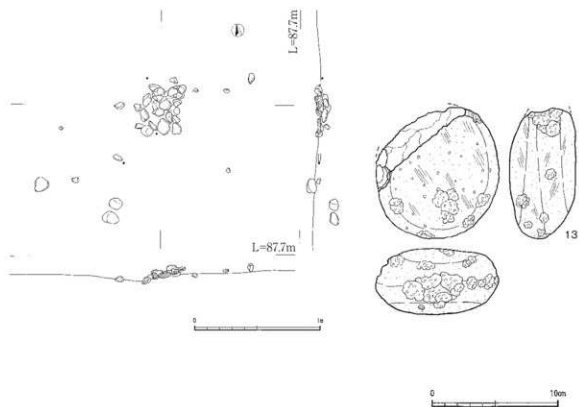
第 21 図 縄文早期 2 号集石遺構・出土遺物



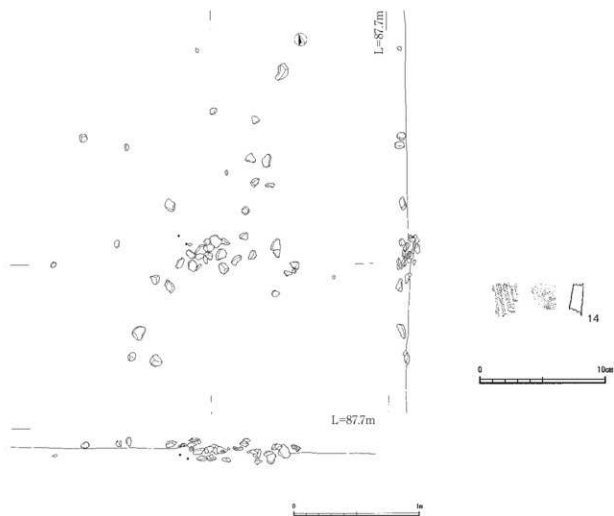
第22図 縄文早期3号集石遺構・出土遺物



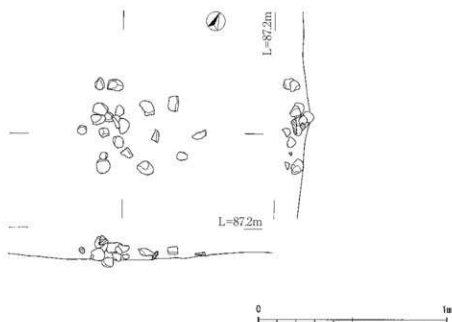
第23図 縄文早期4号集石遺構・出土遺物



第24図 縄文早期5号集石遺構・出土遺物



第 25 図 縄文早期 6 号集石遺構・出土遺物



第 26 図 縄文早期 7 号集石遺構

7号集石遺構 (第26図)

E-7区で検出された。51cm×69cmの狭い範囲に集中する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は21個である。礫の総重量は2,910g、平均重量は139gである。構成礫のほとんどを安山岩がしめる。被熱を帯びた痕跡のある礫は確認できなかった。

8号集石遺構 (第27図)

B-5・6区で検出された。246cm×265cmの広い範囲の中に、中心部をもたず散在する。特に掘り込みは確認できなかった。構成礫数は64個である。礫の総重量は8,815g、平均重量は138gである。構成礫は安山岩と砂岩が半々で、拳大以上の大きめの礫が5個入るが、いずれも安山岩である。土器が1点出土したが、小片のため図化しなかった。

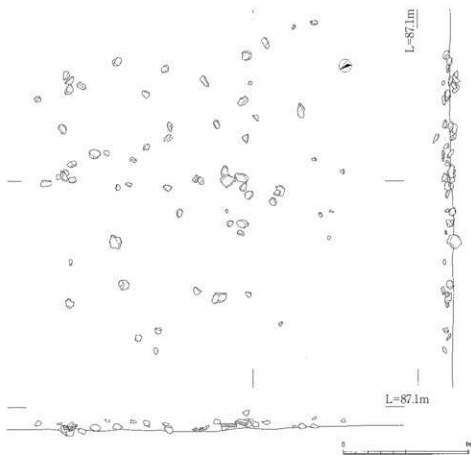
9号集石遺構 (第28図 15・16)

C-5・6区で検出された。178cm×373cmの広い範囲の中に、中心部をもたず散在する。特に掘り込みは確認

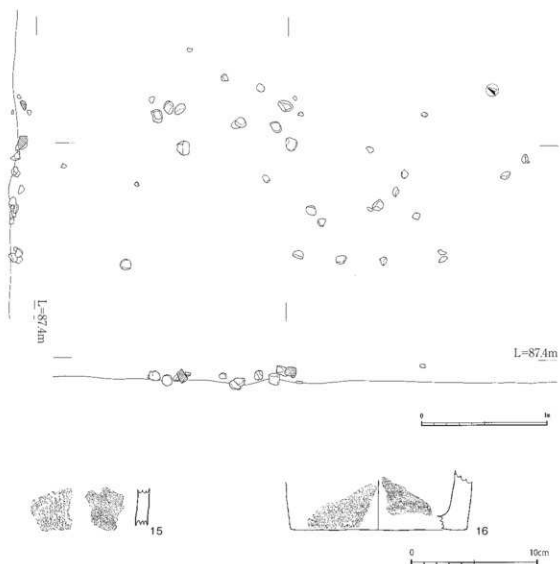
できなかった。構成礫数は30個である。礫の総重量は8,590g、平均重量は296gである。集石遺構内から土器が2点出土した。胴部片1点(15)、底部片1点(16)で、いずれも小片である。

10号集石遺構 (第29図 17)

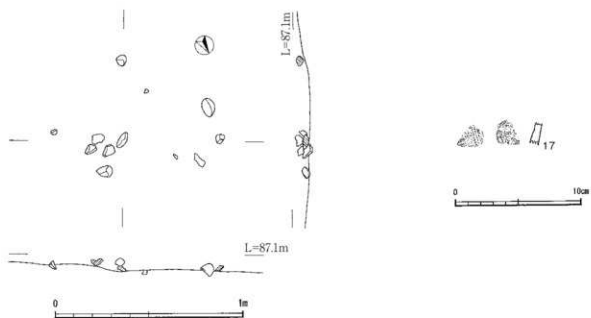
C-5区で検出された。65cm×94cmの間に散在する。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は11個である。礫の総重量は1,313g、平均重量は119gである。礫のほとんどに熱破砕の痕跡は見られない。安山岩の円礫で構成されている。集石遺構内からは、土器が1点(17)出土したので図化したが、小片のため、分類はできなかった。



第27図 縄文早期8号集石遺構



第 28 図 縄文早期 9 号集石遺構・出土遺物



第 29 図 縄文早期 10 号集石遺構・出土遺物

11号集石遺構 (第30図 18~20)

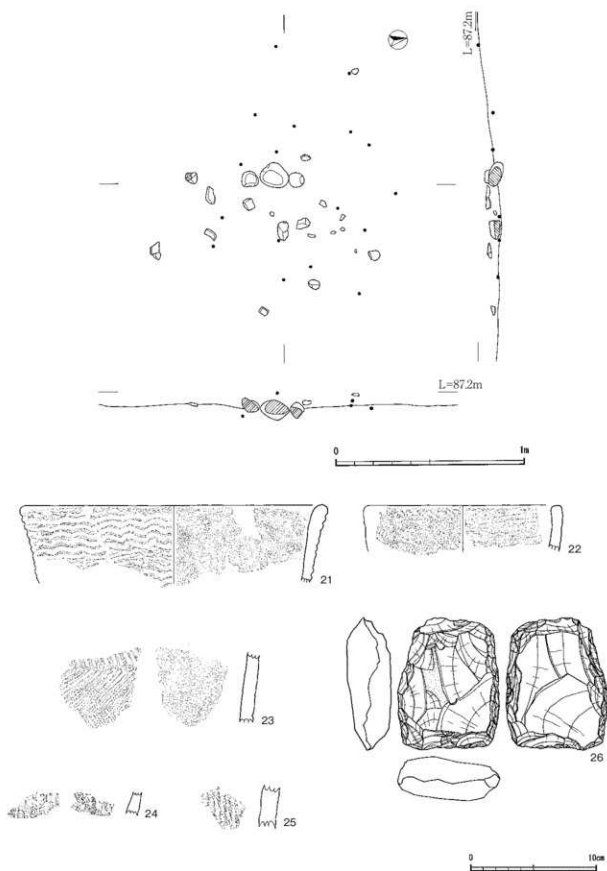
B-4区で検出された。218cm×210cmの範囲に広く広がっている。特に掘り込みは確認されなかった。構成礫数は111個と多い。礫の総重量は14,327g、平均重量は129gである。熱破砕したと考えられる礫も1割ほど見られる。集石遺構内からは土器が3点、チップが12点出土した。土器3点(18~20)を図化した。18は、胴部から口縁部にかけてやや内湾する土器である。胴部には、細かく短めの貝殻刺突文が規則的に施されている。

12号集石遺構 (第31図 21~26)

B-4区で検出された。132cm×123cmの範囲に広がり、構成礫数は12個である。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は4,045g、平均重量は337gと大きめの礫を使用している。礫は乳児頭大の礫を中心に散在していることがわかる。集石遺構から、土器が7点、石器が1点、黒曜石等のチップが17点出土している。土器片2点は小片であったので図化しなかった。土器5点(21~25)は、貝殻条痕文を施したやや口縁部が外反する



第30図 縄文早期11号集石遺構・出土遺物



第31図 縄文早期12号集石遺構・出土遺物

21、やや内湾する 22 がある。26 は、打製石斧である。刃部が基部よりも若干広がる。長さと同幅が同じような長さであること、長さの割に厚さもあることから、折れた石斧を再利用した可能性もある。

13号集石遺構 (第32図 27)

C-3区で検出された。245cm×413cmの範囲に幅広く散在している。構成礫数は82個である。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は13,950g。平均重量は176gである。熱を帯びて赤化した痕跡の残る礫は、ほとんどなかった。集石遺構から土器が2点出土したが、胴部の1点(27)だけ図示した。

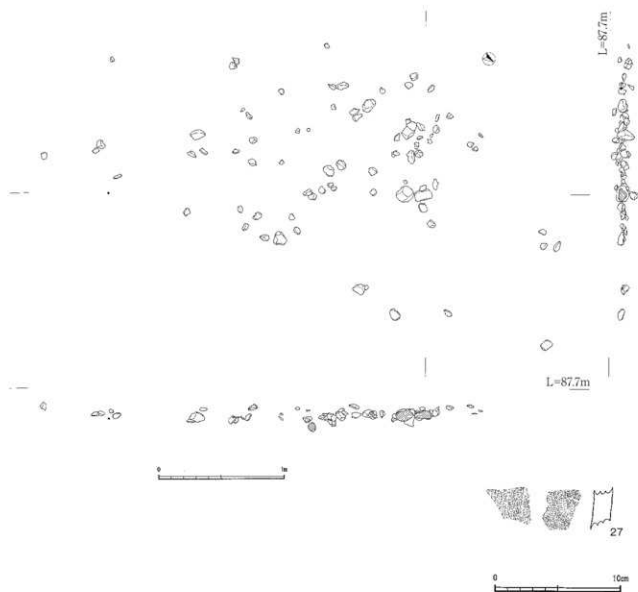
14号集石遺構 (第33図 28~31)

F-3・4区で検出された。162cm×216cmの範囲に広

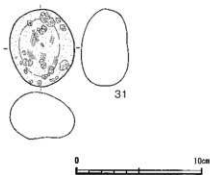
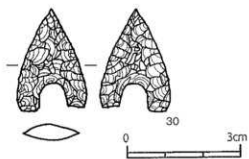
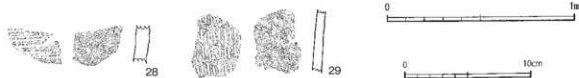
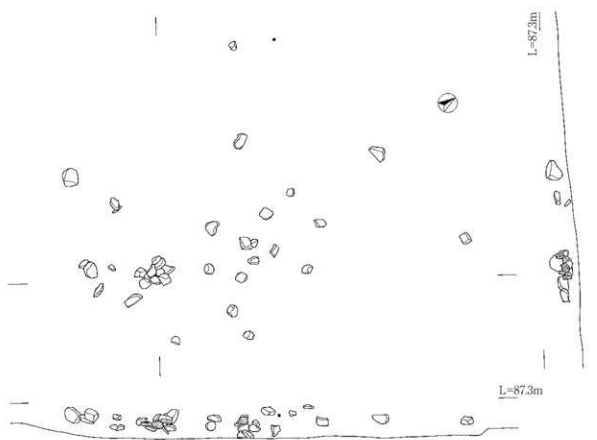
がっている。構成礫数は35個である。特に掘り込みは確認できなかった。総重量は4,165g。平均重量は119gであり、100~200gの大きさの礫を多く使用している。集石遺構からは土器が2点(28, 29)と石鏃(30)、磨石(31)が出土した。土器は深鉢の胴部小片、石鏃はチャート製で、基部にU字状の袂が入る鋸形鏃で、磨石は多孔質の安山岩小円礫である。明確な敲打痕は見られないが、部分的に平滑な面があり、磨・敲石として使用された可能性がある。

15号集石遺構 (第34図)

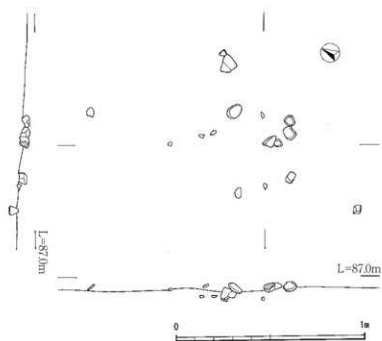
E-6区で検出された。145cm×118cmの範囲に散在する。構成礫数は17個と少ない。特に掘り込みも確認できなかった。総重量は1,853g。平均重量は109gである。集石遺構内からは遺物の出土は見られなかった。



第32図 縄文早期13号集石遺構・出土遺物



第33図 縄文早期14号集石遺構・出土遺物



第34図 縄文早期15号集石遺構

16号集石遺構 (第35図)

B-4区で検出された。43cm×33cmの狭い範囲に集中しているが、構成礫数は9個と少ない。掘り込みは確認できなかった。総重量は900g、平均重量は100gと小ぶりの礫を使用していることがわかる。集石遺構内からは、チャートのチップが1点出土した。

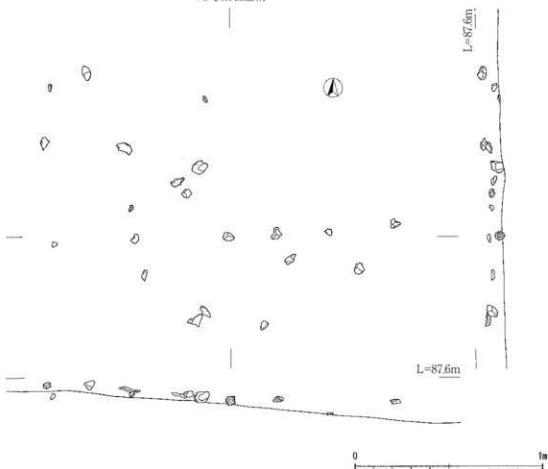


17号集石遺構 (第35図)

B-4区で検出された。50cm×83cmの範囲に割と集中はしているものの構成礫数は13個と少ない。特に掘り込みは確認されなかった。総重量は1,765g、平均重量は136gである。割と大きめの拳大の砂岩3個を使用している。集石遺構内からは遺物は出土しなかった。



18号集石遺構



第35図 縄文早期16号・17号・18号集石遺構

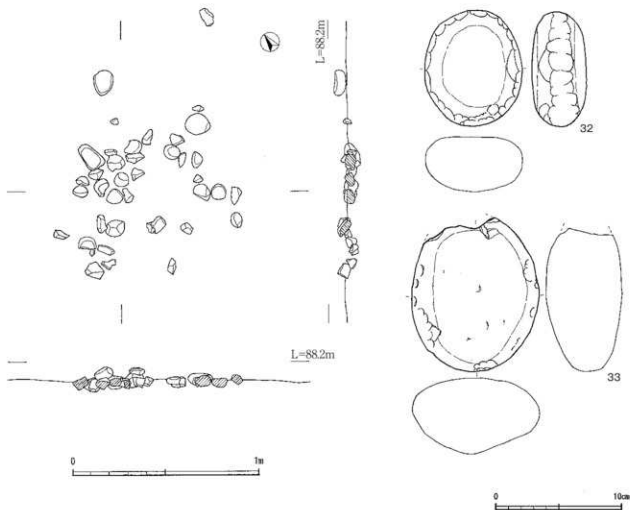
18号集石遺構 (第35図)

I-2区で検出された。190cm×140cmの範囲に中心をもたず散在する。構成礫数は20個である。総重量は1,511g。平均重量は75gと全体的に小ぶりの礫を使用している。礫の多くは砂岩の角礫である。

19号集石遺構 (第36図 32・33)

G-1区で検出された。145cm×100cmの範囲に半円状に集まっている。礫が配置されている弧に沿って、若干掘り込みの可能性が残されたが、図示するまでには至

らなかった。構成礫数は40個である。総重量は8,165g。平均重量は255gである。集石遺構の中から、石器が2点出土したので図示する。32は円礫の上面、下面の3分の2ほどを磨り面として使用している。さらに側面は全体に渡って敲打の痕跡が巡っていることから、敲打兼用の磨石といえる。33は円礫を磨石として使用したものである。上面に広く磨り面として使用した痕跡が残る。側面に見られる不規則な凹みは敲打痕と考えられる。また、上部は敲打により欠損した可能性もある。



第36図 縄文早期19号集石遺構・出土遺物

20号集石遺構 (第37図)

H-1・2区で検出された。175cm×257cmの範囲に広く散在している。構成礫数は78個である。特に掘り込

みは確認されなかった。総重量は6,725g。平均重量は85gと小ぶりの礫が多い。100g未満が56個である。集石遺構からは遺物は出土しなかった。



第37図 縄文早期20号集石遺構

2 遺物

(1) 土器 (第19・38~45図 34~115)

1類土器 (第38図 34~36)

1類土器は、平底の底部から口縁部に向かい緩やかに外傾する深鉢形の土器である。口縁部から胴部上位には貝殻による横位条痕文を施し、胴部中位以下には、斜位に交差するように沈線を施している。内面は、斜めから縦方向のナデ調整が行われている。

34は口縁部から胴部にかけて接合した破片である。口唇部の端部は丸まっており、器壁はほぼ同じ厚さ(約1.2cm)である。外面は、口縁部から胴部上位にかけて横方向に15本の沈線が巡らされている。5条が単位となっている。

胴部中位から下位にかけては、斜めの2方向の沈線が施されている。左下方向へのものと右下方向へのものである。左下方向へは6~7本が1組、右下方向へは4~10本が1組に見える。しかし、沈線をナデ消されている部分や重複している部分もあるので、4本が最小の単位であって、10本の部分についても4~5本が1単位となっていると考えられる。内面は口縁部付近が斜めから横方向のナデ調整、口縁部の下部から胴部の残存している部分の下部にかけてはほぼ上下方向のナデ調整がおこなわれている。

上位にある横方向の沈線に若干、斜め方向に延びる沈線の名残がある。沈線の切り合い関係の観察より、左上から右下への沈線が最初、次に右上から左下への沈線、最後に上位の横方向の沈線が施されたのがわかる。

35は胴部の破片である。上部には横方向の8~9条

の沈線が付されている。その下部には、下方の沈線と重複して、斜めの2方向の沈線が交互に施されている。1つには左下方向へのものであり、もう1つには右下方向へのものである。左下方向へのものは5本の沈線が1組となっており、右下方向へのものは4~6本の沈線が1組となっているようである。内面は斜めから縦方向のナデ調整が行われている。

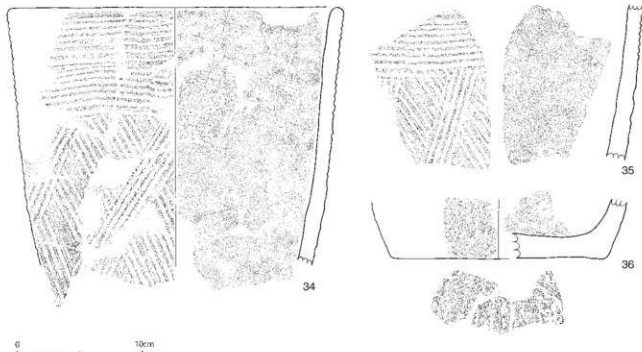
沈線の切り合い関係は、34と同じく、左上から右下への沈線が一番最初、次に右上から左下への沈線、最後に上位の横方向の沈線が施されている。

36は底部の破片である。安定した平底を呈するもので、底面と胴部下部の接合点にかけては、幾分上げ底となっている。胴部へは、やや開き気味なカーブで上部へと立ち上がっていく。外面は縦方向のナデ調整が行われている。内底もナデによる調整である。

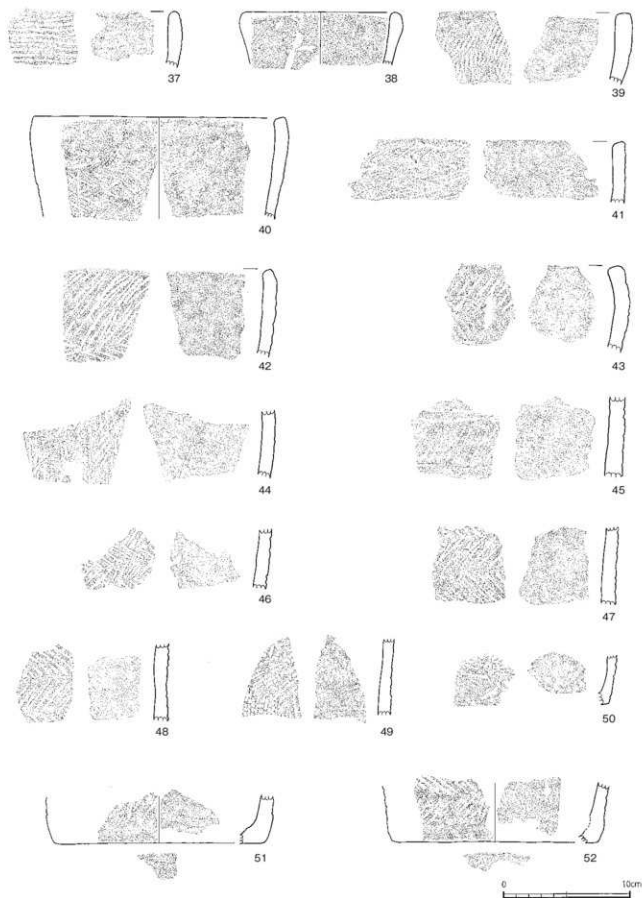
34と35を比較すると、上部の横方向の沈線の下部に斜めの2方向の沈線があること、そして左下方向の沈線が少なく、右下方向へが左下方向へのもの約2倍の数の沈線であること、沈線の施文順が同じであること、器壁の厚さがほぼ同じであることなどから、同一個体と考える。また、36も内面の器面調整や器壁の厚さがほぼ同じであること、底部から復元した胴部の大きさが同等になりそうなことから、3点とも同一個体になる可能性がある。

2類土器 (第39~42図 37~96)

2類土器は、胴部に貝殻刺突文及び羽状文を施す深鉢形の土器であるが、文様構成により細分類した。



第38図 縄文早期の土器1



第39図 縄文早期の土器2

37~52までは、2-a-1類と位置づけた。この類は胴部から口縁部にかけてやや内湾する。口唇部がやや丸みを帯び、貝殻条痕文は浅いが「く」の字状に大きめの文様が施される一群である。37~43は胴部から口縁部にかけてであるが、44~49は胴部、50~52は底部である。

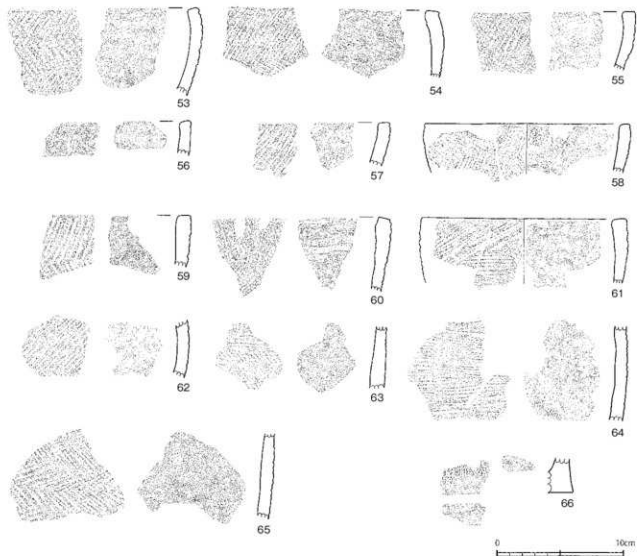
37は、口縁部の小片であるが、口唇部の端部は丸まり、外面は貝殻の腹縁による横方向への列状の押圧が施されている。内面は横方向の丁寧なナデ調整が行われている。38、39は貝殻条痕文を口縁部付近まで施しているが口縁部付近がやや肥厚する。39は口唇部をナデ、平らな面を作る。40は貝殻刺突を「く」の字状に施すが、不規則である。口唇部には煤が付着する。41も40に類する。42は「く」の字状ではあるが、刺突を驚ぎ長めに斜の文様を施している。43は等間隔に刺突を施す。44は不規則な刺突である。45は斜位に刺突文を施しているが、その上下には横位に貝殻刺突文を施している。46は、短い沈線で羽状文を施している。47~50は、貝殻刺

突を「く」の字状に規則正しく施している。51、52は底部付近まで刺突を施していることが観察される。

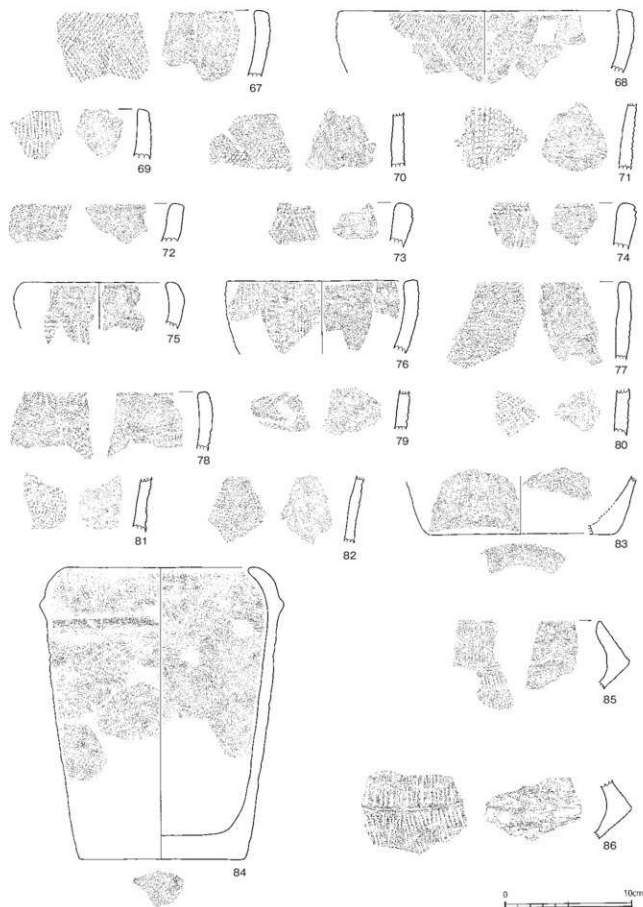
53~66は、2-a-2類と位置づけた。この類は口唇部が平坦面を成している。貝殻刺突文が2-a-1類と比べて深く、文様間が比較的狭い一群である。

53~61は口縁部を含む胴部である。59以外からは、口唇部を強くナデ平坦面を構築した様子が、口唇部端に粘土が溜まっていることから窺える。53~59は「く」の字状に貝殻刺突を狭い間隔で丁寧に施している。60、61は斜位の刺突文の下に横位に刺突文を施している。62~65は胴部片である。62は、斜位の刺突文を長めに施している。63は60と同様、「く」の字状の刺突文の上部に横位に刺突文を施している。64は横位に近い角度に斜位の刺突を長めに施している。65は「く」の字を横だけでなく、上下にも連続で丁寧に施している。66は底部片であるが、貝殻刺突文が施文されている様子が窺える。

67~86は2-a-3類と位置づけた。2-a-1、2類と



第40図 縄文早期の土器3



第41図 縄文早期の土器4

同じような文様を施しているが、全体の器形が不明な一群である。

67～69は、胴部上位から口縁部が残る。器形は、やや内湾気味で、貝殻刺突をはっきりと細かく丁寧に繰り返している。70、71は口縁部が残存しない胴部であるが、67～69と同様の貝殻刺突文が施されている。72～77は、胴部から口縁部が残るものであるが、いずれも口唇部に平坦面をもち、貝殻刺突文を施してはいるものの、やや施文が不規則だったり空間が入ったりするものもある。75は、口唇部付近に煤の付着が見られる。78は、口縁部に縦位の貝殻刺突を巡らせ、その下方に「く」の字状の刺突を繰り返している。79～82は胴部である。「く」の字を意識した刺突が繰り返されている。83は底部であるが、貝殻刺突の痕跡は微妙に残る。84は完形品である。口縁部が大きく内湾し、突帯を1条貼り付けている。外面には貝殻刺突文が施され、内面はナデとミガキ調整が行われている。底部は安定した平底である。85、86は84の形状に近いと考えられる口縁部である。縦位の貝殻刺突文が施されるが、屈曲部の上位は丁寧なナデが見られる。2点とも小片のため、傾きには若干の不安も残

される。文様形態や屈曲部の様子から同一個体の可能性がある。

87～91は、2-b類と位置づけた。丁寧なつくりで口縁部が平坦になることが予測される一群である。87、91は羽状文を横方向に巡らせ、88～90は、縦方向に施文を繰り返している。また、列点状に施した刺突文も縦方向の施文の間に見られる。

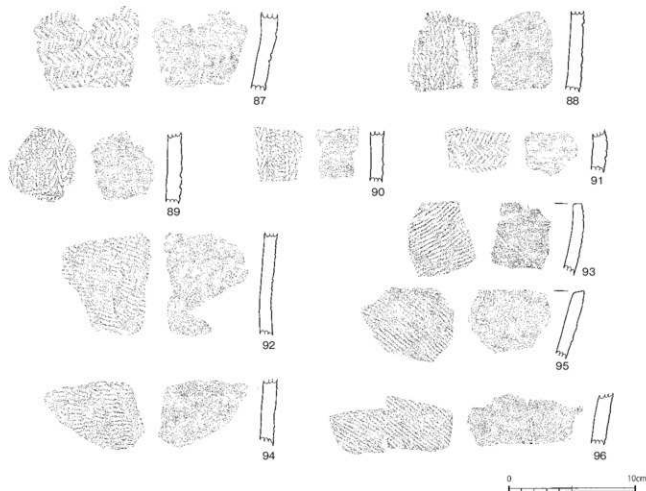
92～96は、2-c類と位置づけた。口縁部断面形状、内面磨きなどから2類の範疇とした。外面に単筋の斜縄文を施している。

3類土器 (第43～45図 97～115)

口縁部がラッパ状に開き、胴部がやや膨らみ、底部が安定した平底となる土器の一群である。

97～103を3-a類と位置づけた。c類と比べると比較的器壁が薄めで沈線と捺糸による文様が施されている。

97は口唇部に刻み目が等間隔で施されている。97～104は、沈線による施文の状況、内面及び外面の調整等から同一個体の可能性が高い。99、101は胴部である。沈線と捺糸文を施しているが、同一個体の可能性が



第42図 縄文早期の土器5

ある。102, 103は胴部である。捺糸文を施した後、沈線により文様を描いているが、同一個体の可能性がある。

105~109を3-b類と位置づけた。a類と同じように器壁は薄めで、口縁部は外側に大きく開くものである。口唇部の端部は角張るもの(105・107・108)と丸みを帯びるもの(106・109)とがある。105は外面の口唇部の端部から口縁部全体にかけて、短い爪形の連続刺突文が4段に亘って波状に付されている。106の口唇部の端部から口縁部にかけては同様な施文が6段施されている。また、頸部から胴部の上部にかけても施され、それより下部は格子状の沈線の内側に捺糸文が充填される。捺糸文が充填された格子の外側は丁寧にナデられて無文となる。107は波状となる口縁部で、口唇部の端部と口縁部の下部のみに短い爪形の連続刺突文が、108は残存している部分には3段の同様な施文が見られる。109は口唇部の端部に短い刻みがあるほか、口縁部にも3列に「D」の字状の形状の貝殻刺突文が3段付されている。頸部に

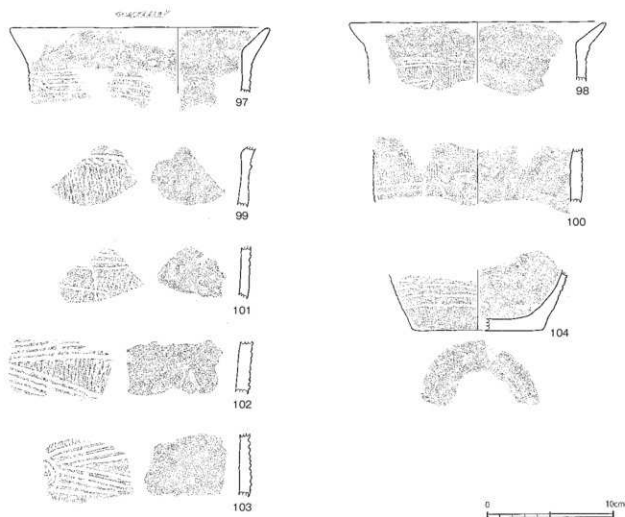
かけては横方向の沈線が4, 5巡り、胴部には三角ないしは六角形状の沈線の内部を貝殻の刺突による文様を満たしている。

110~115は3-c類と位置づけた。器壁がやや厚く貝殻刺突文、押し引き文、貝殻条痕文が施される一群である。

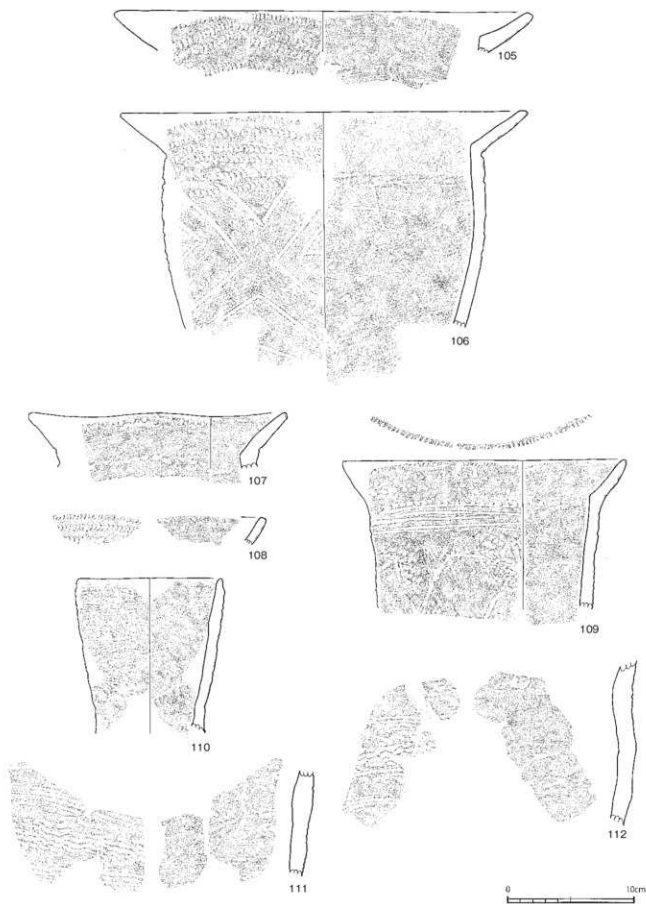
110は円筒形を呈する土器の口縁部から胴部にかけての破片で、外面には横方向を主とする貝殻条痕文が付される。

111と112は胴部である。横方向と波状の貝殻条痕文が施されている。器壁は比較的厚い。

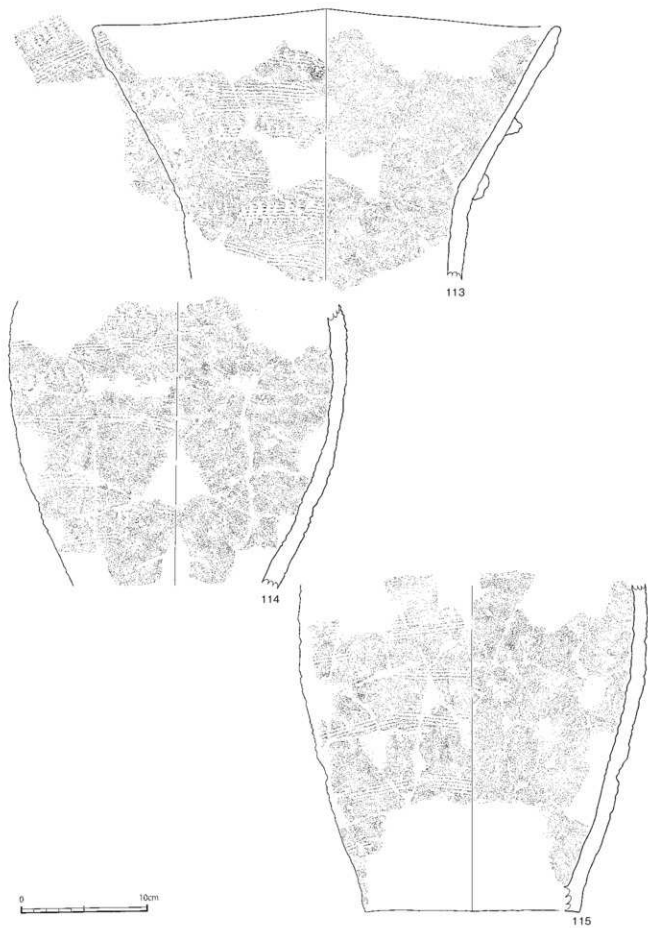
113は口縁部が長く大きく開くもので、外面には横方向の貝殻条痕文と貝殻腹縁の押圧が行われているほか、塊状の突帯が部分的に付される。114と115は、外面に横方向の貝殻条痕文と貝殻腹縁の押圧が連続的に行われているものの胴部である。113と文様形態は似ている。113~115は、同一個体である可能性が極めて大きい。



第43図 縄文早期の土器6



第44図 縄文早期の土器7



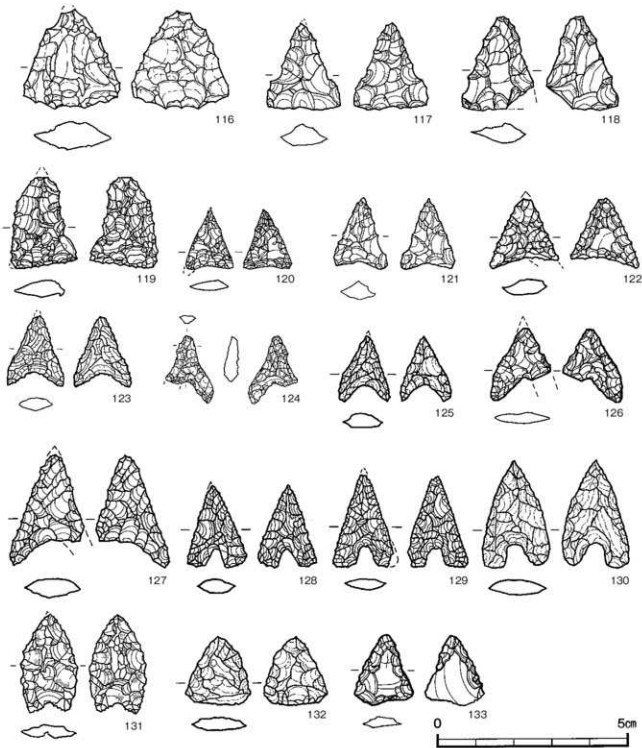
第 45 図 縄文早期の土器 8

(2) VII層出土石器 (第19・46~53図 116~182)

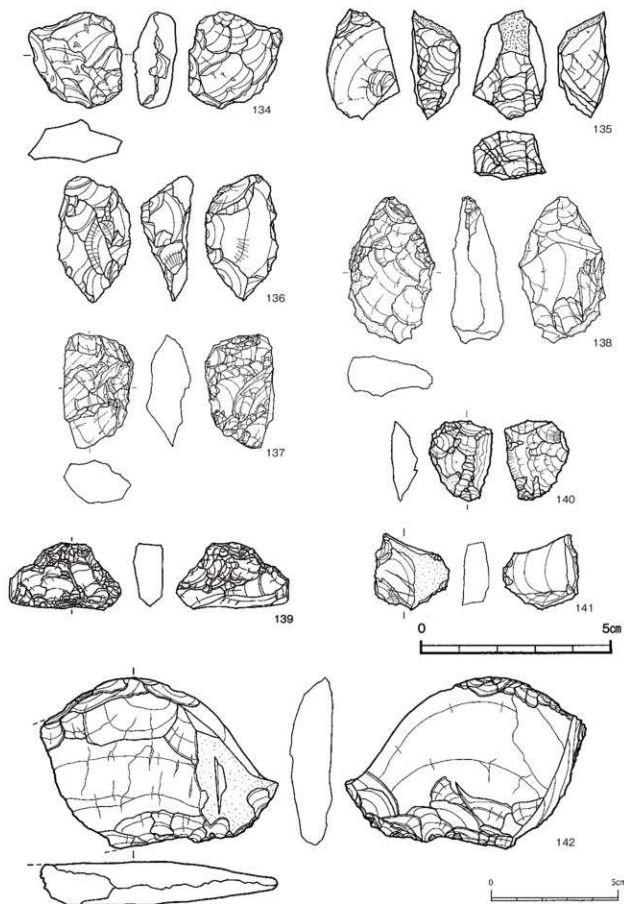
VII層出土の石器として、石鏃18点、掻器3点、彫器1点、楔形石器1点、加工痕・使用痕のある剥片4点、磨製石斧4点、打製石斧(加工痕のある剥片1点を含む)3点、礫器2点、磨・敲石類11点、砥石類5点、石皿2点、石錘8点、蜂の巣石1点を図示した。

石材に関する分析・同定は行っていないが、黒曜石I類は不純物を多く含む漆黒色不透明の黒曜石で、薩摩川

内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市市来町平木場産に類似する。II類はガラス質の透明感があり不純物を多く含む黒曜石で3類に細分できる。II A類は黒色~黄茶褐色を呈し均質に不純物を含む黒曜石で伊佐市大口日東・五女木産に類似する。II B類は青みがかった灰色の色調を呈する黒曜石で錦江町長谷産に類似する。II C類は青みがかった灰色から黄茶褐色を呈し不均質に不純物を含む黒曜石で鹿児島市三船産に類似する特徴をもつ。III類は



第46図 VII層出土の石器1



第 47 図 Ⅷ層出土の石器 2

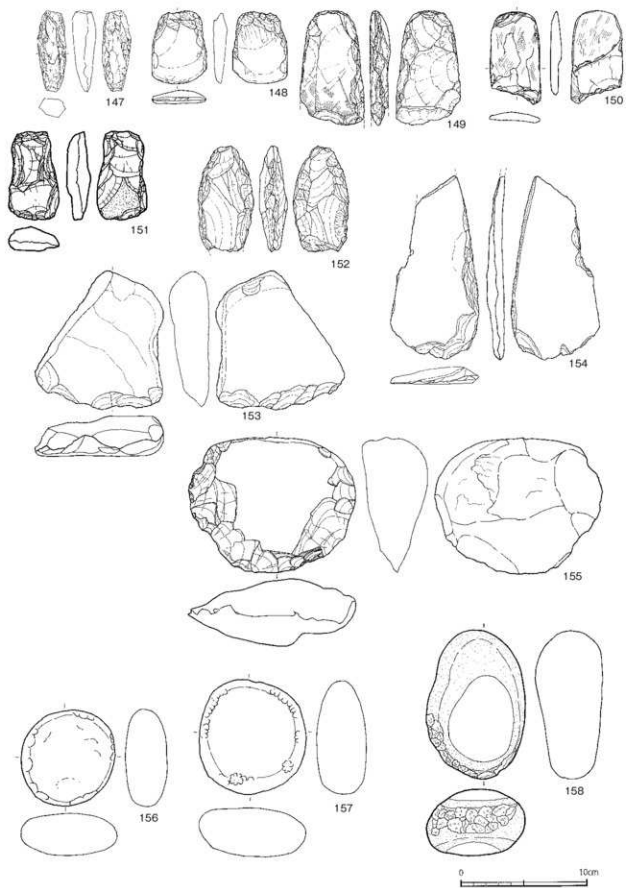


黒色～紫色を帯びた藍色を呈し、透明感があり白色の不純物を含む、熊本県人吉市桑ノ木都留産及び上青木産に類似する。ⅢⅠ類は黒色～濁灰色半透明で白色の不純物をやや多く含む黒曜石で内屋敷ⅠⅡ群に類似する特徴をもつ。Ⅳ類は黒色ガラス質で不純物が少なく良質な黒曜石で佐賀県伊万里市腰岳産に類似する。Ⅴ類は黒色～灰黒色で透明度低く、少量の不純物を含む黒曜石で、長崎県佐世保市針尾中町産黒曜石に類似する。Ⅵ類は青灰色で透明度が低く不純物を少量含む黒曜石で長崎県佐世保市東浜産黒曜石に類似する。Ⅶ類は不純物をほとんど含まない薄い灰色～オリーブ色を呈する黒曜石で、佐賀県精野町椎葉川流域で採集される黒曜石に類似する。Ⅷ類は不純物をほとんど含まない透明感の無い灰白色～灰色を呈する黒曜石で大分県郷島産に類似する。

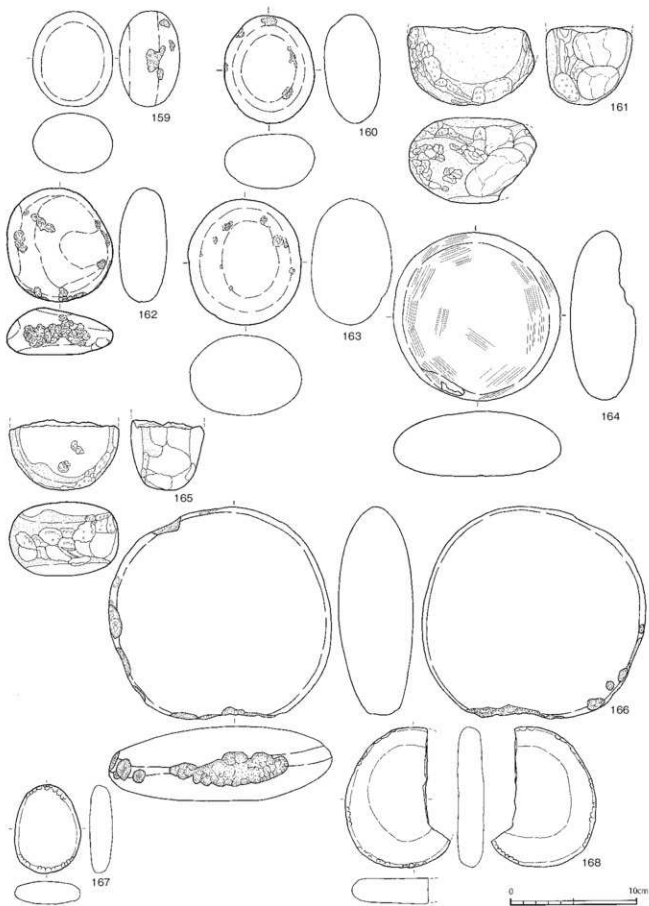
石鏃 (第46図 116～133)

116は緻密な安山岩製の大型の円基鏃である。重量・厚みがあり、銛先の可能性もある。117・118は平基の三角鏃でチャート製である。119は黒曜石Ⅰ類で、先端部及び右側辺部を欠損するが残存部から五角形鏃とみられる。120～122は浅い凹基の三角形鏃で、120は黒曜石Ⅳ類、121は黒曜石ⅢC類、122は黒曜石Ⅷ類とみられる。123～127は、基部が弧状に内湾あるいは三角形の挟りが入る凹基の石鏃である。123が緻密な安山岩、124・

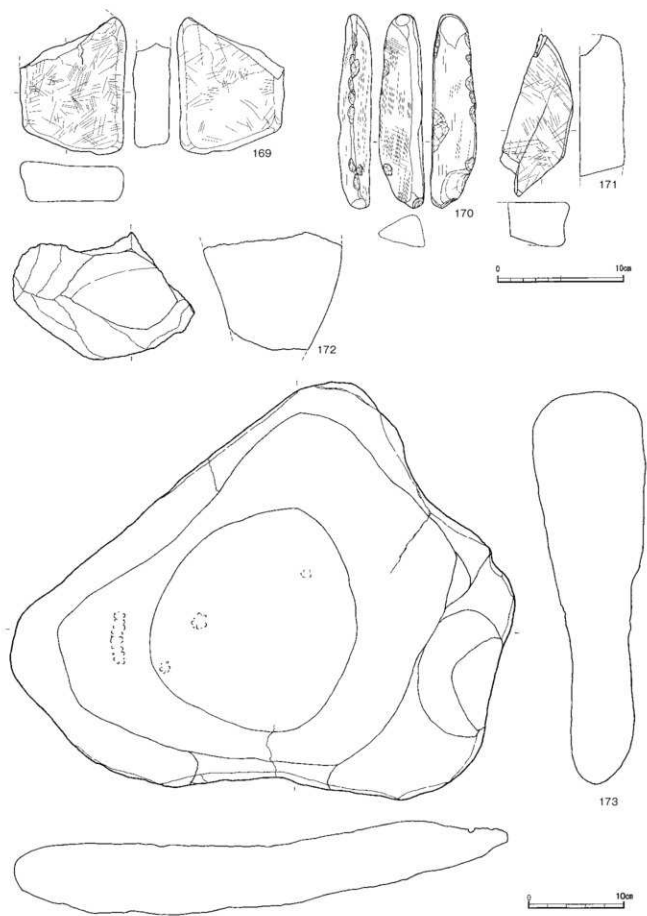
第48図 Ⅶ層出土の石器3



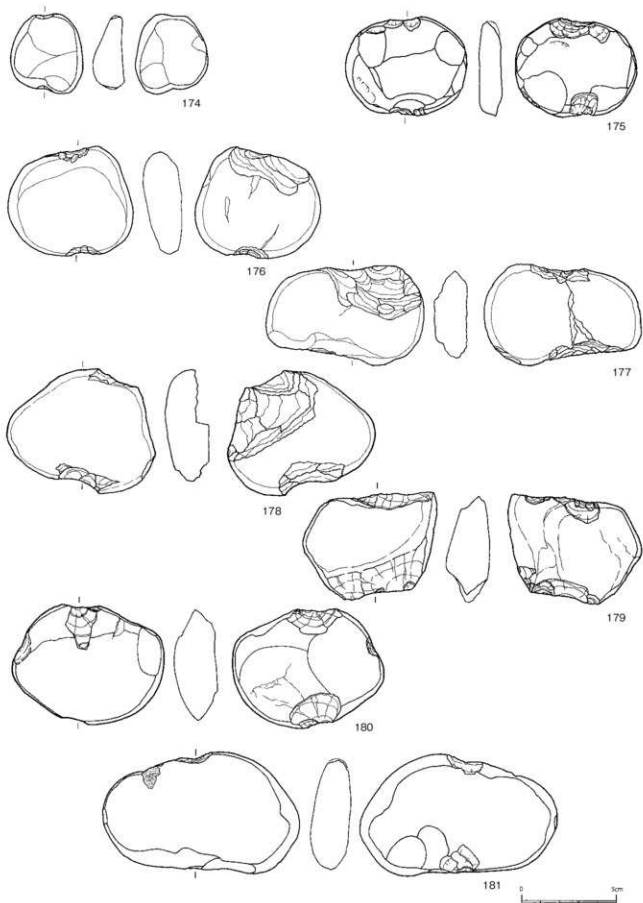
第49図 Ⅷ層出土の石器4



第50図 Ⅷ層出土の石器5



第 51 図 Ⅶ層出土の石器 6



第 52 図 Ⅶ層出土の石器 7

126 は珪質頁岩、125・127 は黒曜石Ⅴ類に類似する。128～130 は、基部にU字状の抉りが入る楕形鏝である。128 は灰褐色のチャート製、129 は珪質頁岩製、130 は緻密な安山岩製を石材としている。131 は肩部中央に最大幅を持ち基部で窄まり、基部に浅い三角形の抉りが入る。132 は玉髓製で石鏝若しくは製作段階の欠損品とみられる。133 は緻密な安山岩製の石鏝若しくは未製品である。

播器 (第47図 134～136)

やや厚みのある不定型な剥片で二次加工により部分的に刃部が作り出される。134 は黒曜石Ⅱc類、135 は黒曜石Ⅰ類、136 は珪質頁岩製である。

楔形石器 (第47図 137)

137 は緑灰色のチャート製で上下に対向する剥離があたり、縦断面は紡錘形を呈し、上辺に階段状の剥離がみられることから楔形石器とした。

彫器 (第47図 138)

138 は玉髓製の厚みのある不定形剥片で、上半部を中心に調整剥離が施され、右辺縁上に上端から桶状剥離が加えられることから彫器とした。

加工痕のある剥片 (第47図 139～142)

139 は灰色を呈するチャート製で左右側辺、下辺部に調整剥離が加えられている。製作途中で摘み部を欠損した石匙の未製品である可能性もある。140 は黒曜石ⅡC類の不整形剥片で、上辺・左側辺上部、下端に不規則な剥離がみられる。141 は背面に自然面を残す珪質頁岩の剥片で、不規則な剥離及び微細剥離がみられる。142 はホルンフェルス製のやや大型の剥片で、下辺及び上辺に二次的な剥離が加えられている。

石核 (第48図 143～145)

いずれも黒曜石Ⅰ類の石核である。143 は各面に自然面が残し、剥片剥離が進行しないまま遺棄される。144 は下面、正面、上面へと90°単位に打面を転移させながら

剥片を剥離している。

尖頭状石器 (第48図 146)

146 は砂岩の縦長剥片を素材とし、両側部から側縁に剥離を加えた後、背面及び左右側面上半部に研磨を加え、端部が尖る形状に成形されている。

磨製石斧 (第49図 147～150)

147～150 はいずれもホルンフェルス製の磨製石斧である。147 は小型で細身の石斧である。左右側面に剥離を加えて整形し刃部のみに研磨を加えた整形の石斧である。148 は小型扁平な片刃の石斧である。欠損後基部に再加工を施し再利用したものとみられる。149 は横長の剥片素材の石斧で、両側面に剥離調整を加え整形した後、刃部を中心に部分的に研磨を加える。使用によると思われる刃部の欠損が生じている。150 は、小型扁平な磨製石斧である。

打製石斧 (第49図 151・152・154)

いずれも石材はホルンフェルスである。151・152 は研磨痕がみられないため打製石斧とした。154 は便宜上ここに掲載したが、整形加工が不明瞭である。

礫器 (第49図 153・155)

153 は下辺部に、155 は左右側縁及び下縁に二次的な剥離がみられることから礫器とした。いずれもホルンフェルス製である。

磨・敲石類 (第49図 156～158 第50図 159～166)

156～166 は磨・敲石類である。158・162 は敲石で明瞭な磨面はみられず石器制作に用いられた可能性が高い。その他は磨面をもち側縁部に部分的に敲打痕がみられるもので、明瞭な形状加工を伴うものはみられない。石材は、158 が砂岩、161 が花崗岩で、他はいずれも器面の粗い安山岩製である。

砥石類 (第50図 167・168 第51図 169～171)

167・168 は砂岩のやや扁平な凹縁で表面に凹面状を呈する磨面を持つことから砥石とした。169・171 は盤状の砂岩礫片で不規則な擦痕がみられる。170 はホルンフェルスの棒状礫で、部分的に擦痕がみられる。

石皿 (第51図 172・173)

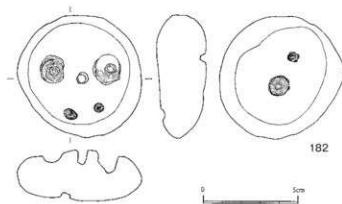
172 は花崗岩製の石皿の破片である。173 は粗面の安山岩製の石皿で表面中央付近に使用の痕跡をみる。

石錘 (第52図 174～181)

174～177 は砂岩製、178 は粗面の安山岩製、179～181 はホルンフェルス製のいずれも打ち欠きの石錘である。

蜂の巣石 (第53図 182)

多孔質の安山岩製で器面には無数の自然の凹みがみられる。図示されるものは、凹みの形状から回転穿孔により自然の凹みが拡張されたものとみられるが、擦痕・線状痕は不明瞭である。



第53図 VII層出土の石器8

(3) VI層出土石器 (第54図 183~192)

VI層出土の石器として、石鏃6点、加工痕・使用痕のある剥片2点、打製石斧1点、磨・敲石類1点を図示した。

石鏃 (第54図 183~188)

183・184は基部が弧状に内湾あるいは三角形に抉りが入る凹基の石鏃である。石材は、183が黒曜石種類、184が安山岩である。185は基部にU字状の抉りが入るチャート製の鉞形鏃である。186~188は深いU字状の抉りが入る石鏃で、186が緻密な安山岩、187が鉄石英、188が黒曜石種類である。

加工痕のある剥片 (第54図 189・190)

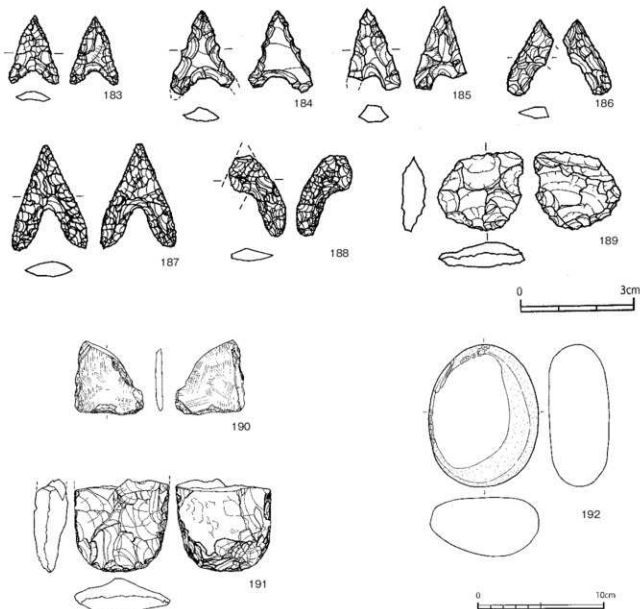
189は鉄石英の不定形剥片で周縁に部分的に二次的な調整剥離が加えられている。190は粘板岩の剥片で、表裏に研磨の痕跡を認める。

打製石斧 (第54図 191)

ホルンフェルス製で、上辺の折れにより欠損する。研磨調整がみられないため打製石斧としたが、磨製石斧の未製品の可能性もある。

磨・敲石類 (第54図 192)

粗面の安山岩の円礫で、上面に部分的に磨面があり、周縁部分に部分的に敲打痕がみられる。



第54図 VI層出土の石器

第2節 縄文時代後・晩期の調査

縄文時代後期及び晩期の調査は、遺物包含層であるⅡb層の掘り下げを中心に行った。遺構検出はⅢ層の池田カルデラ起源の白色軽石層を目安として行った。ただし、白色軽石層の堆積が不安定な箇所については、V層のアカホヤ層上面まで掘り下げて行った。

遺物包含層は残存状況が全体的に良好であったことから、調査範囲は第1地点を中心として第2・第3地点の調査区全体とした。遺構調査の範囲も同様である。

第1地点からは、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑・ピットなどが検出され、遺物としては後期及び晩期の土器や石器などが数多く出土した。土器や石斧などの集中域も見られた。第2地点からは、後期の竪穴住居跡が検出されたほか、その時期の土器・石器などが出土した。第3地点からは、土坑が検出されたほか、土器・石器も出土している。

調査範囲のほぼ全体から遺構や遺物が確認され、この時期の町田堀遺跡は人々の生活の痕跡が色濃く残っていることがわかった。

当時の地形に近いと考えられるV層上面のコンターで見ると、第1地点では全体的に西側が高く、東側に向かって下がっていることがわかる(第55図)。また、北側が高く、南側に向かって下がっている。ただ、細かく見ると、西側では中央に北東-南西方向に安定した尾根上の段があり、その部分を挟んで北西及び南東に3m程の凹部が見られるが、その部分を避けるようにして竪穴住居跡や土坑などが広がっていることがわかる。

F-5区にある2号竪穴住居跡が、周辺よりも低い場所に位置していることは特徴的である。また、F-2・3区に土坑が集中しているが、ここは本遺跡では高い部分になる。

調査区の東地区は、東及び南側が低くなっている。石斧や土器が集中して出土した場所は、北側の高い部分に、土坑は南側の低くなる傾斜部分に位置している。また、4号竪穴住居跡は南東部の緩やかな斜面に位置している。

第3地点は、北西から南東にかけて漸次低くなっている状況であるが、ここでも土坑は比較的高い場所に位置している。

また、第2地点で検出された竪穴住居跡は、ほぼ平坦で、遺跡全体としても比較的安定した高い部分に位置していた。

遺跡の中での遺構のある位置は、今後他遺跡との比較検討の必要もある(第56図)。

1 遺構

(1) 竪穴住居跡(第57~68図 193~290)

1号竪穴住居跡(第57・60図 193~225)

E-5区に位置し、Ⅳ層上面で検出された。検出面での規模は2.55m×2.53mで、ほぼ円形を呈しており、残存部の最深部は検出面から43cmであった。

東西、南北両方向に耕作による深い溝痕が筋状に見られたため検出は困難であった。実際の掘り込み面は、検出面よりも上位にあったことが考えられる。床面及び周囲は精査を繰り返したが、柱穴は確認されなかった。

埋土は、最下部が黄色土ブロック混じりの黒褐色土で、敷き詰められた後に固められた状況を示していた。その上の壁付近には黄色土がマール状に混じる砂質の暗茶褐色土が斜めに堆積していた。このような堆積状況は他に見られないことから、壁面の崩壊土と考えられる。その上に堆積している土は、下層から黄褐色土のブロックを少量含む砂質の黒褐色土、白色パミス(軽石)と黄褐色土を多く含むやや硬質の暗茶褐色土、最上部が白色パミスが少量混じる砂質の黒色土で、軟らかく粒が細かいものの順であった。

遺構内からは土器や石器、礫が出土した。最下部の硬化した黒褐色土の上面から出土したもののうち、大型の石皿の破片など数点は床着であったことから本住居で使用された可能性も考えられるが、それ以外の大多數の遺物は、住居の廃棄後に堆積したものと考えられる。

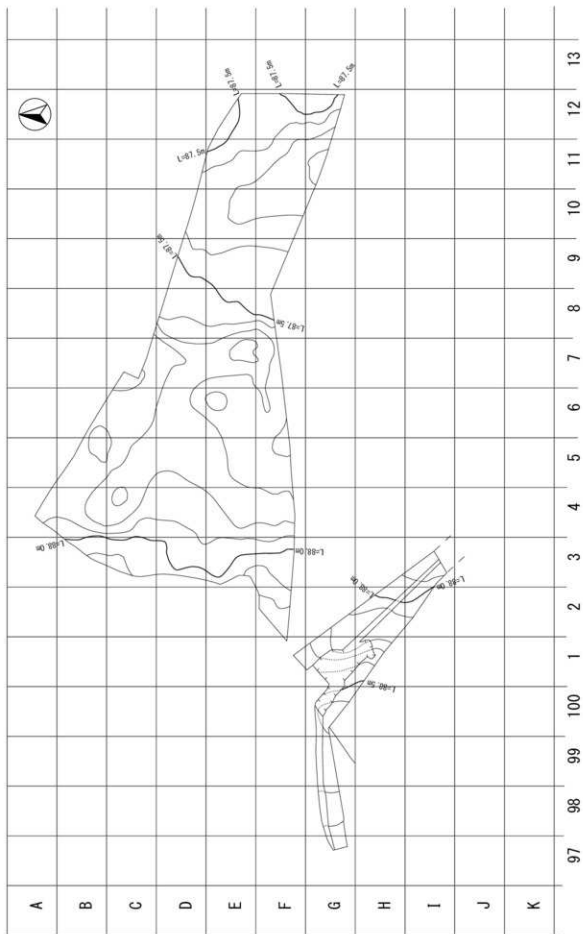
竪穴住居跡の床面近くからは、炭化物が多く検出されたので放射性炭素による年代測定を行い 3020 ± 25 (yrBP $\pm 1\sigma$)という数字が得られた。(P216参照)

以下、本住居跡から出土した遺物について説明を行う。

土器は193~211を図化した。193~195、197~205は口縁部である。そのうち193と194は胴部の直径が復元できた。いずれも胴部が膨らみ、上部にかけては一旦すぼまった後に口縁部が開いている。膨らんだ胴部最大径の部分には明確な稜を持つ。内面は、口唇部下に段を有し、胴部の稜は不明確である。

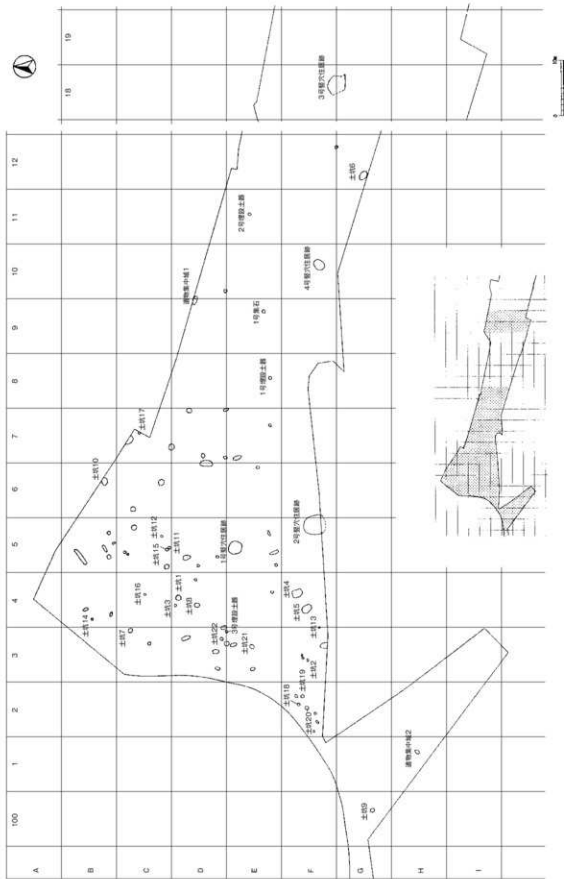
194は口縁部の端部が欠くが、形態的には193と類似している。195は口縁部の端部に平坦面を作っている。197は194に類似するが、口唇部に平坦面を作り、その中央に沈線を1条施すが、口縁部端外にも同様に2条の沈線を巡らせている。199は頸部が外反しているものの、口縁部の端部は内側に向かうことはない。口唇部には1条の浅い沈線が巡る。198は口唇部直下に1条の凹線が巡り、線には円形に近い凹点が1箇所施される。200は口縁部が大きく外反している。

201~205は口縁部付近の破片である。201は外面に1条の沈線が巡り、202~205は2条の沈線凹線が巡っている。203はための凹線状であるが、外は細くシャープな沈線である。

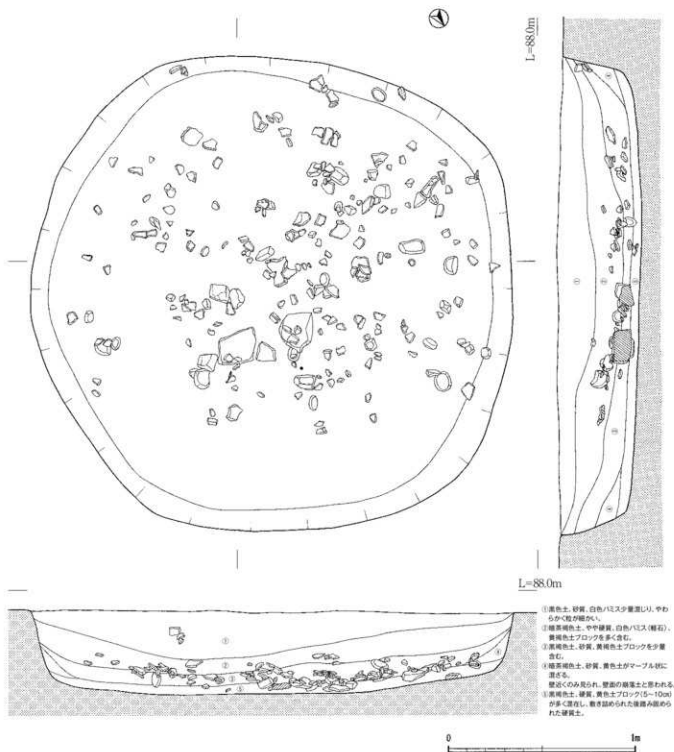


1 グリッドは 10m x 10m

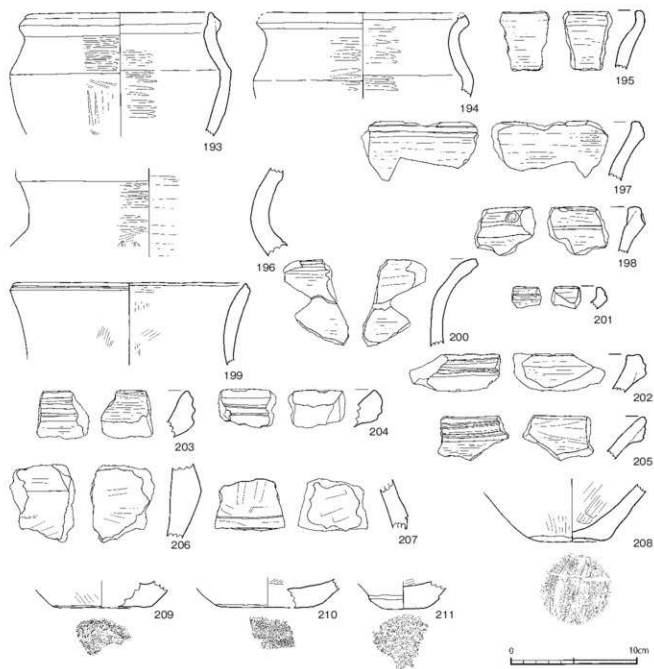
第 55 図 V 層上面コンター図



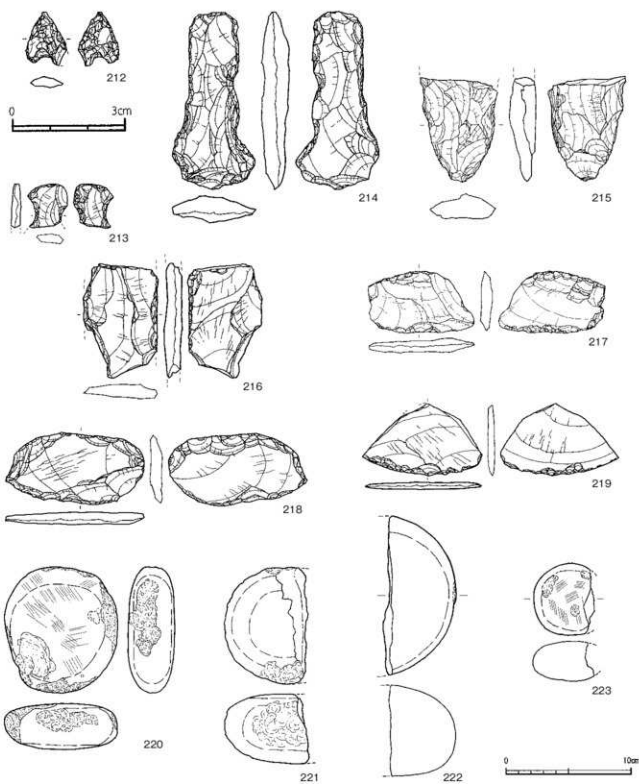
第 56 圖 縄文時代後期遺構位置圖



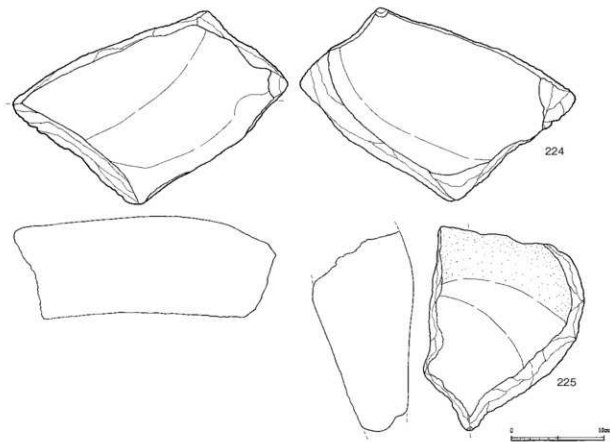
第 57 図 縄文後期 1 号竪穴住居跡



第 58 図 縄文後期 1 号竪穴住居跡出土土器



第59図 縄文後期1号壑穴住居跡出土石器1



第60図 縄文後期1号竪穴住居跡出土石器2

206と207は胴部の破片である。胴部の中でも、最も張り出す部分と考えられるが、いずれもやや内傾しながら立ち上がる器形を呈する。207は胴部に2条の沈線が巡る。

208～211は底部である。208と209は若干上げ底となるが、ほかは平底である。209は底部が薄い割に小さく、やや不安定な底部である。

石器は打製石鏃、打製石斧、スクレイパー、磨・敲石などが出土した。212は凹基式の打製石鏃213～216は打製石斧と考えられるもので、213は基部、216は刃部付近であるが刃部を欠失する。215は刃部である。217～219はスクレイパーと考えられる。それぞれ形状が異なっている。220～223は磨・敲石である。自然円礫を用いて広い2面を磨り面に、側縁を中心に敲打に使用している。

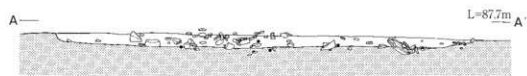
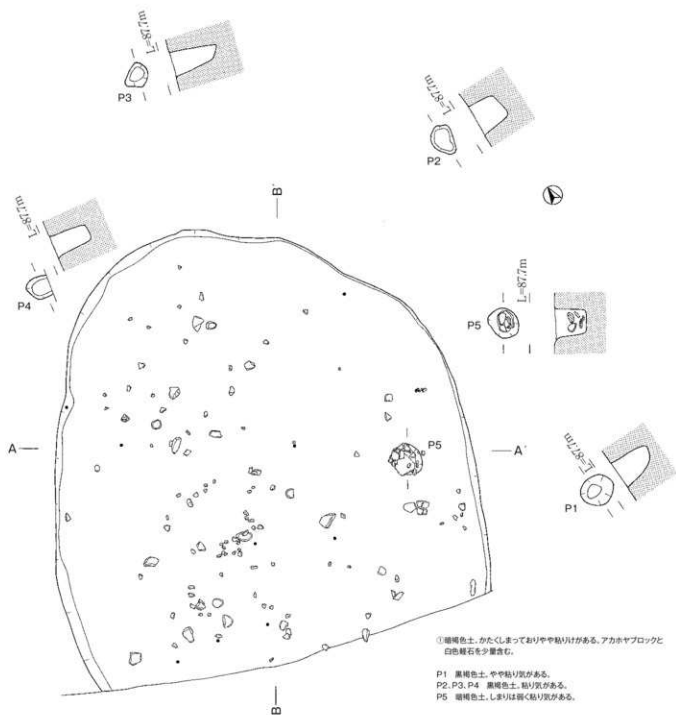
224と225は大型の石皿の破片である。大きな自然礫の広い面を使用面として利用している。

2号竪穴住居跡 (第61～63図 226～250)

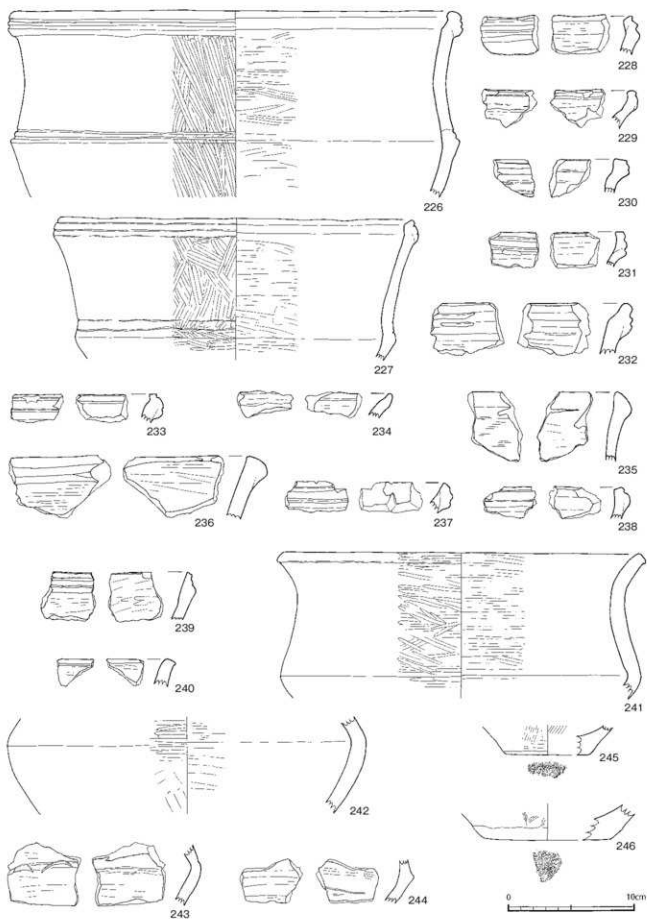
F-5区に位置し、V層上面で検出された。南側は調査区外に延びるため、長軸方向の最終的な長さは不明であるが、検出面での規模は3.50m×3.41mで、全形は楕円形を呈すると考えられる。残存部の最深部は18cmであった。床面に1基の柱穴と思われるピットがあったほか、周囲から4基のピットも検出されたが、本住居跡との関係については明確にできなかった。

埋土は、アカホヤのブロックと白色の軽石を少量含む暗褐色土で、硬くしまっており、やや粘り気がある。床面には若干凸凹が見られ、貼床と考えられるものは確認されなかった。また、埋土中の炭化物について放射性炭素による年代測定を行い、 3096 ± 20 (yrBP $\pm 1 \sigma$) という数値結果が得られた。(P216参照)

遺構内からは土器や石器、礫が出土した。埋土はやや粘性もあるが硬くしまった暗褐色土の1種類であった。明確に床着と考えられる遺物は少なく、遺物の多くは住居の廃棄に伴って遺棄されたものである可能性が高いと



第 61 図 縄文後期 2 号竪穴住居跡



第 62 図 縄文後期 2 号竪穴住居跡出土土器

考えられる。

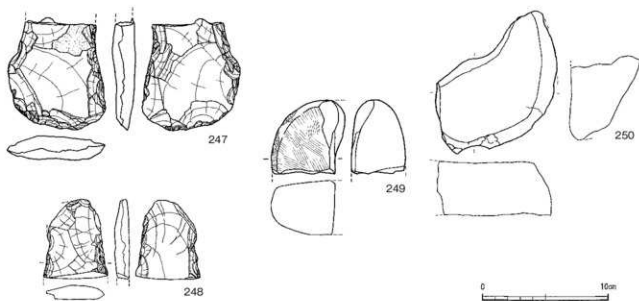
土器は、226～241が口縁部、242～244は胴部、245・246は底部である。そのほとんどが深鉢であった。

226は口縁部の外面に深い2条の沈線が巡る。また、「く」の字状に屈曲する胴部の上位にも、2条の沈線を巡らせている。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデ調整が行われている。227も226と同様に、口縁部下と「く」の字状に屈曲する胴部の上位にそれぞれ2条の沈線を巡らせている。口唇部は平坦面を作出しているが内傾している。228～240は口縁部の小片である。断面の形状や口縁部下の沈線の有無などの様々なバリエーションがあることがわかる。241は胴部が若干丸みを帯

びており、頸部にかけては大きく内傾し、その後、口縁部の端部にかけては大きく外反している。器面調整は、外面が斜め方向のミガキ、内面は横方向のナデが中心となっているが部分的にミガキも見られる。

242と243は胴部が丸みを持って頸部に向かい、244は明確な稜を持って頸部につながっている。245と246は底部である。いずれも底面が狭いことから全体は不明確である。

石器は、247と248は打製石斧、249は敲石兼用の磨石、250は石皿である。247は打製石斧の刃部、248は基部である。249は自然円礫の広い面を磨る使用面とし、側縁に敲打痕が見られる。



第63図 縄文後期2号竪穴住居跡出土石器

3号竪穴住居跡 (第64～67図 251～288)

F・G-18区に位置し、V層上面で検出された。西側は掘溝で切られており、南東部は2号地下式横穴墓により、また、南側の一部も3号溝によって切られていることから、本来の規模は不明である。北～東にかけての形状が緩やかな弧状を呈することから、円形もしくは楕円形状の住居であったことが想定される。規模としては、残存部の形状から、直径3.2m程度の円形を呈していたと推測される。

床面のほぼ中央部にピット状のごく浅い凹みを検出したが、掘り込みの底部がはっきりしないことから、樹痕の可能性が大きいと判断された。それ以外には、床面にも周囲にも柱穴は確認されなかった。

埋土は、下部が池田降下軽石がごくわずかに混じるIV層と考えられる黒褐色土、上部がII b層の黒褐色土とII a層の黒色土との混在土、直径1cm未満のアカホヤの混じった黒色土で、炭化物を多く含んでいる。

この炭化物を試料として放射性炭素による年代測定を行い、 3065 ± 25 (yrBP $\pm 1\sigma$) の数値結果が得られた。(P216参照)

本住居跡には貼床及び床の張り出し部分は確認されなかった。

埋土中からは多くの土器や石器、礫が出土した。ほぼ全部が住居の廃棄に伴って遺棄されたものである可能性が大きいと言える。

土器は、251～271が深鉢、272～277が浅鉢である。251～261は口縁部である。251は胴部に稜を持つもので、口縁部にかけては外反した後に再び内湾する。口縁部下には深い2条の沈線が巡っている。内外面ともにナデ調整が行われるが、内面には指頭圧痕が残っている。

252～260口縁部の様々なバリエーションである。断面形状や沈線の有無、器面調整などに変化のあることがわかる。257は口縁部下の文様帯が比較的幅広く、3条の沈線が巡っている。260は口唇部の端部に縦方向の刻みが見られ、器壁も薄くほととは異なった特色をもつ。261の口縁部下にある2本の並行沈線のうち、上位の沈線の一部が山形に施され、それに伴って口唇部もごくわずかに盛り上がる形状を呈している。このわずかなピークの口唇部端には、刻み目状の凹点が2か所施される。262は頸部の破片で、大きく外反するものである。

263～265は胴部で、稜のある胴部最大径付近の破片である。基本的に、稜の上位に1～2条の沈線が巡っている。263は上位の沈線には逆「ハ」の字状の刻みを、下位の沈線には凹点を付している。また、264の沈線が上下にずれて、一部は2本の沈線となっている部分もある。265は、胴部稜の上位に2条の細くシャープな沈線を施している。266、267は胴部と底部が直接接合したものであるが、色調や器面調整、胎土などから、同一個体に

なる可能性があると考えられる。胴部の稜のある部分から上方、頸部にかけては大きく内傾しながら立ち上がっている。また、下方へはすはまりながら底部に向かう器形となっている。267の底面は厚く接地面は少ないことから厚く作られているが、器形全体からすると若干不安定な感否めない。

268～271の底部は若干上げ底のものもあるが、ほぼ平底である。底面が狭く不安定なものも見られる。

272～277は浅鉢の破片である。272は残存状態は余り良くないが、底部を欠くものの、ほぼ完形に図上復元することができた。胴部はなめらかなカーブを描いて上方に向かい、上部の後部分でほぼまっすぐに立ち上がった後で大きく外反して口縁部に向かう。口縁部の端部には1条の浅い沈線を巡らせ玉緑状の口縁部を意識している。器面調整は内外面ともにミガキ調整で非常に丁寧な作りになっている。

273～277の口縁部は小片のため詳細は不明瞭であるが、いずれも器面の内外に丁寧な磨きが施されている。

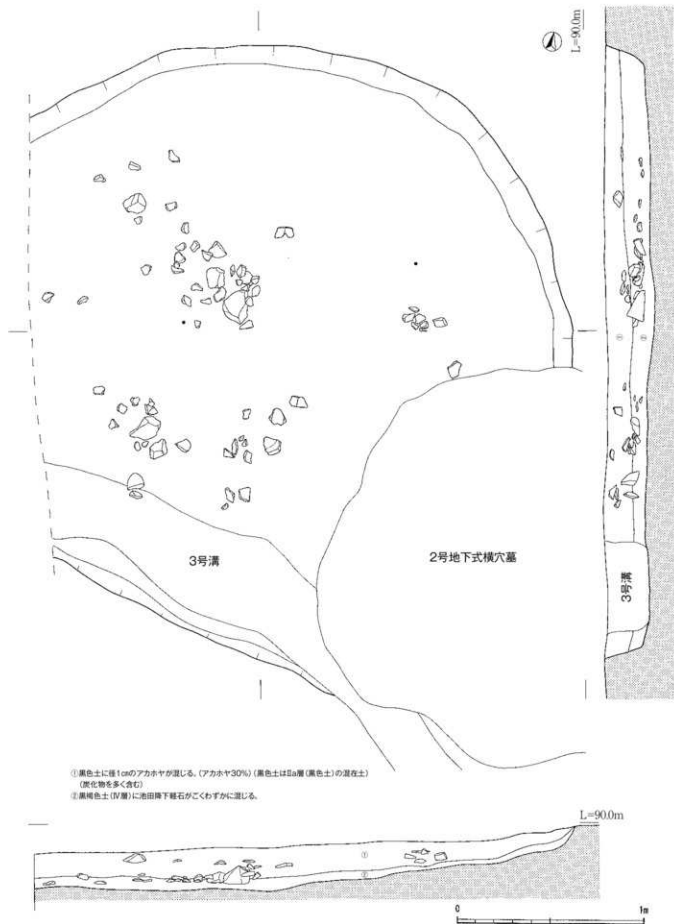
石器は、278と279はいずれも凹基式の打製石鏃、280は磨製石斧の基部で、破損したものを敲石として使用した可能性のある転用品と考えられる。281は磨製石斧の刃部で、使用中に折損したものと考えられる。282と284は打製石斧の折損したものと、283は打製石斧の基部で、抉りの部分から折損したと考えられる。285は刃部である。286はスクレイパーである。当初は、打製石斧の刃部と考えたが、打製石斧として使用する際の刃部とされる部分は、調整痕が見られるのみで使用痕がなく、一方の側縁に当たる部分に使用痕が見られたことから、スクレイパーとして図示した。287は磨・敲石の破損品、288は砂岩製の磨石である。

4号竪穴住居跡 (第68図 289・290)

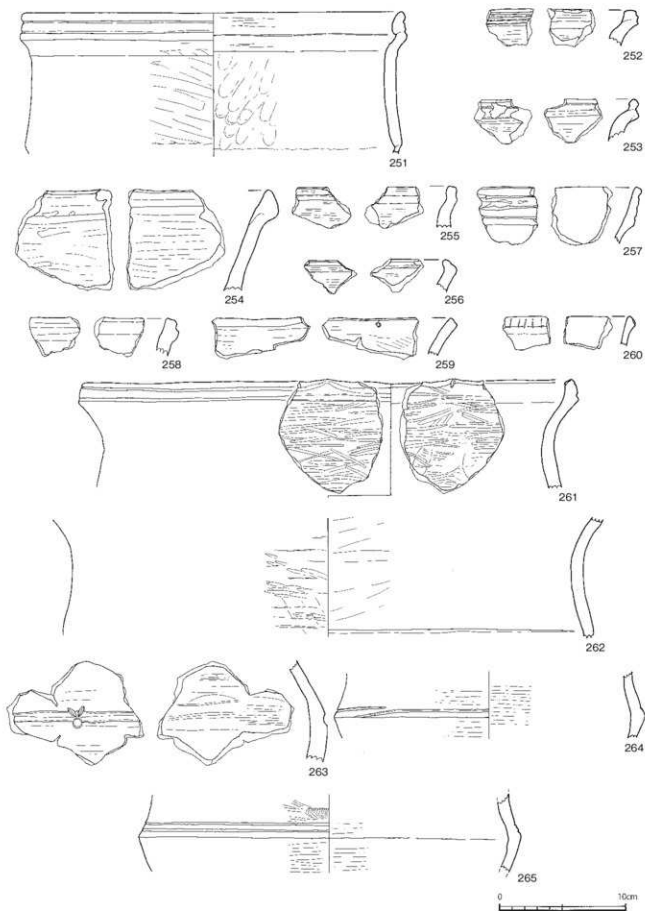
F-10区に位置し、III層から検出された。検出面の規模は2.25m×1.80mで、若干いびつな楕円形である。残存部の最深部は9cmであった。上面は削平されていると考えられる。埋土中の遺物は小片ながら縄文時代後期の土器であることや埋土中に池田軽石が含まれることから、この時期の遺構と判断した。床面及び周囲には柱穴は見られなかった。

埋土は池田軽石の混じる黒色土であり、分層はできなかった。また、埋土中から石皿の破片と土器が出土したが、極めて少数であった。図化したものは2点のみである。

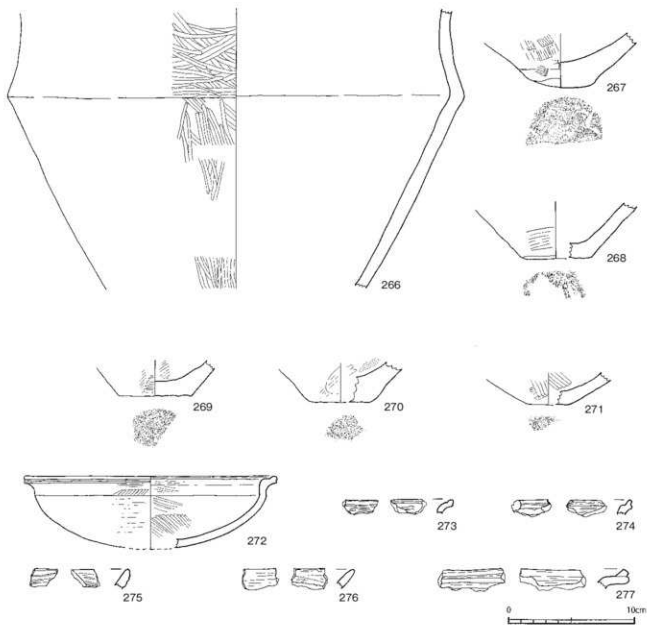
289は浅鉢の口縁部と考えられるものである。口唇部は丸く、全体の形状としては外反器形を呈するものである。290は口唇部を平坦に仕上げた後、等間隔で細くシャープに縦方向の刻みを施している。



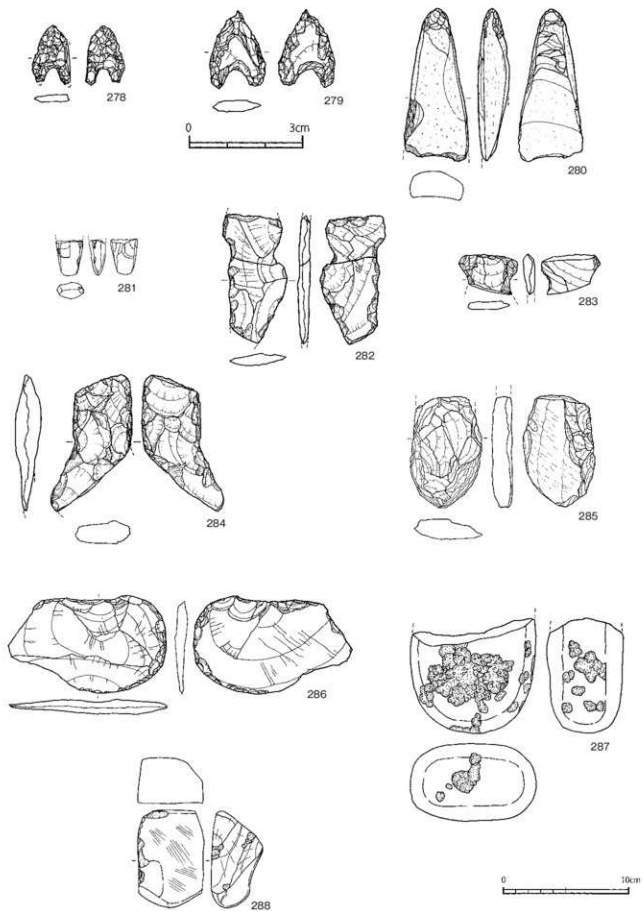
第64図 縄文後期3号竪穴住居跡



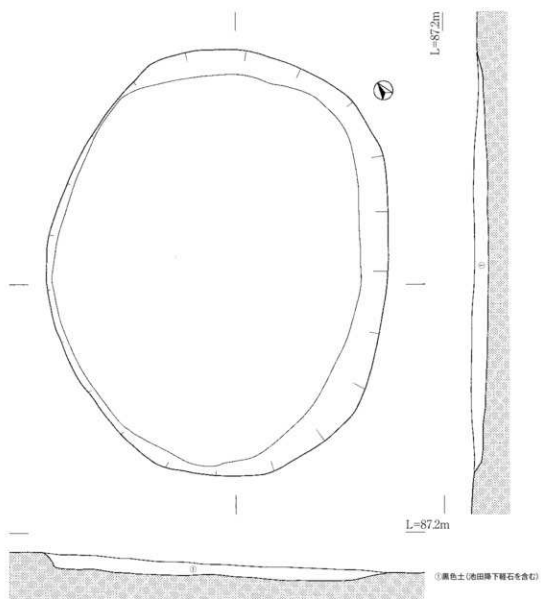
第65図 縄文後期3号竪穴住居跡出土土器1



第66図 縄文後期3号竪穴住居跡出土土器2



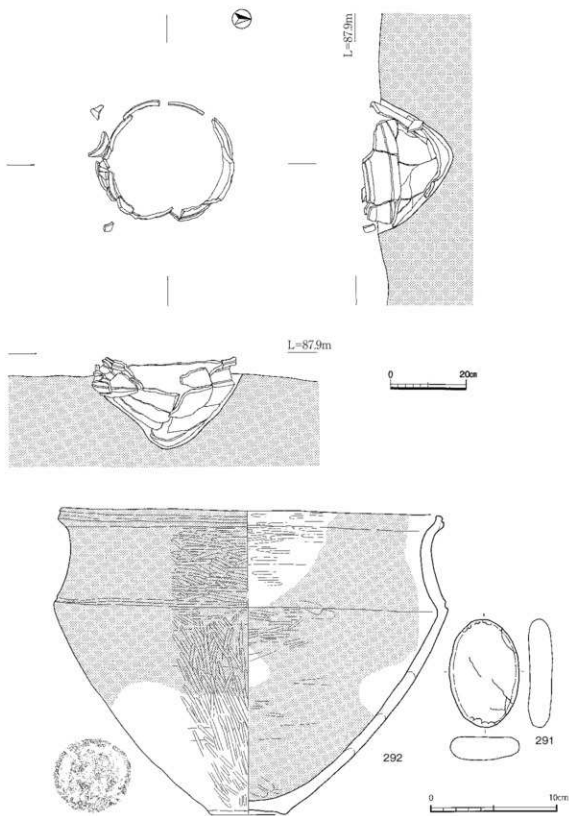
第 67 図 縄文後期 3 号竪穴住居跡出土石器



第 68 図 縄文後期 4 号竪穴住居跡・出土土器

(2) 埋設土器 (第 69~72 図 291~294)

埋設土器が3基検出された。いずれも第1地点から検出されたものである。



第 69 図 1号埋設土器・出土土器・石器

1号埋設土器 (第69図 291・292)

E-S区のⅡ層で検出された。

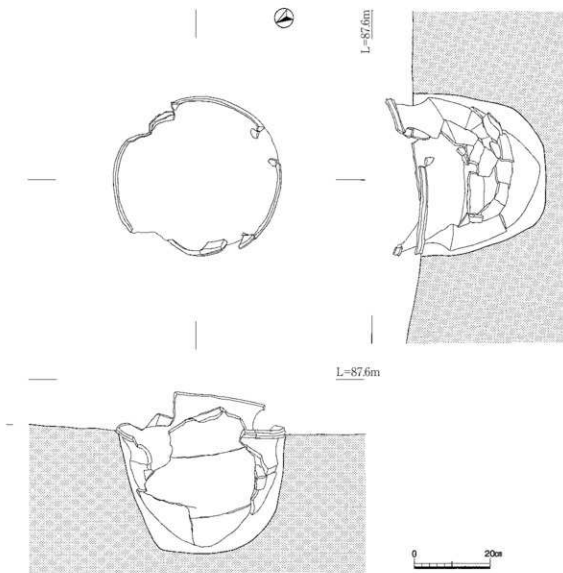
土器が検出された場所は、西側に向かって緩やかに上っていく傾斜面にあり、平面形が、約40cm×35cmの略円錐状を呈し、深さが約25cmの土坑に、ぴったりと納まるように埋設されていたことから、極めて安定した状況であった。

土器は口縁部付近に欠損が見られるものの良好な残存状態であった。中に入っていた埋土は黒色土の単一土であり、土器や炭化物等は検出されなかった。

この土器を接合し、復元した結果、口径30.4cm、底径6cmで、器高は34.4cmとなった。胴部の最大径は全体の

高さの3分の2程のところにあり、30.9cmであった。その上部には深い1条の沈線が走り、そこから口縁部に向かっては内傾しながら立ち上がり、口縁部端部にかけて再び外反する。口縁部は丸みを持って肥厚し、外面の中央には1条の沈線が走っている。

胴部最大径の部分から底部にかけては幾分膨らみを持ちながらすぼまる。外面は口縁部直下が横方向、胴部から底部にかけては縦方向のミガキ調整が施され、内面は部分的に指頭痕が残るものの全体的には横方向のミガキ調整が見られる。底部は口縁部の約5分の1の直径で、若干上げ底を呈している。それらのことから、この土器は縄文時代後期中の中岳Ⅱ式の深鉢と考えられる。



第70図 2号埋設土器

2号埋設土器 (第70・71図 293)

E-11区のⅡb層で検出された。

土器は、平面形が直径43cmの円形を呈し、深さが33cmのバケツ状の土坑に、ほぼ納まるように埋設されており、極めて安定した状況であった。

口縁部の一部は耕作により欠損している。全体的に残存状態が良く、埋められた当時の状況が想定できるが、やや北側に傾いており、中段には圧迫された痕跡が残っている。残存状態が良かったことから土器の中の埋土を残したまま取り上げを行った。土器中の埋土は分層できず、単一の黒色土であった。また、土器や炭化物は検出されなかった。

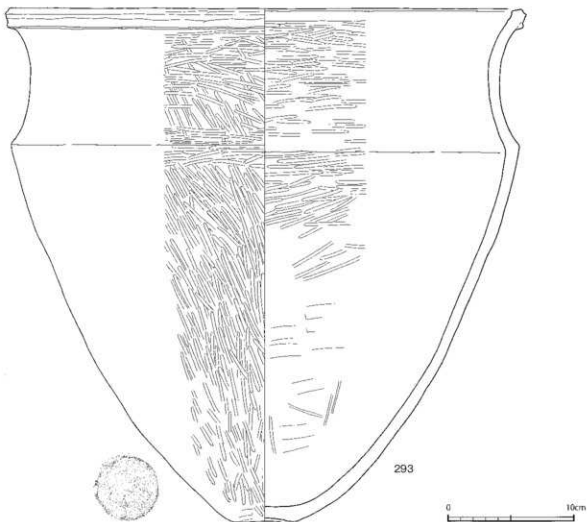
この土器を接合し、復元した結果、口径53cm、底径5cm、器高は40.6cmとなった。胴部の最大径は40.2cmで、その上部には沈線は見られない。そこから口縁部に向かっては内傾しながら立ち上がり、口縁部端部にかけて

再び外反する。口縁部は全体的に四角形状に角張り、外面の稜の下部には浅い1条の沈線が巡っている。

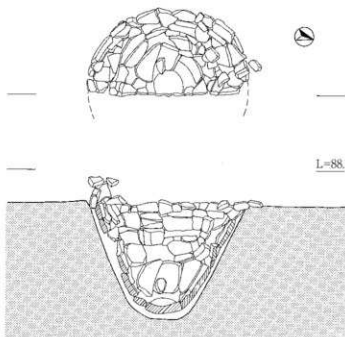
胴部最大径の部分から底部にかけては、底部付近でやや膨らみを持つものの、全体的には直線的にすぼまっている。底部は接地面が狭小で上げ底を呈している。外面は口縁部の下部と胴部最大径付近の上下が横方向、それ以外の部分は縦～斜め方向のミガキ調整が施されており、内面は口縁部から胴部の上部にかけては横方向、それより下位は斜め～縦方向のミガキやナデ調整が見られる。それらのことから、この土器は縄文時代後期中のⅡ式の深鉢と考えられる。

3号埋設土器 (第72図 294)

D-3区の表土直下で検出された。現況は畑地であったことから、地盤整備等で削平を受けて口縁部から胴部の上部にかけては消失していたほか、トレンチャーによ



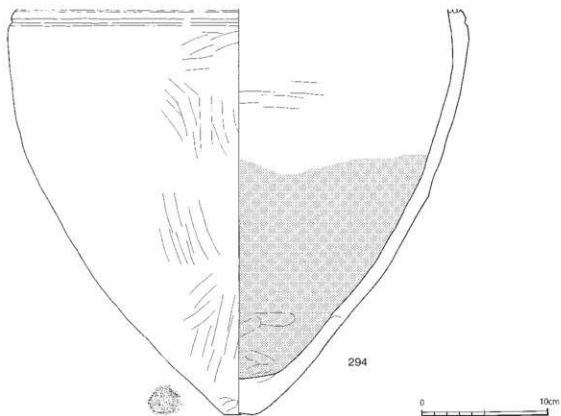
第71図 2号埋設土器・出土土器



る掘削のために東側に当たる全体の半分ほどは断ち切られて消失していた。また、上方及び横方向からの掘削時の圧迫によるものか、土器は全体的に粉々に割れていた。検出時の最上面の土層はIV層であったが、上部を大きく消失していたことから、本来の掘り込み面はまだ上部に位置していたと予測される。

検出時の土器の大きさは、直径の残存部での復元口径が43cm、深さは上部の残存部分から計測すると35cmであった。堀方は直径の検出部分で42cm、深さ31cmの円錐状の土坑を呈していた。最下位はVa層（アカホヤ火山灰層）の下位で止められていたことから、先端の底部がしっかりと座るようにVa層を成形して据えたと考えられる。土器は極めて安定した状況であった。

この土器は粉々に割れていたことから、接合・復元は困難を極めたが、胴部最大径は36cm、底径は3cm、残存長は32cmとの情報を得ることができた。全体の形状は、口縁部付近を欠くことから明確ではないが、胴部最大径の上部には浅い1条の沈線が巡っており、そこから口縁部に向かっては内湾している。また、胴部最大径から底部に向かっては緩やかなカーブを描きながら底部に繋がっている。底部は接地面が極めて狭小で、若干上げ底状を呈している。



第72図 3号埋設土器・出土土器

(3) 土坑 (第73～79図 295～311)

第1地点及び第3地点から土坑が多数検出された。しかしながら、全体的に耕作による破壊や擾乱が激しく、遺物等帰属時期を検討できる情報が残っていた土坑はごく限られたものにとどまっており、資料化できたものはわずかとならざるを得なかった。以下、図化した土坑について説明する。

なお、説明は、便宜上、形態が類似したものにまとめて行う。また、図中の点線は、各遺構の想定線を意味する。各土坑の計測値は表3にまとめた。

土坑1～8は、縦横長に比較して深さが相対的に浅い一群である。(a類)

土坑1は、粘性のない黒色土とアカホヤブロックが多く混じり、粘性のある暗褐色土を埋土とする。黒色土から土器小片が出土したほか、南西隅から両埋土の境界付近で磨石片が小礫とともに出土した。

土坑2はこの群のなかでは小型である。埋土中に中岳Ⅱ式と考えられる胴部片と黒曜石のチップが出土した。埋土には炭化物も散見されたが、サンプルを採取できるほどではなかった。

土坑3は約半分を耕作により失っている。残存した埋土中から、中岳Ⅱ式の胴部小片と295の石器が出土した。295は磨製石斧の基部と考えられる破断資料で、石材はホルンフェルス、重さ95.5g。両側辺から平坦剥離により成形した後、形状を整えている。縁辺部には稜を軽く潰したような痕跡も確認できる。また、背面から基部端部にかけて色調がやや赤変している。

土坑4はやや粘質のある黒色土を埋土とし、床面や壁面に被熱等の痕跡は確認できなかった。遺物は胎土や焼成等の特徴から、中岳Ⅱ式と考えられる土器小片が数点出土した。

土坑5は粘質のない黒色土を埋土とする。埋土中から、内外面を軽く研磨した器壁の薄い土器小片が1点出土した。

土坑6は、明褐色と黒色のシルト質の埋土で、池田降下軽石やアカホヤブロックの混在度合いからさらに細分できた(断面図参照)。しかし、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

土坑7は、アカホヤブロックを含み、やや粘性のある黒色土を埋土とする。耕作により床面等は十分観察できるほど残存していなかった。わずかな埋土中から中岳Ⅱ式の底部と想定される小片と比較的器壁が薄くやや雑なナデ仕上げの胴部片などが出土した。

土坑8は、池田降下軽石とアカホヤブロックがわずかに混じる黒色土を埋土とする。器壁の薄い土器小片が数点出土した。

土坑9～12は、縦横長と深さが相対的にほぼ同じ一群である。(b類)

土坑9はG-100区Ⅳ層下位で発見された。平面検出時点で土色の変化と遺物を確認し、遺構の認定を行った。全体形状は、壁が場所によって凹凸するものの、床面はほぼ平坦でおおむね樽のような形態である。埋土はやや粘性のある灰褐色土で、橙色ブロックの混在度合いで分層した。遺物は上位の埋土から多く出土した。図化したものについて説明する。296、297、298の口縁部は、いずれも器壁が分厚く、端面外面には太く浅い凹線が横位に施文される。296のみ口縁部が短く強く屈曲して立ち上がり、屈曲部に細かい刻目が施文される。299、300の胴部はやや器壁が厚く、どちらも焼成は良好で、内外面は軽く研磨されている。299には屈曲部の上端に細く浅い凹線が2条、横位に施文されている。300は299よりも屈曲部がやや丸く仕上げられている。301と302の底部は、どちらも明瞭な底面平坦部を有するものの面積は小さい。内外面とも丁寧にナデられている。303、304は打製石斧の破断資料で、石材はどちらもホルンフェルス、重さは303が51.0g、304が98.0gである。

土坑10は、耕作により検出面はほとんど覆乱されていたが、床面付近は残存しており調査が可能だった。床面付近から土器小片が複数出土した。小片で詳細は不明だが、器壁が薄く器面を研磨した資料もある。

土坑11は、C-5区のⅣ層上段で発見した。粘性の有無などから埋土を細分したが、略水平という特徴的な堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。Ⅳ層上段であるが、埋土の全体的な特徴がⅡ～Ⅲ層に類似すること、埋土2並びに4には開閉岳噴出物由来とみられる土壌を含んでいたことから、縄文後期に帰属すると考えられる。因みに、隣接する牧山遺跡でも類似する形態の土坑が検出されており、縄文後期の落とし穴と想定されている。

土坑12も耕作により擾乱されていたが、遺構西側のほぼ半分と床面付近が残存しており、調査・記録することができた。やや粘性のある黒色土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

土坑13～17は、縦横長と比較して深さが相対的に深く、柱穴状の断面形状を呈する一群である。(c類)

土坑13は、検出面と底面では平面形状が大きく異なる形態の土坑である。粘性がある黒色土の埋土から、中岳Ⅱ式と想定される土器小片が出土した。

土坑14も耕作により大きく擾乱された遺構だが、アカホヤブロックを含む粘性がある黒色土の埋土から、中岳Ⅱ式と考えられる底部小片が出土している。

土坑15は縄文土器の小片と、305の花崗岩製磨石が出土した。磨石の使用面はごく平滑である。劣化した進行が激しい。現状の重さは217.0g。

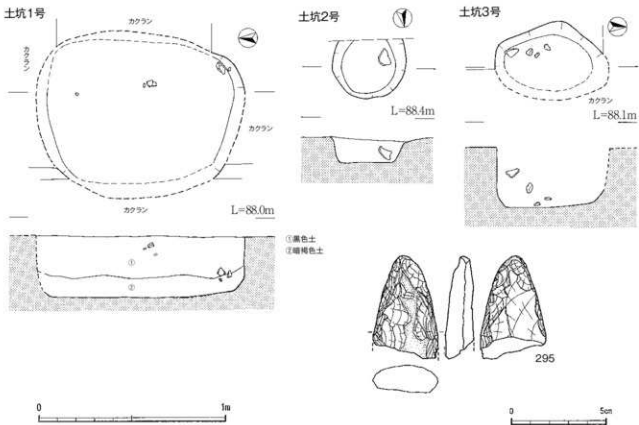
土坑16は、全体形状がラッパ状を呈する。アカホヤブロックを含み粘性のある黒色土の埋土から306の中岳

Ⅱ式口縁部片が出土した。器壁は比較的薄く、内外面を研磨で仕上げ、口唇部は断面略方形である。口唇部外面に太く浅い凹線が2条、横位に施文される。

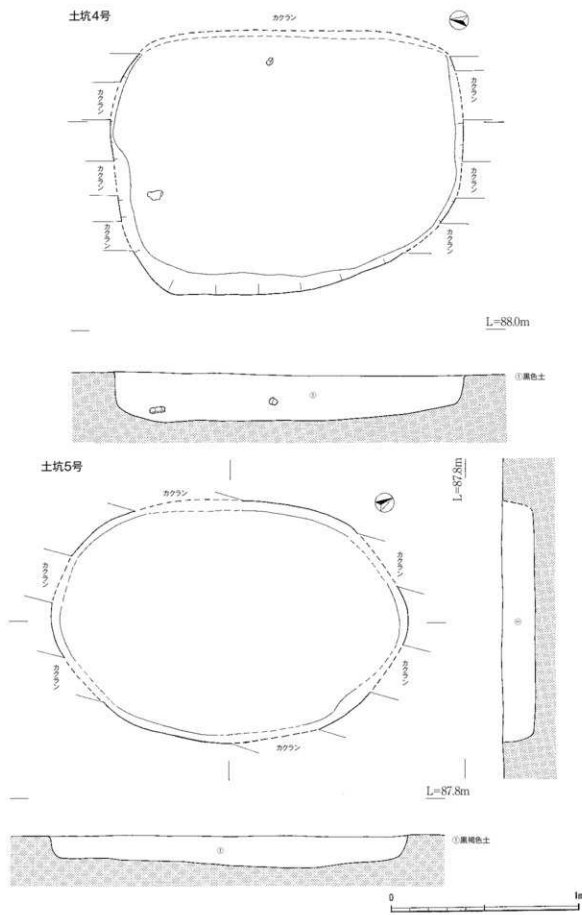
土坑17はC-7区で発見された。全体形状は単純な柱状を呈する土坑であるが、埋土の中へ上位から石皿の破片等が多数出土するという、特徴的な出土状況を示す遺構である。埋土は池田降下軽石やアカホヤ小粒をわずかに含む黒色土で、細分はできなかった。出土した石器のうち、図化できたのは以下の4点である。なお、これらを含む石器は、縦位に埋まっていた309の直上に311、308などがあり、さらにその上に310、307があるという状況であった。307は加工痕のある剥片である。石材は黒曜石で、軽石粒などの不純物を多く含むことからⅡC類とみられる。やや厚めの縦長剥片に部分的に不規則な剥離が加えられている。重さ7.0g。309は凝灰岩製の

大型石皿の破片で、重さ12,000g。表面の色調はやや赤みを帯びている。308も大型石皿の破片で、安山岩製、重さ5,020gである。上面、下面ともきわめて平滑で、さらに上面はわずかに凹むが、残存する側面は整形痕を残す。311も凝灰岩製の大型台石の破片であるが、破損が激しく下面と側面の一部しか器面が残存していない。全面赤みを帯びている。重さ1,860g。309とは接合しないが、同一個体である可能性もある。310は、凝灰岩製の礫片である。破砕と器面の風化により磨面等の残存は認められない。重さ990g。

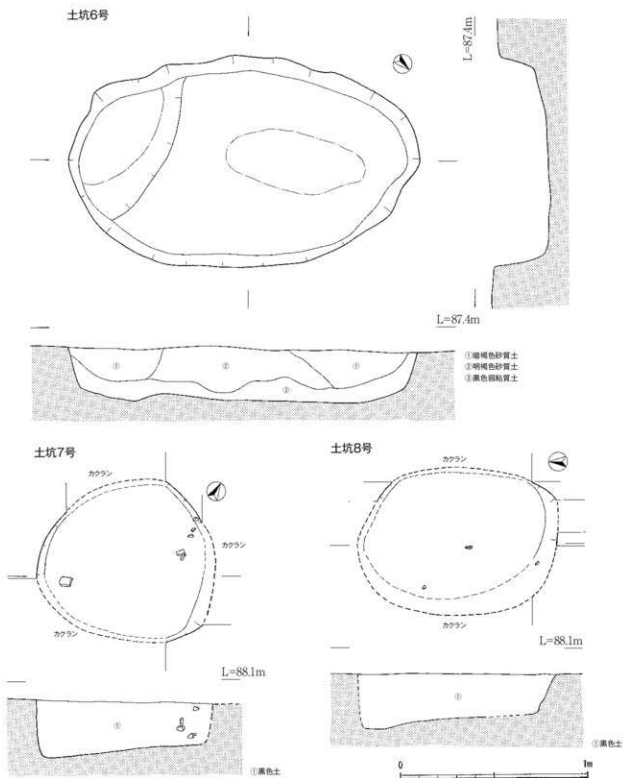
土坑18~22は、縦横長に対する深さでは最初にまとめた一群と同様であるものの、全体形状が皿状や不定形になる一群をまとめた。(d類) いずれも埋土は黒色土で、出土遺物は、中岳Ⅱ式と想定される土器片などもあったが、ほとんどが小片で詳細を明らかにできなかった。



第73図 縄文後期土坑1・出土遺物

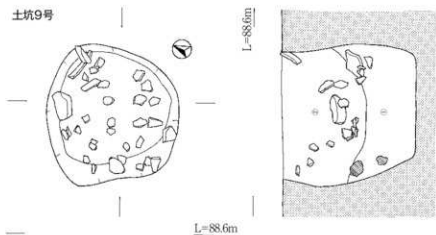


第74図 縄文後期土坑2



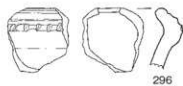
第75図 縄文後期土坑3

土坑9号



L=88.6m

L=88.6m



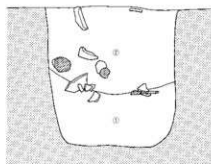
296



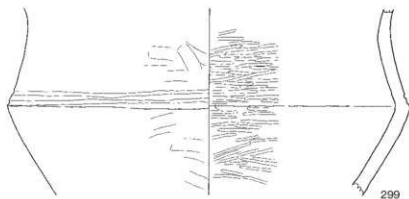
297



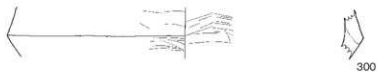
298



①灰褐色土、しまりあり。
②灰褐色土、しまりなし。



299



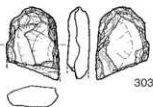
300



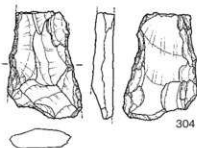
301



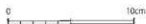
302



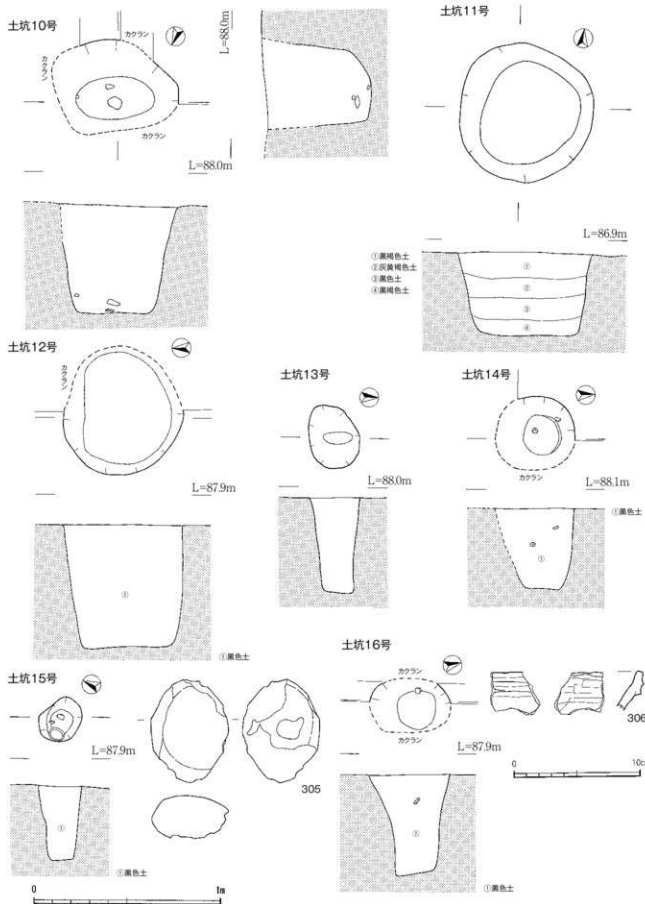
303



304



第76図 縄文後期土坑4・出土遺物

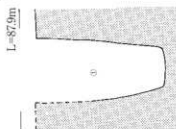
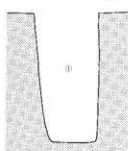
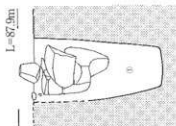


第77図 縄文後期土坑5・出土遺物

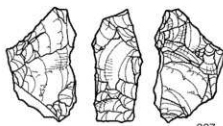
土坑17号



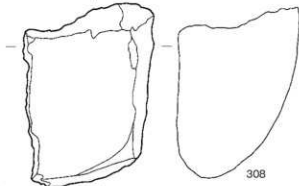
L=87.9m



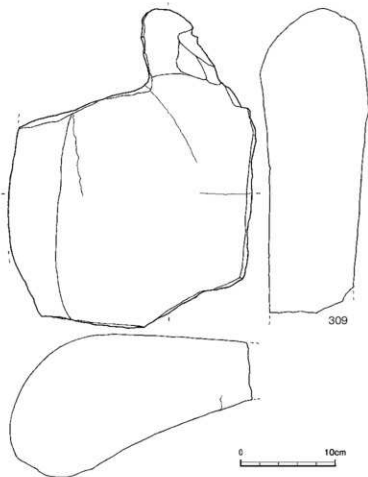
土坑17号
①黄褐色土



307

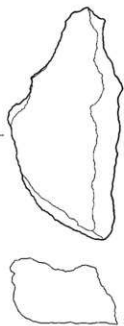


308



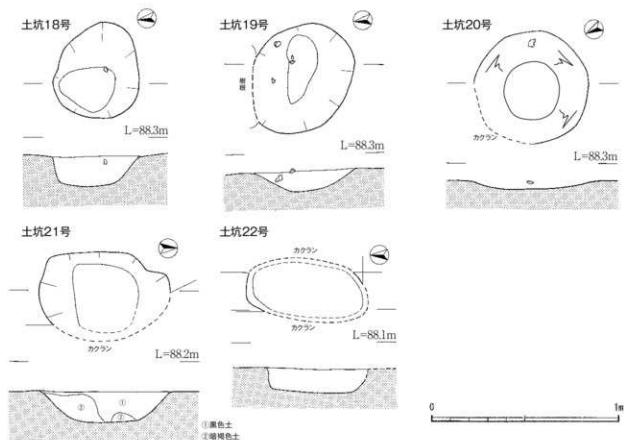
309

310



311

第78図 縄文後期土坑6・出土遺物



第79図 縄文後期土坑7

第3表 縄文後期土坑観察表

図	番号	類型	区	層	規模 (単位: cm)			遺物	備考
					縦	横	深		
73	1	a	D4	V	90	110	32	縄文土器	
	2		F3	IV	31	39	13	中岳式	
	3		D4	V	42	61	32	中岳Ⅱ式, 296	
74	4	a	F4	V	(140)	188	25	中岳式	
	5		F4	V	127	189	16	縄文後期末?	
75	6	a	G12	V	112	187	27	無	
	7		C3	V	86	95	30	中岳式, 縄文後期末?	
	8		D4	V	(78)	(105)	29	縄文後期末?	
76	9	b	G100	IV下	75	71	72	301, 302, 303, 304, 他	
	10		B6	V	(46)	(64)	57	縄文後期末?	
	11		C5	IX	74	71	44	無	
	12		C5	V	(69)	64	65	無	
77	13	c	F3	V	33	27	50	中岳Ⅱ式	
	14		B4	V	(39)	(42)	43	中岳Ⅱ式	
	15		C5	V	24	23	39	縄文土器, 305	
	16		C4	V	(30)	42	52	306	
78	17	d	C7	IV	38	40	70	307, 308, 309, 310, 311	
	18		F2	IV	52	46	16	縄文土器	縄文後期末
79	19	d	F2	IV	58	(53)	11	縄文土器	
	20		F2	IV	60	61	5	縄文土器	
	21		E3	V	(47)	70	17	中岳Ⅱ式	
	22		D3	V	(33)	(64)	12	中岳Ⅱ式	

(4) 石器集積遺構 (第80~82図 312~328)

E-9区のII層上面で検出された。全体の規模は、東西2.26m、南北1.90mで、高低差は約20cmであるが、細かく見ると、東西2つのまとまりとして分けられる。その場合には、東側が1.16m×1.13m、西側が1.88m×1.34mとなる。2つの塊の中心の距離は約1.2mであった。

本遺構が所在する場所は、ほぼ平坦といえる。

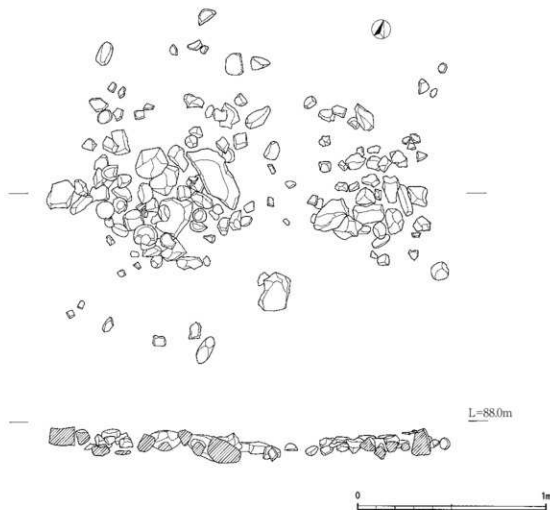
礫の組成は、一般の自然礫の割合は少なく、破碎された石皿や台石、磨石、敲石、石斧などの石器が大部分を占めている。長さが40cmを越える大型の石器が多いのも特徴である。中には10cm前後の破砕礫や土器片も含まれている。礫を外し、掘り込みや焼土域、赤化などの確認を行ったが、確認することはできなかった。遺物の量や状態を見ると、廃棄による可能性も考えられる。

遺構から出土した石器等で図化したものは17点である。

土器片は29点出土したが、部位や施文がはっきりしない小片だったため図化しなかった。312~320・322は打製石斧、321はスクレイパー、323、325、326は敲石兼用の磨石、324は軽石加工品、327、328は石皿である。

打製石斧のうち、313は刃部は残存しているものの、基部が斜め方向に欠損したもので、内外両面の一部には自然面が残っている。312は打製石斧の刃部を欠損したもので、314~316は基部、317と318は刃部と基部を欠損するもの、319~321は刃部である。刃部のうち、319は基部に対して刃部がやや広がるもの、320と322は刃部の先端が尖るものである。

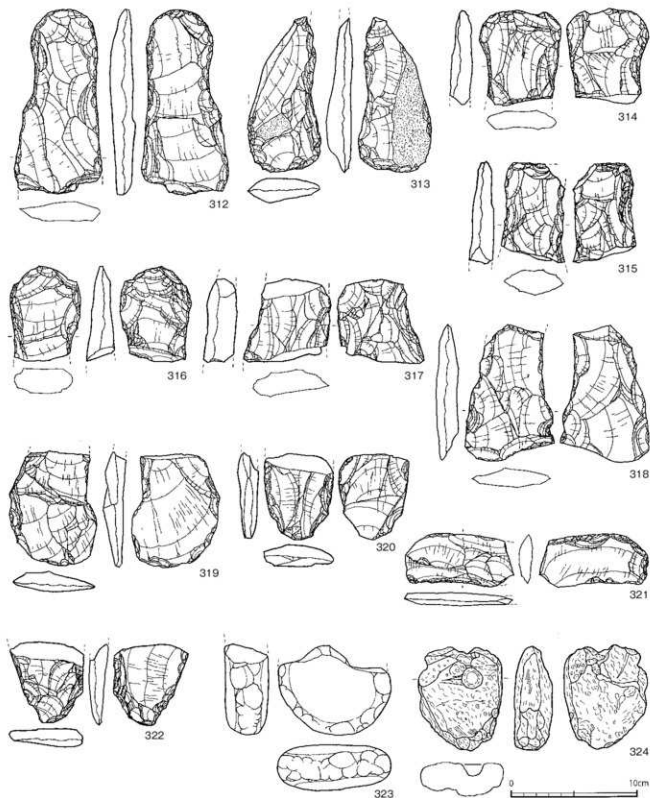
321のスクレイパーは刃部が直線的である。323の敲石兼用の磨石は中央部付近で折損しているが、広い2面を磨るための使用面としており、側面には広く敲打面が巡っている。324は上面に直径1.5cmほどの穴が見られるが、貫通はしていない。面として整えられた形跡はな



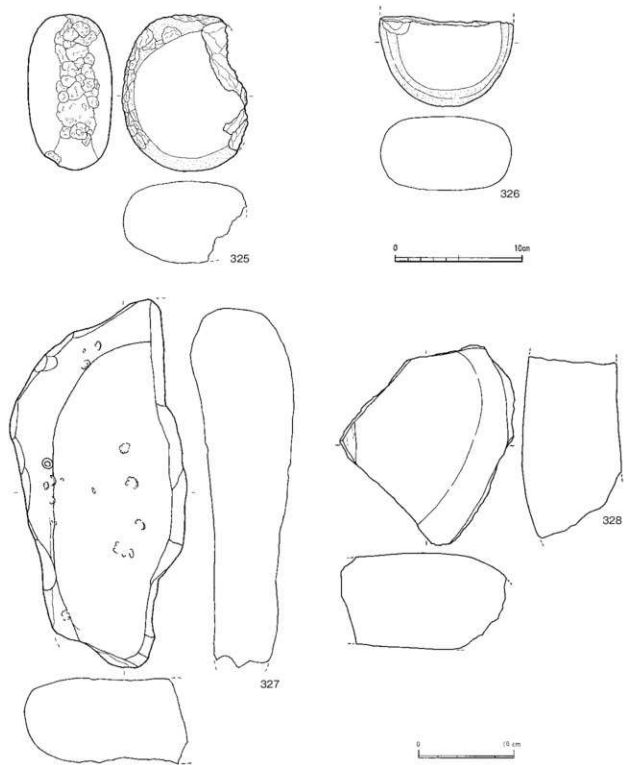
第80図 石器集積遺構

く、穴を空けようとした加工痕だけのものと考えられる。
石皿2点は、いずれも破片である。327は上下2面を

使用しており、328は片面のみの使用であるが一部に敲
打痕が見られ、台石としての使用も考えられる。



第 81 図 石器集積遺構出土石器 1



第 82 图 石器集積遺構出土石器 2

(5) 遺物集中域 1 (第 83~85 図 329~346)

D-9・10 区の II 層で検出された。長径 1.75 m、短径 1.56 m の範囲に石斧 6 点を含む遺物が広がっており、検出レベル差は約 26cm である。石斧の他は、破砕した自然礫や磨石、土器なども出土している。石斧は、幅約 0.6 m、長さ約 2 m の北西-南東の帯状の範囲にあり、北西端と南東端にそれぞれまとまっているような状況である。当初、意識的に石斧、礫、土器などを配置しているようにも見られたが、掘り込みの有無や規則性を検討した結果、遺構としての決め手を欠いたので、ここでは遺物集中域として、遺物の出土状況と遺物を掲載する。

石器は、打製石斧 6 点、スクレイパー 2 点、敲石類 1 点を図示した。

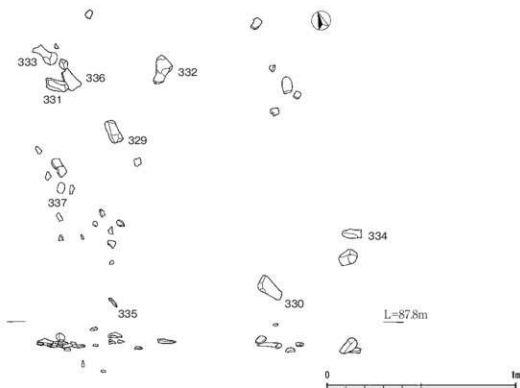
329 はホルンフェルス製の打製石斧で、横長の剥片を素材とし、周縁からの平坦剥離によって整形されている。背面の刃部に接する部分に自然面が残り、平面形は短冊形であるが、刃部側がわずかに幅広となる。331 も短冊形の打製石斧である。横長のホルンフェルス剥片に周縁からの平坦剥離によって整形される。背面上部付近に摩耗がみられることから、上辺が刃部となっていた可能性がある。330・332 はいずれも刃部の幅に比して、基部が幅狭となる撥形の打製石斧で、刃部部が器軸に対して斜行する偏刃の打製石斧である。330 は風化した器面が黄褐色を呈するホルンフェルス製、332 は灰褐色を呈するホルンフェルス製としたが、こちらも変性を受けている

可能性がある。333 は刃部に対し細く括れた基部をもつ撥形に類する打製石斧である。ホルンフェルス製で背面側の稜上に摩耗を認める。

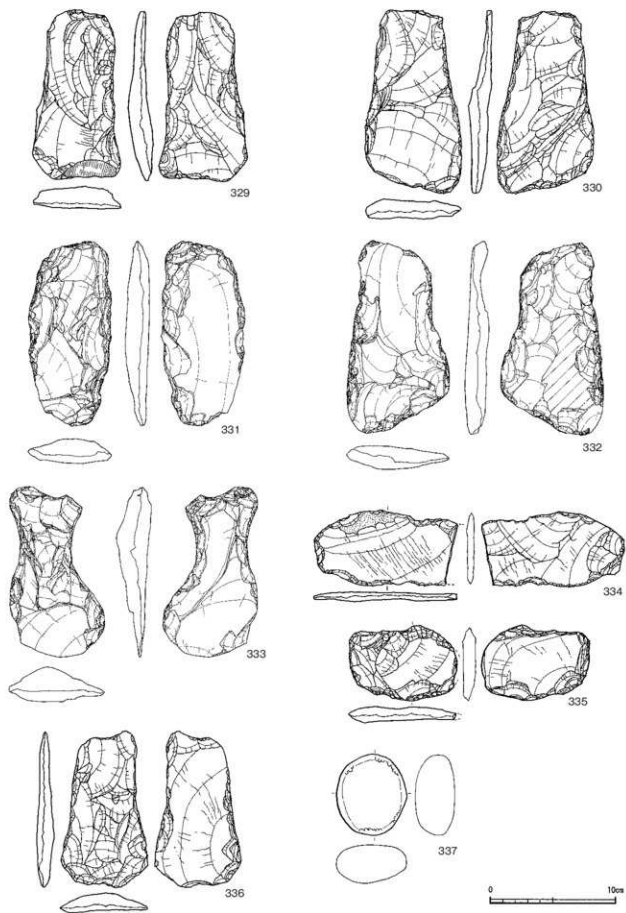
334 は薄い板状のホルンフェルス剥片で、右側面は折れ面である。縁辺の剥離により下縁部が鋸歯状を呈することからスクレイパーとしたが使用の痕跡は明確ではない。335 はやや厚みのあるホルンフェルスの剥片で調整剥離は不規則であるが、表表面にわずかに摩耗を認める。

337 は安山岩の扁平な円礫である。表表面とも面上に摩耗・磨面は認められないが、側縁下部にわずかに敲打によるつぶれ状の痕跡を認める。

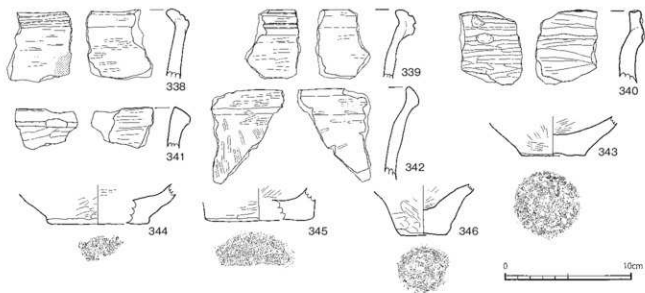
土器は 17 点出土したが、小片は除き 9 点を図化した。338~342 は深鉢の口縁部、343~346 は深鉢の底部である。口縁部、底部ともに様々な形状がみられる。338 は口縁部が内湾する。339 は口縁部が外反しており、内面には緩やかな段が見られる。340 は口縁部が直立しており、口唇部は平らに整えられている。また、外面の 2 条の沈線内には、それぞれに楕円形状の小さな貼り付けが見られる。341 は肥厚した口唇部をやや外反気味に貼り付けており、内面は稜が明確である。342 は外反した口縁部にはほぼ直立気味に断面が三角形の口唇部を貼り付けている。底部はすべて平底であるが、底面の広さや形状がそれぞれ異なっており、若干上げ底となるものも見られる。



第 83 図 遺物集中域 1



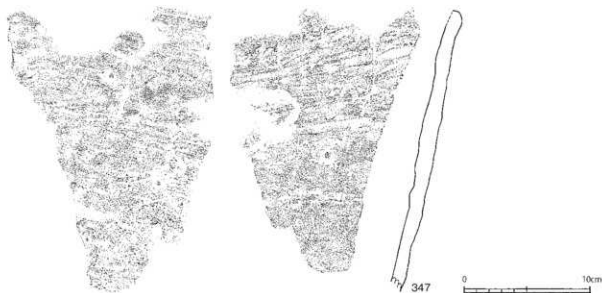
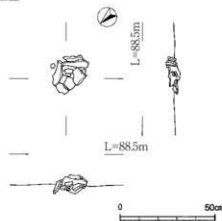
第 84 图 遺物集中域 1 出土石器



第85図 遺物集中域1出土土器

(6) 遺物集中域2 (第86図 347)

H-1区のⅢ層で検出した。遺物は、20cm×18cmの範囲で、深さ11cmにまとまって重なるように出土した。土器片の総数は10点であった。小片の土器が多かったので、ここでは接合できた1点のみ図化した。347は器壁の厚さが一定せず、器面は内外面共に若干の凹凸が見られる。また両面共に横及び斜め方向のナデによる調整が見られる。胎土に雲母を多量に含んでいるのが特徴である。



第86図 遺物集中域2・出土土器

2 遺物

(1) 土器 (第87~94図 348~505)

縄文時代後期及び晩期に相当する土器には多くの種類が見られる。以下、分類に従って概略を述べる。

4類土器 (第87図 348~354)

深鉢で、外面の口縁部下部あるいは胴部にかけて沈線を付す土器の一群である。

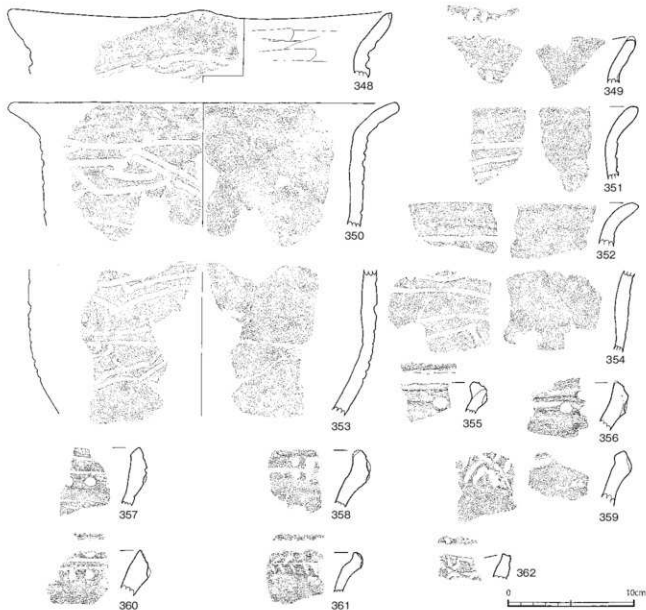
348は口縁部が波状となるものであり、波状口縁の先端には4か所に刻みが付される。口縁部下部には鉤手状の繋ぎ文が付されている。350は、ほぼ直立する胴部であるが、口縁部はラッパ状に開く形状である。屈曲部より下部に横及び斜め方向に太めの凹線が施される。353も同じような文様構成である。

349は348と同様な波状口縁で先端には2か所に刻みが付される。351は外反する口縁部の下部に、3条の沈線が施され、352は1条の沈線が口縁部とはほぼ平行に付されている。

353と354は胴部に沈線が描かれているものであるが、そのうち353は横～斜め方向に鉤手状の繋ぎ文などが広い部分に描かれている。また、354は緩やかな曲線の下方に、直線が向きを大きく変えて描かれている。

5類土器 (第87~93図 355~498)

深鉢は胴部から口縁部にかけて全体的に外反し、口縁部は肥厚する。そして、その肥厚した口唇部は平坦部を作出されたものが多く、口縁部の内面に明瞭な段を有するものもある。口縁部に沈線が巡るものや刺突文・凹点が施さ



第87図 縄文後・晩期の土器1

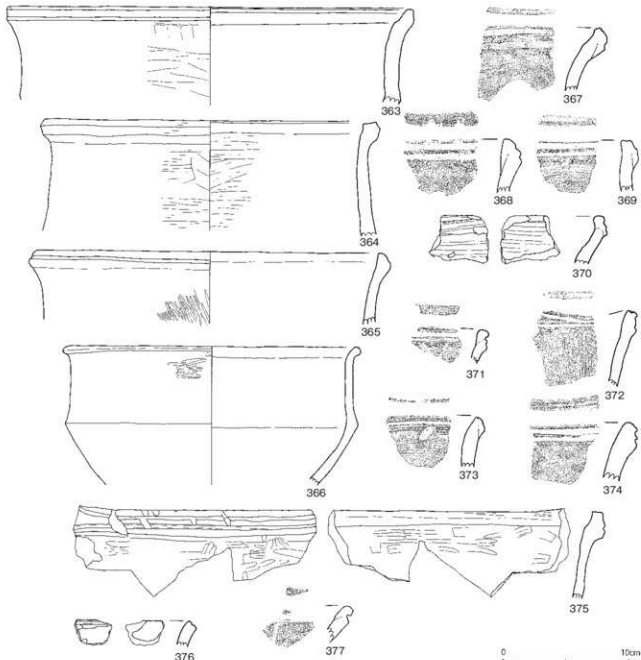
れるものもある。胴部は張り、胴部の上部に沈線が付されるものもある。底部は平底のほか、上げ底も見られる。浅鉢も口縁部は外反し、胴部が張り、底部は平底である。

355～414は口縁部である。そのうち、355～362は刺突文や凹点のあるものである。355～358、360は沈線が付された上下に凹点が見られる。凹点の位置や大きさ、数などに差異がある。359、361、362は斜め方向を主とした刻みが付されるものである。361が細い沈線の上下に向きを違った刻みが付されているのに対して、359や362は方向に規則性がなく、何らかの表現を意図している可能性も考えられる。

363～377(364・366を除く)は文様として沈線が巡る

ものである。沈線は1条が多く見られるが、2条の沈線も見られる。口縁部の形状にも、直立(363など)、内湾(370など)、外反(373など)ともに見られる。

363は外反する口縁部で、外面には幅の広い1条の沈線が巡り、367は幅の狭い2条の沈線が巡る。いずれも内面には段が見られる。364は口唇部が凹状に面取りされていることから、断面形状は四角形に近いといえる。365は断面三角形で、中ほどを細い沈線が巡る。368も断面が三角形を呈するが、沈線は2条である。369は口唇部を平らに調整する。370は口縁部が内湾して内面に段を有し、2条の沈線が付される。371は直立した口縁部に幅の異なる2条の沈線が施される。372は幾分外反



第88図 縄文後・晩期の土器2

した口縁部に2条の沈線が施されるが、平行とはなっていない。373と374は口縁部が外反する。375は口唇部が平らに面取りされ、2条の沈線は平行な部分とそうでない部分とが見られる。376は口唇部に1条の沈線が見られる。

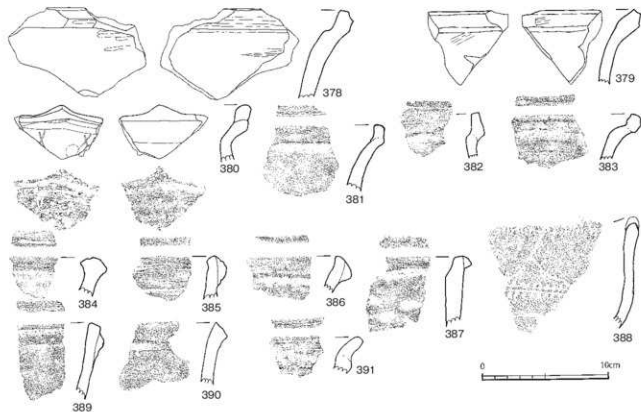
378～391は無文のものである。378は口唇部が平らに整えられ、内面には段を有する。口縁部はほぼ直立している。379の口縁部は外反する。380は内面に段を有するもので、波状の口縁部である。直立した口縁部の下部には×のような印が2か所に見られる。381～387のように、口縁部の向きや断面形状もさまざまである。

388は小型の土器である。形や文様などから5類の中に含めた。口縁部はほんのわずかに外反し、口唇部には突起が見られる。口縁部に短めの刻みが施されるほか、胴部にも1条の沈線とともに左下がり方向の刻みが見られる。胴部はそれほど張らず、緩やかに底部へと向かっている。

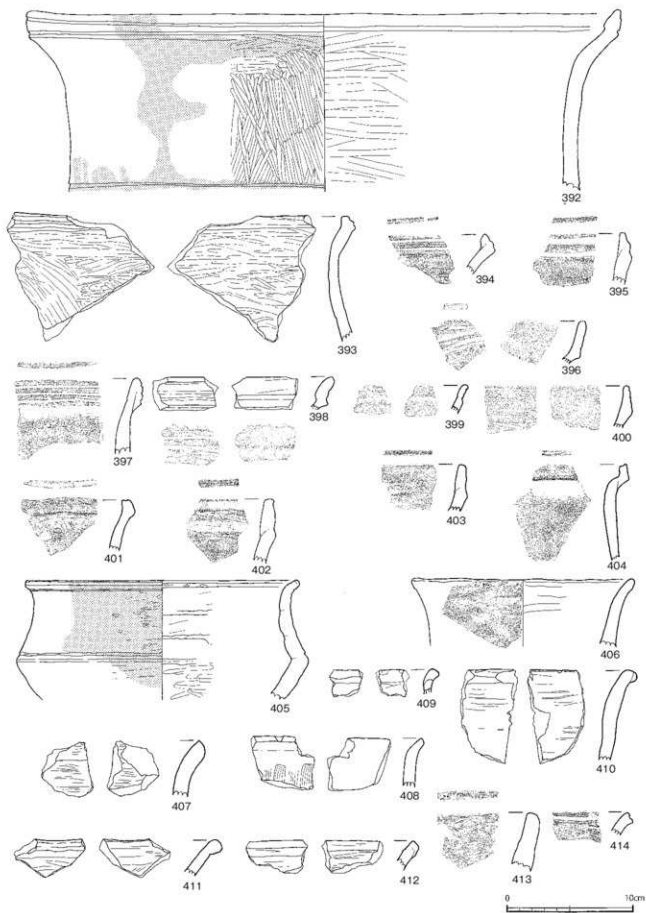
392～404を5類に含めたのは、器形や文様などからこれらとはほぼ同様な時期の土器群と考えたからである。392は断面形が三角形を呈する口縁部がほぼ直立しており、2条の沈線が付され、内面には段を有する。胴部にも1条の沈線が巡っていることから、この沈線の下部に胴部最大径の部分があると考えられる。器面調整は内外面ともに横～斜め方向のナデ調整が行われ、外面の胴部の沈線から上部は縦方向のミガキ調整が見られる。393は口唇部を平坦部を作り出し、口縁部には2条の沈線が

施される。内面には段が見られる。器面調整は、内外面ともに横～斜め方向のミガキ調整が行われている。394は断面が三角形の直立した口縁部には2条の沈線が巡っており、内面には段を有する。395は全体的に直立した口縁部には2条の沈線が施されており、口唇部は狭く平らに面取りされている。内面には段は見られない。396は幾分外反気味の幅の広い口縁部に、斜め方向の2条の沈線が施されている。399は端部が外反した口縁部で、3条の細い沈線が付されている。396のほとんど直立した口縁部には3条の沈線が斜め方向に付されている。397は直立気味の口縁部に3条の沈線が、ほぼ平行になるように整然と施されている。398は外反した口縁部に2条の沈線が施されており、内面には明瞭な段が見られる。401は平らに面取りされた口唇部に沈線が見られる。口縁部の断面形状はほぼ四角形で、内面には明瞭でない段が見られる。402と403は口縁部全体の形状が類似している。402が若干長く、断面も厚い。いずれにも、内面に緩やかな段が見られる。口唇部の形状は若干異なっている。404は面取りした口唇部に沈線が施されており、401と類似するが、口縁部内面の段が明瞭で、胴部に向かうカーブが大きいことが要因と考えられる。

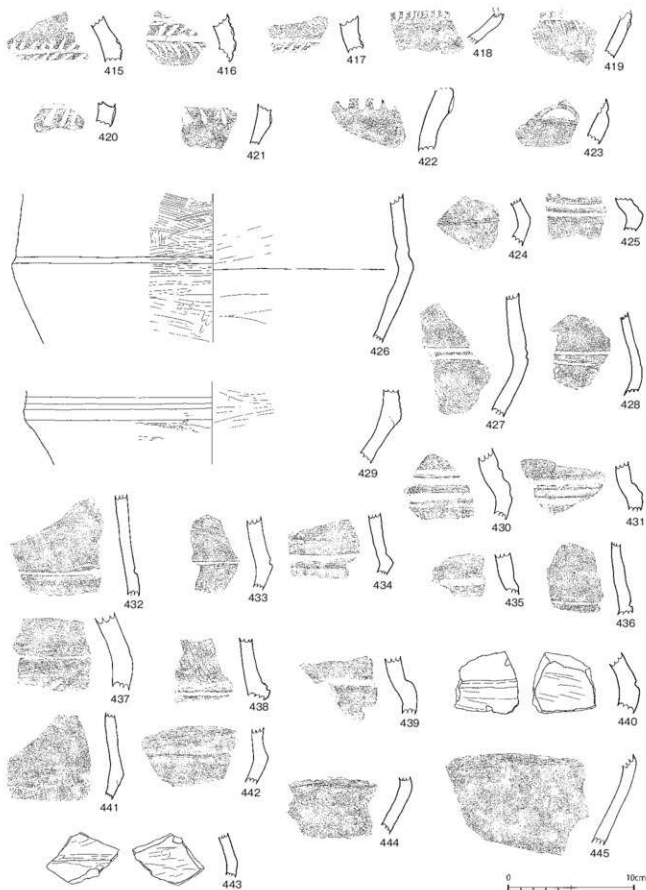
399～414は5類と同時期と考えられる外反する口唇部である。405は口唇部が丸く整えられており、口縁部の下部に1条の細い沈線が巡っているほか、胴部の上部にはそれよりも太い沈線が巡っている。断面には輪積み



第89図 縄文後・晩期の土器3



第90図 縄文後・晩期の土器4



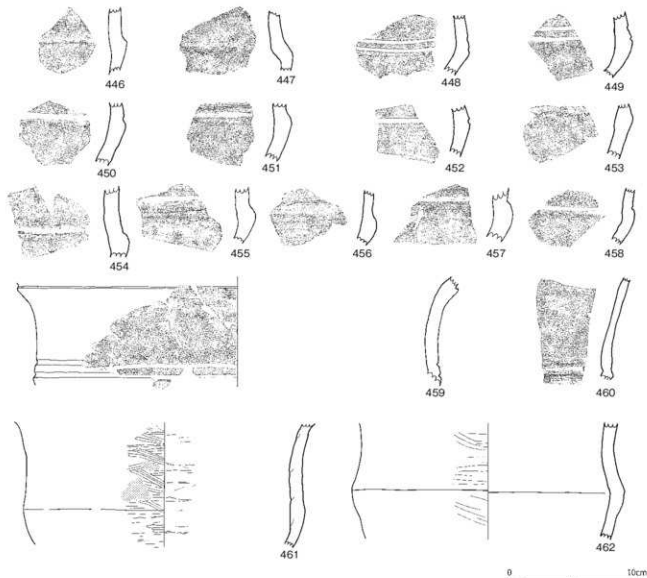
第91図 縄文後・晩期の土器5

痕が明瞭に残っている。器面調整は横方向のミガキ調整であるが、ナデ調整も見られる。406は口唇部がやや波打ったようになっている。409は口唇部を斜めに整えた結果、外面には稜が残る形となった。410は口唇部を丸く整えている。407は口縁部の内面をまっすぐに整えた結果、頂部には稜が残っている。408は口唇端部が外反する。ハケ目調整が見られる。411は410に類似している。412は口縁部の断面形状が四角形で、内面には明瞭ではないものの段が見られる。414は口唇部に1条の沈線が施されている。

415~462(422を除く)は胴部である。そのうち415~423は、刺突文及び凹点の文様が施されたものである。415は胴部の屈曲部付近と考えられるところに巡らされている1条の沈線の上下に、左下がりの刻みが施されている。416は沈線の上下で向きの異なる斜め方向の刻みが施される。417は胴部の屈曲部よりやや上部に巡って

いる沈線の下部に、左下がりの刻みが見られる。418は屈曲部付近に、縦方向の短い刻みが見られる。419は屈曲部付近の1条の沈線より下部に右下がりの刻みが付されている。420は屈曲部付近の沈線の下部に、左下がりのやや長目の刻み、421は屈曲部付近から上部にかけて右下がりのやや長目の刻みがそれぞれ施されている。422には凹点状の刻みが見られ、423は屈曲部付近に半月形の上向き大きな凹点が刻まれている。

424~445は胴部の屈曲部から上部が内湾するもので、そのうち426~435は沈線のあるもの、442~445は沈線の見られないものである。426は屈曲部の上部に1条の沈線が巡っている。424には極めて細い沈線が見られる。425、427~429は2条の沈線が巡るものである。その中で、428は断面に整えられた痕跡があり、円盤状土製加工品(いわゆるメンコ)の可能性も考えられる。430は3条、431は太い2条の沈線である。432~434、436~



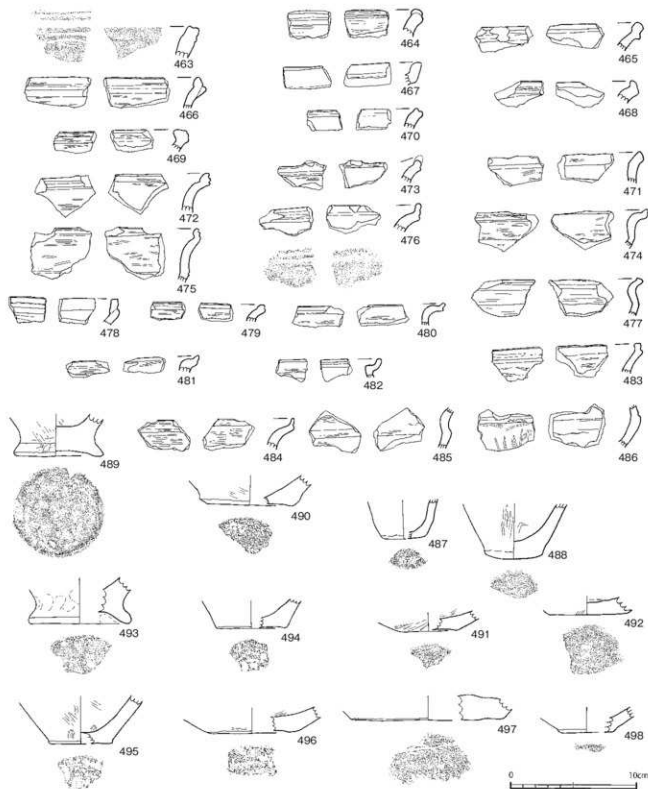
第92図 縄文後・晩期の土器6

438 は 1 条の沈線、440 は太い沈線である。439・441～445 には沈線は見られない。

448～458 は直立するものである。沈線のあるものは、448、449 が 2 条、450、452、458 が 1 条あり、それ以外は沈線が見られないものである。459 は外反するもので、2 条

の沈線が巡るもの、460～462 は沈線のないものである。459 は口縁部と考えられる部分に 1 条の沈線も見られる。胴部の屈曲部付近の 2 条の沈線は幅が広い。462 は 461 と比較すると、胴部が張り屈曲により稜が確認できる。

463～498 は後期の土器である。463～484 は口縁部を

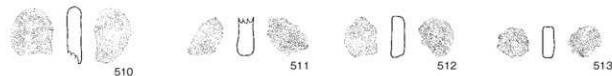
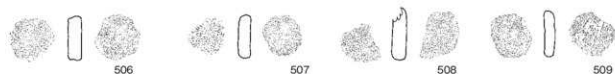
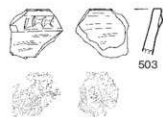
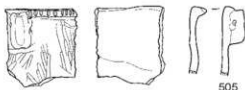
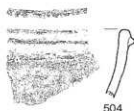
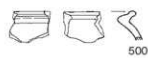
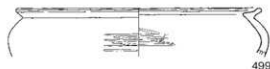


第 93 図 縄文後・晩期の土器 7

含む胴部、485、486は胴部片、487～498は底部である。口縁部及び胴部は、小片の土器が多く、傾きに関しては、正確性にやや欠ける恐れもある。口唇部に平坦面を持ち、土器によっては、平坦部に沈線を意識した凹みを巡らせるものが多い。また、口縁部に1条もしくは2条の沈線を巡らせるタイプ、口縁部近くに屈曲部をもつタイプが多いのが特色である。底部の資料も胴部の形状がわかるものが少ない。487、488は小型の鉢、489は若干干上げ底の底部である。490～498はいずれも底部であるが、小片のため全体の器形は不明である。

6類土器 (第94図 499～500)

499と500が該当する。いずれも晩期の浅鉢である。器壁が薄く、胴部が大きく張り出している。口縁部は短く、口唇部近くの内面に沈線を施すことで、玉縁状になることを意識している。



第94図 縄文後・晩期の土器8・土製加工品

7類土器 (第94図 501～505)

501～505は深鉢である。口縁部に突帯が付くタイプである。501は口唇部に並行した突帯が途中から胴部に縦に付されているが、この類とした。502、504は口唇部に近い外面に貼り付けられている。505は刻み目のある突帯の一部に罽玉状の瘤を貼り付ける。瘤には、焼成前の穿孔も観察できるが、意図的なものか偶然かは判断できなかった。

(2) 円盤状土製加工品 (メンコ) (第94図 506～515)

土器片を円盤状に加工したものである。10点を図化した。ほかにも、加工痕の観察される土器片2点もあったが、明確ではなかったので掲載しなかった。欠損もあるので正確な全体形状は推測になるが、どれも形状はほぼ円形である。側面を磨った形跡、特に角を磨り、丸めた様子が伺える。厚さや大きさは様々である。

第3節 弥生時代の調査

弥生時代の調査は、Ⅱ層を包含層とする遺物の調査と、Ⅲ層以下を検出面とする遺構の調査として行い、第1地点を主な調査区として実施した。

第1地点の調査は、当初、A-E-2～8区を対象とし、その後、F・G-2～8区、そしてD・G-9～12区の調査と、調査区を分割しながら行っていた。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑や多数のピットなどが検出されたほか、弥生時代中期を中心として、土器や石器などが出土した。

竪穴住居跡は2軒とも、周囲よりも若干低い、調査区の南側に位置していた。また掘立柱建物跡1棟も同様な地形のところから検出されている。弥生時代の明確な土坑は1基のみで、住居や建物などよりも比較的高い場所から検出された。

2軒の竪穴住居跡については、検出面が低いことから、本来はまだ周囲に広がりがあった可能性も否定できない。

1 遺 構

(1) 竪穴住居跡 (第96～100図 516～531)

1号竪穴住居跡 (第96～99図 516～528・531)

D・E-5区のV層で検出された。東西2.44m、南北2.18mの規模で、北側が若干張り出すものの、全体としては隅丸方形の平面形を呈する住居跡で、検出面からの最大の深さは50cmであるが、約10cm程でベッド状の高まりが見られる部分もある。遺構内には4基のピットがあり、位置や間隔、深さなどから判断すると、これらは全て主柱穴と考えられる。中央部は一段下がっており、西側を除く3方向にベッド状の段が設けられている。ほぼ中央部に78cm×71cmの隅丸方形を呈し、深さ14cmの土坑があるが、焼土や赤化は見られないことから、炉の可能性は低いと思われる。

床面直上には床面を整えるためと考えられる暗褐色土主体のやや硬質な土が敷き詰められていた。中には直径が5cm前後のアカホヤのブロックが多く混在していた。

壺や甕、鉢などの大量の遺物が床面付近に広がって出土したが、床面直上よりもやや浮いた状態であったため、住居の廃棄に伴って遺棄されたものと考えられる。

埋土は、最下位は暗褐色粘質土で硬い。貼床と考えられる。その上位には、壁側に近い部分に黒褐色砂質土で、黄褐色のアカホヤの小ブロックが少量混じっている。最上部には比較的軟らかい黒色土があり、Ⅳ層と考えられ

る茶褐色粘質土が少量混在する。遺物は、特に最上部の黒色土中から大量に出土している。

1号住居跡から出土した遺物は多いが、ここでは主なものを掲載した。

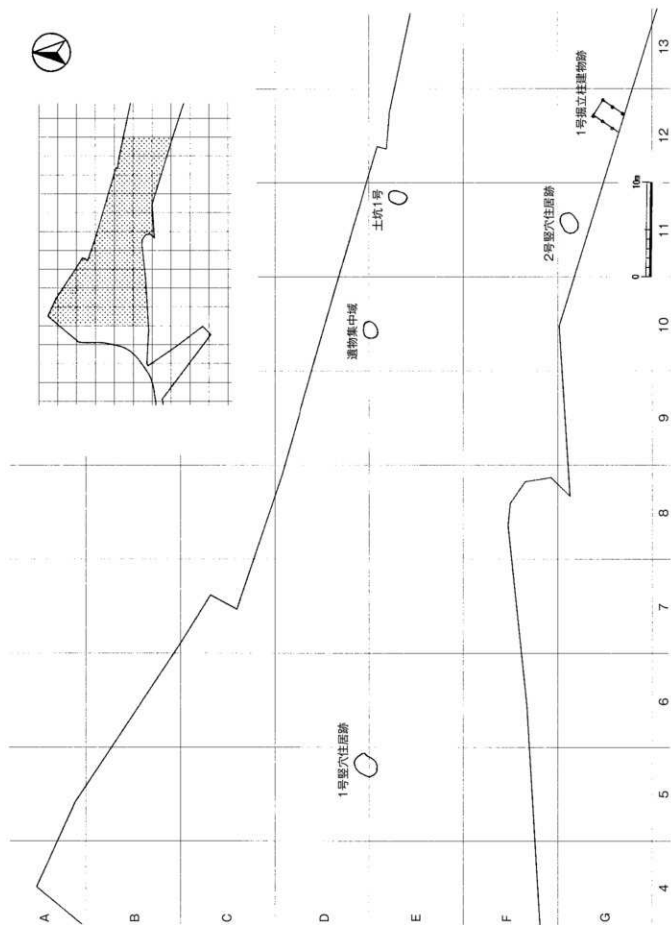
516～523は甕形土器である。いずれも口縁部は外反し、内面の稜は明確ではなく、滑らかとなっている。516は口唇部の下端がやや尖り気味となっており、胴部上部から底部へは急速にすぼまっている。517は口唇端部が丸味を帯びており、胴部上部から底部へは緩やかにすぼまって行く。518は口縁部が上向き気味にカーブしており、口唇端部は小さく丸められている。器面は、内外面ともに細かなハケ目調整によって整えられている。519の口縁部も518と同様に上向き気味にカーブしており、器面調整は、外面の口縁部付近を横方向のナデ、胴部は縦方向のナデ調整が行われ、内面も横～斜め方向のナデ調整である。520は口縁部の中央部が厚く作られており、口唇端部は小さく丸められている。521は全体的に器面の厚さが厚く、特に頸部から胴部にかけては著しく肥厚しているといえる。522は外反する口縁部で、内面のカーブは極めて緩やかである。523は胴部下半から底部にかけてである。底部は端部を欠いているが、底径は10cm程度と考えられる。

524は壺形土器の完形品である。口縁部は短く外反し、胴部最大径は頸部から3分の1ほどのところにある。底部は平底で、比較的安定している。断面の輪積み痕が明瞭である。器面調整は、外面が斜め方向のハケ目、内面はナデによって整えられており、内外面ともに部分的に指頭圧痕が残る。外反する口縁部をもつ短頸の壺である。

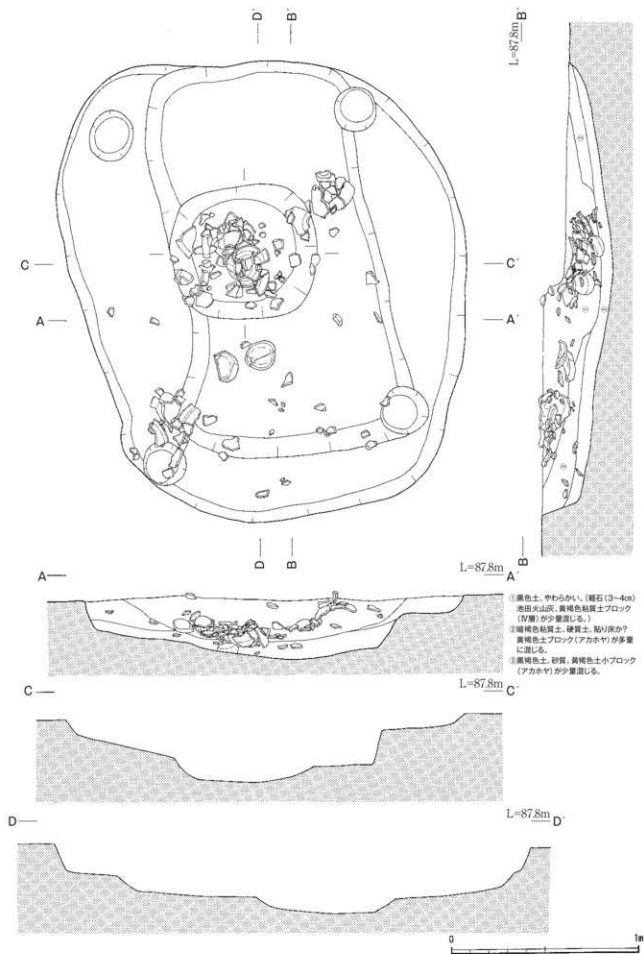
525～528は鉢形土器と考えられる。525は口縁部から胴部にかけての傾きが大きいことや、口径に対する器高が壺ほどは高くはないことなどから鉢形土器とした。526は内湾する口縁部をもつ鉢で、胴部は影らむ。528は胴部から底部にかけての傾きであるが、端部を欠くものの、底部がそれほど高くはないと考えられることから鉢形土器と想定した。527は胴部から口縁部にかけて大きく開いている鉢である。底部の脚台は低く、端部は外側に大きく踏ん張っている。

これらの土器は、主に甕形土器の形状などから、弥生時代後期終末の中津野式と考えられる。

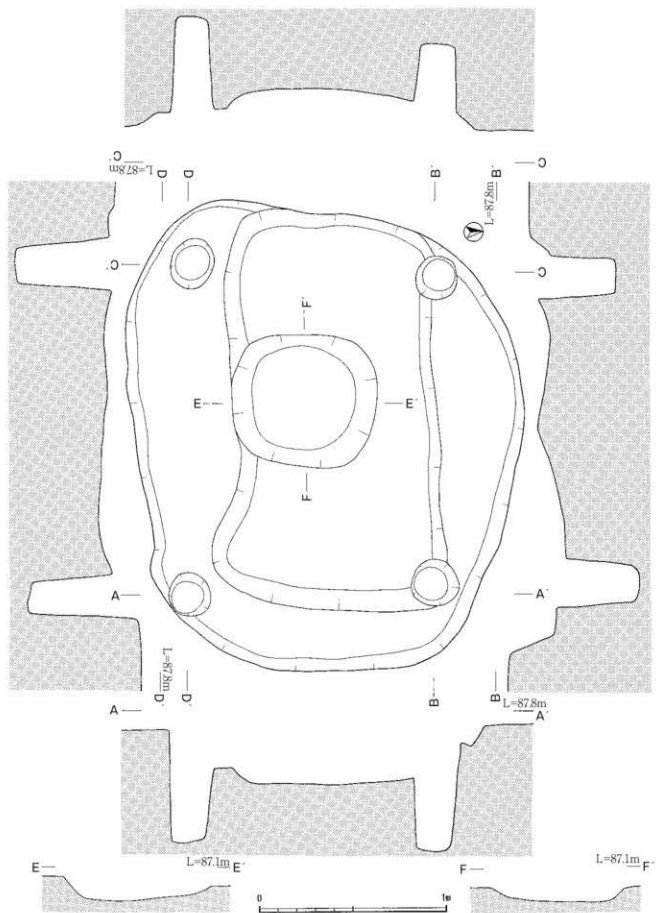
また、石器を1点図化した。531は砥石で、広い2面のほか、側縁と、割れた面も砥面として使用している。石材は軟らかい砂岩を利用している。



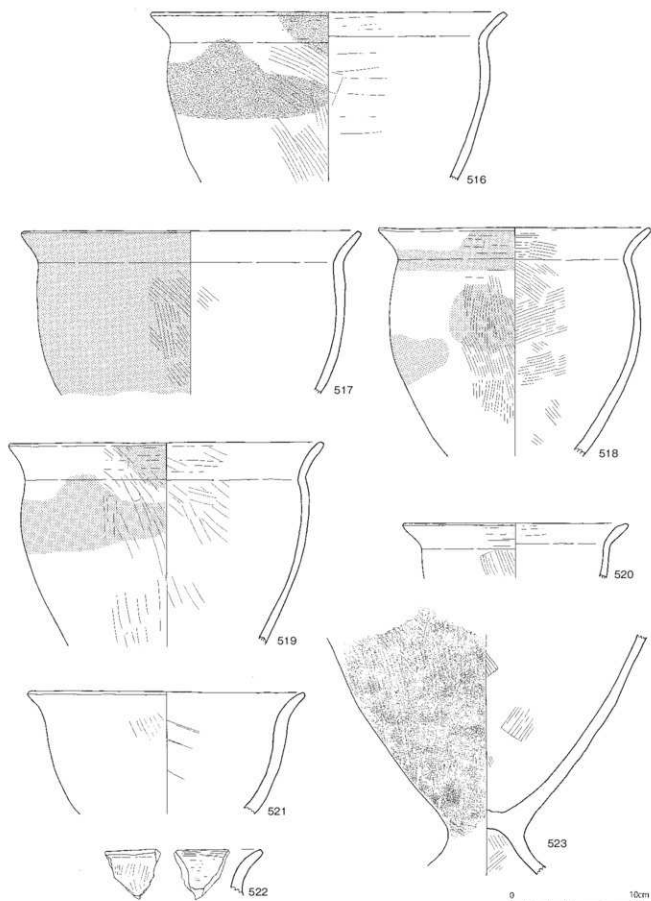
第95图 弥生时代遺構位置图



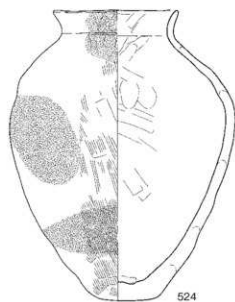
第96図 1号竪穴住居跡1



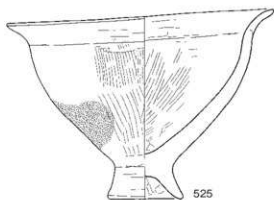
第97图 1号竖穴住居跡2



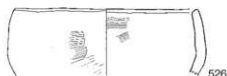
第98图 1号竖穴住居跡出土土器1



524



525



526



527



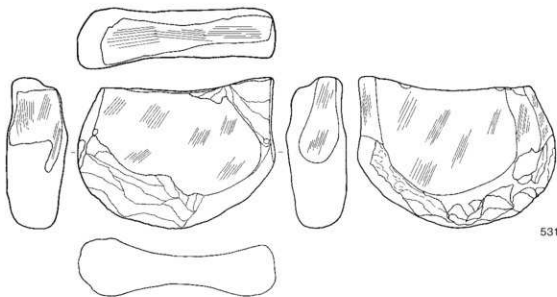
528



529



530



531



第99圖 1号・2号竪穴住居跡出土土器2・石器

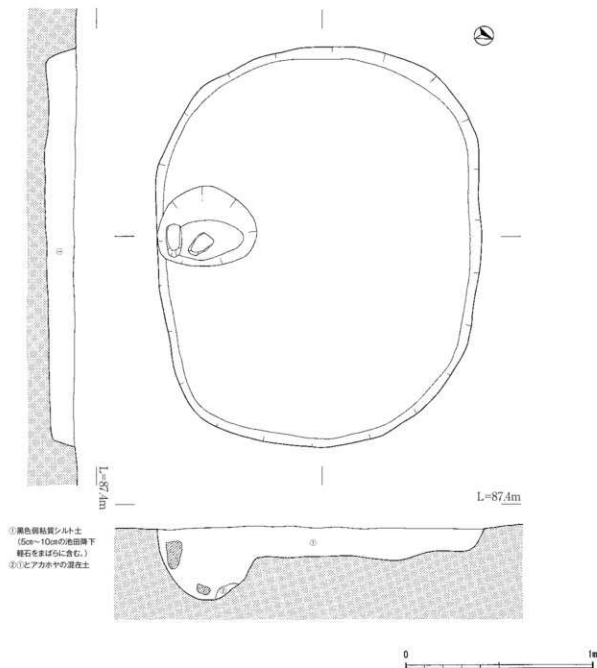
2号竪穴住居跡 (第99・100図 529・530)

G-11区のIV層上面で検出された。長径2.11m、短径1.74mで、残存している深さは15cmであるが、本来の掘方上面はもっと上部にあったと考えられる。北東-南西方向を主軸とし、内部には南側のほぼ中央部に54cm×43cm、深さ26cmの略円形の土坑が見られるほかは、住居跡の内外にはピットは見られない。(N 65° E)

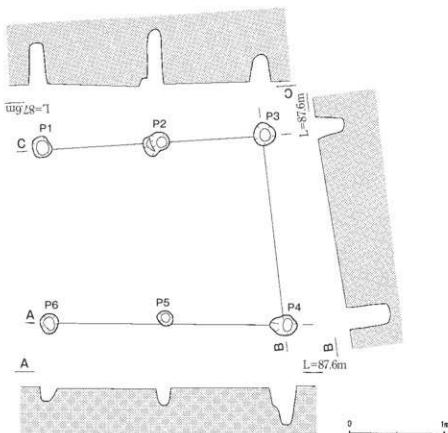
埋土は分層できず、黒色弱粘質シルト土で、5~10mm

の池田降下軽石とアカホヤのブロックを疎らに含んでいるものみであった。

遺物は、土坑内から土器片2点と礎が2点出土した。土器片のうち530は壺形土器で、肩部に付された三角突帯が2条残存している。礎の1点はほぼ床着、1点は土坑中位の壁際にやや浮いた状態で出土した。注意深く観察したが、使用した痕跡は見当たらなかった。



第100図 2号竪穴住居跡



第101図 1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡 (第101図)

1号掘立柱建物跡

G-12区のVa層上面で検出された。6基の柱穴からなる。1間×2間分の検出であるが、柱穴が調査区域外に延びる可能性もある。柱筋は北側で広く、南側に向かっては狭まる傾向が見られる。建物は北東-南西方向に主軸を取っている。(N36°E)

柱穴の深さはまちまちで、最も深いP2が59cm、最も浅いP6が15cmであり、その差は44cmある。そのほかの柱穴の深さはP1が43cm、P3が30cm、P4が40cm、P5が18cmであり、平均すると34.1cmとなる。二重の堀方を持つピットがP2とP4であり、これらはいずれも深く掘られたものであることから、抜き取り痕の可能性も考えられる。

いずれの柱穴内からも遺物は出土しなかった。

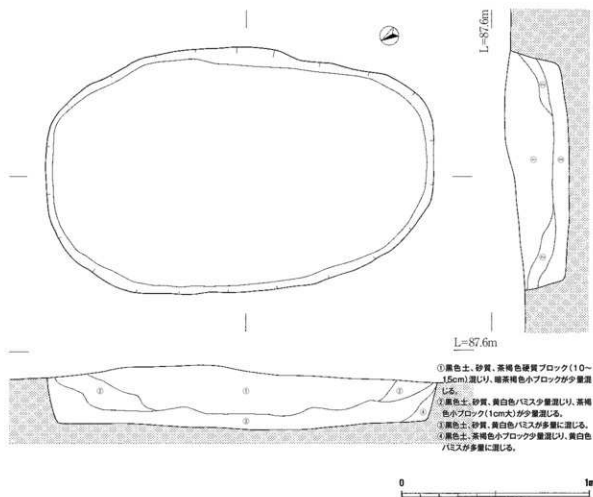
(3) 土坑 (第102図)

弥生土坑1号

E-11区のVa層上面で検出された。主軸方向はほぼ南北で、規模は南北2.06m、東西1.30m、残存している深さは32cmで、ほぼ楕円形を呈している。(N30°E)

埋土は4層に分けることができる。最も下部の南端に部分的に見られるものは壁の崩落土と考えられる黒色土で、茶褐色の小ブロックが少量と黄白色バミスが大量に混じっている。それ以外の大部分を占める最下層は砂質の黒色土で、黄白色のバミスが大量に混じっている。それより上部の壁面近くにある土は砂質の黒色土で、黄白色のバミスを少量含み、1cm大の茶褐色の小ブロックを含むので、最上部は砂質の黒色土で、10-15mm大の茶褐色の硬質ブロックに暗茶褐色の小ブロックが少量混じったものである。

遺構に伴う遺物は出土していない。



第102図 弥生土坑1号

(4) 遺物集中域 (第103・104図 532~550)

D・E-10区境界付近において、土器や石器がまとめて出土した。明瞭な遺構ではないが、ここでは遺物集中域として取り上げることとする。調査を進めていく段階で、住居跡になることも想定したが明確な掘り込みを見いだすことはできなかった。

遺物集中域は4.2m×3.3m程度の範囲に広がっていた。

主な出土遺物を19点図化した。

534~539 (536を除く)は甕形土器である。534、535は口縁部に「く」の字状を呈する。537は胴部下部、538、539は底部で、538は充実した脚台を持つ。541~543は壺形土器の底部であろう。

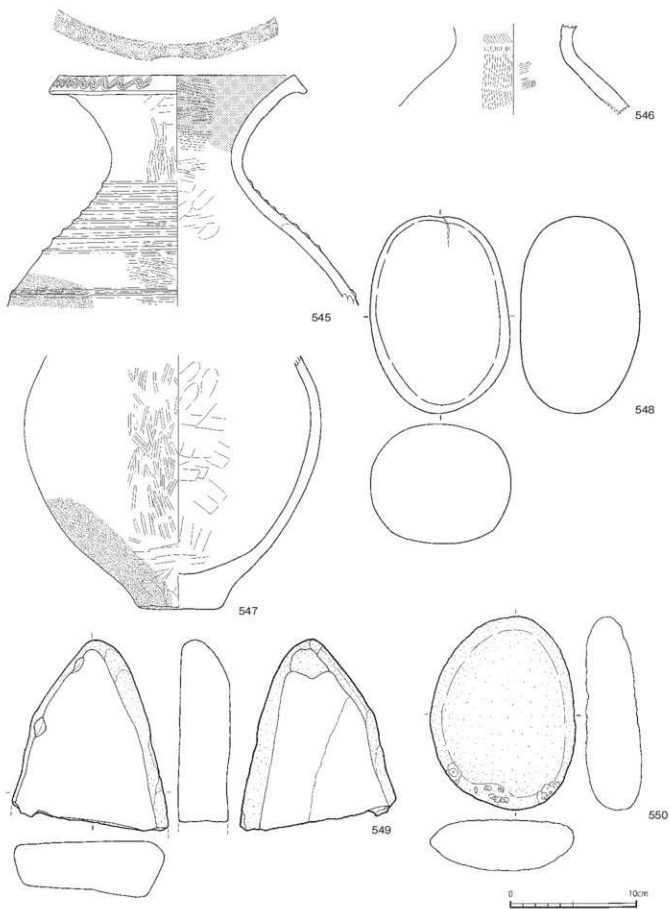
544は無頭蓋で、口縁部は端部が小さな凹縁が巡り、内面に稜の見える逆「L」字状を呈する弥生時代中期の特徴を有している。内外面ともに指頭圧痕と細かなハケ目調整が見られ、底部は若干上げ底状を呈している。

545は口唇部に櫛描波状文が見られるもの、全周に描かれるわけではなく、一部に描かれているに過ぎない。頸部は大きくすぼまり、肩部には8条の三角突帯が、胴部には「M」字状の突帯が巡る。外面は頸部付近が縦方向の、胴部が横方向のミガキ調整、内面は頸部より上部が横方向のミガキ調整で、肩部には指頭圧痕が残っている。546は頸部であるが、突帯は付されていない。

548は磨石、549は砥石、550は磨・敲石と考えられる。



第 103 图 遺物集中域・出土土器



第104圖 遺物集中域出土土器・石器

2 遺物

(1) 土器 (第105~110図 551~666)

弥生時代の土器は、甕形土器、大型甕形土器、鉢形土器、壺形土器、高坏のほか、土製品として土製勾玉が出土している。以下、器種毎に概略を述べて行く。

甕形土器 (第105~107図 551~593)

551~593は大型のものを含む甕形土器である。そのうち、551~559は口縁部や胴部の突帯に刻目が付くものである。器形は基本的に口縁部が外反あるいは直行している。552・555・558は口縁部の下部に突帯が付くもの、それ以外の突帯は見られないものである。全般的に刻目は小さく、浅く付されているものが多い。

557は口唇端部の上面から突帯が連続して延び、それより下部に2条の突帯を巡らせている。口縁部下部の突帯は、2条とも口縁部の突帯よりも低くなっている。刻目は非常に小さく浅いものが付されている。551は口唇端部の上面から延びるものと、それより下部に1条の突帯を巡らせている。口縁部下部の突帯は、口縁部のものとはほぼ同じ高さにある。刻目は浅く小さく付される。口縁部は若干内湾気味となっている。552は口縁部が内湾するもので、口縁部よりも下部の突帯は、貼り付ける位置が離れている。また、刻目は深く大きく施されている。553も口縁部とそれより下部に合せて2条の刻目突帯が巡っている。口縁部下部の突帯は、突帯の向きが下方を向いているが、刻目は浅く小さい。口縁部は若干内湾気味である。554も553と類似するものである。口縁部よりも下部の突帯が下向きとなっている分、刻目は浅く小さい。口縁部は、ほぼ直立しており、555は口縁部よりも下部の突帯が、さらに離れた位置に貼り付けられたものである。口縁部は直立から若干内湾気味となっており、刻目は浅く小さい。556と558は口縁部に巡らされた突帯で、1条見られる。ただ、口縁部よりも下部に突帯が付されていたかどうかは、いずれも不明である。558の口縁部はやや外反し、口唇端部に添うように小さい突帯を巡らせる。刻目は小さいが、若干深いものである。557は口唇端部に添うように、大きく貼り付けられた突帯である。刻目は浅く小さい。559は、突帯の付された胴部である。刻目は浅く小さい。

560からは刻目のない突帯が巡るものである。561は口縁部が逆「L」字状となるもので、端部は三角形気味となっている。560も逆「L」字状となる口縁部で、端部は若干丸みを帯びる。口縁部の下部に2条の三角突帯が巡り、復元口径が約45.2cmの大型の甕形土器といえる。563と566も逆「L」字状の口縁部であるが、断面形状が台形を呈しており、端部には浅い凹状の沈線が巡っている。同器種の他の土器に比べて、胎土に黒雲母を大量に含む。また、563は胴上部に約3mm幅の凹線を1条、そ

の下に沈線を2条巡らす。566は胴上部に沈線を2条巡らせる。外面に煤が厚く付着する。562・564も逆「L」字状の口縁部であるが、端部は三角形を呈している。564は直立、562は幾分内湾しながら口縁部に至る。

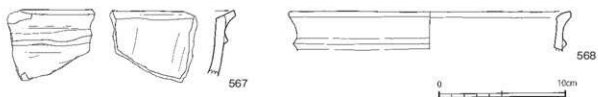
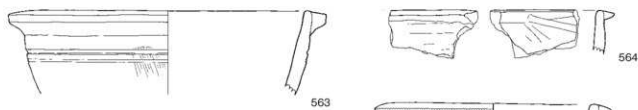
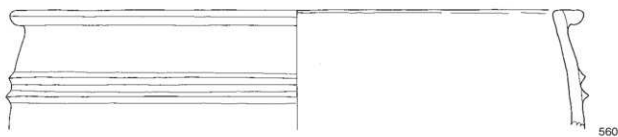
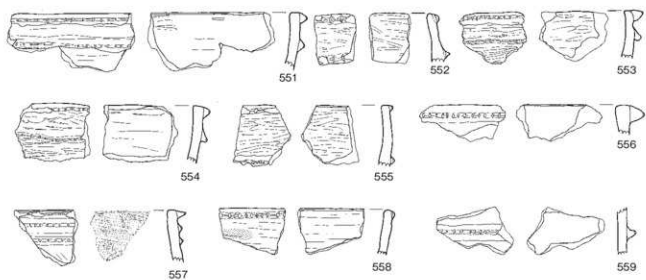
565からは「く」の字状の口縁部を持つもので、大型の甕形土器も含まれる。568は短い口縁部を持つもので、逆「L」字状の口縁部に近い形状をしている。口縁部やや下部に、少なくとも1条の三角突帯が付されている。567は、口縁部が「く」の字状に屈曲する口縁部の口唇部は、浅い凹状となる。569・570はいずれも口縁部が「く」の字状に、やや外反気味に開くものである。口唇部は凹みを有し、3条の三角突帯を貼付する。

571~580は充実した脚台を持つ底部である。接地面は外側に向かって張り出すものが多く、端部は平らにヨコナデし、小さく凹ませている。579の接地面は、外側への張り出しは見られない。

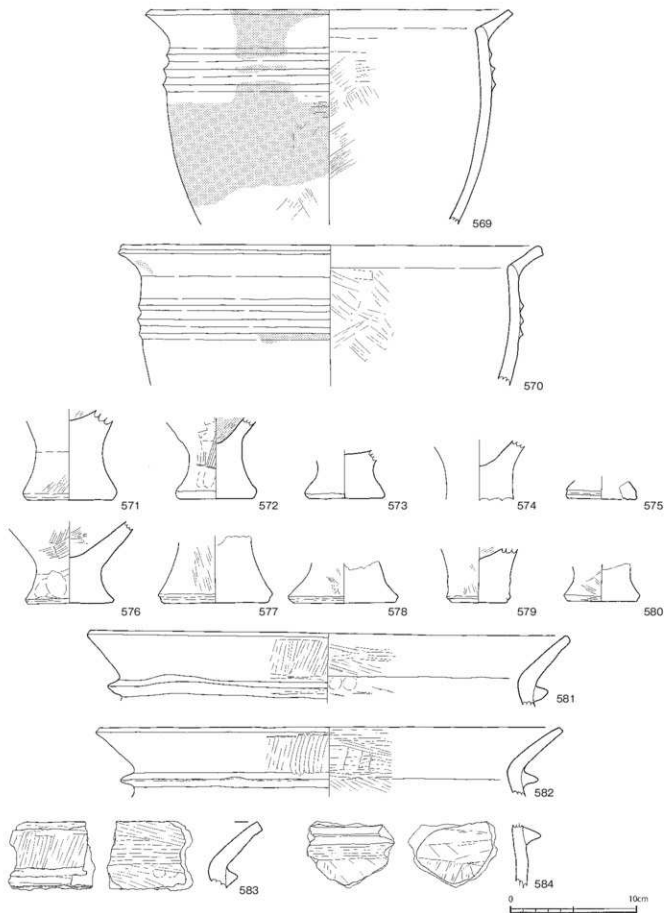
581~593は大型の鉢形土器である。口縁部はいずれも「く」の字状に外反しており、口縁部の下部に接するように高い三角形の突帯が巡り、断面で見ると口縁部と突帯はV字状をなす。585は胴部がやや膨らんだ後にすばまって行く。586は口縁部は外反しているが、胴部にかけては膨らまずに徐々にすばまっている。それでも内面には明確な稜が見られる。口縁部からやや離れて、下部に略台形の突帯が巡っているが、585ほど高いものではない。断面で見ると、口縁部と突帯はU字状をなす。587は口縁部の形状が、本体部の基部の厚みが厚く、先端部が薄くなっており、端部はヨコナデして中央部を少し凹ませていることから、台形に近い形となっている。590~593は胴部に付された突帯である。591のみ胴部にヨコナデが見られず、鈍い三角形となっている。

鉢形土器 (第108図 594~605)

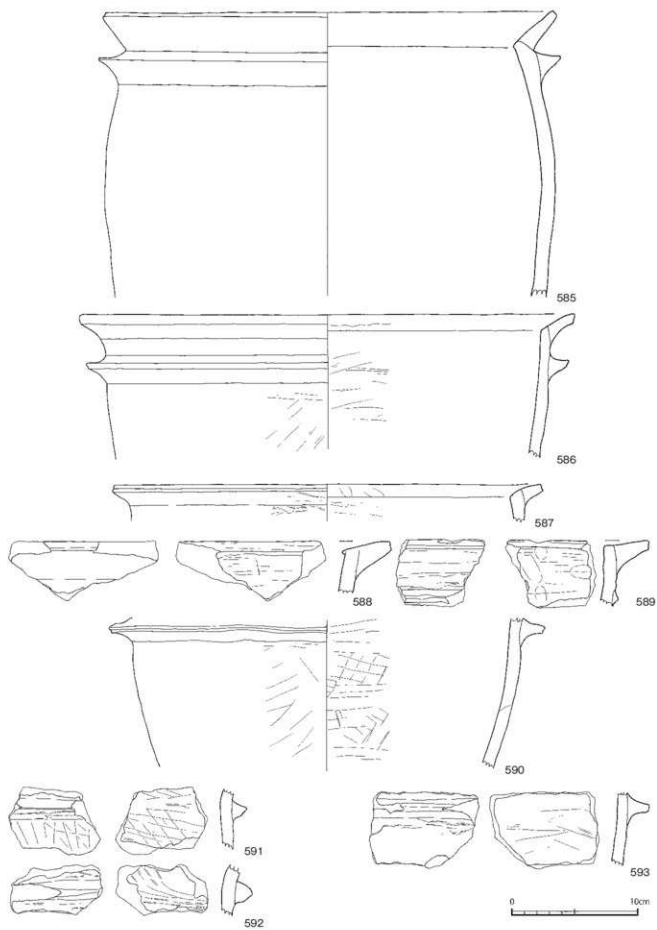
594~605は鉢形土器である。これら全てに、口縁部あるいはそれより下部に突帯が巡っている。594はやや外反する口縁部を持ち、口縁部と口縁部から離れた下部に低い突帯を巡らせている。595は口縁部のみであるが、594と同様な形のもので、口縁部はやや外反する。596はほぼ直立する口縁部からすぐに胴部に向かってすばまって行く。口縁部から離れた下部に突帯が巡る。597は594と同様な口縁部の形状でほぼ直立しているが、口縁部の下部に突帯が巡るの否かは不明である。598は内湾する口縁部である。599はほぼ直立する口縁部を持ち、胴部に向かってすぐにすばまって行く。601はやや外傾、600は明確な外傾、604は直立気味に若干外反する口縁部である。603は断面形状が丸みを持つ、かまぼこ形の口縁部である。604は口縁部よりもやや下部に突帯を巡らせている。そのために594~603とは形状が若干異なっているといえる。605は大きく外反する口縁部よ



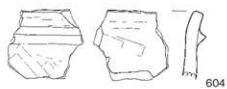
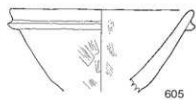
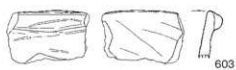
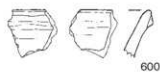
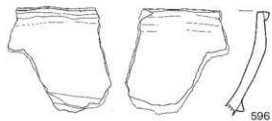
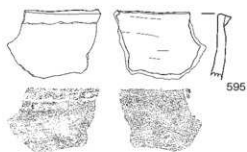
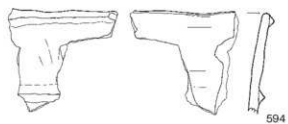
第105図 弥生時代の土器1



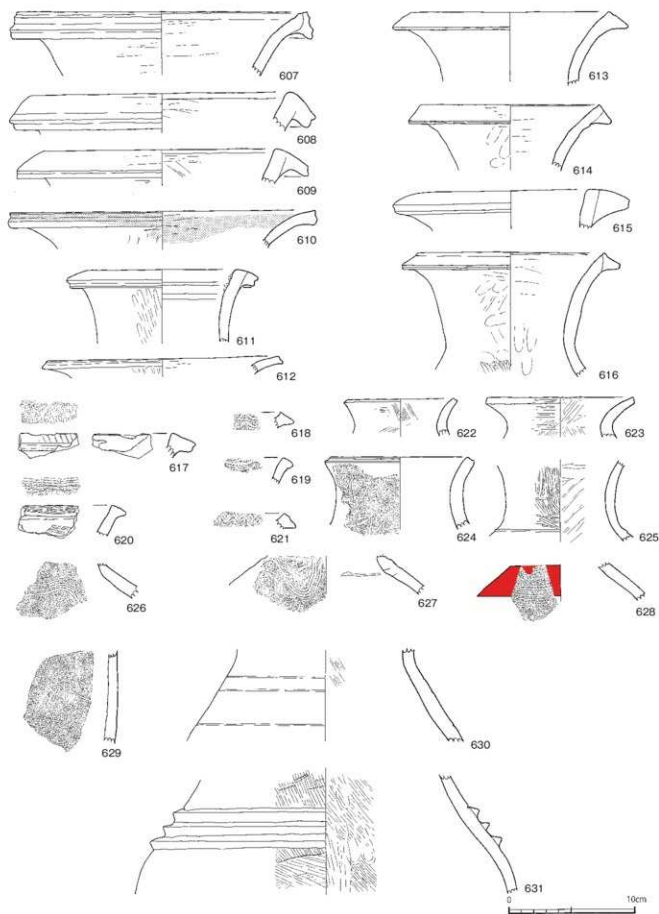
第106図 弥生時代の土器2



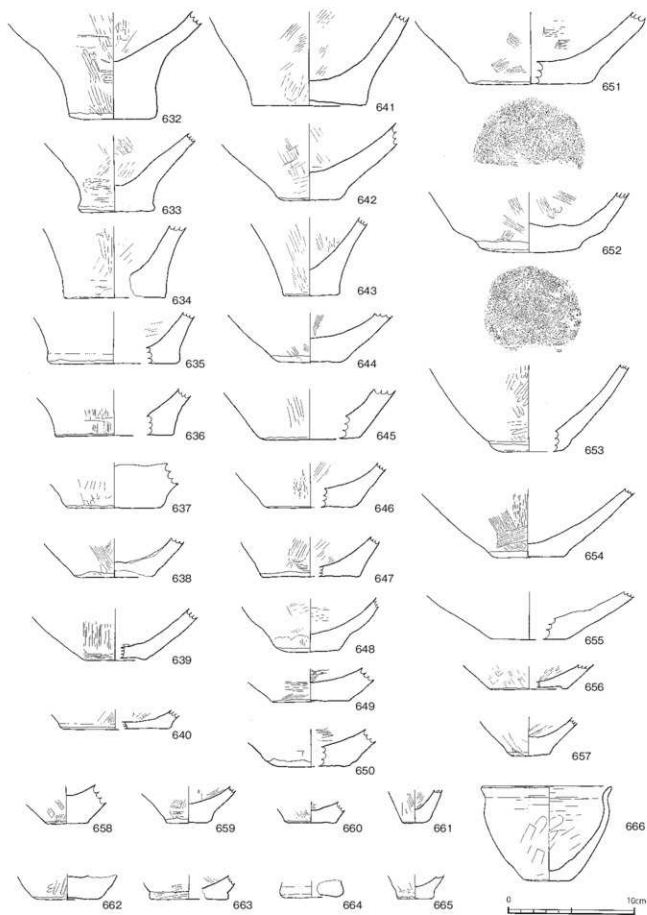
第107図 弥生時代の土器3



第108図 弥生時代の土器4



第 109 図 弥生時代の土器 5



第110図 弥生時代の土器6

りも下部に突帯が巡るもので、小型の鉢形土器といえる。

高坏 (第108図 606)

606は高坏の脚部である。外面の裾部分に1条の突帯を巡らす。脚部はそれほど高くならないと考える。

壺形土器 (第109・110図 607~666)

607~666は壺形土器である。口縁部は、口唇端部が平らにヨコナデされ、中央部には凹みが見られるものがほとんどである。608と609は肥厚した口縁部であることから、大型の壺形土器と考えられる。608は逆「L」字状に垂れ下がる口縁部である。口唇端部は凹線状に凹む。609は外反する口縁に端部を薄くし、基部を厚くした断面形状が台形となる口縁部が取り付けられている。611は、外反する頸部に逆「L」字状に垂れ下がる口縁部をもつ。口唇部端は凹線状に凹む。631は肩部に3条の三角突帯が巡っているもので、胴部は大きく張っている。629は胴部の破片であるが、直線的な線刻により文様が描かれている。611は内面に2条の低い突帯が付されていたものが剥落している。616は頸部から外側に向けて、大きくカーブしながら外反し、614はほぼ直線的に外反している。617は口唇部に縦方向の短沈線の刻みが少なくとも8本ほど見られる。622~624は外反する口縁部がそのまま開くもので、口唇端部もそのままの状態ですらに面取りされ、624には浅い凹みが巡らされる。625は端部を欠くが、622に近い形状の口縁部と考えられる。頸部と胴部の境界付近には低い突帯が付されている。626~631は頸部から胴部の上部にかけての部分で

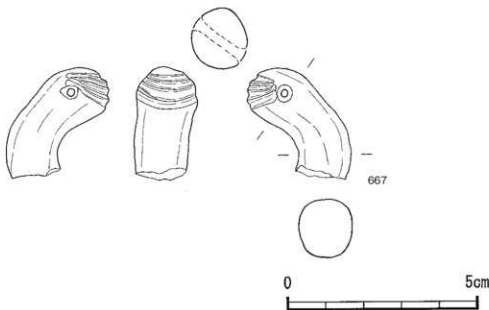
ある。626は少なくとも3条にわたって沈線が巡っている。627は2~3本の曲線で文様が描かれている。628は横方向の沈線の間に、右下がりの短い斜線が刻まれ、幅の広い文様帯となっている。外面には丹塗りが観察される。618~621は口縁部の口唇端部に沈線や柳描波状文などが描かれている。

632~665は底部である。いずれも平底である。さまざまな形状のものが見られる。632は底部が厚く、やや脚台状を呈する。643・661は小さい底部である。底面や端部の状況などもさまざまである。666は短頸壺(もしくは小型鉢)である。口縁部が「く」の字状に外反し、器高は口径に近い長さである。頸部が幾分すぼまるものの、それほどしまったものではない。

(2) 土製品 (第111図 667)

土製勾玉

土器ではないが、土製の勾玉667も出土した。4条の沈線の丁字頭をもち、尾部は欠く。頭部は丸みを帯び穿孔されている。胴部の形状から判断すると、尾部もそれほど小さなものではないと思われる。作りは丁寧に焼成も良好である。



第111図 土製勾玉

第4節 古墳時代の調査

古墳時代は、Ⅱ層を包含層とする遺物の調査と、Ⅲ層以下を検出面とする遺構の調査を行った。第1地点と第2地点が主な調査区となった。

なお、第2地点は、平成25年度の調査時に、市道として共用されていた部分の調査を行った。

調査は表土及び道路の基礎部分の砂利等を重機によって削いだ後に、人力により、掘り下げを行った。

その結果、前回調査の続き部分として溝が4条検出されたほか、地下式横穴墓の竪坑と考えられる遺構も検出された。また、溝の掘り下げ部分より地下式横穴墓の竪坑と考えられる遺構が検出された。市道部分からも地下式横穴墓が検出されたことから、地下式横穴墓は今回、合わせて4基確認されたことになる。

そのほかにも、第2地点からは溝に近接して大型の壺形土器の破片が大量に出土する範囲が見られた。土器集中区と呼び調査を進めたが、最終的には地下式横穴墓の祭祀に係わる遺構と考えられるに至ったため、他区の調査地と同様に「土器破砕祭祀遺構」と判断した。

1 遺 構

(1) 地下式横穴墓 (第114~117図 668~676)

1号地下式横穴墓 (第114図 668)

道路部分のアスファルトを取り除いた面(Ⅵ層)のI-19区で検出された。竪坑の規模は長軸が0.53m、短軸が0.32mで、残存していた部分の深さは最大で6cmであった。遺構の上部が削平され、床面のみが残存していたことになる。竪坑の長軸方向は、北西-南東方向で、玄室も同様の向きであったと考えられる。(N 22° W)

埋土は黒色土で、アカホヤの粒が含まれている部分と、暗褐色土の含まれている部分とがある。おそらくは、玄室部分が黒色土で、暗褐色土の部分が羨道部分と想定された。ほぼ床着で、玄室の北側の端から鉄製品が出土したが、取り上げて観察した結果、刀子の破片であることが判明した。

全体の規模を埋土を除去して計測した結果、羨道部分が0.47m×0.20m、深さは6cm、玄室は長軸が1.48m、短軸は0.7mで、深さは15cmであった。玄室は平入りで、竪坑の最深部よりも5cmほど低く作られていた。

竪坑が極端に小さいことから、竪坑の大部分は道路の敷設工事などで削平され、残存していた竪坑部分で最も深い部分が残ったものと判断される。

玄室から出土した刀子は、全長が6.5cm、最大幅1.4cmで、最も厚い部分で0.3cmほどである。刃は緩やかなカーブを持ち、先端は鋭くとがっている。背部は極めて

微細なカーブであり、ほとんど直線的といってもいいほどである。刃部は完全に残存しているが、基部は途中で折損している。銹着が著しく、木質が付着している部分も見られる。

2号地下式横穴墓 (第115図 669~673)

F・G-18区のⅤ層上面で検出された。南側の3号溝を切っていることから、溝よりも新しいことがわかる。

規模としては、竪坑と玄室を合わせたもので、長軸で2.40m、短軸で2.08mである。平成25年度の調査で遺構の東側が検出されていた。下部が安定した状況ではなく、平成28年度に検出された西側の床面が安定していることから、西側の部分が玄室、東側が竪坑と判断できる。

その場合、竪坑は長軸が2.08m、短軸が1.13m、検出面からの深さは0.82mとなり、玄室は長軸が2.10m、短軸が1.32m、深さは0.98m、玄室の長軸方向は北東-南西向きとなる。(N 17° E)玄室は竪坑よりも15cmほど低く作られており、平入りで、羨道は確認できない。

また、玄室が竪坑よりも大きく作られており、竪坑と玄室がほぼ平行になるような作りと言える。

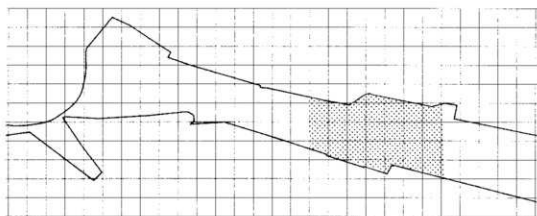
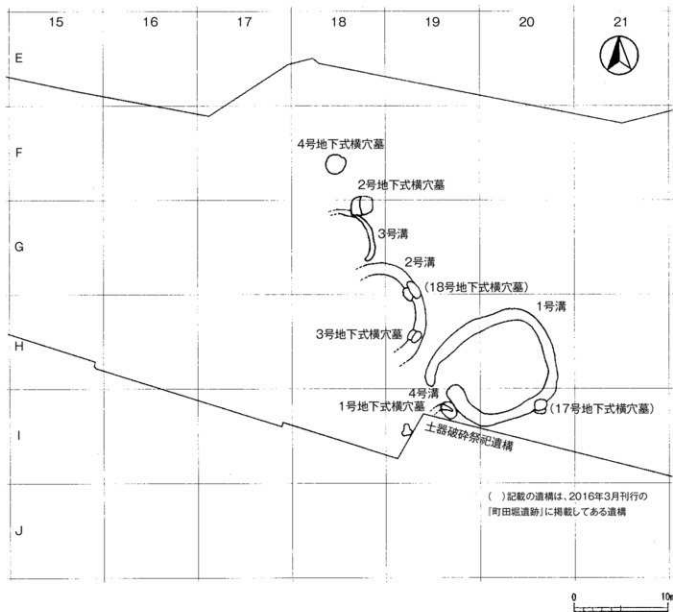
669~673は2号地下式横穴墓から出土したものである。670以外は、縄文時代後・晩期の5類土器の口縁部、胴部、底部である。670は壺形土器の肩部に付された突帯で、弥生時代中期のものと考えられる。673は打製石斧の基部で、表面には自然面が残っている。

3号地下式横穴墓 (第116図)

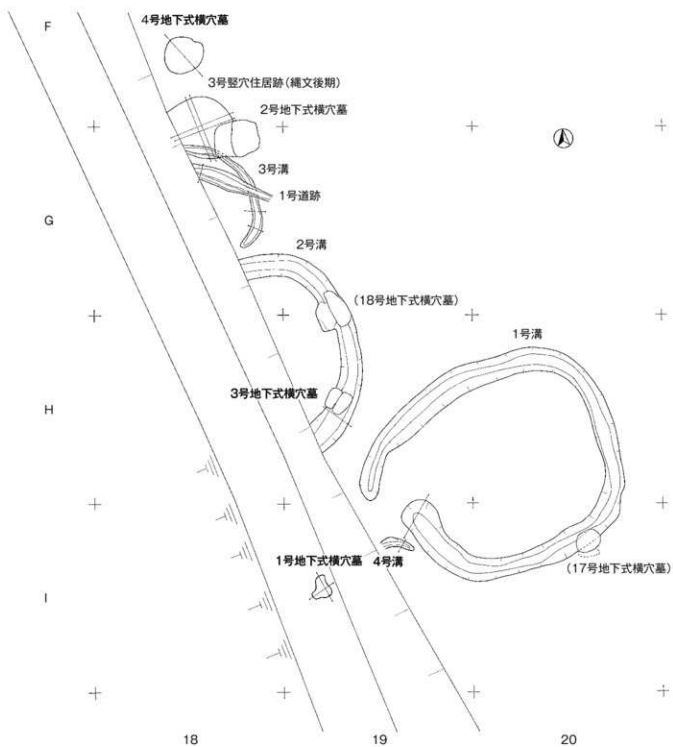
H-19区で検出され、2号溝の内部に、溝から掘り込まれて作られていた。

溝内にある竪坑は、長軸が1.27m、短軸が0.62mで、ほぼ長方形を呈しており、溝下部の検出面からの深さは0.78mである。ほぼ西方向に平行して作られている玄室は、長軸1.12m、短軸0.58mで、おおよそ隅丸の長方形を呈しており、溝の検出面からの深さは1.15mである。玄室の床面は、竪坑の最下部よりも13cmほど高い位置に段を設けるようにして作られている。玄室の長軸方向は、北東-南西に向いている。(N 28° E)

玄室の床面から天井までの高さは約40cmほどであり、内部には中央から南側にかけて赤色顔料が見られた。これをサンプリングして県立埋蔵文化財センターに分析を依頼した結果、鉄を主成分とし、針状の結晶が見られることからパイプ状ベンガラの可能性が高いことが判明した。(第5章第4節参照)



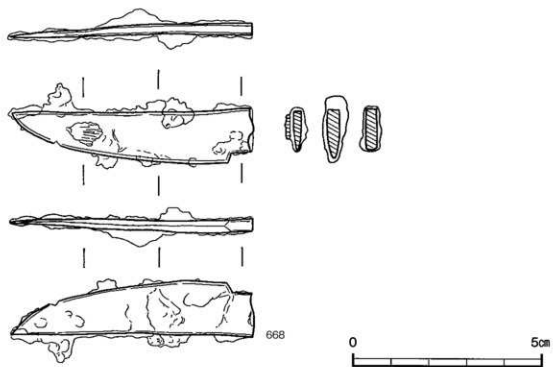
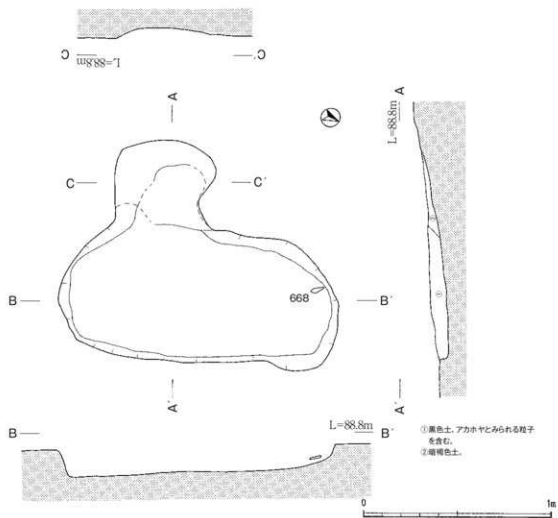
第112図 古墳時代遺構位置図



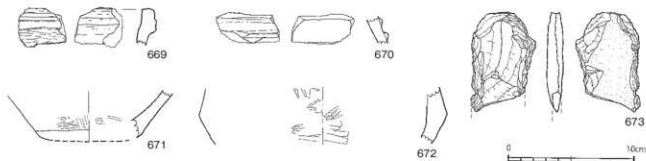
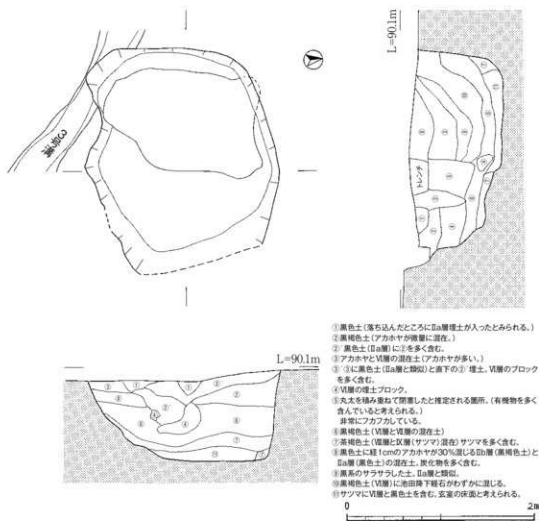
() 記載の遺構は、2016年3月刊行の「町田経溝跡」に掲載してある遺構



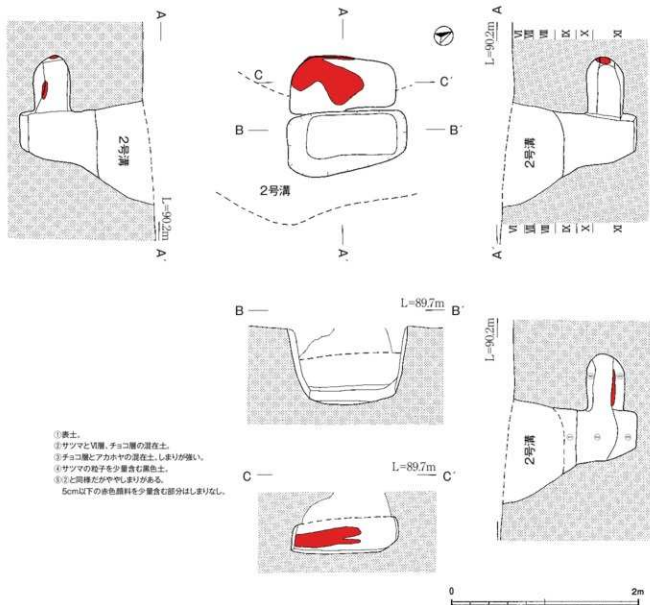
第113図 第2地点検出遺構図



第114図 1号地下式横穴墓・出土の鉄器



第115図 2号地下式横穴墓・出土遺物



第116図 3号地下式横穴墓

4号地下式横穴墓 (第117図 674~676)

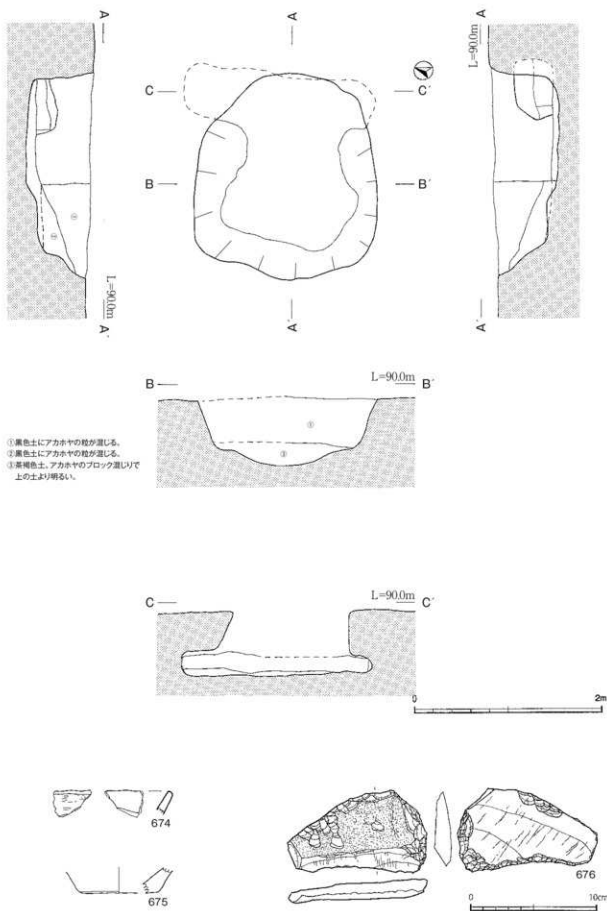
F-18区のV層で検出された。堅坑は長軸1.95m、短軸1.20m。検出面からの深さは0.73mであり、玄室は長軸2.03m、短軸0.60m。検出面からの深さは0.70mである。また、羨道の規模は0.96m×0.56mである。遺構全体の主軸方向は北東-南西を向いている。玄室の床面から天井までの高さは約0.30mと、天井は極めて低い。

674~676は4号地下式横穴墓から出土した遺物である。674は深鉢の口縁部、675は底部である。いずれも5類土器と考えられる。676はスクレイパーである。

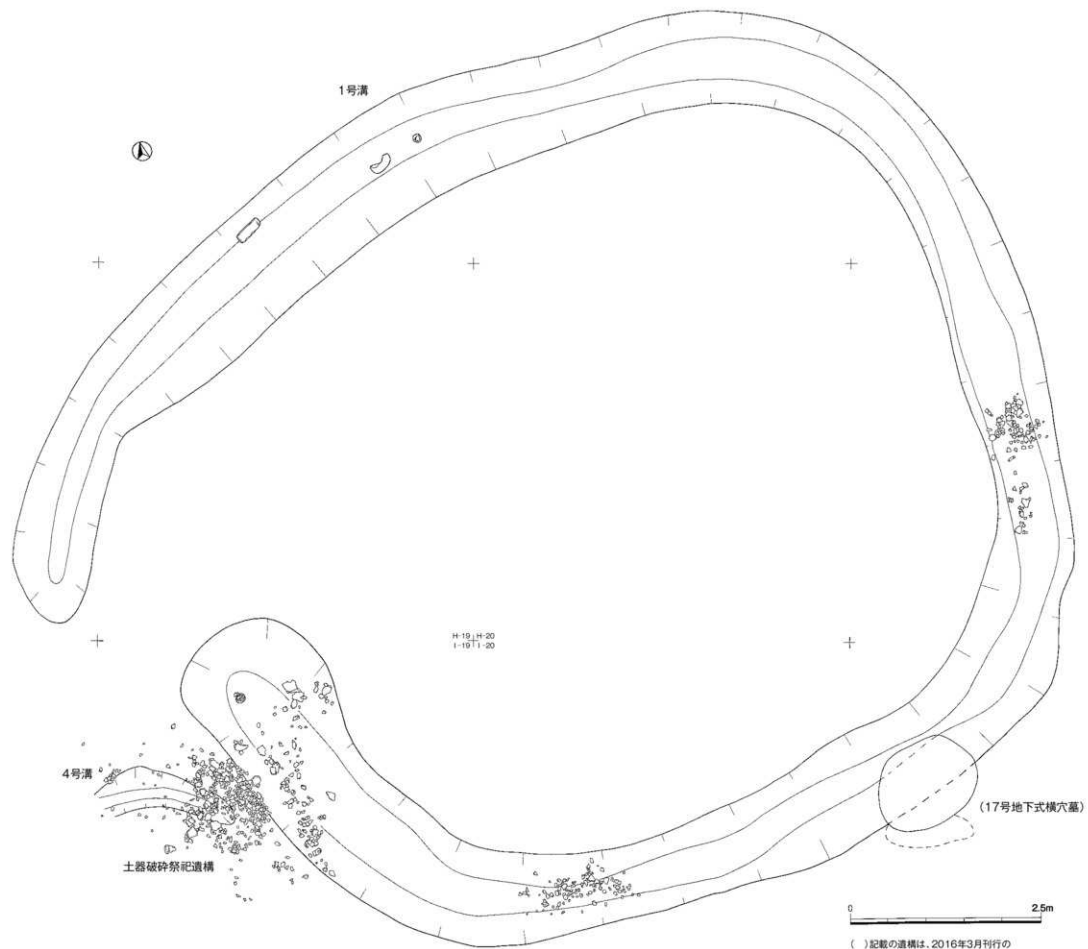
(2) 溝状遺構 (第118~127図)

1号溝 (第118・119・124図 677~679)

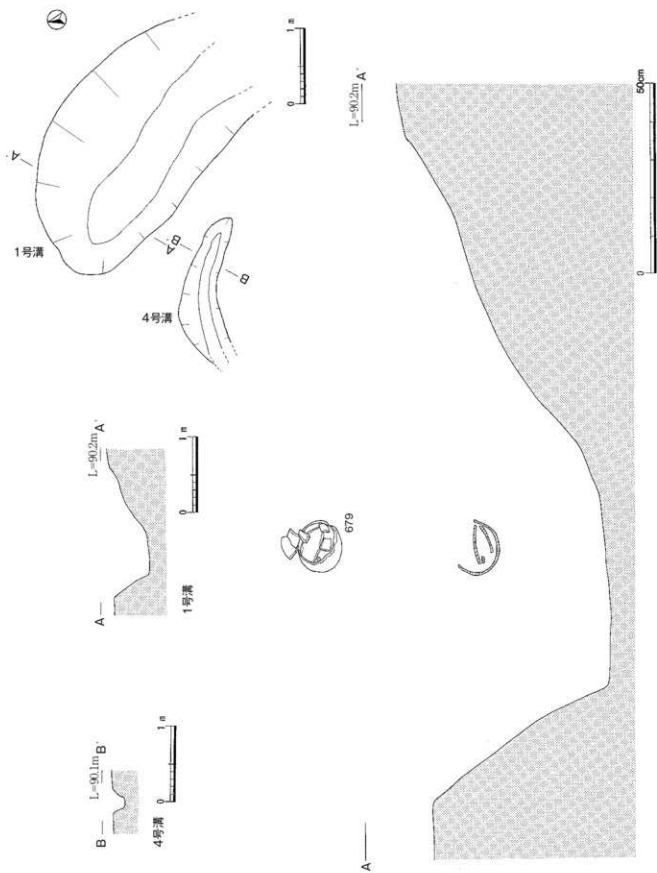
H・I-19・20区のV層で確認されたが、平成25年度の調査で一部検出されていたもので、その北側の先端



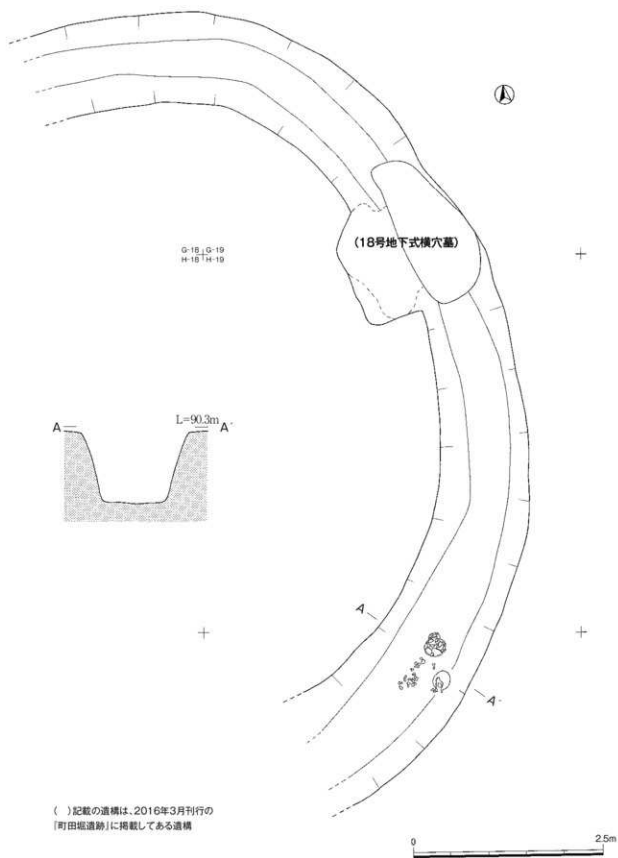
第117図 4号地下式横穴墓・出土遺物



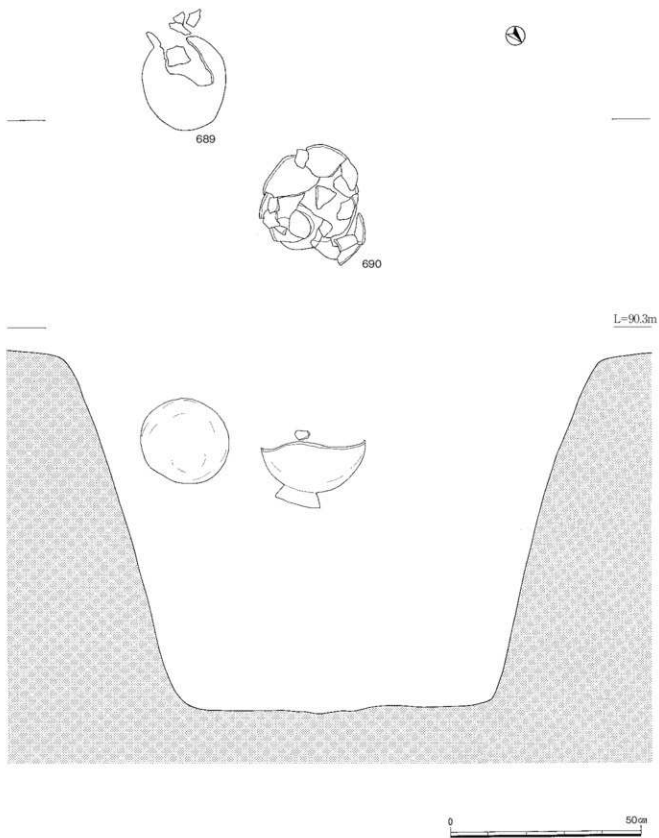
第118図 1号溝・4号溝



第119图 1号溝・4号溝遺物出土状況



第 120 図 2 号溝

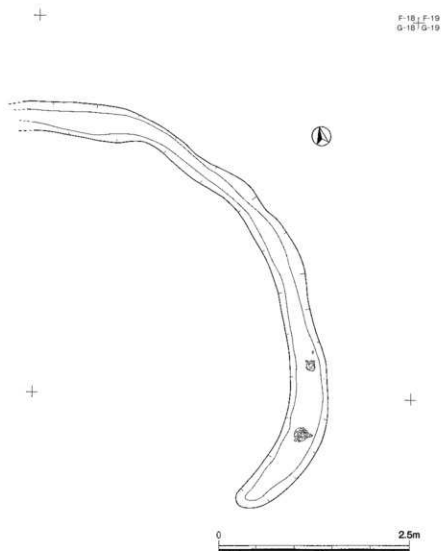


第 121 图 2号溝遺物出土状況

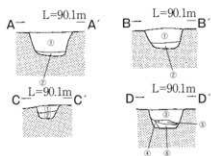
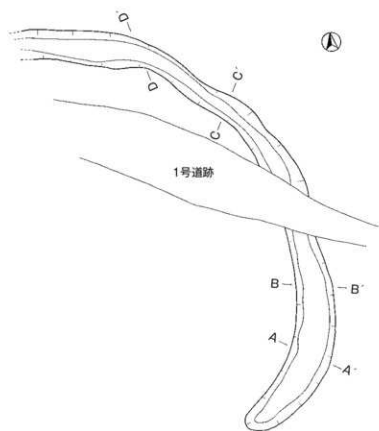
部分に当たる。最大幅は1.75 m、検出された先端までの長さは約3.2 mである。最大の深さは0.52 mで、黒色土の埋土中からはほぼ完形となる土器が出土した。

677～679が1号溝から出土した土器である。677は甕形土器の口縁部である。「く」の字状の口縁部を持ち、口唇端部が平らにヨコナデされており、口縁部下位には三

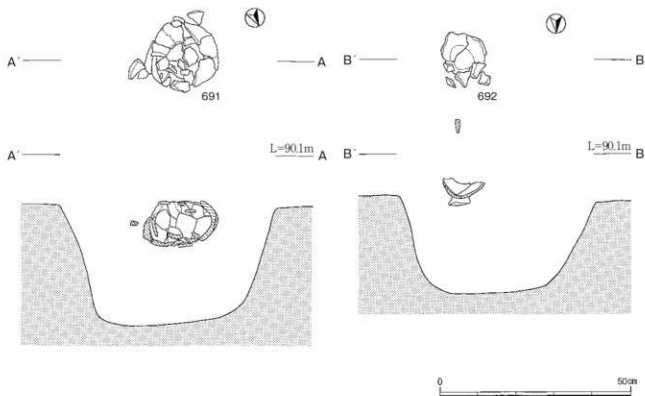
角突帯が1条巡っている。678は壺形土器の底部付近と考えられる。安定した平底で、底部から胴部への立ち上がりりが滑らかでシャープである。これらはいずれも弥生時代中期の山ノ口式土器と考えられる。679は小型丸底壺（埴）の完形品である。体部は球状で、胴部には穿孔が見られる。古墳時代の土師器である。



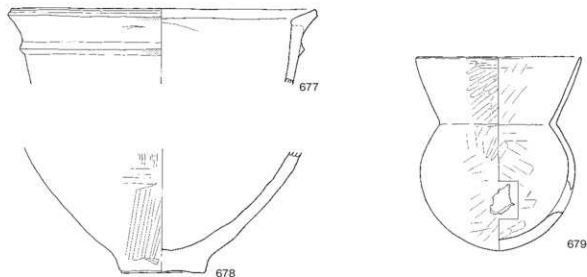
第122図 3号溝



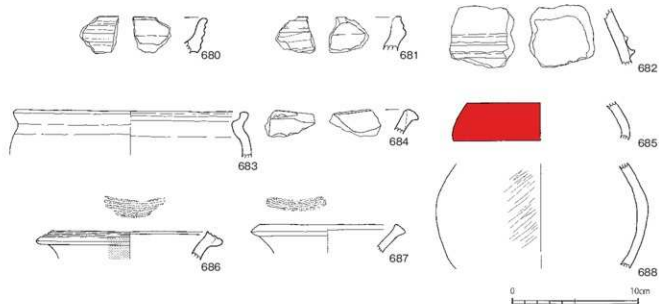
- ① IIa層とIIb層の混在土。
- ② アカホヤを70%含むIIb層との混在土。
- ③ IIa層の土とアカホヤをまじりに含む。
- ④ V層(アカホヤ)にIIb層が少量混入。
- ⑤ IIa層の黒色土と類似。(2号地下式横穴墓の崩落の影響を受けている。)
- ⑥ 縄文後期の3号野穴住居跡の埋土と類似。



第123図 3号溝遺物出土状況



第124図 1号溝出土の土器



第125図 2号溝出土の土器1

2号溝 (第120・121・125・126図 680~690)

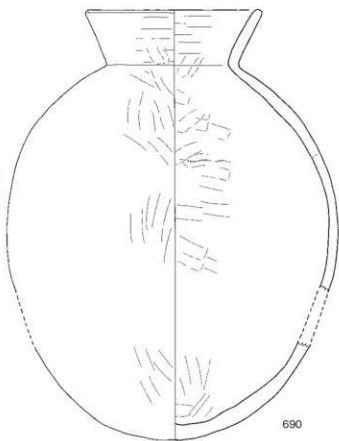
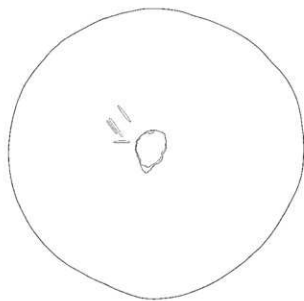
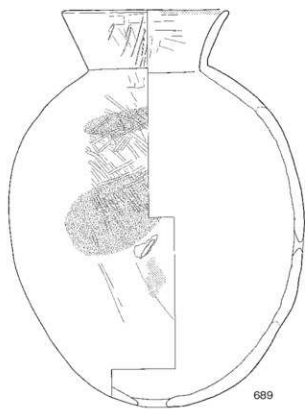
G・H-18・19区のV層で確認された。平成25年度の調査では2号溝A・Bとして調査したが、平成28年度の調査で、これが繋がったことから、改めて2号溝という呼称で呼ぶこととなった。

規模は、検出した南北の径(端部と端部の間隔)が、10.8mあり、西側は市道の敷設により切られているため残存部分では4.15mある。幅は最大で1.76m、残存している最大の深さは0.88mである。断面形状は、最下面が幅80cm程度であり、堀方の両側は急勾配で直線的となっており、U字状の溝と言える。この溝からは、今回の調査で検出された3号地下式横穴墓のほかにも、「町田堀遺跡」に掲載の18号地下式横穴墓も検出されてお

り、合わせて2基(以上)の地下式横穴墓がこの溝をもとにして作られていたことが判明した。

この溝の黒色土の埋土からも完形品を含む土器が多数出土した。680~690が2号溝から出土した土器である。680・681・683は縄文時代後期あるいは晩期頃の土器と考えられる深鉢と浅鉢である。682・684・685・688は弥生時代中期の壺形土器と考えられる。686・687も壺形土器であるが、古墳時代のものである可能性が高い。

689・690はほぼ完形となる壺形土器である。いずれも口縁部が大きくラッパ状に開き、頸部が縮まり、胴部にかけては大きく膨らむ器形のもので、底部はともに丸底である。古墳時代に位置づけられるものである。689は胴部中位と底部に穿孔が見られ、祭祀に伴う可能性が考えられる。

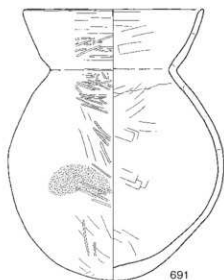


第 126 図 2号溝出土の土器 2

3号溝 (第122・123・127図 691~693)

G-18区のV層で検出された。規模は、検出された南北の径(端部と端部の間隔)は6.22mあり、西側は市道の敷設により切られているが残存部分は約2.2mある。深さは最大で0.33mほどである。

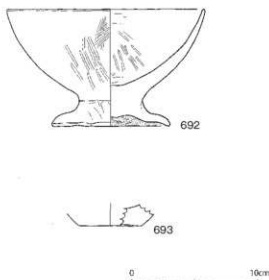
埋土は黒色土を主体としており、土器片も混じっている。691~693は3号溝から出土した土器である。691は2号溝から出土した689や690と類似する壺形土器である。692は鉢形土器で、半球形の体部に若干上げ底となる不整形の底部が付く。693は壺形土器の底部と考えられる。



第127図 3号溝出土の土器

4号溝 (第118・119図)

I-19区のV層で検出された。規模は、東西方向の長さが1.8m、最大幅は0.55m、最も深い部分で0.18mである。西側は市道の敷設工事により削られている。埋土は黒色土である。図化できる遺物は出土していない。



(3) 土器破砕祭祀遺構 (第128~131図 694~707)

1号溝の南側にあたる部分から、土器片が大量に出土した。それらは細かく割れたものが多く、接合作業を進めた結果、完形品として復元できるものもあった。このような土器の出土状況は平成25年度調査時にも見られ、この周辺が地下式横穴墓や円形周溝墓などからなる墓域であることから、個々の地下式横穴墓などの墓、または墓域全体の祭祀の場である可能性が高いとし、「土器破砕祭祀遺構」の呼称が付された経緯があった。そこで今回のこの土器の出土状況も同様に判断することとした。

この遺構の範囲は、長径3.50m、短径1.80mにも及び、遺物の出土する上下の範囲は25cmの間に集中している。

土器破砕祭祀遺構から出土した土器を4点図化した。704は粉々に割れていたためパーツ毎に実測を行い、完形品として復元したものである。二重口縁に見える大型の壺形土器で、大きく反外した口縁部の外面のほぼ中央部に三角形の突帯を付すことで二重口縁の土器に見えている。頸部は縮まり、外面には突帯を巡らして刻目を付している。胴部は大きく膨らみ、ゆっくりとすぼまりな

がら底部へと向かう。底部は底径が10cmほどで、全体の長さや胴部の大きさに比して極めて小さい。

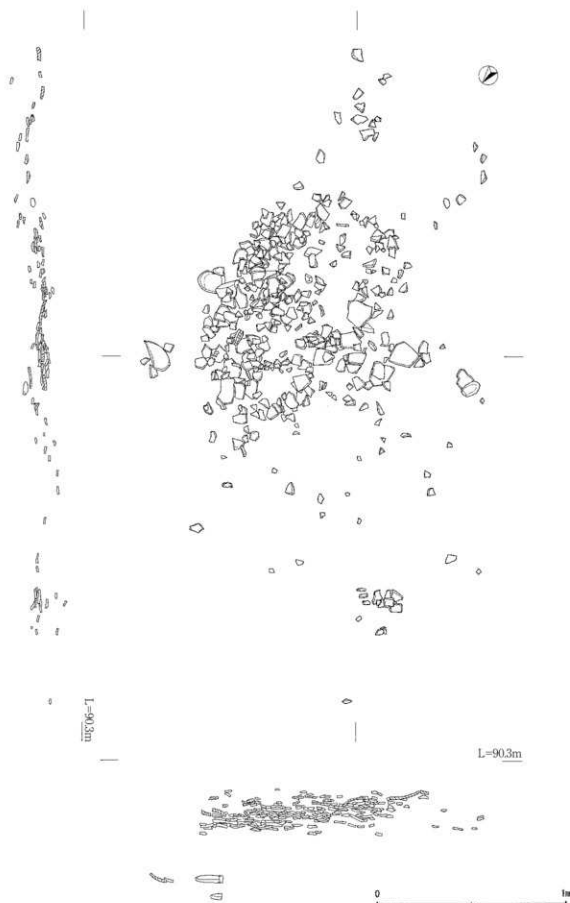
705~707は壺形土器の底部である。705は平底、706、707は丸底である。

また、この遺構からは縄文時代後期と考えられる5類土器694~702及び磨石703も出土している。時代的にはそぐわないが遺構内から出土した遺物として、ここで取り上げた。

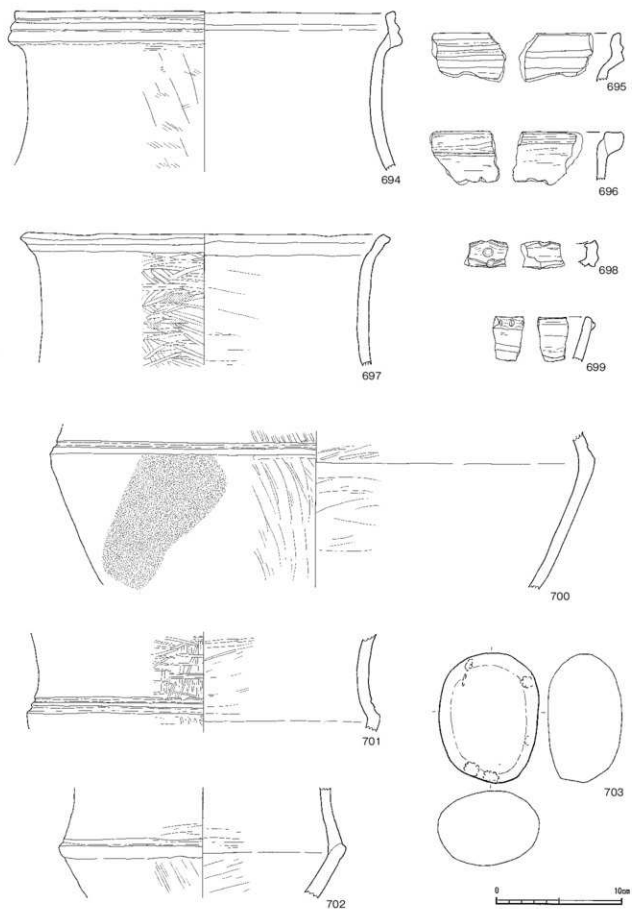
694~699は口縁部である。694と695は、口縁部に幅広い浅い沈線を2条施し口縁部を強調している。696は肥厚した口縁部を作り出しているが沈線は施されていない。697は直立気味に胴部上位まで立ち上がるが、口縁部は大きく反外し細めの沈線を1条施している。698は、口唇部から口縁部にかけて凹点を縦に施している。699は、口唇部に刻目突帯を貼り付ける。

700~702は胴部で屈曲部を残す。いずれも沈線を施し、屈曲を強調しているが、701は2条を、700、701は1条を巡らせている。

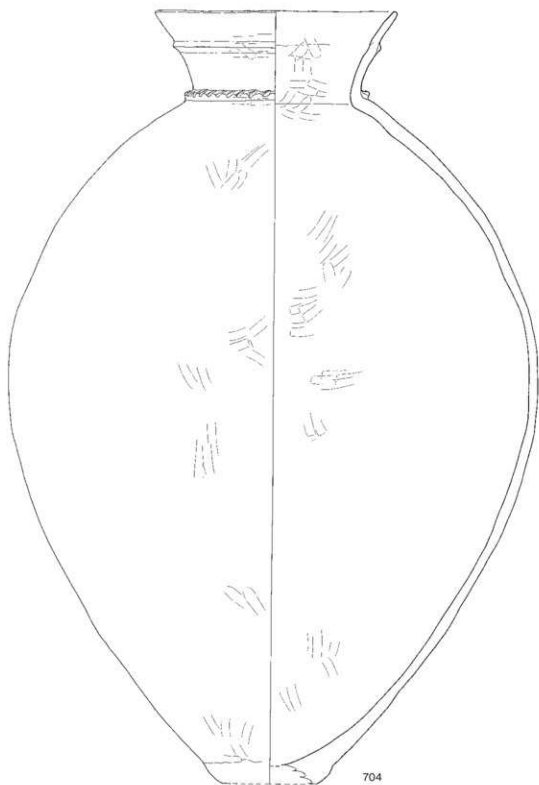
703は、磨り敲きの痕跡がわずかに残る磨石である。



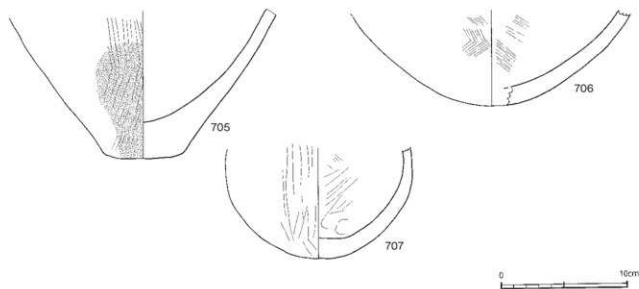
第 128 図 土器破碎祭祀遺構



第 129 图 土器破碎祭祀遺構内出土遺物 1



第 130 圖 土器破碎祭祀遺構内出土遺物 2



第 131 图 土器破砕祭祀遺構内出土遺物 3

2 遺物

(1) 土器 (第132~141図 708~839)

古墳時代の土器には、甕形土器、鉢形土器、壺形土器、高坏、手捏ね土器が見られる。

甕形土器 (第132~135図 708~762)

708~713は口縁部が明らかに外反し、内面には明確な稜が残る口縁部の下部には突帯が通るものである。この突帯は、三角形の突帯の上から刻みを施し、布目痕が認められる(708~712)が、無文のもの(713)も見られる。突帯は、布目の圧痕が見られるものは、内面の稜の位置よりも下部に付されているのに対して、無文のものは稜の位置と考えられる部分に付されている。708~710は、突帯の接着痕上下のラインが刻みの力の入れ具合により歪みが生じている。709や710、711には、突帯の貼り付け部分の上部または下部に、横あるいは斜め方向の傷跡が見られるが、これは布目を押圧する棒状の施工具の先端によって付けられたものと考えられる。傷跡は、突帯の上部あるいは下部のいずれか一方に付いていることから、突帯の下部あるいは上部いずれかの方向から付されたことがわかる。器面調整は、内外面ともにナデによるものが多く、ハケ目調整も一部に見られる。

714~729は口縁部が緩やかな「く」の字状となる口縁部を持つ甕形土器である。714・719・725などのように内面の稜が明確なものも見られるが、多くは稜が不明瞭なものである。口唇部は若干浅い凹みを持つもの(714・715など)や平らに成形してあるもの(718・721など)、丸みを持つもの(716・717など)、三角形気味に仕上げるもの(725・729など)と、さまざまな形状が見られるほか、端部がまっすぐに整えられておらず、波打ったようになっているもの(715・720など)も見られる。器面調整はナデ調整が多く見られる。また、ハケ目が明確に残るものと、ハケ目の幅がわかってはハケ目の本目が明確でないものが見られるが、これは調整に使用するハケ目板がすり減ったものを使用していたことも考えられる。頭部から口縁部にかけて跳ね上げるようなハケ目痕が見られるものも多い。

730~740は胴部を中心としたものである。口縁部付近のものも多く、内面の稜は全体的に不明瞭である。また、外面は口縁部に向かって「く」の字状に緩やかに外反する。胴部は割合に膨らむもの(731・737など)と、それほど膨らまないもの(730・738など)、すばまるもの(739など)などのタイプが見られる。器面調整はナデ調整が多く見られ、ハケ目が明確に残るものと1本1本のハケ目が明確でないもの両方がある。また、ハケ目の幅が異なるものも見られる。

741~750は底部付近であるが、脚部の先端は欠損する。甕形土器本体の体部の下部は、割合に広い底部から

上部の胴部・口縁部方向に向かってゆったりと膨らんで行くもの(741・746など)と、狭い底部から急角度で広がって行くもの(742・748など)のタイプが見られる。なお、図で断面をケバで表現しているものは、その部分から折れたり割れたりしているもので、断面の形状を表現しているものは、主に剛硬した形状を表している。器面調整は内外面ともにハケ目調整が多く見られる。

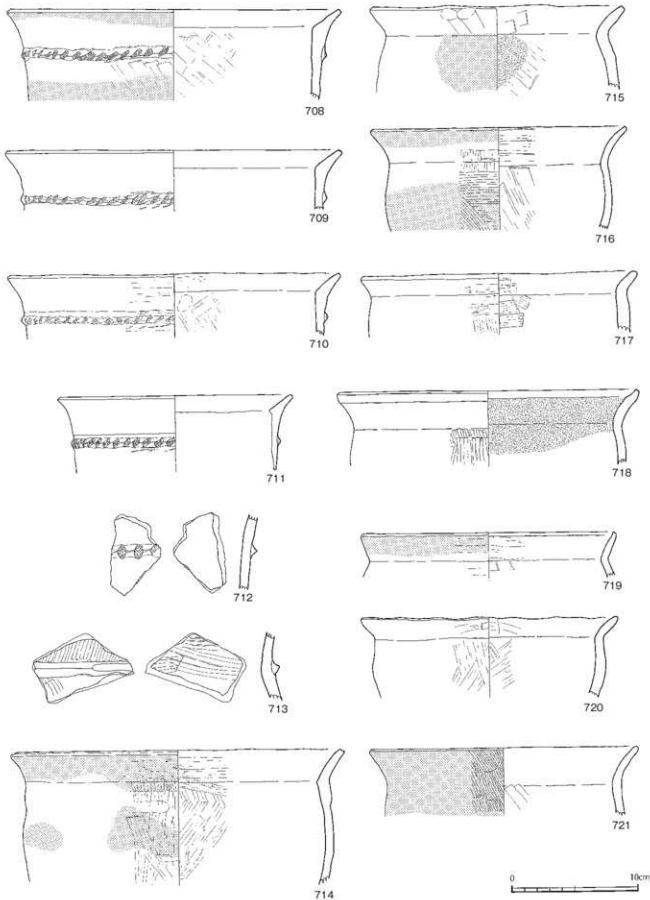
751~762は底部(脚部)である。甕形土器の底部(脚部)としているが、鉢形土器の底部(脚部)も含まれている。しかし、両者を明確に区別することが困難であったため、底部として一括して掲載した。

脚部の高さや端部の形状もさまざまである。751は脚部の高さが低く、端部は太く丸まっている。752はやや高く直線的な脚部で、端部は丸まる。753も直線的な脚部で、端部は小さく丸まる。754は体部の下部が広く、脚部は反り気味となっており、端部はやや尖り気味に丸まっている。755は脚部が先細りになって薄くなる直線的な脚部をもつ。756は脚部全体が緩やかにカーブしており、端部は丸まっている。757は大きく開く脚部である。759はさらに大きく開く脚部である。760は緩やかにカーブした脚部の端部が大きく開いている。761は逆に脚部全体が内側に向けてカーブしている。脚部の高さが最も高いタイプと考えられる。脚部の断面を見ると、756・757・759・761などは体部の下部を製作後に、脚部を貼り付けて製作されていると考えられる。

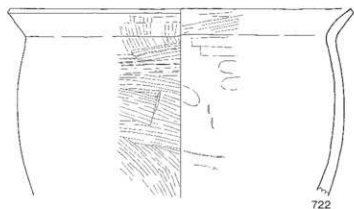
鉢形土器 (第136図 763~778)

763~778のうち、763~767、769、770は口縁部、768、771は頭部~胴部、777、778、774は底部である。また、772、773は完形に復元された、割合に小型のものである。

口縁部のうち、763は開いた体部が一旦立ち上がって幾分内湾気味となるもので、口唇部は若干波打ったような状況になっている。器面調整は、内外面ともに粗い指ナデ調整が行われている。764は体部から口縁部がほぼ直線的に開くもので、一部に指頭圧痕が残るものの、丁寧なハケ目による器面調整が行われている。765は胴部がほぼまっすぐに立ち上がった後に、口縁部の端部が短く外反する。口唇部は平らに成形されている。766は直線的に広がる胴部から、口縁部がさらに大きく外反する。767は直立気味の胴部から、口縁部が大きく外反するものである。769と770は口縁部の端部よりやや下位に突帯が付されるもので、突帯の付される位置には違いが見られる。770は内面に段が見られ、口唇部は幾分平坦部をもつ作りである。769の口唇部は丸みを帯びている。768と771は頭部付近である。768は外面に煤の付着が見られ、内面の稜は明確ではない。771は、内面の稜は幾分明確である。器面調整は768は内面にハケ目調整が行われており、1本1本のハケ目が明確である。



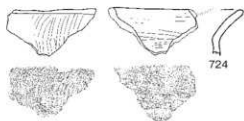
第 132 図 古墳時代の土器 1



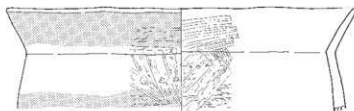
722



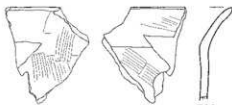
723



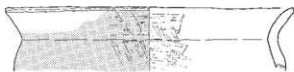
724



725



726



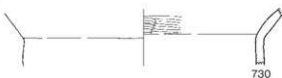
727



728



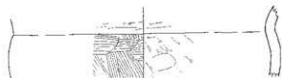
729



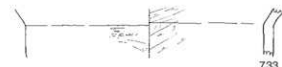
730



732



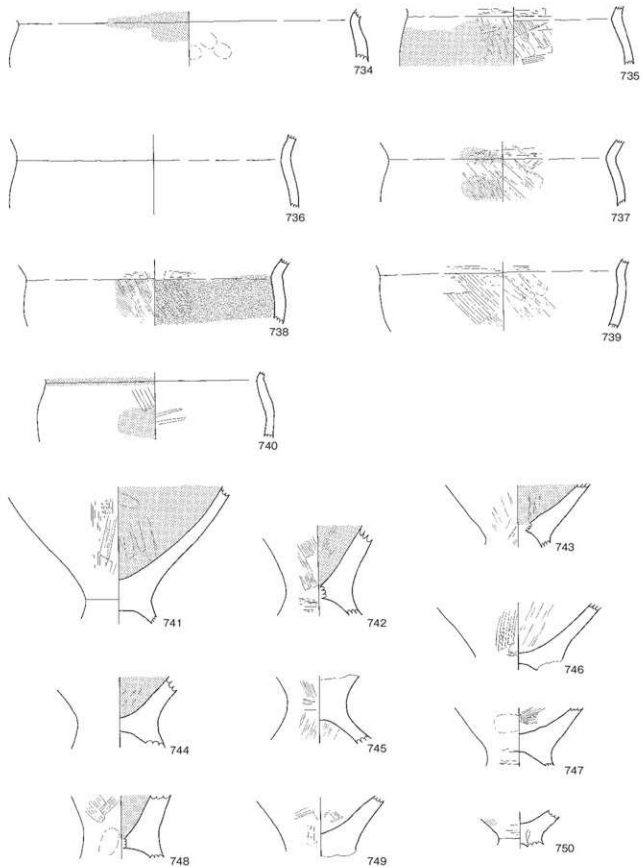
731



733



第133図 古墳時代の土器2



第134図 古墳時代の土器3

772は鉢形土器の中でも甕形土器と類似した器形のもので、本体には比較的高い脚台が付き、端部は外側に大きく開いている。外面には煤の付着も見られる。それに対して、773は772と同様の高い脚台を持つものであるが、口縁部が若干内湾気味に直立しており、772と比べて全体的に小型である。774・777・778は底部である。脚部の高さがそれほど高くなく、底部（脚部）が甕よりやや小さいため、口縁部が大きく開くタイプの鉢形土器のものと考えられる。

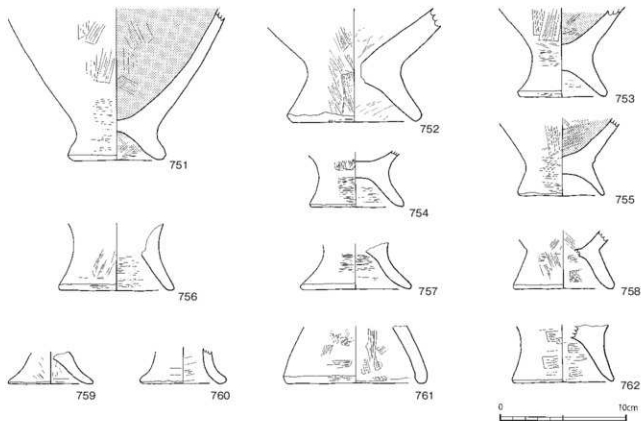
775と776は小型の鉢形土器と考えられる完形品である。大きさは手捏ね土器と同程度の大きさであるが、器面に指頭痕が顕著に見られず、小さなハケなどを用いて器面調整が行われていることなどから、鉢形土器と判断

した。775・776ともにコップ状を呈しており、底部は平底である。776は幾分傾いた形状をしている。

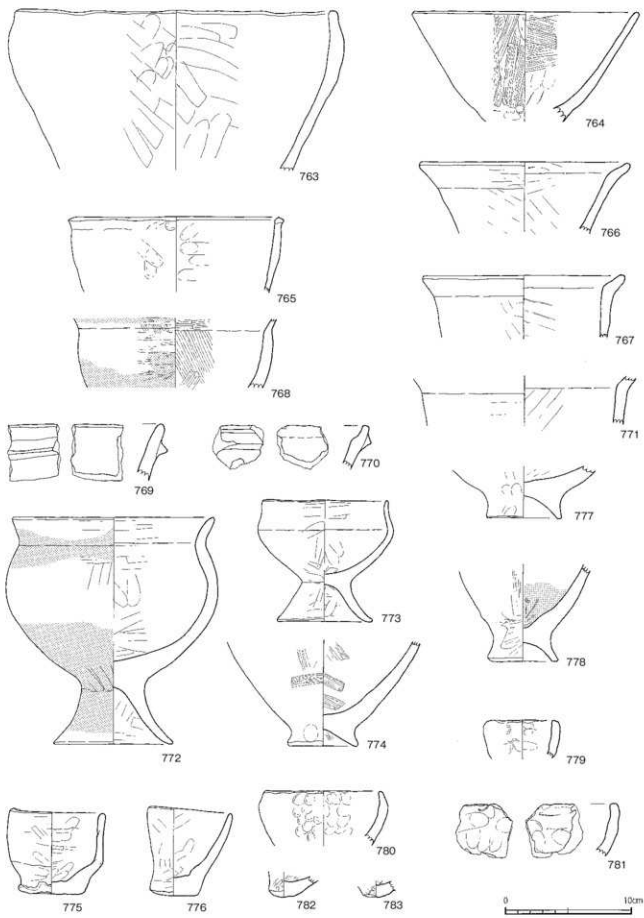
手捏ね土器（第136図 779～783）

779～783は手捏ね土器である。全て破片であることから、全体の形状をつかむことは難しい。

779～781は口縁部である。器形的には、開くタイプの体部が口縁部に向かって直立気味となり、端部は三角形形状から平らに面取りしたような形状である。内外面共に指頭圧痕が顕著に見られる。782と783は底部である。いずれも不安定ながら平底を表現していると考えられる。これらの手捏ね土器は、平底の鉢形土器をモチーフとしているように思われる。



第135図 古墳時代の土器4



第136図 古墳時代の土器5

壺形土器 (第137~140図 784~835)

784~835は壺形土器である。

784は頸部から口縁部を欠くが、胴部から底部にかけて復元できたものである。全体的な形は卵形または砲弾形といえよう。肩部から胴部にかけては大きく膨らみ、胴部から底部にかけては次第にすぼまっていく。底部は厚い。器面調整は内外面ともにハケ目によって丁寧に調整が行われている。785は完形に復元できた壺形土器である。頸部はすぼまり、口縁部はカーブを描きながら大きく外反し、口唇部は平坦面を作り出している。頸部内面には明瞭な稜が見られる。胴部は大きく膨らみ、胴部から底部にかけては次第にすぼまっていく。全体的な形状は、784と同様、卵形または砲弾形といえよう。器面調整は内外面に部分的に指頭圧痕が残る、全体としてはナゲ調整である。底部は若干丸みを帯びた平底である。

786~792は口縁部である。786と787はほぼ直線的に外反するものであるが、786は端部に向かって次第に薄くなっており、幾分内湾している。787は、全体的に同じ厚さで端部に向かっている。788はほぼ直線的に外反した口縁部が、端部付近で大きく開く形状をしている。口唇部は平らに成形し、さらに小さく凹ませている。789は大きく開いた口縁部で、平らに成形した口唇部は小さく凹ませている。

790は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口唇部は平らに成形されている。791は外反して立ち上がった口縁部が、端部ではさらに小さく外反している。頸部の外面には小さな段が見られる。792は大きくカーブしながら外反した口縁部の端部を内側に折り曲げて平らに成形し、口唇部には、全面に櫛描波状文が付けられている。

793~795は頸部から胴部や肩部を中心とした部分、796~806は胴部及び胴部の破片である。793は頸部から口縁部にかけて大きく外反しており、頸部の内面には明瞭な稜が見られる。肩部が張り、胴部に向けては大きく膨らむ。胴部以下は矢損のためどのような形態か不明であるが、残存する胴部からは、偏球状に膨らみ胴部が予測される。胎土は土師質で、1~2mm程度の礫を多く含む。794と795は頸部から胴部上半の肩部にかけての部分である。頸部から胴部に向かっては、794が大きく開くものに対して、795は広がり方が若干小さい。

胴部のうち、796は卵形と考えられる壺形土器の胴部の最大径付近に、かまぼこ状ないしは台形状の突帯が巡るものである。場所により突帯の全体的な形や断面の形状が異なっている。797は793と類似した形状の壺形土器の胴部である。胴部の上部、頸部付近には横方向の沈線が上には少なくとも2条、その約1.6cm下の2条の沈線を引く。また、2条の沈線の間の約1.6cm幅の部分には右下がりの斜沈線が描かれる。この土器は、赤みの強い土器であり、他地域からの搬入品の可能性も考えられる。

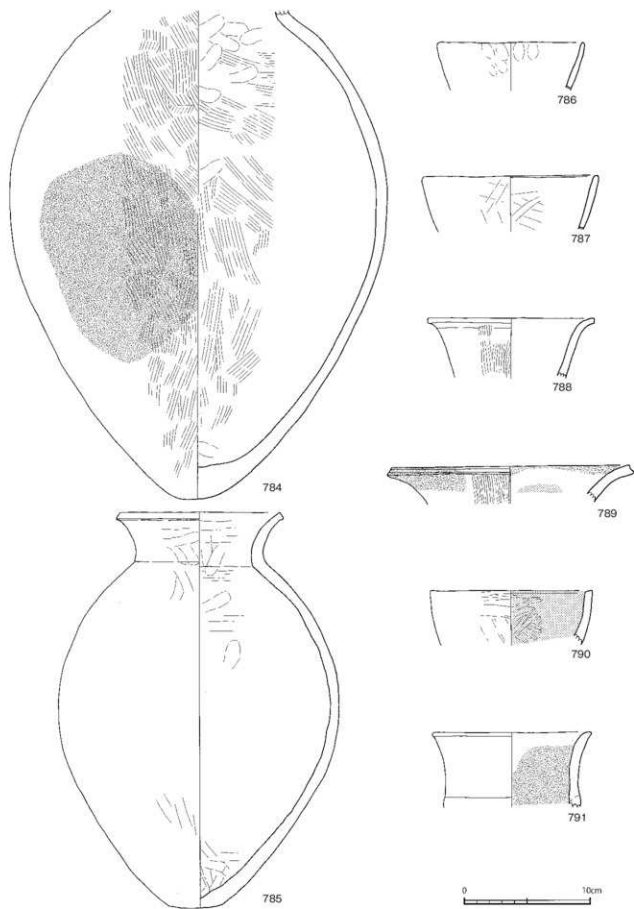
798からは胴部の破片である。798から804は胴部の突帯部分である。刻目を持たない三角形の突帯が、798は2条、799は少なくとも1条それぞれ巡らされている。800~804は突帯に刻目が付されるものである。801はかまぼこ状あるいは台形状の突帯に、鋭く短い刻目が施されている。802は平らな楕円形状を呈する刻目が施されている。803と804は浅い刻目を付している。805と806は沈線で文様を描くが、沈線はいずれも直線であり、805は鋸歯状か矢羽根状と考えられ、806は沈線が2本交わっていることがわかる。

807~835は底部を中心としたものである。807は卵形を呈する壺形土器の胴部の最大径を有する辺りに802と類似したような平らな楕円形状の刻目を持つ突帯が巡っている。底部は安定した平底である。器面調整は、内外面ともにハケ目により丁寧に調整がなされている。808は丸底の厚い底部である。809は808、810と類似する不安定な丸底である。811は安定した平底で、若干上げ底となっている。813も811に似た形状を呈している。812もこれに似るが、接地面の外への張り出しがほとんどない。

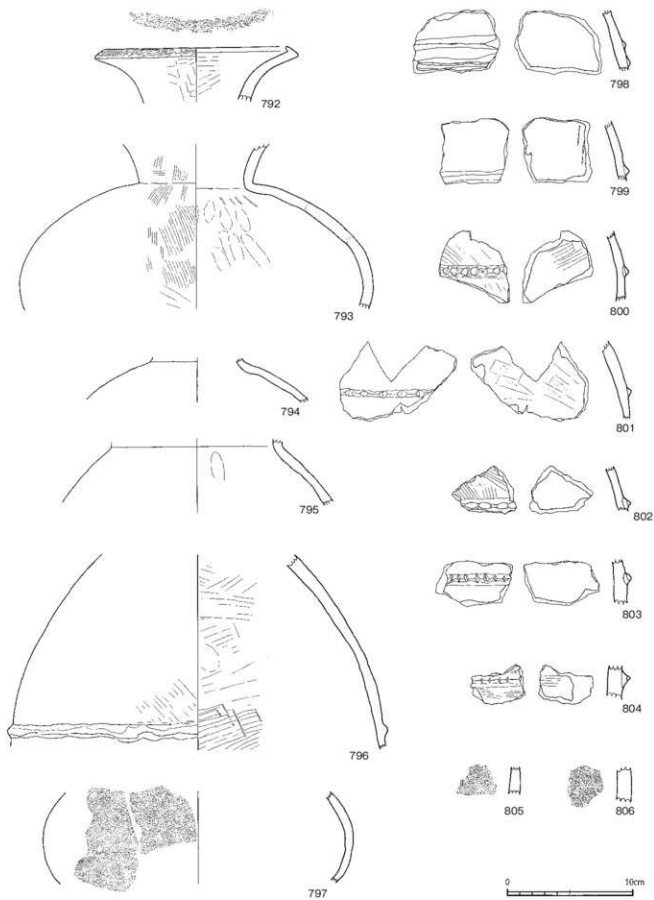
814~835は底部のさまざまな形の一括して掲載した。814は丸底、815は狭い底部を持つ、厚みのある平底である。

818は平底気味の丸底で、接地面はある程度広い。819は広く、安定した平底である。822は狭い底部を持つ、厚みのある平底で、やや安定性には欠ける恐れがある。823は丸底気味の平底で、やや安定性を欠くものである。826は厚みのある丸底の底部である。827は厚みのある安定した平底で、胴部に向かっては緩やかにカーブしながら膨らんでいる。829は平底の底部で、胴部への立ち上がりはほぼ直線的である。830の底部は丸底となる可能性が大きい。832は球形状を呈する壺形土器である。底部は極めて狭く、不安定な平底である。833は不安定な平底気味の丸底で、胴部に向けては直線的に立ち上がるような状況となる。

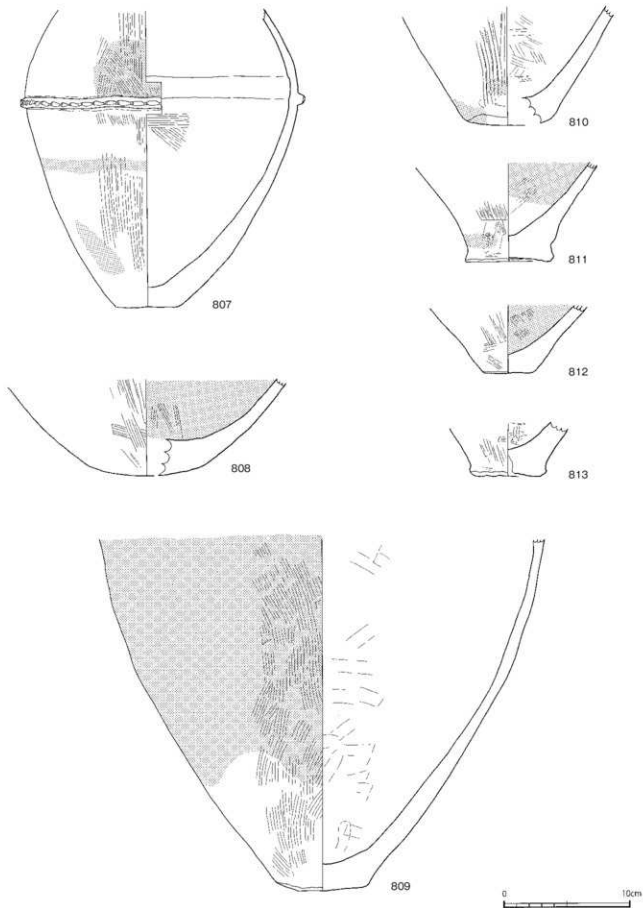
816は極めて厚い底部を持ち、幾分上げ底気味の平底である。817も平底といえるが、面積としては非常に狭く、安定した平底とは言いがたい。820は厚い底部を持つ、丸底気味の平底で、安定性はそれほどよくはない。821は狭い平底を持つ底部である。胴部に向けては大きく広がりが立ち上がる。824は厚い底部を持つ丸底のもので、胴部に向けては大きく広がる。825は狭い平底を持つ底部で、内面の中央部は若干凹んでいる。828は極めて安定した平底の底部である。胴部に向けては、割合に急傾斜に近い状況で立ち上がる。831は狭い平底の底部で、胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がっていく。834は底部そのものは欠くが、胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がっていく。底部そのものは丸



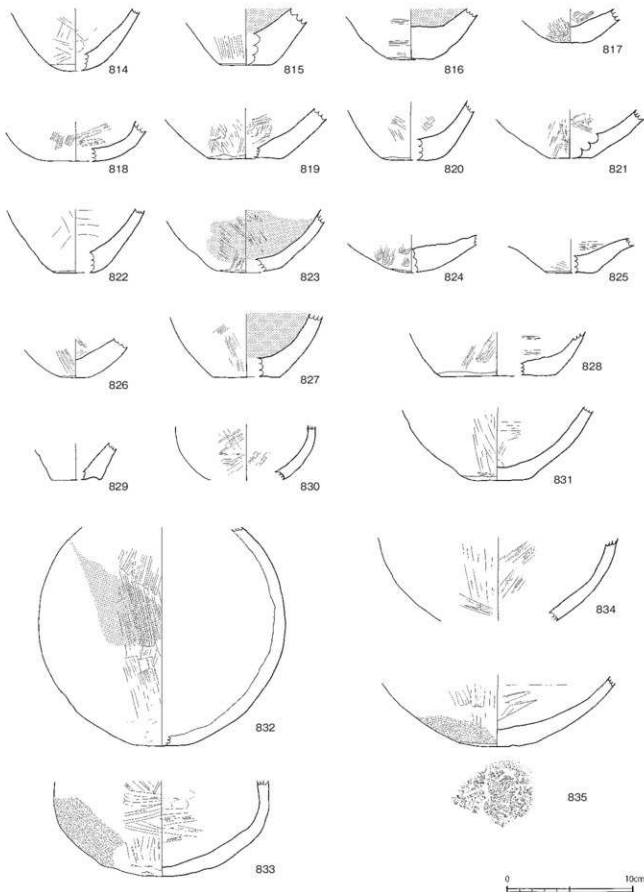
第 137 図 古墳時代の土器 6



第138図 古墳時代の土器7



第139図 古墳時代の土器8



第140図 古墳時代の土器9

底と考えられる。835は丸底の底部である。外底にはヘラのような工具によると思われる痕跡が見られる。胴部に向けては緩やかなカーブで立ち上がっていく。

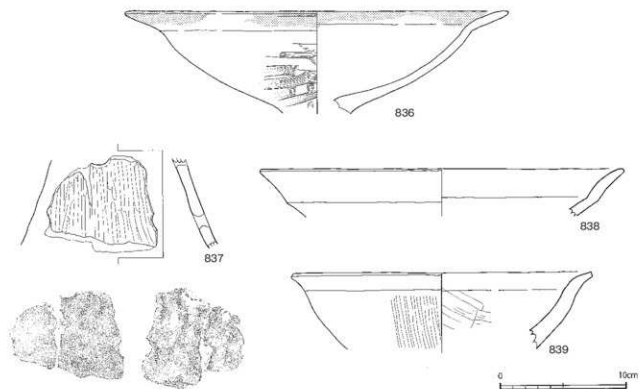
高坏 (第141図 836~839)

836~839は高坏である。836・838・839は坏部、837は脚部である。

836は緩やかに膨らみ気味の坏部が、口縁部にかけては大きく外反しており、尖り気味の端部は丸められている。

838は直線的な体部から口縁部に向かって明瞭な稜を設け、その後外反して口縁部へと続いている。口縁部は全体的に丸みを帯びており、端部も丸みを持つ。内面にも段が見られる。839は器壁の厚い坏部であり、口縁部付近のラインは丸みを帯びて滑らかである。

837は脚部であるが、大きく開いた脚部には土器製作時に開けた穿孔が少なくとも3か所に見られる。破片を見る限り、穿孔のある位置の間隔から考えると、下部の穿孔は4か所に見られると考えられるが、上部の穿孔が何か所あるかは不明である。



第141図 古墳時代の土器 10

第5節 II層の調査

本節では、II層をベースとした埋土を有し、III層上面以下で検出された遺構の調査と、II層を包含層とする遺物について報告する。調査は、第1地点及び第2地点を調査区として実施した。また、掘立柱建物跡として想定復元できるピット群についても、時代、時期の特定が厳しことから、ここで取り上げることとする。

なお、II層出土遺物の中で、縄文時代後・晩期、弥生時代、古墳時代の土器についてはそれぞれの節で取り上げた。ここでは古代以降の焼物と、時代を特定できない石器について取り上げる。

1 遺 構

(1) 掘立柱建物跡 (第143~155区 840~894)

1号掘立柱建物跡 (第145・146区 840・841)

E-10・11区のV層上面で検出された。この1棟のみ、柱筋は北から西に約5°傾くが、東西南北の軸に最も近い。東側と西側の柱穴にそれぞれ重複が確認されるものの、基本的には2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均するとP713・P712・P710が直径約30cmで深さ約60cm、P714西側・P715・P717が直径約30cmで深さ約70cm、P714・P716・P718が直径約30cmで深さ約80cm、P720・P724・P707が直径約25cmで深さ約60cm、P720西側・P723・P707西側が直径約30cmで深さ約60cmである。

柱穴の状況については、P713・P712・P710の柱穴列は、東側及び西側よりも若干浅い。また、東端及び西端の柱穴列は、各々のすぐ内側の柱穴列よりも若干深くなっている。こうした状況から、この建物は1棟であり、東側並びに西側の最も外側で重複する柱穴列は、すぐ内側の柱穴列の添柱であった可能性を想定している。この場合、柱穴間の距離は約1.6mである。

なお、調査段階では、P713~710の柱穴が共通する(再利用か)、重複した2軒の掘立柱建物と想定しているが、報告書の作成に際して、上述のとおり解釈を変更した。

柱穴埋土内には、比較的遺物が多く含まれていたが、いずれも中岳Ⅱ式や石皿などの破片である。主なものを挙げる。P712の埋土中やや下位から、840の石皿の破損品が出土した。花崗岩製で、わずかしか残っていないが作業面を観察できる。P707の埋土中位から、841の横刃型石器が出土した。ホルンフェルスの横長剥片を素材とし、下端に刃部を設けている。右側辺にはごく簡単な調整剥離が観察される。

2号掘立柱建物跡 (第147・148区 842~852)

E-10・11区のV層上面で、1号掘立柱建物跡と重複して検出された。柱筋は北から東へ約22°傾く。1号と同じく、2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均すると、P633・P725・P739が、直径25~30cm程度で深さは40~60cm程度、P738・P711・P709が、直径25~30cm程度で深さ40~50cm程度、P705・P706・P722が、直径約30cmで深さは30~40cm程度である。

柱穴の状況については、中央のP725が最も深く、次いでP739が深い。そのほかの東側、西側及び北側の柱穴は上記2基より浅いがほぼ深さが揃っている。また、中央、北側及び東側にみられる柱穴の重複や段掘りについては、建て替え等による可能性が高いと解釈している。柱穴間の距離は、約2mである。

柱穴埋土内には、比較的遺物が多く含まれていたが、いずれも中岳Ⅱ式や石皿などの破片である。主なものを挙げる。P738の埋土中から、842の軽石加工品が出土した。右半部分が欠損しているが、全体は半割した卵形を呈するもので、上部に弧状に内湾する底面が認められる。P705の埋土上半から、843、844などが出土した。844は胴部屈曲部で、器面調整を兼ねて明確な稜線を形成し、その上位にやや浅い凹線を丁寧に施文している。P706の底面近くからは、845などが出土した。中岳Ⅱ式の口縁部片で、口唇部をやや肥厚させている。摩耗により口縁部片は不明。P711の埋土下半から土器片や石皿の小片などが出土した。846は中岳Ⅱ式の口縁部で、摩擦しているが口縁部外端に横位の浅い凹線を2条観察できる。浅鉢のような器形と想定される。P633からは、土器片や石器が埋土の下半と検出面からまともに出土した。848のみ埋土中位から出土している。847、848は中岳Ⅱ式である。847は口縁部形状が略方形を呈する点、848は浅鉢のような器形となる点が特徴である。849は、打製石斧と考えられる。砂岩のやや厚みのある剥片を素材とし、刃先は、潰れて丸く滑らかになっており両端が破損している点、色調が赤変色しており被熱した可能性がある。また、正面並びに背面の稜もわずかに滑らかになっていない。850、851は、ホルンフェルスの横長剥片を素材とした打製石斧と想定される。851は、正面中央部分の稜がわずかに丸く滑らかになっており、背面側刃部には使用に伴うと考えられるステップ状の剥離が観察される。852は、破損品のため詳細は不明だが、頁岩の薄い剥片を素材とした剥片石器である。平坦剥離で素材剥片の打撃部を除去している。刃先並びに刃部の稜は、わずかに角が取れて滑らかになっている。

3号掘立柱建物跡 (第149・150区 853)

1、2号から西へ約5mほど離れた、D・E-9・10区のV層上面で検出された。柱筋は、2号と同様、北から東へ18°ほど傾く。中央部の柱に重複があるが、1、2号と同じく2間×2間の総柱建物跡である。

柱穴の規模は、平均すると、P677・P749・P743が

直径約30cmで深さ25~40cm程。隣接するP 676・P 750・P 742が直径約30cmで深さ20~40cm程。P 733・P 682・P 748が直径約30cmで深さ25~40cm程。P 663・P 667・P 671が直径約30cmで深さ40~50cm程である。

柱穴の状況については、P 733のみ特に深いが、それ以外の柱穴は比較的深さが揃っている。その中で、四隅に位置する柱は比較的深く、中央に位置するP 749と750は比較的浅い。また、P 677~743とP 676~742の柱穴列の関係については、この2列のみ重複している一方で四隅の柱穴は深く重複がないこと、柱穴の位置関係などから、P 676~742列は建物の中心からやや外れることなどから、P 676~742列をP 677~743列の添柱の可能性が高いと解釈している。(調査段階では建て替えと解釈していた。)この場合、柱穴間の距離は約2mで、わずかに東西方向が長い。

なお、想定時期が異なるものの、西側には古墳時代の土器破砕祭壇遺構が、東側には弥生時代の遺物集中域が隣接している。また、3号の周辺ではピットが多数確認されたが、3号との関連は見いだせなかった。

遺物は、P 733の埋土土上から853の敲石が出土した。砂岩製の大型の磨・敲石で面にあばた状の敲打痕が見られる。被熱による赤化剥落が生じている。

4号掘立柱建物跡 (第151~154図 854~887)

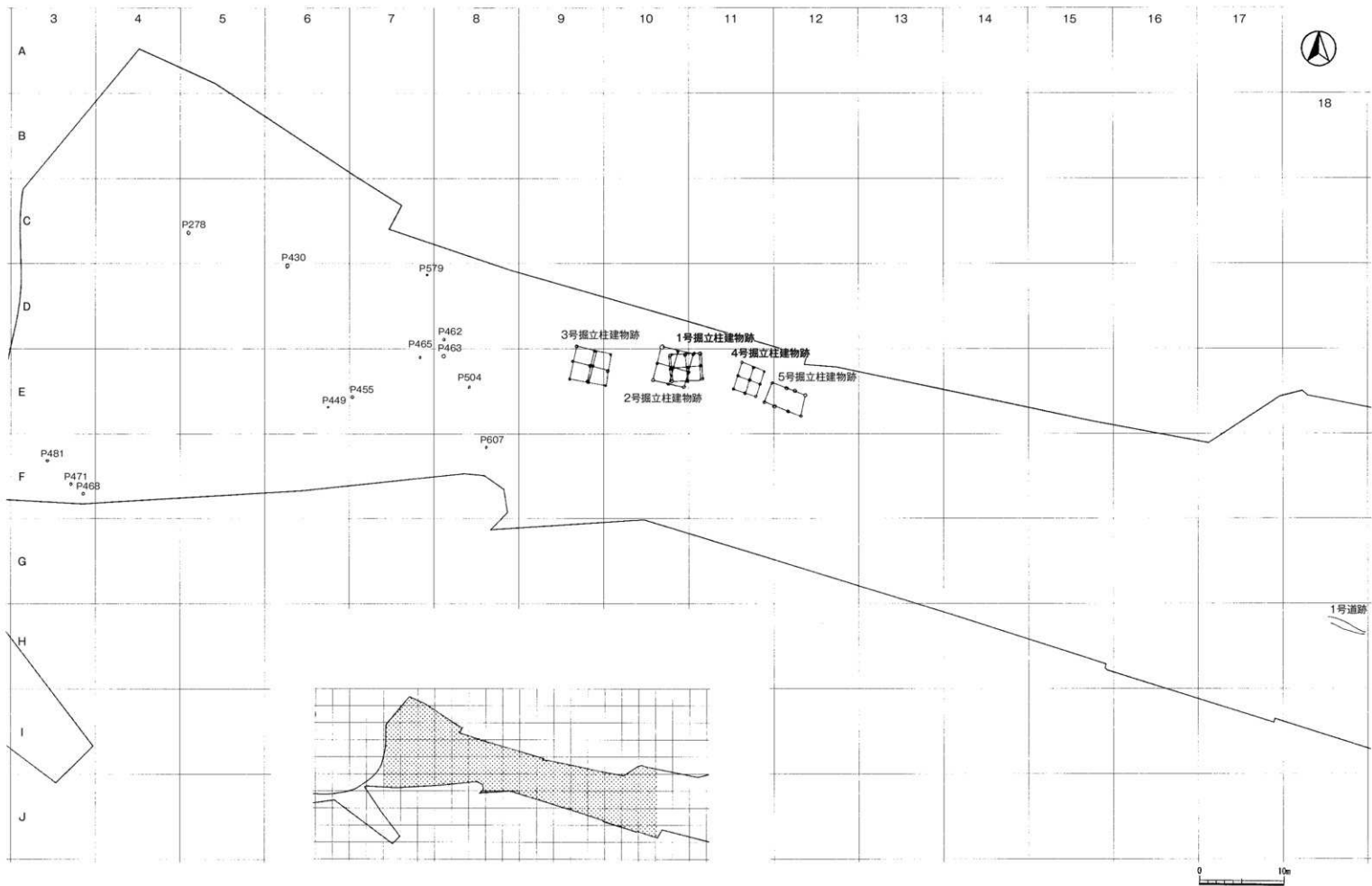
1、2号から東南東へ約4m離れた、E-11区のV層上面で検出された。柱筋は、2、3号と同様北から東へ傾くが、傾斜度は約29°である。1~3号と同じく、2間×2間の総柱建物である。

柱穴の規模は、平均するとP 721・P 754・P 632が直径25~30cm程度で深さ20~50cm程。P 755・P 751・P 752が直径20~30cm程度で深さ30~60cm程。P 631・P 740・P 753が直径20~30cm程度で深さ20~50cm程である。

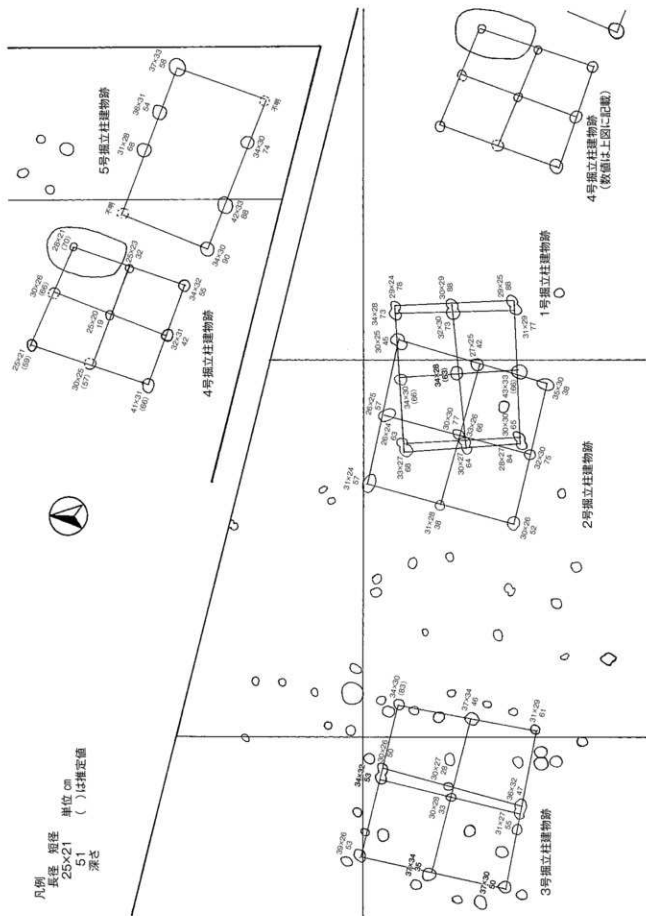
柱穴の状況は、3号と類似する傾向がみられる。即ち、四隅の柱穴が全体の中では比較的深い一方、それ以外の柱はより浅く、特にP 754と740が浅い。また、この建物には重複する柱穴がみられない。柱穴間の距離は、東西方向が約1.4mで南北方向が約1.6mと、南北方向がやや長い。

柱穴には、埋土中に大量の遺物が詰め込まれたような出土状況を呈するものがあった。P 631からは、土器や石器が検出表面並びに埋土中央部に集中して出土した。854と855は中岳Ⅱ式の底部で、集中の最下段あたりで出土した。855はやや上げ底に整形されている。856~859、861は、集中の上半部から出土した。856は、横刃のスクレイパーである。ホルンフェルスの横長割片を素材としている。857は、磨製石斧の破損品である。石材はホルンフェルスで、側面部分に敲打調整の痕跡が

残る。858は、砥石である。砂岩製で、磨面は部分的に見られ、平滑である。背面にはススの付着が観察される。859は、磨・敲石である。花崗岩製で、表面及び裏面に磨面が認められる。側縁に部分的に敲打痕が残る。860は、敲石である。集中の下半部から出土した。ホルンフェルスの棒状鏝で、上端部が敲打具として用いられた可能性がある。861は、磨・敲石である。粗面。多孔質安山岩製で、上端部にわずかに敲打の痕跡を認めるが、磨面は不明瞭である。下半を欠損するが、欠損面にススが付着する。862は、軽石加工品である。複数の平坦面を観察できる。色調もわずかに赤変しており、被熱した可能性がある。P 721では、遺物が、検出表面から出土した他、柱穴をおよそ3分割するような深さから、面を水平に置く意図があるかのような状態で出土した。特に、検出面では土器片と石器片が敷き詰められたかのような出土状況であった。863~867は、中岳Ⅱ式である。いずれも検出表面から出土した。863は、断面略方形に整形した口縁部に、凹点文と横位の浅い凹線文1条が施文される。2号掘立柱建物跡のP 633埋土中出土の破片と接合している。864は、小型浅鉢状の器形を呈する。口縁部は波状に小さく隆起する。865、866は胴部片で、866は屈曲部に細い沈線文を1条施文する。867は底部である。868は磨・敲石である。最下段の上位にあった。花崗岩製、楕円形の磨石の破損品で、上面に磨面を持ち、下面に敲打痕が見られる。869は、磨・敲石である。868と同じく最下段にあった。安山岩製で、磨面、敲打痕ともに明瞭なものではない。870は、磨・敲石である。輝石を含む安山岩製で、正面と背面の磨面は比較的顕著である。右側縁部分に敲打によるつぶれが見られる。871は、安山岩製の磨・敲石である。検出面の中央から出土した。872は、磨・敲石の破損品である。検出表面から出土した。ホルンフェルス製で、側縁の敲打痕は、顕著な敲打つぶれが複数面形成されている。背面は、節理面を利用して磨面としている。P 632でも、検出表面付近に埋土や下位の2か所からはほぼ水平にまとまって出土するという、P 721と類似した状況を呈している。円化した土器はいずれも中岳Ⅱ式で、検出表面付近のまとまりから出土した。873、874は口縁部片である。873は、器壁がかなり薄い。875、876は胴部片である。外面のみ軽くミガキ調整で仕上げ、屈曲上端に横位の浅い凹線文を3条施す。877は、敲石と考えられる。粘板岩の扁平な礫片で、側縁部に敲打の痕跡が見られるが、正面、背面ともに剥落が著しい。878は、砂岩製の石皿の端部付近の破片資料と考えられる。平坦な磨面が部分的に残存する。P 740は、埋設土器2号の調査後、石皿片(887)を中心として土器片や石器片が幅、深さともに30cm程度の範囲に密集して出土したことで確認した。879、880は中岳Ⅱ式の口縁部片で、879は887の下、880は887の上から出土している。879



第 142 图 II 层遗址位置图

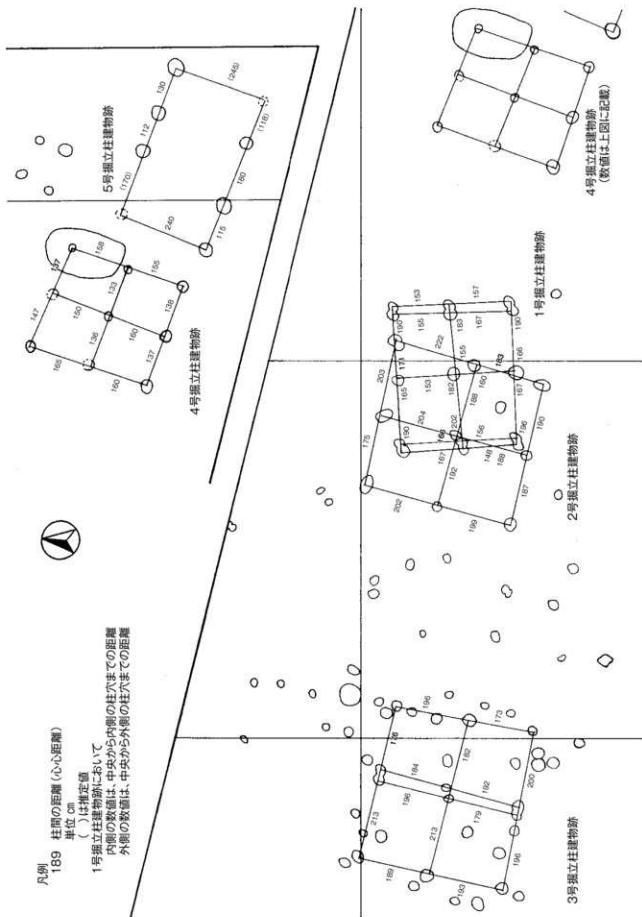


第 143 図 独立柱建物跡計測図 1 (柱穴の規模)

凡例
189 柱間の距離(中心距離)
単位 cm

()は推定値

1号掘立柱建物跡において
内側の数値は、中央から内側の柱穴までの距離
外側の数値は、中央から外側の柱穴までの距離



第 144 図 掘立柱建物跡計測図 2 (柱間の距離)

には特有の2連の凹点文を観察できる。881は、磨製石斧の基部である。遺物の中では最下段、柱穴の断面形状が狭く逆りから出土した。ホルンフェルス製で、丁寧な加工で形状を整え、個縁部は剥離整形の後、敲打が加えられている。882は、ハンマー又は敲石の端部片である。密集部の上位から出土した。敲打部はよく潰れて複数の平面が形成されている。883-885は、破損した軽石加工品で、密集部の上位から出土した。いずれにも浅い溝状の凹みが複数観察される。特に、884の右上と885の右側面の凹み部分は色調が赤変している。886は安山岩製の大型磨石の破片で、スズ痕が観察される。887は花崗岩製の大型石皿片で、密集部の中心から出土した。表面全体の色調が赤変しており、破片の状態で被熱した可能性がある。わずかに凹んだ作業面が一部残存しているが、被熱または敲打によると想定される損傷が激しい。

5号掘立柱建物跡 (第155図 888-894)

4号に隣接して、E-11・12区のV層上面で検出された。確認できなかった柱穴を含むもの、1間×3間の掘立柱建物である。柱筋は、長軸は北から東へ約210°ほど傾くが、短軸では北から東へ29°ほどの傾きとなり、2-4号とおおむね揃う。

柱穴の規模は、平均するとP1~P3が直径約30cmで

深さ50-60cm程、P7、P6、P4が直径30cm程度で深さは40-50cm程である。柱穴の状況等は、未確認の柱があるため限界があるが、ほぼ同じ深さである。

遺物は、P4の埋土中からは中岳Ⅱ式が出土した。888、889は口縁部片である。どちらも口縁部外端に横位の浅い凹線文を2条めぐらせているが、889には特有の2連の凹点も施文される。890、891は胴部片である。P6の埋土中からはやや摩耗した中岳Ⅱ式の口縁部片(892、893)と894の磨・敲石が出土した。894は破損品だが、左側端部に敲打部が観察されるほか、上部の破断面も稜がとれて丸くなっているか所が複数観察されることから、破損後も使用し続けたと考えられる。

ビット (第142・156~160図 895~928)

第1地点では、他に掘立柱建物等の構造物としては把握できなかったが、ビットが多数検出された(分布状況は第142図)。これらビットの中には、埋土中に遺物を含むものが散見されたため、それらを中心に報告する。

なお、各ビットの埋土に、遺物の上下で埋土の変化等は確認されていない。

ビット462は、D-8区で検出された。平面形は不整形円形、断面は略円筒形で底面はVI層に達する。遺物は、自然礫や石器片が12点、埋土中に集中して出土した。895は、ハンマーまたは敲石で、長さ13.7cm×幅6.55cm

第4表 各掘立柱建物跡の柱穴深さ及び柱穴間距離 (P:柱穴No. ():各断面図標高からの柱穴深さ、単位:cm)

1号掘立柱建物

P714 (78)	153	P716 (88)	157	P718 (88)	
190	P● (73)	155	P715 (73)	167	P717 (77)
	171	183	155	190	166
	P713 (66)	153	P712 (63)	160	P710 (66)
165		182		167	196
P720 (63)	190	166	P724 (66)	202	P707 (65)
			156	156	
	P● (68)	167	P723 (64)	148	P719 (64)

(P●は番号なしのビット)

3号掘立柱建物跡

P733 (83)	196	P682 (46)	173	P748 (61)
176		182		200
P677 (50)	202	184	P749 (28)	209
			192	P743 (47)
P676 (53)	196	P750 (33)	179	P742 (55)
213		213		196
P662 (53)	189	P666 (35)	193	P671 (50)

2号掘立柱建物跡

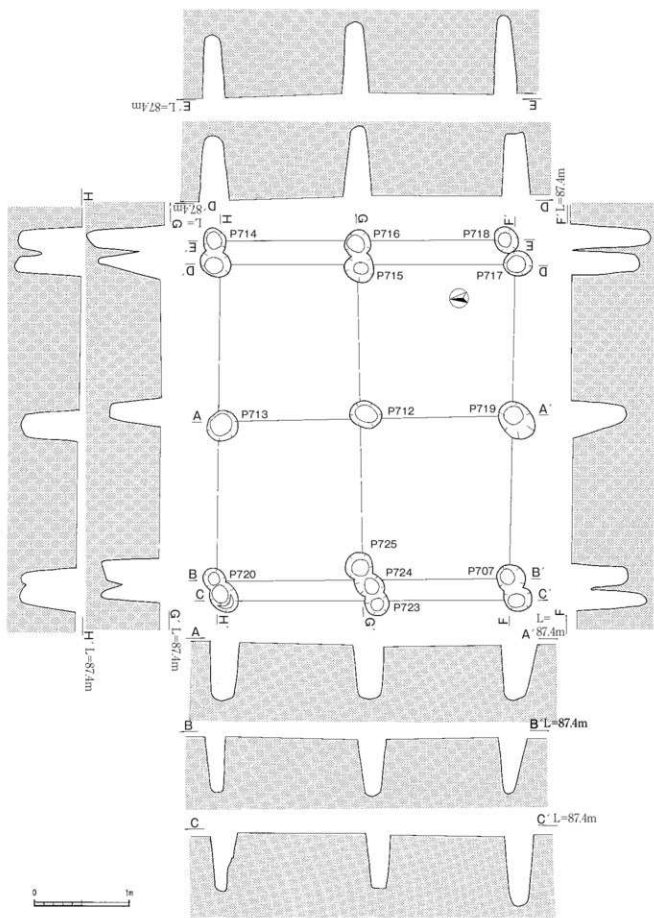
P738 (45)	222	P711 (42)	183	P709 (38)
203		188		190
P633 (57)	204	P725 (77)	188	P739 (75)
	175	192		187
P705 (57)	202	P706 (38)	199	P722 (52)

4号掘立柱建物跡

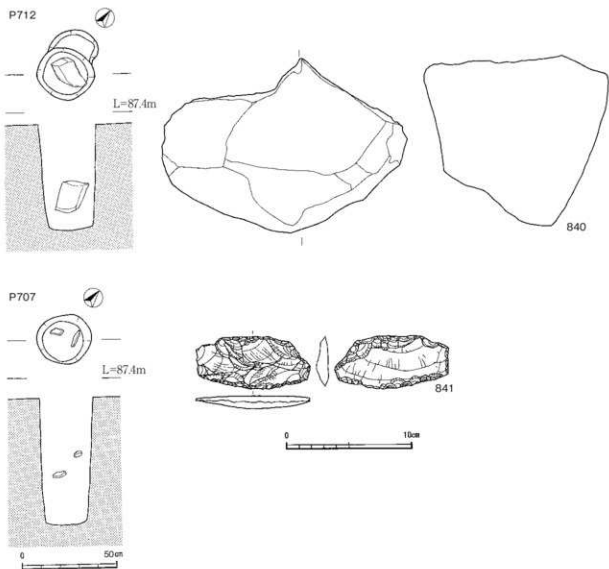
P755 (70)	158	P751	155	P752
137		133		138
P721 (66)	150	P754	160	P632
147		136		137
P631 (59)	165	P740 (57)	160	P753 (66)

5号掘立柱建物跡

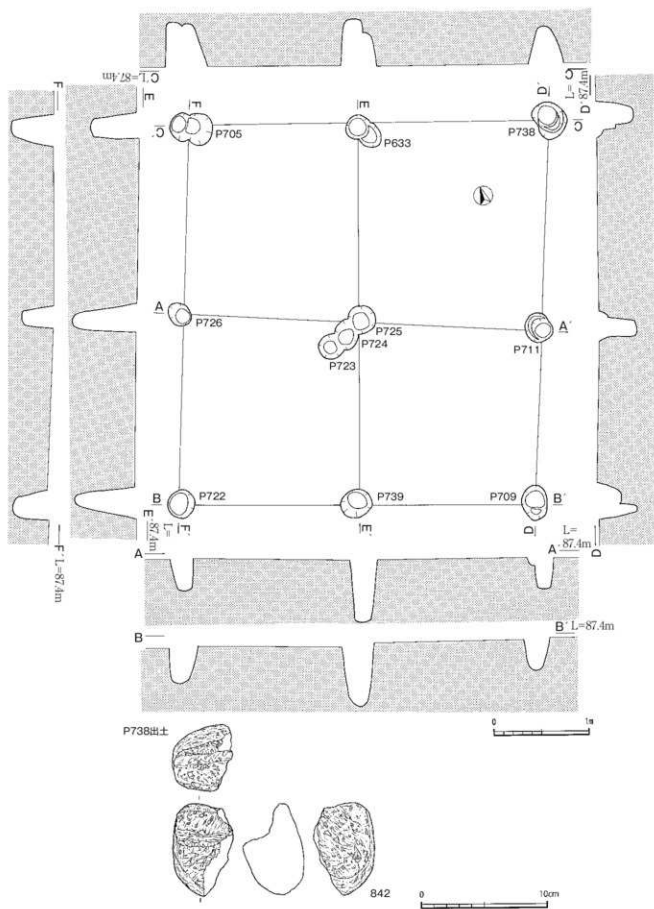
(P)	170	P1 (68)	112	P2 (54)	130	P3 (58)
240		(260)		(250)		245
P7 (90)	115	P6 (88)	180	P4 (74)	118	(P)



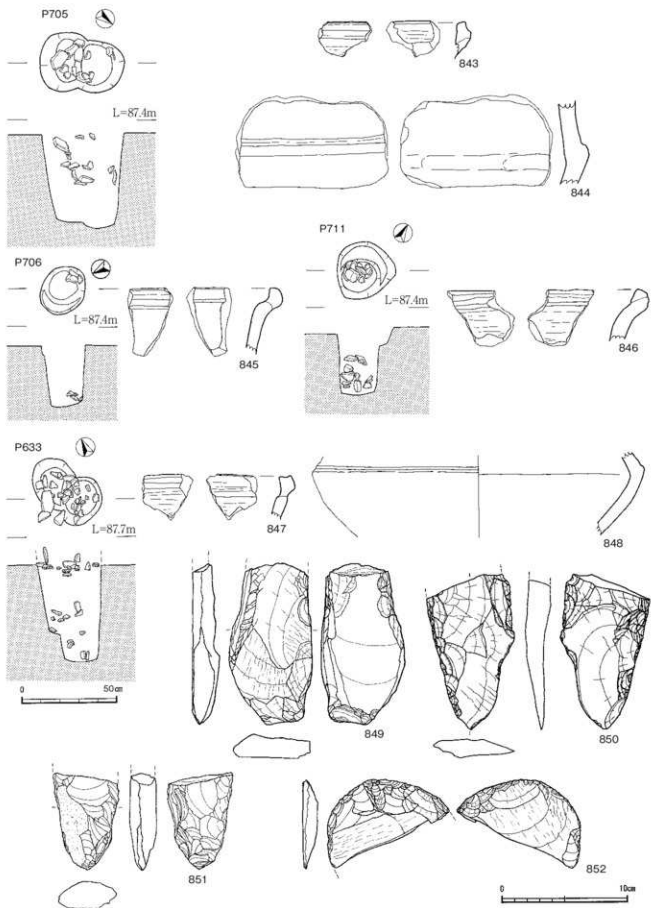
第 145 图 1 号掘立柱建物跡



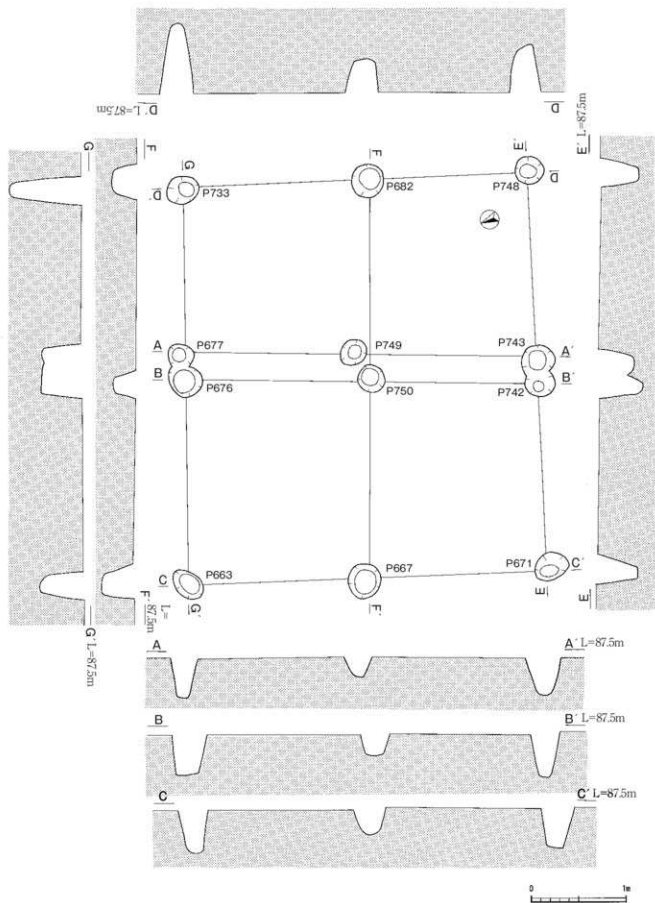
第 146 図 1号据立柱建物跡のビット内遺物



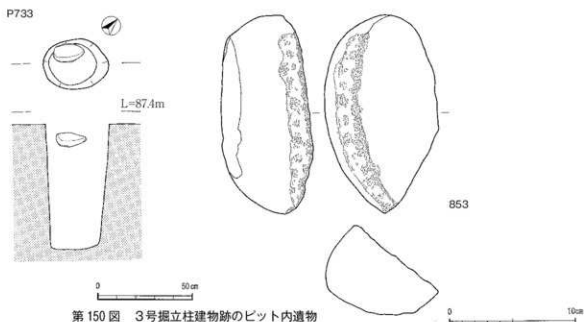
第 147 図 2号据立柱建物跡・ビット内遺物



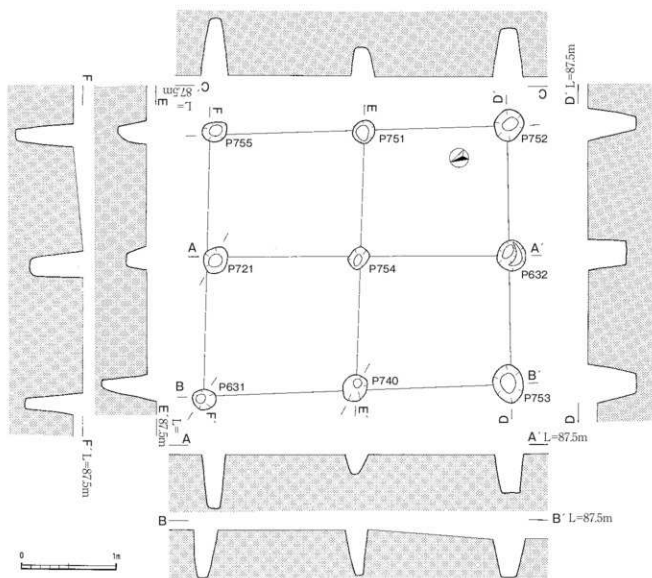
第148図 2号据立柱建物跡のピット内遺物



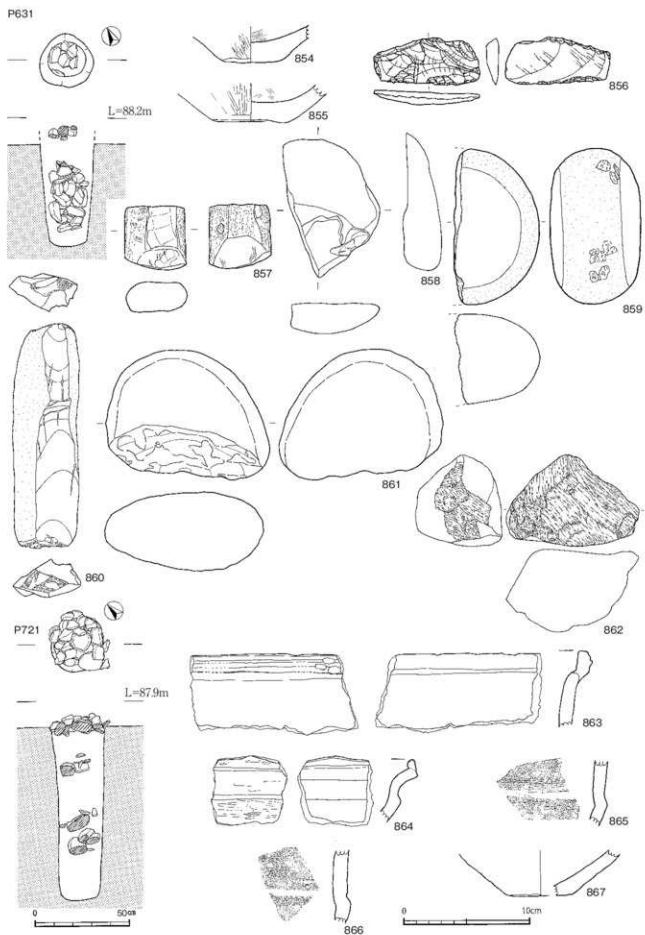
第 149 图 3号掘立柱建物跡



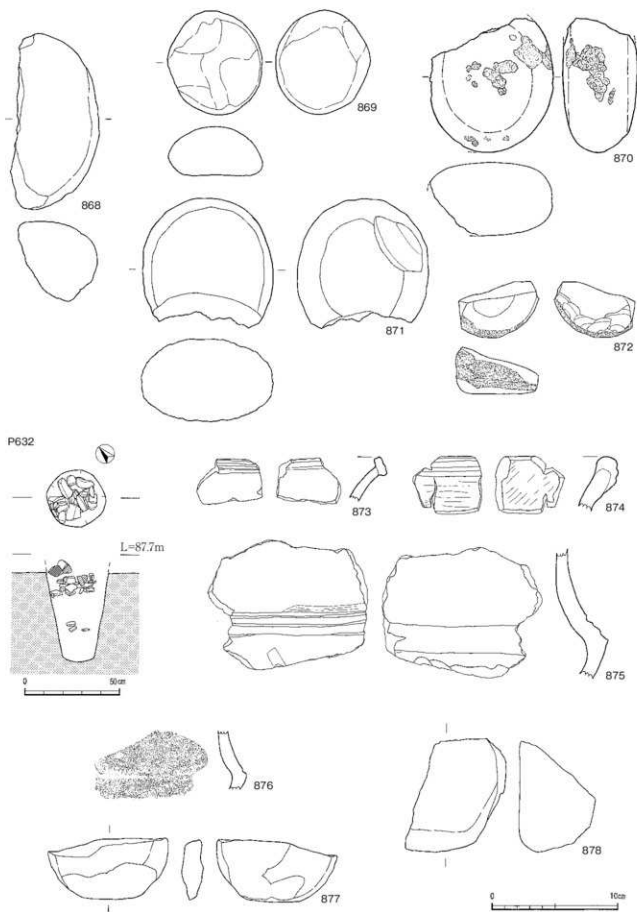
第150図 3号掘立柱建物跡のピット内遺物



第151図 4号掘立柱建物跡



第152図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物1

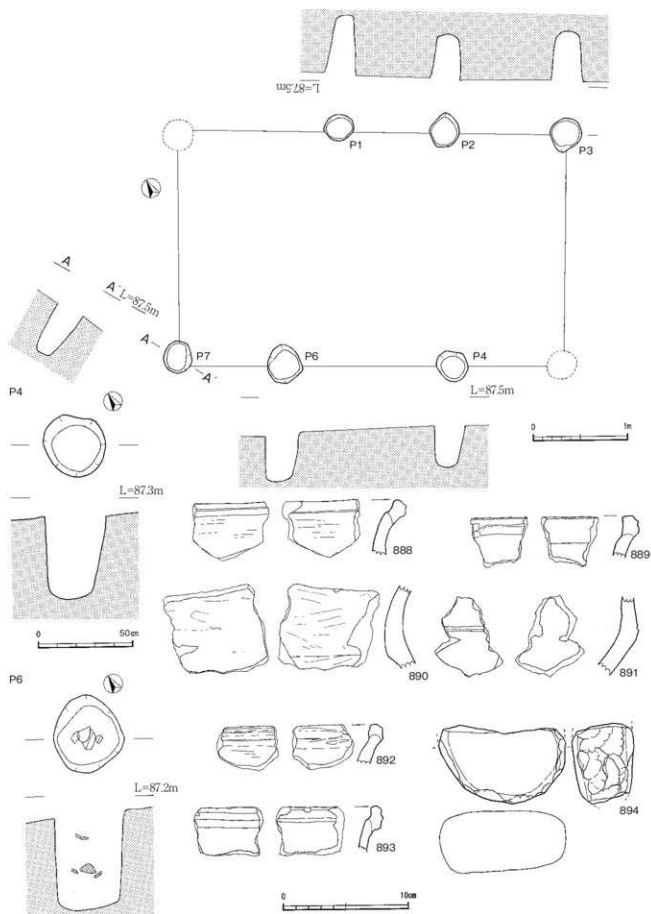


第153図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物2

P740



第154図 4号掘立柱建物跡のピット内遺物3



第155図 5号据立柱建物跡・ビット内遺物

×重さ 722g。石材はホルンフェルスである。両端に観察できる敲打部は複数の小さなつぶれ面で構成されている。また、右側面には被熱による赤化と剥落が認められる。

ピット 463 は、E-8 区で検出された。検出面の一部は耕作による攪乱を受けている。底面は平坦ではなく 2 か所で略円錐形にすぼまる。近接する 2 つのピットであった可能性もあるが、埋土の状況等からは不明であった。遺物は、自然礫や石器片が 6 点、底面近くに集中して出土した。897 は楕形の打製石斧の破断資料で、現況の長さ 10.6cm × 幅 4.9cm で重さ 75g、厚さ 1.0cm。石材はホルンフェルスである。899 は大型石皿の破片で、現況の長さ 31.5cm × 幅 20.1cm で重さ 5.695g。石材は花崗岩である。両面に凹面が形成されており、ともに極めて滑らかに加工されている。また表面の色調は、全体的に熱を受けたかのように赤変している。

ピット 504 は、E-8 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で底面は VI 層に達する。遺物は、自然礫が 2 点と磨石が 1 点、埋土の中～上位に集中して出土した。896 は磨・敲石で、長さ 8.31cm × 幅 7.24cm で重さ 456g。石材は安山岩である。表面は全体的に滑らかである。敲打痕は、右側縁部分にみられるほか、表面には浅い凹みが生じている。表面には 2 か所に剥落がみられる。

ピット 449 は、E-6 区で検出された。平面形は不整形、断面は略砲弾形で底面は VI 層に達する。遺物は、礫が 4 点、埋土中位から上端がおおむね同じレベルでまともって出土した。礫について使用痕等を観察したが、明瞭な痕跡を観察できなかった。

ピット 579 は、D-7 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で底面は V 層中で取まる。遺物は、比較的大型の自然礫が 1 点、埋土中位から出土した。

ピット 430 は、D-6 区で検出された。平面形は略円形、断面は略円筒形で、底面は V 層と VI 層の境界付近で取まる。遺物は、石器 1 点が縦位に埋まっていたほか、小礫数点が埋土中～上位に落ちて出土した。898 は、磨・敲石で長さ 10.1cm × 幅 9.0cm で重さ 363g。石材は安山岩である。厚さが 3.3cm と扁平で、磨面は背面に明瞭であり、敲打部は主に右側面に集中する。

ピット 455 は、E-6・7 区で検出された。検出面の一部は耕作による攪乱を受けている。断面は円筒形で底面は VI 層に達する。遺物は、自然礫などが 6 点、埋土上位から全体的に傾斜した状態で出土した。900 は、磨・敲石で、長さ 9.8cm × 幅 8.6cm、重さ 846g。石材は安山岩である。磨面とやや平滑な部分のみみられるが、敲打痕とともに明瞭な使用痕ではない。

ピット 465 は、E-7 区で検出された。平面形は略円形形で断面は略円筒形、底面は VI 層に達する。遺物は、石

皿の剥落片などが埋土低位から出土した。

ピット 471 は、F-3 区で検出された。平面形は略円形、断面は円筒形で底面は V 層中に達している。遺物は、検出面で砂岩製の石皿片が 1 点出土したが、石皿としては小片で図化するに至らなかった。

ピット 468 も、F-3 区で検出された。平面形は略円形、断面は逆台形で底面は V 層上面に達する。遺物は、検出面で自然礫が 1 点出土した。

ピット 607 は、F-8 区で検出された。平面形は円形、断面は略円筒形で底面は IV 層中で取まる。掲載したピットの中では浅い。遺物は、磨・敲石と自然礫が 2 点、検出面と埋土中から出土した。901 は、扁平な磨・敲石で、長さ 13.6cm × 幅 12.0cm、重さ 736g。石材は多孔質の安山岩である。磨面・敲打痕ともにあまり明瞭ではない。表面の色調は、赤褐色を呈する。

ピット 278 は、C-5 区で検出された。平面形は不整形、断面は略円筒形で底面は VI 層上面に達する。遺物は、土器片と自然礫が検出面近くで出土した。902 は、中岳式土器の胴部である。比較的薄手で焼成は良好、胎土に金雲母片が混ざっている。器面は、内外面ともにミガキ調整で仕上げられているが、内面は外面よりわずかに粗い。破片下端には、かろうじて沈線を観察することができる。

ピット 481 は、F-3 区で検出された。平面形は楕円形で断面は円筒形、底面は IV 層中に取まる。遺物は、903 がピット 481 を含む周囲のピットから出土している。903 は、中岳 II 式である。復元口径 39.6cm、底径 4.8cm、復元高 35.0cm で、胎土に長石の細粒を含み焼成は良好、内外面ともミガキ調整で仕上げられる。口縁部には 4 か所の波頂部が想定され、それぞれに浅い凹点が施される。また、口縁部外面に 2 条の横位平行沈線文と胴部屈曲部やや上に 1 条の横位沈線文がある。この沈線文は焼成後穿孔が 1 か所あるが、口縁の波頂部や文様展開とは連携していないようである。

ここからは、ピット内出土遺物で主なものに掲載する。

904 (ピット 535) は、中岳 II 式の口縁部である。焼成は良好で、胎土に長石の細粒を多く含む。器面は、内外面ともミガキ調整で仕上げられる。口唇部には、浅い横位沈線文が 2～3 条観察できるが、接続にズレがみられるなどやや粗い施文となっている。この沈線文を上下で挟むように連続刻目文が施される。刻目は、間隔や深さがほぼ一定した丁寧な施文である。905 (ピット 637)、906、907 (ともにピット 638) は、形状が 904 とはやや異なるが、いずれも中岳 II 式の口縁部である。907 は、摩耗しているために全体的な形状がやや丸味を帯びているようにみえる。908 (ピット 609) は小型の鉢で、口縁部が厚みを持たずに収まっているが、口唇部内面を凹ませる点が他の資料と共通する。破片下端には、中岳 II 式の胴部

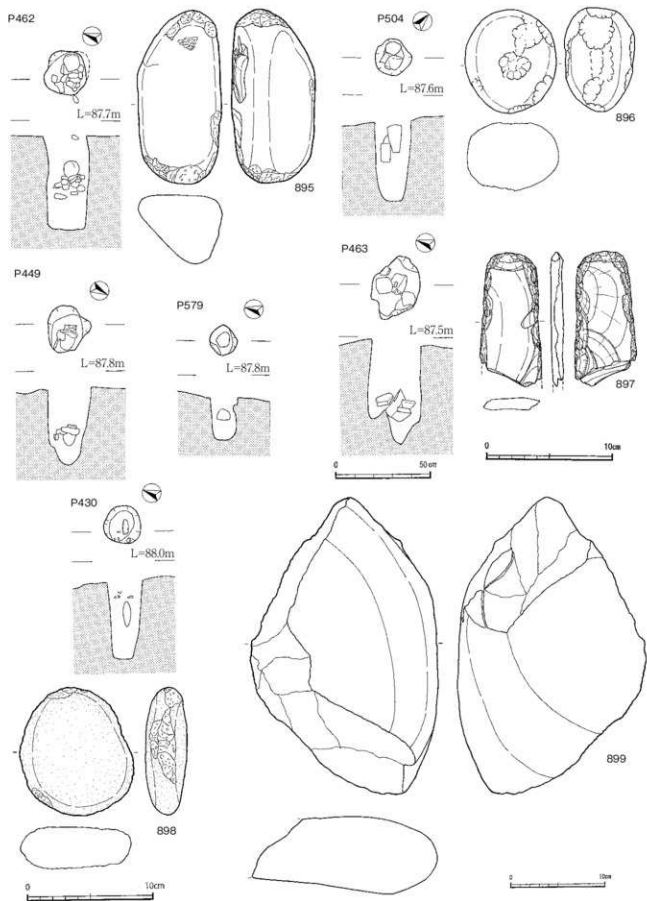
屈曲部に施文される一対の凹点のうち片方を観察できる。909（ビット 820）は無文の胴部である。内外面とも丁寧なナデ調整が施される。910（ビット 313 - 2）は、口縁部先端が剥落している。胴部上位の外面上、ミガキ調整を暗文様に施している。912（ビット 608）は、かなり大型の深鉢の胴部と推定される資料である。器厚約 1.5cm、長石粒が混じり、焼成は良好である。器面は、内外面ともに丁寧なナデ調整の後に、ミガキ調整を軽く施している。外面下位に、ごく浅い横位沈線文を 2 条観察できる。911（ビット 383 - 2）、913（ビット 502 - 1）、914（ビット 313 - 1）は中岳Ⅱ式の胴部屈曲部で、文様のある資料である。913 は大型の深鉢の胴部と推定される。ごく浅い 2 条の平行沈線文の下にある斜位の連続短沈線文は、911 にもみられる胴部屈曲部の稜線を利用した刻目文を意識したものと想定される。914 は、器壁が比較的薄く整形も丁寧である。外面には、ミガキ調整を暗文様に用いている。915（ビット 517）、917（ビット 469）は無文の胴部屈曲部であるが、屈曲部にわずかに段を形成させている。916（ビット 638）は、浅鉢の胴部にも見える資料である。胎土に長石細粒が混じり、焼成は良好、器面は内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施している。成形時に粘土板をずらして貼り付けることで屈曲部を形成し、その屈曲部に浅い凹線を巡らせている。918（ビット 424）は口縁部の小片で山形隆起と外面に浅い沈線文を確認できる。919（ビット 693）は中岳Ⅱ式の底部である。内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げている。

920（ビット 638）～923（ビット 486）は、石斧類である。920 は、刃部を欠失する打製石斧で、長さ 10.4cm × 幅 7.2cm、重さ 110g、石材はホルンフェルスで、幅広の刃部に対し、基部は細身に仕上げている。921（ビット 195）は、磨製石斧の基部付近で、残存部の長さ 7.3cm × 幅 5.08cm、重さ 139g、石材はホルンフェルスで、敲打により整形されている。基端部と刃部側は折れて欠失するが、破断面の状況や背面以外の器面の赤変から、被熱破砕の可能性がある。922（ビット 195）と 923（ビット 486）は、磨製石斧の刃部である。922 が残存部の長さ 7.4cm

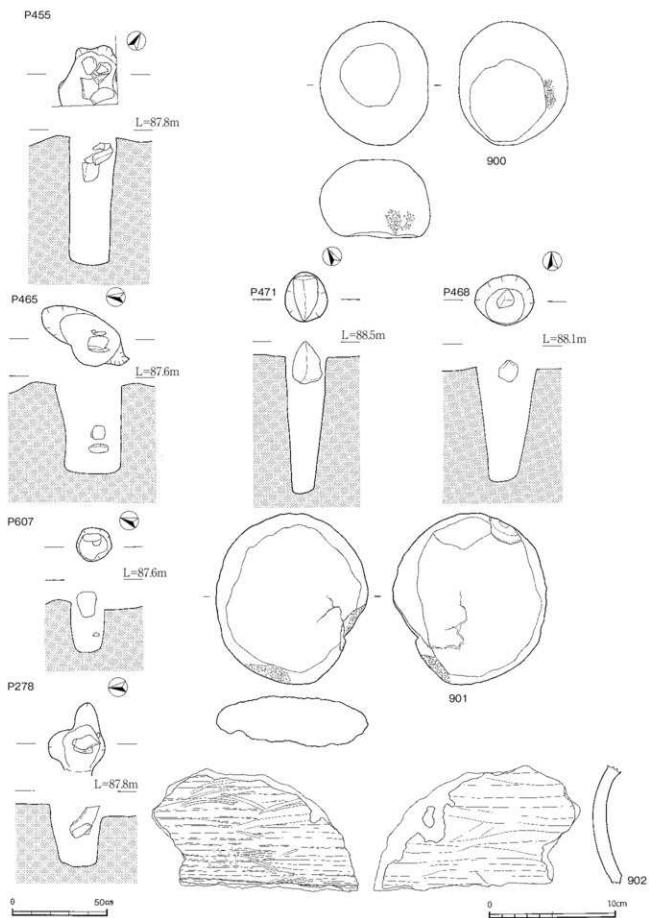
× 幅 5.2cm、重さ 76g、石材はホルンフェルスで、923 は残存部の長さ 4.0cm × 幅 3.6cm、重さ 23g、石材はホルンフェルスである。いずれも弱凸強凸凸片刃の身部がやや扁平な石斧である。922 の刃部平面形は円刃、923 は欠損により不明である。924（ビット 411）～927（ビット 561）は、磨石・敲石類である。924 は、長さ 7.0cm × 幅 5.9cm、重さ 139g、石材は凝灰角礫岩である。小型でやや扁平な形状で、作業面は両面に形成されている。925（ビット 296）は、長さ 7.6cm × 幅 6.8cm、重さ 102g、石材は頁岩である。扁平な形状で、磨面はあまり明瞭ではないが、敲打部は、下端から特に右側にかけて顕著に形成されている。上端はガジリによる欠損である。926（ビット 195）は、長さ 13.3cm × 幅 10.9cm、重さ 912g、石材は安山岩である。敲打部は、右側面に形成されているほか、正面と背面の磨面も明瞭に観察できる。927（ビット 561）は、残存部の長さ 9.7cm × 幅 6.9cm、重さ 362g である。928（ビット 352）は残存部の長さ 10.7cm × 幅 7.25cm、重さ 589g で、石材はどちらもホルンフェルスである。不定形な円礫で、上半を欠失する。左側面に凹面を呈する磨滅面が認められることから砥石とした。上・下端部に弱い赤化が認められ、被熱により破砕、剥落が生じた可能性がある。

第 5 表 ビット観察表

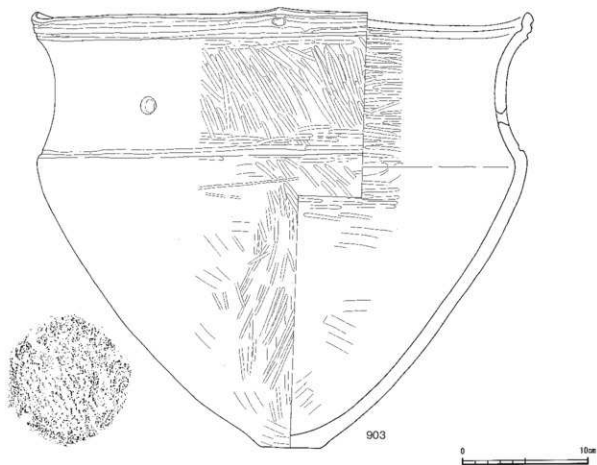
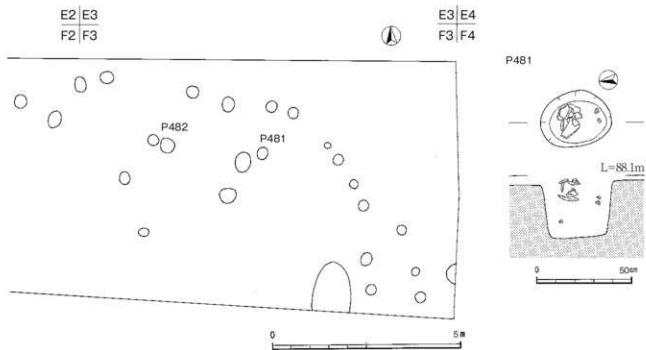
図	番号	区	規模（単位：cm）			埋土	図	番号	区	規模（単位：cm）			埋土
			縦	横	深					縦	横	深	
156	462	D8	23	23	51	157	465	E7	34	29	48	黒色 + 茶褐色	
	504	E8	20	19	42		471	F3	26	23	74	黒色	
	449	E6	25	23	40		黒色	468	F3	27	31	61	黒色
	579	D7	17	15	23		黒色 + 茶褐色	607	F8	18	19	25	黒色 + 茶褐色
	463	E8	31	25	54		黒色	278	C5	37	30	34	
	430	D6	20	20	42		茶褐色	158	481	F3	30	38	29
157	455	E6-7	31	32	68	黒色 + 茶褐色							



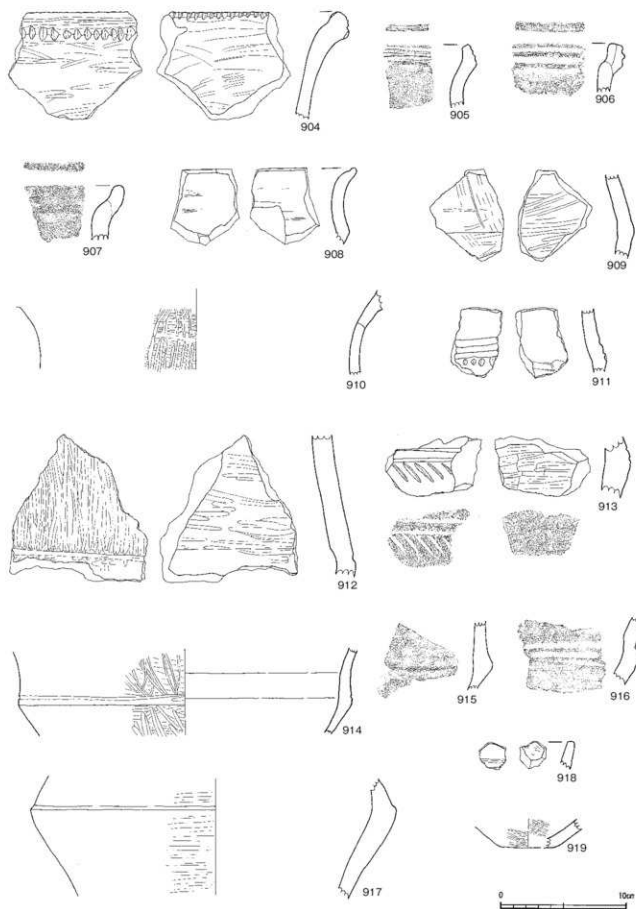
第 156 図 ビット内出土の遺物 1



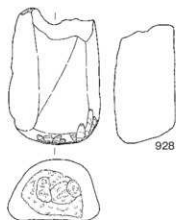
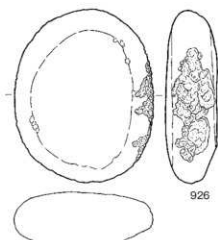
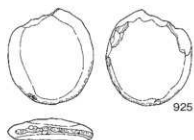
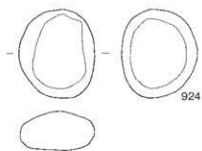
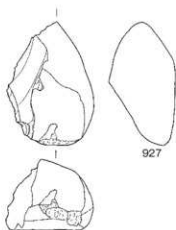
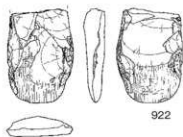
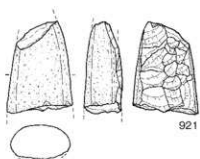
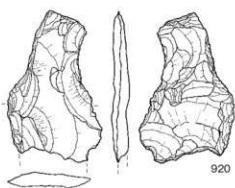
第 157 図 ビット内出土の遺物 2



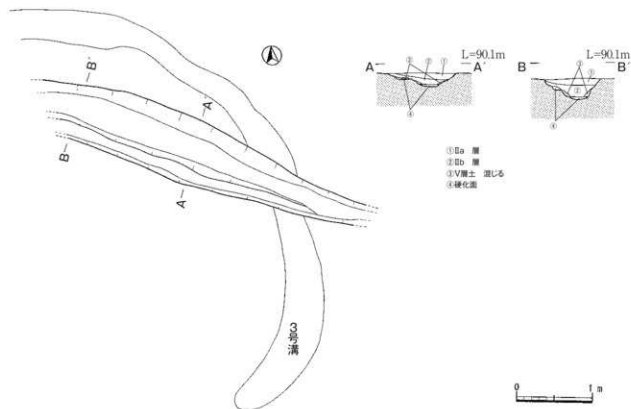
第158図 ビット内出土の遺物3



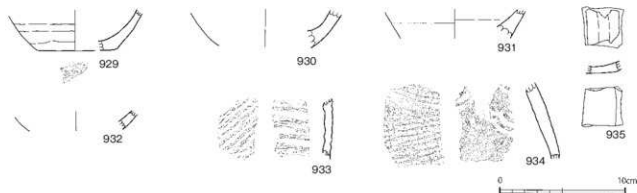
第 159 図 ビット内出土の遺物 4



第 160 図 ビット内出土の遺物 5



第161図 1号道跡



第162図 古代以降の出土遺物

(2) 道跡

1号道跡 (第161図)

G-18区のV層上面で検出された。平成25年度調査で検出していた“1号古道”の延長部にあたると思われる。

検出した全長は4.4m、最大幅は0.9mで、上下2面の硬化面が見られる。埋土は下部からIIb層、IIa層に比定した。硬化面の上部にはV層土の混じった土が見られる。

平成27年度刊行の『町田堀遺跡』の報告書で年代測定が行われており、平安時代のもものと想定された。

2 遺物

土器 (第162図 929~935)

II層から、古代及びそれ以降の遺物と考えられる遺物が出土した。

929は土師器の椀である。930~932は底部が欠損していることから詳細は不明であるが、椀と考えられる。

935は焙烙の把手である。933と934は須恵器の甕の破片であろう。胴部の一部と考えられる。

第6節 II層ほか出土の石器

1 V層出土の石器 (第163図 936~942)

V層出土の石器として、加工痕のある剥片1点、打製石斧5点、剥片1点を図示した。なお、V層はアカホヤ火山灰層に相当し、本来、遺物包含層には該当しない。

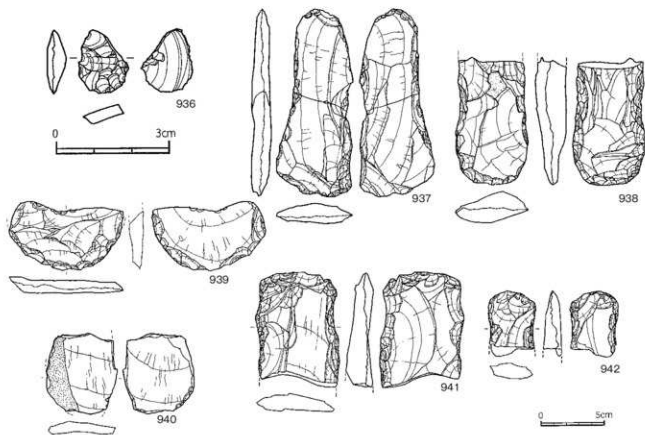
加工痕のある剥片 (第163図 936)

黒曜石II C類の剥片で、背面には周縁から剥離調整が加えられている。

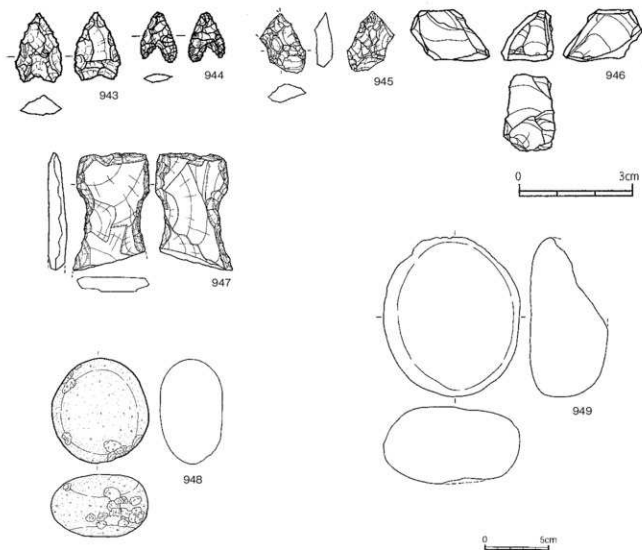
打製石斧ほか (第163図 935~942)

937 はやや丸みを帯びた基端部から刃部に向けて広が

る撥形を呈する打製石斧である。右側刃下半に欠損が生じ、身部中間で折れている。938も剥離で整形された打製石斧で基部を欠失する。939は刃部が半円状に外湾する打製石斧の刃部片である。裏面は捩理に沿った剥離面である。941・942は打製石斧の基部である。いずれもホルンフェルスの大型の剥片を素材とする。940は風化面が黄褐色を呈するホルンフェルスの剥片である。打製石斧と同じ石材であるが、加工の痕跡が明確でないため、剥片として報告する。



第163図 V層出土の石器



第164図 IV層出土の石器

2 IV層出土の石器 (第164図 943~949)

IV層出土の石器は石鏃3点、使用痕のある剥片1点、打製石斧1点、磨・敲石類2点を図示した。

石鏃 (第164図 943~945)

943は黒色を呈する緻密な安山岩製で、基部に半円状の抉りをもつ。944は黒曜石IV類の小型の石鏃である。基部に抉りが入る凹基の石鏃で、脚部は左右非対称の形状である。945は黒曜石IV類のやや大型の石鏃の脚部片である。

使用痕のある剥片 (第164図 946)

946は乳白色を呈する玉髄製の剥片が分割されたもの

で、正面下辺部分に使用に伴う可能性のある小剥離がみられる。

打製石斧 (第164図 947)

947は風化面が黄褐色を呈するホルンフェルス製の打製石斧である。基部は左右から弧状に内湾し、基端部が広がる形状である。

磨・敲石類 (第164図 948・949)

948は粗面の安山岩円礫で、表面にやや顕著な磨面があり、下縁右半部に敲打によるつぶれと剥落がみられる。949は多孔質・粗面の安山岩で、表面に顕著な磨面がみられる。

3 II層出土の石器

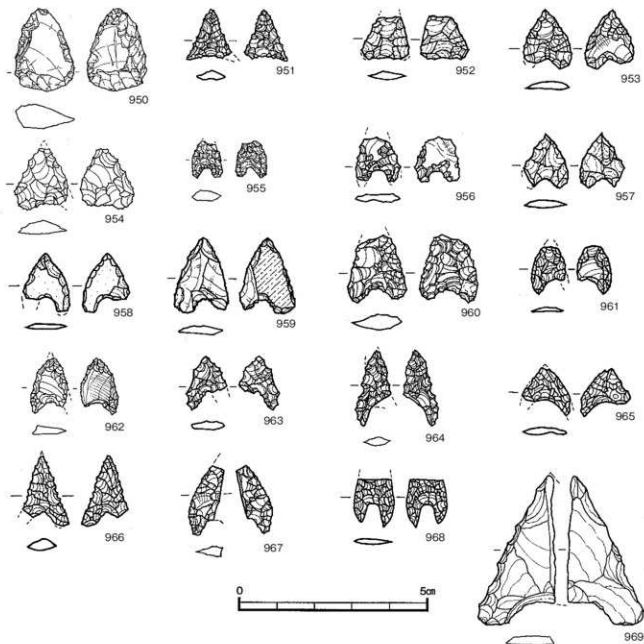
II層出土の石器として、打製石鏃20点、磨製石鏃4点、磨製石製加工品1点、石匙1点、石錐1点、加工痕・使用痕のある刮片16点、石核1点、磨製石斧12点、石包丁1点、石斧5点、打製石斧22点、スクレイパー1点、磨・敲石類19点、石錘1点、砥石類3点、石皿5点、異形石器2点、管玉1点、石製加工品2点、原礫5点を図示した。

出土層位のII層は耕作に伴い著しく攪乱を受けており、層位的安定性を欠く。また、I層(表土層)及び攪乱部分からの出土遺物、出土層位不明とされた遺物についてもII層出土石器に一括して報告した。個別の出土層位については一覧表で確認されたい。

石鏃(第165図 950~969)

950は珪質頁岩の不定形刮片を素材とする。調整剥離が周縁部のみにとどまり、断面形状が非対称で厚みが残ることから整形段階の未製品の可能性が高い。951~954は基部が浅く内湾する凹基の三角形鏃である。951は灰黒色を呈するチャート製、952・954は黒色を呈する緻密な安山岩製、953は黒曜石IV類製である。

955~960は基部に半円形に抉りの入る三角形鏃である。955は黒曜石III類、956は黒曜石IV類、957は黒色の緻密な安山岩、958はホルンフェルス、959は粘板岩、960は緑灰色を呈する珪質頁岩製である。961・962は基部が弧状に内湾する小型の石鏃で、左右側辺はやや外湾する。いずれも黒曜石IV類製である。



第165図 II層出土の石器1

963は黒曜石Ⅲ類製で、左右側辺上半部が突起する基部に挟りが入る凹基の五角形鏃である。

964は黒曜石Ⅳ類製で、瘦身で脚部に膨らみをもち、基部にU字状の挟りが入る。965は水晶製で先端部及び左脚部を欠損する。基部は弧状に内湾する。966は黒曜石Ⅳ類製で、基部に半円状の挟りが入る。やや長身で側辺部分は鋸歯状を呈する。967は黒曜石Ⅴ類製の基部に半円状の挟りが入る石鏃であるが、右半部を大きく欠損する。968は上半部を欠損するが、基部にUの挟りが入るやや長身の黒曜石Ⅳ類製の石鏃である。969はホルンフェルス製の大型の石鏃である。

磨製石鏃 (第166図 970~973)

970は最大長が5.75cmを計るやや変成を受けた粘板岩製の大型の磨製石鏃で、矢が装着される身部中心部分が縦方向の研磨により薄身に仕上げられている。二次的な被熱により器面に赤化・剥落の痕跡が残る。971~973はいずれも黒色頁岩製の磨製石鏃である。971・972は基部

の凹部が表裏からの研磨で薄身に仕上げられている。973は上半部を欠損する。

磨製石製加工品 (第166図 974)

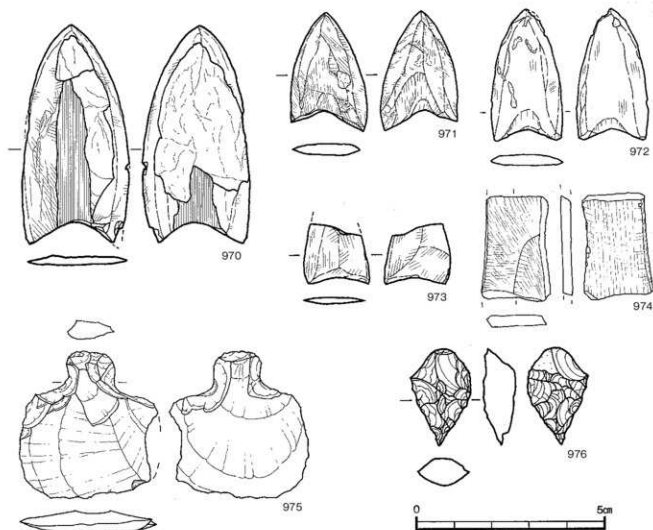
黒色頁岩製で表裏とも研磨され薄身である。左側辺は表裏からの擦り切りによって切断されている。上・下辺及び右側右辺を欠失するため全形は不明である。

石匙 (第166図 975)

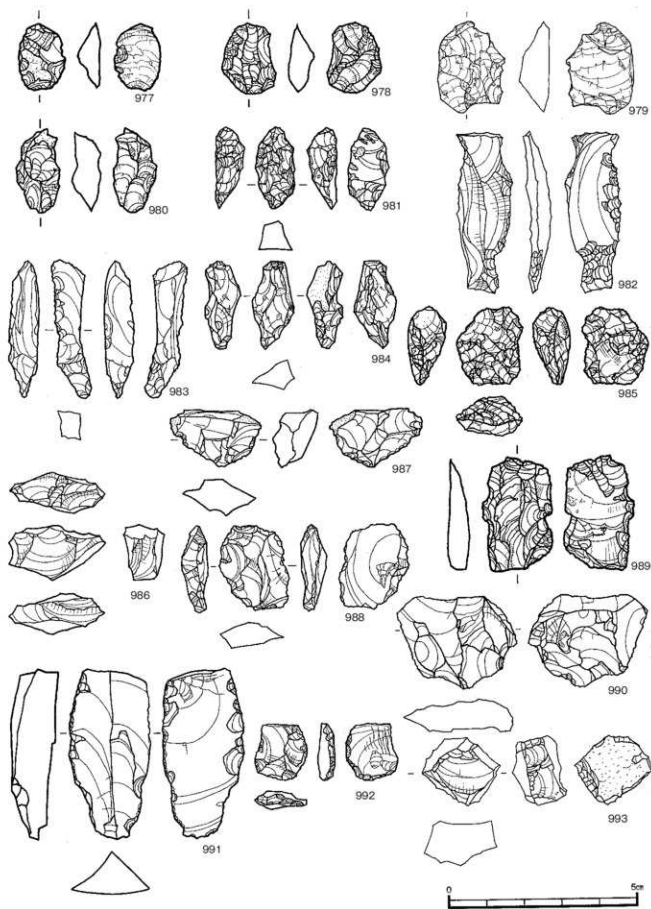
ホルンフェルス製の粗製の石匙である。上端及び側方からの調整でつまみ部が作り出されるが、刃部と目される下辺部は剥片の縁辺が残置され、二次加工は施されない。

石錐 (第166図 976)

玉髓製のやや厚みのある剥片を素材とし、周縁部分に二次加工を加え整形する。錐部は下端先端部分に短く作り出されている。機能部の梁上には摩擦が生じている。



第166図 Ⅱ層出土の石器2

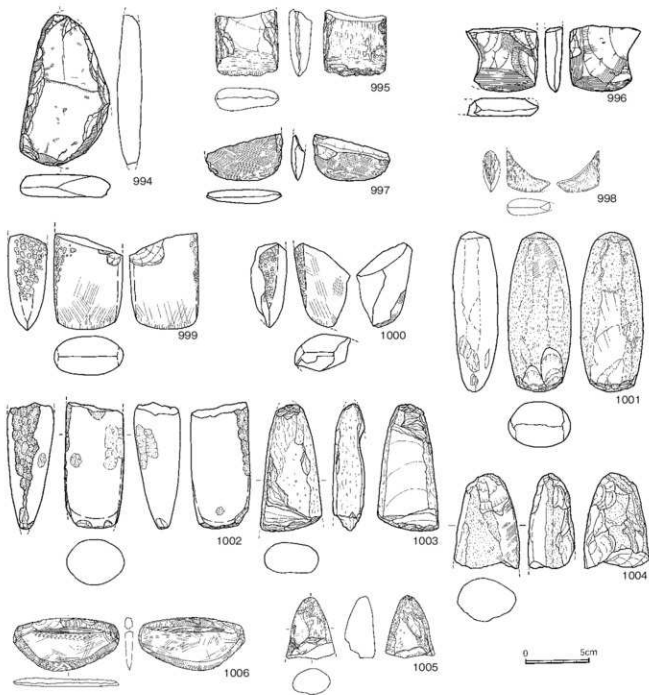


第 167 図 II 層出土の石器 3

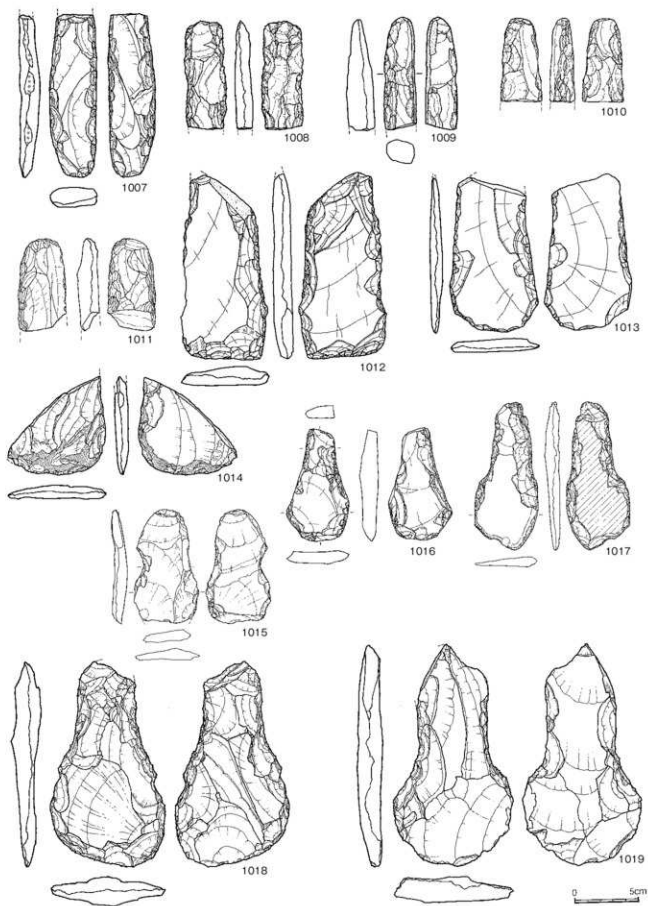
加工痕・使用痕のある剥片 (第167図 977~992)

977は背面に自然面が残る黒曜石IV類の剥片で、下縁周辺及び左側縁上部に二次的な剥離痕がみられる。978は黒曜石IV類で上下・左右に対向する剥離がみられ、左縁上半部及び右辺下端部にはつぶれが生じており、楔形石器に類する特徴がみられる。979は黒曜石II C類の不定形剥片で、主に覆面から背面側へ不規則に調整剥離が施される。左側縁上端に部分的に微細剥離がみられることから搔・削器的な用途が考えられる。980は黒曜石III類の砕片である。左側辺下半の縁辺につぶれが生じてい

る。981は黒曜石III U類で、覆面側からの急傾斜の調整剥離で丁寧に整形されている。下端部を機能部とする石錐の可能性を想定したが、錐部の作り出しがみられず、摩耗や微細剥離も生じていないことから加工痕のある剥片として報告した。982は黒曜石V類の幅広い剥片の切断した末端部を用い、左右側辺に細かい剥離調整を加え整形した後、上下につまみ状の括れを作り出す。983は灰褐色のチャート製。984は黒曜石II C類で、いずれも下端部にやや粗雑な加工で錐部状の突起部が作り出されるが明瞭な摩耗などは観察されない。985は黒曜石II C



第168図 II層出土の石器4



第 169 図 II 層出土の石器 5



第170図 II層出土の石器6

類のやや厚みのある不定形剥片で、左側辺及び下辺部分に調整剥離が施され、縁辺に微細剥離が生じている。掻・削器的な使用の可能性がある。986は黒曜石Ⅳ類で、実測図では石核のように見えるが背面はポジティブな剥離面である。主要剥離の打面に相当する上面に複数の剥離が加えられている。987は灰黒色のチャート製の剥片で、右側辺下半、左側辺等の縁辺に小剥離がみられる。988は乳白色を呈する玉髄で、右側辺に微細な剥離がみられる。989は黒曜石ⅡC類のやや縦長の剥片で、図左が主要剥離面である。図左右側辺に剥離及び微細剥離が不規則にみられる。990は灰褐色のチャート剥片で、図左側辺に不規則な微細剥離がみられる。991も990と同質のチャートのやや縦長の剥片で両側辺に微細な剥離がみられる。992は黒曜石Ⅳ類の不定型な小剥片で、図右縁から下辺にかけて、小剥離が密にみられる。

石核 (第167図 933)

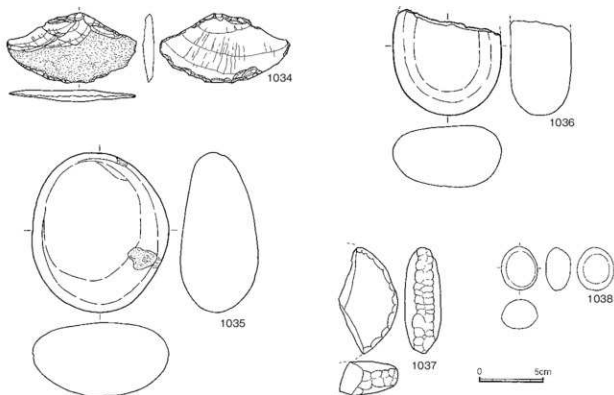
複数面に自然面が残る黒曜石ⅢU類の小原礫を用いた石核である。剥片剥離はさほど進行していないが、ネガティブな剥離面と自然面によって構成されることから石核とした。

磨製石斧 (第168図 944~1005)

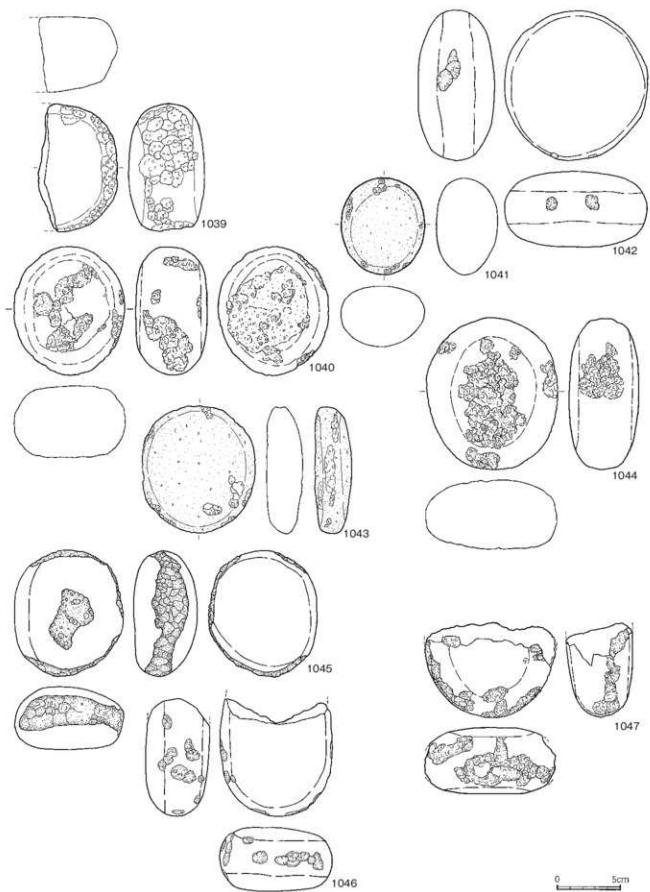
944はホルンフェルス製の厚みのある横長剥片を剥離・

敲打調整後、刃部のみを研磨した弱凸強平刃の磨製石斧である。平面形は楕形を呈し、右側刃部から側辺にかけて使用に伴うとみられる欠損が生じている。995・996もホルンフェルス製の弱凸強平刃の磨製石斧で、いずれも剥片素材で肩部が扁平で、研磨は刃部を中心に表・表面に及ぶ。997・998はホルンフェルス製の扁平な両凸刃の磨製石斧の刃部片である。残存部分は剥離調整後・敲打で整形されほぼ全面に研磨が及ぶ。

999は砂岩質のホルンフェルスの厚みのある全面研磨の磨製石斧で刃部は両凸刃である。被熱による赤化が生じており、基部を欠失するが乳房状を呈するものとみられる。1000は緑灰色の緻密な砂岩製の両凸刃の磨製石斧である。左側縁から背面にかけて被熱による赤化と剥離がみられる。1001はホルンフェルス製の乳房状を呈する磨製石斧である。体部は丁寧に敲打で整形され、刃部付近には研磨の痕跡を認める。刃部は敲打痕と剥離が生じており、敲打具に転用されたとみられる。このため、刃部形態は不明である。1002は器面の風化が激しく敲打や研磨痕跡は不明瞭であるが乳房状の両凸刃の磨製石斧とみられる。基部を欠失し、刃部縁辺のつぶれから敲打具へ転用されたとみられる。1003・1004・1005はいずれもホルンフェルス製の磨製石斧の基部である。いずれも剥離調整後、敲打で整形された乳房状の石斧とみられる。



第171図 II層出土の石器7



第 172 図 II 層出土の石器 8

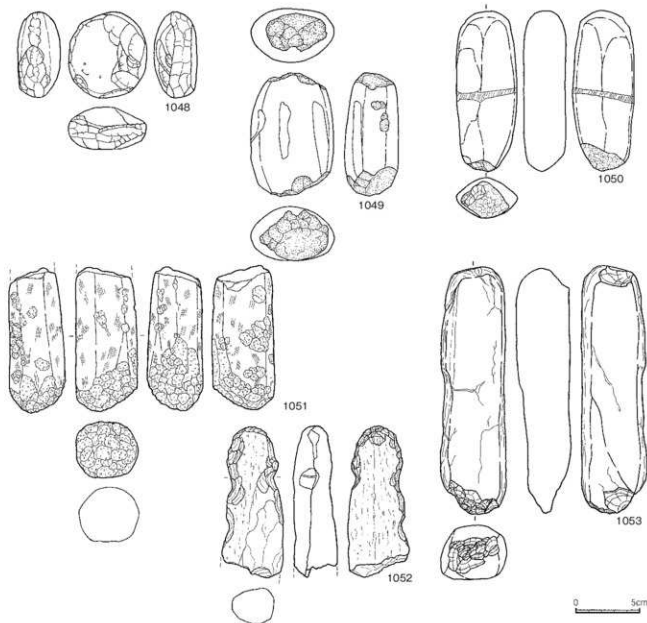
石包丁 (第168図 1006)

1006はホルンフェルスの剥片に剥離を加え整形した後、表裏から擦り切りで穿孔し、全面を研磨して石包丁としている。下縁刃部には光沢が生じている。

石斧 (第168図 1007~1011)

1007~1011は研磨痕が不明瞭なため、石斧として扱った。1007はホルンフェルスの横長の剥片に剥離調整後、両側面に敲打を加え整形している。刃部には二次的な剥離が生じ、器表面の風化もあり明確な研磨を認めることはできないが、扁平で細身の刃部磨製の石斧であった可能性がある。1008は灰褐色を呈するホルンフェルス製

で、1007同様、細身・扁平で側面は剥離調整後、部分的ではあるが敲打で整形されている。1009は器面が風化するホルンフェルス製で、側面は剥離調整後、敲打で整形されている。身部がやや丸みを帯び、図上端部が基部に細身、扁平となっており、当該部位が刃部である可能性がある。1010もホルンフェルス製で、両側面とも剥離調整後、敲打による整形が施され、細身の身部をもつ。1011も同様に剥離調整後、敲打が加えられている。いずれも、剥離調整後、敲打整形の過程がみられることから、刃部磨製の石斧である可能性があり、他の打製石斧とは区分した。



第173図 II層出土の石器9

打製石斧 (第 169・170 図 1012~1033)

1012~1014 は基部の一部を欠損するが、短冊形が想定される打製石斧である。いずれもホルンフェルス製であるが、1012 が灰褐色でやや硬質、1013 が黄褐色で器面の風化が激しくやや軟質である。いずれも刃部背面側の摩擦がみられる。1014 は刃部片であるが残存する右側面の形状から短冊形が想定される。刃部背面側の顕著な摩擦がみられる。

1015 は身部側面が内湾し括れた形状を示す打製石斧である。刃部先端には折れが生じている。

1016~1019 は刃部が広く基部に向かって窄まる撥形の打製石斧で、1018 を除き他はホルンフェルス製である。1016 は小型で刃部平面形は円刃で、刃部背面側にわずかに摩擦が生じている。1017 は背面に自然面を残す黒灰色のホルンフェルスの剥片を素材とするやや小型の打製石斧である。刃部側面に摩擦が生じており、特に右側縁部分に顕著である。1018 は砂岩製の打製石斧である。撥形の形状であるが、刃部は右寄りに傾く偏刃で、刃部左側縁が顕著に摩擦する。1019 は器面が黄褐色を呈し風化が進むが、新しく傷が生じた部分は暗紫色を呈する。刃部形状は円形を呈し、背面側に摩擦が生じている。

1020 は左側面が直線状で、右側面基部付近がかり状に窄まる形状で、右側面の基部が窄まる部分から左側面下端付近が半円状の刃部となる。石材は黄褐色に器面が風化するホルンフェルス製で、刃部左端表・裏及び同縁面に顕著な摩擦が生じている。

1021 は左右側面基部の左右が剥離調整により弧状に内湾し、基端部がやや広がる。刃部は下端部に新しい欠損が生じているが、右側に影らむ左右非対称の形状となっている。石材は黄褐色のホルンフェルス製で刃部左側縁縁面に摩擦が生じている。

1022・1023・1027・1028 は打製石斧の刃部片である。1022 は砂岩製で、残存部からみるとかなり大型の製品である。刃部平面形状は円刃を呈し、裏面側器面に摩擦が生じている。1023 は刃部がやや広がる形状で、右側に傾く偏刃で背面上にわずかに摩擦を認める。1027・1028 はいずれも風化した器面が黄褐色を呈するホルンフェルス製で、刃部先端が尖る形状である。1027 は背面側に摩擦が生じている。

1024 は黒色の頁岩の横長剥片を素材とする打製石斧で、刃部及び基部を欠損するが、残存部から撥形を呈するものとみられる。表表面の梁上に摩擦が生じている。

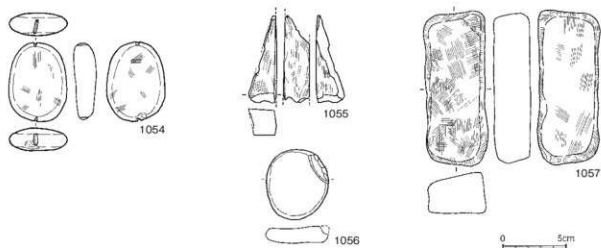
1025・1026・1030~1033 は打製石斧の基部破片である。1025 は砂岩製で残存する側面の下部に左右側縁から浅い挟りが作り出されている。1026 は黄褐色の風化面を呈するホルンフェルス製である。1029~1032 左右側面に調整剥離を加え、側面を内湾させ基端部が広がる形状の基部を持つ。1029 は小型で砂岩製、1030~1032 はホルンフェルス製である。1033 はホルンフェルス製で新しいキズの部分は暗紫色を呈する。残存部分の両側面はほぼ並行する。

スクレイパー (第 171 図 1034)

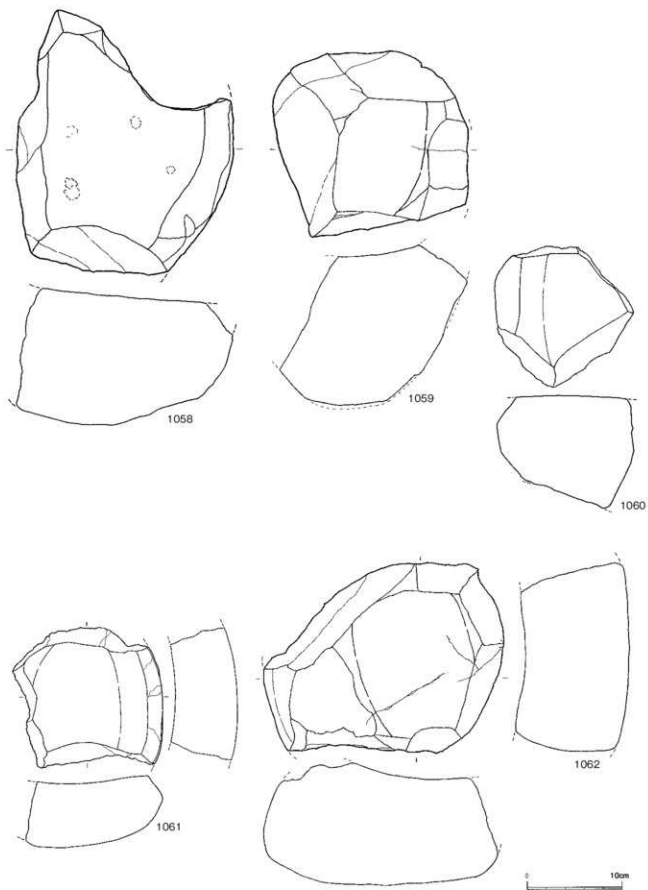
1034 は背面に自然面をもつ砂岩の翼状剥片を素材とするスクレイパーである。刃部は主に背面側から不規則な剥離で調整され、刃部は弧状に外湾する。

磨・敲石類 (第 171~173 図 1035~1053)

1035 は安山岩製の磨・敲石で片面にやや平坦な磨面をもち、上端部側縁に敲打によるつぶれが生じている。1036 は花崗岩製の磨石で表・裏に磨面があるが、正面図側の摩滅が顕著である。1037 は砂岩製の磨・敲石の破片である。正面図表面の摩滅が顕著で、右側縁には敲打に



第 174 図 II 層出土の石器 10

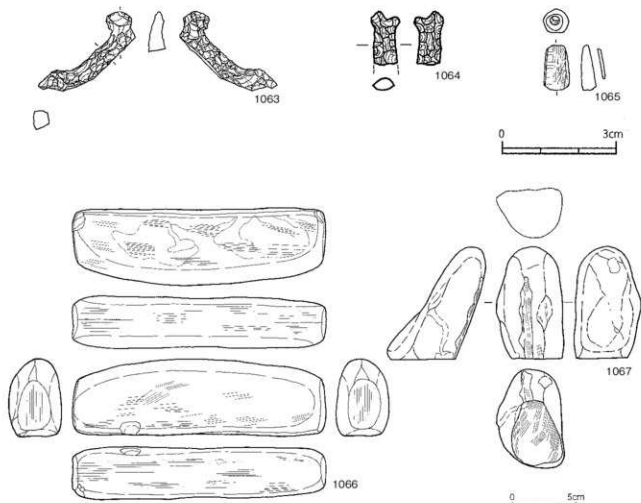


第 175 図 II 層出土の石器 11

よるつぶれがみられる。二次的に被熱を受けており赤化と剥落が生じている。1038は砂岩の小円礫である。片面に弱い摩耗がみられるのみで使用については不明である。1039は粗面の安山岩製の磨・敲石で、裏面側に顕著な摩滅面をもち、側縁に荒い敲打痕がみられる。1040は粗面の多孔質の安山岩で、表表面にあばた状敲打痕が広がり磨面は縁辺にわずかに残る。側縁上下端部にも敲打痕がみられる。1041は鶏卵状の安山岩の円礫で、表裏面とも顕著な磨面はみられない。下端部周縁にわずかに敲打つぶれの痕跡がみられることから敲石とした。1042は粗面・多孔質の安山岩で片面に弱い磨面をもつ。左側縁から右側縁下半にかけて周縁部に敲打の痕跡がみられる。1043も粗面・多孔質の安山岩の扁平円礫で、表裏ともわずかに摩耗を認めるが顕著な磨面ではない。側縁のほぼ全周に敲打痕がみられる。1044は粗面の安山岩で表面に顕著な磨面をもつ。左右側縁に敲打・つぶれがみられるほか、表面中央付近を中心にあばた状の凹みが生じている。1045も粗面の安山岩で表面に外湾する顕著な磨面がみられる。上・下縁及び右側面に荒い敲打痕がみられ、特に右側縁は敲打によるつぶれが進行し側面が

形成されている。また、表面中央付近にあばた状の敲打痕がみられる。1046は粗面の安山岩で、敲打整形により側面をもつ。表面側に顕著な磨面が認められ、下縁左寄りを中心にあばた状の敲打痕がみられる。1047は花崗岩製の磨・敲石で、表裏に摩滅面をもち、下縁に敲打痕がみられる。1048は花崗岩の扁平な円礫で、下半部側縁に敲打によるつぶれや剥落がみられる。1049は長楕円形を呈する砂岩礫で、上下両端に敲打によるつぶれや剥落がみられ、裏面に磨面を認める。

1050~1053は棒状の礫を素材とする敲石類である。1050はホルンフェルスの棒状礫で、下端部に敲打によるつぶれ・剥落が認められる。石器製作具として用いられた可能性が高い。1051は棒状の砂岩礫で、周縁に複数の研磨面をもち、下端部にあばた状の敲打痕、つぶれが認められる。上端は折れ面となっており、砥石から敲石に転用された可能性がある。1052は粘板岩の棒状礫で、下端部及び側面の一部に敲打痕と剥落を認める。1053はやや大型の粘板岩の棒状礫で、下端部に敲打によるとみられる剥落が生じている。



第176図 II層出土の石器12

石錘 (第173図 1054)

1054は黒灰色を呈する細粒砂岩の扁平な重円礫で、上下に擦り切りにより断面V字状の切り目を入れている。

砥石 (第173図 1055~1057)

1055は赤褐色を呈する細粒砂岩の破片で、3面に磨面が残る。1056は扁平な砂岩円礫で凹面を呈する磨面がみられる。1057は直方体を呈する砂岩角礫で磨面は顕著なものではない。

石皿 (第175図 1058~1062)

1058~1062はいずれも凝灰岩製の石皿の破片で、破砕により全体の形状等は不明である。

異形石器 (第176図 1063・1064)

1063は黒曜石Ⅷ類製で調整により端部につまみと小突起が作り出されている。1064は黒曜石Ⅳ類で下半部を欠損する。扁平棒状で端部は叉状に整形される。

管玉 (第176図 1065)

緑灰色を呈する軟玉製の管玉で、下端は折れ面を再研磨したものとみられる。穿孔は中心より外側によっている。

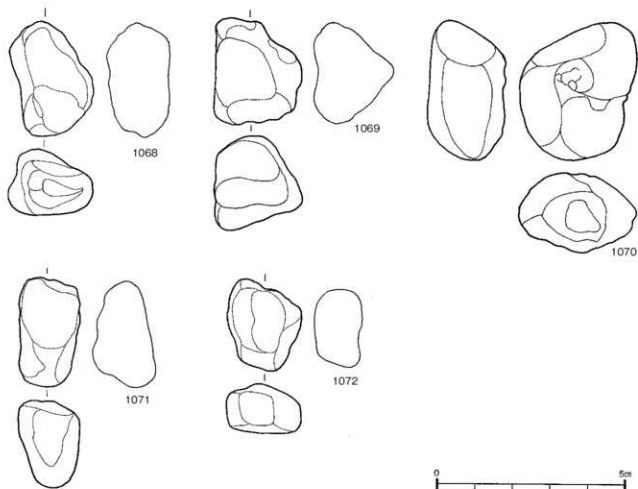
石製加工品 (第176図 1066・1067)

1066は砂岩製で、左右側面は敲打により平坦面に仕上げられ、表裏面は研磨により仕上げられ横方向の線状痕が多数みられる。上縁は弧状にゆるく外湾し、底面も研磨により平坦に仕上げられている。やや横長ではあるが石冠に類似する石製品として報告する。

1067はホルンフェルスの棒状の重円礫で、下面は拱理に伴う折れ面の可能性があるが、平滑に擦られた痕跡がみられることから加工品として報告した。

原礫 (第177図 1068~1072)

灰白色を呈する石英質の重円礫であり、加工の痕跡は認められない。



第177図 II層出土の石器13

第6表 縄文時代早期遺構内出土土器観察表

種別 番号	編年 番号	遺構名	器種	分級	西土区	部位	位置 (cm)		調整		土上				取上番号	備考
							口径	底径	高さ	内径	外径	厚	口縁	胴部		
21	2	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P15	瓶ノ埴式、赤土、沈澱
	3	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P16	瓶ノ埴式、黒目、有灰
	4	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P21	瓶ノ埴式、黒漆、赤土、有灰
	5	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P3	瓶ノ埴式、沈澱、赤土
	6	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P22	瓶ノ埴式、沈澱、赤土
	7	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	底部	7.0		ナ	ナ					P17	
	8	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P1	瓶ノ埴式、沈澱、赤土
22	9	2号壺石	深鉢	3	B-4-5	胴部			ナ	ナ					P2	瓶ノ埴式、黒漆、自殻割突
	10	3号壺石	深鉢	2	A-13-4	胴部			ナ	ナ					P16	伽藍山式、自殻割突
	12	4号壺石	深鉢	2c	B-3-4	胴部			ナ	ナ					P3	瓶ノ埴式、自殻割突
25	14	6号壺石	深鉢	2a	D-4	胴部			ナ	ナ					26	下割壺式、自殻割突
	15	9号壺石	深鉢	2a	C-5-6	胴部			ナ	ナ					P1	下割壺式、自殻割突
26	16	9号壺石	深鉢	2a	C-5-6	底部			ナ	ナ					P2	下割壺式、自殻割突
	17	10号壺石	深鉢	2a	C-5	胴部			ナ	ナ					P1	下割壺式、自殻割突
30	18	11号壺石	深鉢	2b	B-4	胴部			ナ	ナ					P1	下割壺式、黒土、ナ、自殻割突
	19	11号壺石	深鉢	3	B-4	胴部			ナ	ナ					P2	瓶ノ埴式、沈澱、赤土
	20	11号壺石	深鉢	3	B-4	底部			ナ	ナ					P3	
31	21	12号壺石	深鉢	1	B-C-4	胴部	15.0		ナ	ナ、土着土					P1	下割壺式、自殻割突
	22	12号壺石	深鉢	2a	B-C-4	胴部	15.0		ナ	ナ、土着土					P2	中割式、自殻割突
	23	12号壺石	深鉢	2a	B-C-4	胴部			ナ	ナ					P10	下割壺式、自殻割突
	24	12号壺石	深鉢	2a	B-C-4	胴部			ナ	ナ					P6	下割壺式、自殻割突
32	25	12号壺石	深鉢	2a	B-C-4	胴部			ナ	ナ					P7	下割壺式、自殻割突
	27	13号壺石	深鉢	2a	C-4	胴部			土着土	ナ					P1	下割壺式、自殻割突
33	28	14号壺石	深鉢	2a	F-3-4	胴部			ナ	ナ					P12	下割壺式、自殻割突
	29	14号壺石	深鉢	2a	F-3-4	胴部			ナ	ナ					P1	下割壺式、自殻割突

第7表 縄文時代後期遺構内出土土器観察表

種別 番号	編年 番号	遺構名	器種	分級	西土区	部位	位置 (cm)		調整		土上				取上番号	備考
							口径	底径	高さ	内径	外径	厚	口縁	胴部		
58	193	1号壺穴住居跡	煎瓶鉢	5	E-5	胴部	18.0		土着土、ナ	土着土、ナ					S8-137	中割壺式、沈澱
	194	1号壺穴住居跡	煎瓶鉢	5	E-5	胴部	18.0		土着土、ナ	土着土、ナ					S8-151	中割壺式、沈澱
	195	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-22	中割壺式、黒目
	196	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-223	中割壺式、黒目
	197	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-223	中割壺式、沈澱
	198	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-198	中割壺式、黒土、自殻割突
	199	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部	19.0		ナ	ナ					S8-37	中割壺式、沈澱
	200	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8	中割壺式、沈澱
	201	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-31	中割壺式、沈澱
	202	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-153	中割壺式、沈澱
	203	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-283	中割壺式、沈澱
	204	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-170	中割壺式、沈澱
	205	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-96	中割壺式、沈澱
	206	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-31	中割壺式、沈澱
	207	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	胴部			ナ	ナ					S8-82	中割壺式、沈澱
	208	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部	5.0		ナ	ナ					S8-42	中割壺式、沈澱
	209	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部	8.0		ナ	ナ					S8	中割壺式、沈澱
	210	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部	7.0		ナ	ナ					S8-45	中割壺式、沈澱
	211	1号壺穴住居跡	深鉢	5	E-5	底部	5.4		ナ	ナ					S8-206	中割壺式、沈澱
	226	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			土着土	ナ					S12-143	中割壺式、沈澱
	227	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部	30.0		土着土	ナ					S12-46	中割壺式、沈澱
	228	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-23	中割壺式、沈澱
	229	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-17	中割壺式、沈澱
	230	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-24	中割壺式、沈澱、土文付着
	231	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-2	中割壺式、沈澱
	232	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-2	中割壺式、沈澱
	233	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12	中割壺式、沈澱
234	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12	中割壺式、沈澱	
235	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12	中割壺式、沈澱	
236	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-8	中割壺式、胴部肥厚	
237	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-29	中割壺式、胴部肥厚	
238	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-64	中割壺式、沈澱	
239	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-59	中割壺式、沈澱	
240	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-23	中割壺式、胴部肥厚	
241	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部	20.0		土着土	ナ					S12-29	中割壺式、沈澱	
242	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-30	中割壺式、沈澱	
243	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-61	中割壺式、三日月文	
244	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	胴部			ナ	ナ					S12-104	中割壺式、沈澱	
245	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	底部			ナ	ナ					S12	中割壺式、沈澱	
246	2号壺穴住居跡	深鉢	5	F-5	底部			ナ	ナ					S12-43	中割壺式、沈澱	
65	251	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部	10.6		ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	252	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	253	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	254	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	255	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	256	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	257	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	258	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	259	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	260	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			土着土	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	261	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部	8.0		土着土	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
	262	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱
263	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱	
264	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱	
265	3号壺穴住居跡	深鉢	5	F-G-18	胴部			ナ	ナ					S1	煎瓶壺形、中割壺式、沈澱	

第9表 古墳時代遺構内出土土器観察表

探検 番号	遺構名	器種	分級	出土区	部位	位置 (cm)		調整			胎土					取上番号	備考		
						口径	底径	内面	外面	磁引	顔色	雲目	石黄	辰石	黒石				
124	678	1号流	壺	山ノ上	H-19	底部	6.6		ナテ	ナテ							遺1-1-1	管孔	
	679	1号流	流	成川	H-19	底部	13.0	15.3	ミヤキ、工具ナテ	工具ナテ、釉ナテ							遺1-1-1	管孔、沈腐	
	680	2号流	流	成川	G-19	胴部			ナテ	ナテ							172-1	1号胎土、沈腐	
	681	2号流	流	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ							172-2	中厚式、沈腐	
	682	2号流	壺	成川	G-19	胴部			ナテ	ナテ							遺2-1-1	三角弁	
	683	2号流	流	成川	H-19	胴部	18.8		ナテ	ナテ							172-1	中厚式	
	684	2号流	壺	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ							遺2	輪縁底文	
	685	2号流	壺	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ							遺2-1	輪縁底文	
125	686	2号流	壺	山ノ上	H-19	胴部	11.5		ナテ	ナテ							172-1	沈腐	
	687	2号流	壺	山ノ上	H-19	胴部	11.2		ナテ	ナテ							遺2	輪縁底文	
	688	2号流	壺	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ							遺2-1	輪縁底文	
	689	2号流	壺	成川	H-19	胴部	13.1	31.4	工具ナテ、ミヤキ	工具ナテ								172-2	中厚式と胎土に管孔、スス付着
	690	2号流	壺	成川	H-19	胴部	14.0	34.0	工具ナテ、釉ナテ、ナテ	工具ナテ、釉ナテ、ナテ								遺2-1	
	691	3号流	壺	成川	G-18	底部	14.2	21.4	工具ナテ、ミヤキ	工具ナテ								遺1-3-1	7
	692	3号流	作付鉢	成川	G-18	底部	15.5	9.2	ナテ、ミヤキ	ナテ、ミヤキ								遺1-1-1	2
	693	3号流	壺	成川	G-18	底部	18.8		ナテ	ナテ								遺3	
129	694	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部	10.0		ナテ	ナテ							183-1	中厚式、沈腐	
	695	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ								183-1	中厚式、沈腐
	696	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ								183-3	中厚式
	697	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部	10.2		ミヤキ	ナテ								遺3-3	中厚式、スス付着、沈腐
	698	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ								183-3	中厚式、沈腐、管孔、管底、沈腐
	699	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ								遺3-5	中厚式、スス付着、管底、沈腐
	700	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ミヤキ、釉ナテ	ミヤキ、釉ナテ								183-3	中厚式、沈腐
	701	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			ミヤキ、ナテ	ミヤキ、ナテ								183-3	中厚式、スス付着、沈腐
	702	1号胎土観察	流	成川	H-19	胴部			工具ナテ	工具ナテ								183-11	中厚式、沈腐
	703	1号胎土観察	壺	山ノ上	H-19	胴部	25.4	30.0	工具ナテ、釉ナテ	工具ナテ、釉ナテ								183-2	管底、管口変形
	704	1号胎土観察	壺	山ノ上	H-19	底部	6.4		ナテ	ナテ								183-3	管底
	131	705	1号胎土観察	壺	成川	H-19	胴部			ナテ	ナテ								183-3
707		1号胎土観察	丸底壺	成川	H-19	底部			ナテ	工具ナテ、釉縁付着								183-3	管底

第10表 II層遺構内出土土器観察表

探検 番号	遺構名	器種	分級	出土区	部位	位置 (cm)		調整			胎土					取上番号	備考		
						口径	底径	内面	外面	磁引	顔色	雲目	石黄	辰石	黒石				
843	ビット 705	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ								P705-3	中厚式、沈腐	
	844	ビット 705	流	5	-	底部			ナテ	ナテ							P705-1	中厚式、沈腐	
	845	ビット 706	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P706-1	中厚式	
	846	ビット 711	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P711-1	中厚式、沈腐	
	847	ビット 633	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P633-12	中厚式	
	848	ビット 633	流	5	-	底部			ナテ	ナテ							P633-25	中厚式	
	854	ビット 631	壺	先手	-	底部	14.2		ナテ	工具ナテ							P631-67	中厚式	
	855	ビット 631	流	遺残	-	底部	16.0		ミヤキ	ナテ							P631-32	中厚式	
152	863	ビット 633	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P721-4	中厚式四角文	
	864	ビット 721	流	5	-	胴部			ナテ、ミヤキ	ナテ、ミヤキ							P721-27	中厚式、底残片	
	865	ビット 721	流	5	-	底部			工具ナテ、ミヤキ	ナテ、ミヤキ							P721-21	中厚式	
	866	ビット 721	流	5	-	胴部			ナテ、ミヤキ	ナテ							P721-12	中厚式、沈腐	
	867	ビット 721	流	5	-	底部	5.0		ナテ	ナテ							P721-16	中厚式、内外面磨	
	873	ビット 632	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P632-92	中厚式、沈腐	
	874	ビット 632	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P632-1	中厚式、沈腐	
	875	ビット 632	流	5	-	底部			ナテ	ナテ							P632-16	中厚式、沈腐	
153	876	ビット 632	流	5	E-11	胴部			ミヤキ、ナテ	ナテ							P632-19	中厚式、沈腐	
	879	ビット 740	流	5	-	胴部	18.0		ナテ	ナテ							P740-39	中厚式、管突	
	880	ビット 740	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ							P740-19	中厚式、沈腐	
	888	ビット 4	流	5	E-12	胴部			ミヤキ	工具ナテ							P4	中厚式	
	889	ビット 4	流	5	E-12	胴部			ナテ	ナテ							P4	中厚式、沈腐、四角文	
	890	ビット 4	流	5	E-12	底部			ナテ	ナテ							P4	中厚式、スス付着	
	891	ビット 4	流	5	E-12	胴部			ナテ	ナテ、工具ナテ							P4	中厚式、沈腐	
	892	ビット 6	流	5	E-10	胴部			ナテ	ナテ、工具ナテ							P6	中厚式、沈腐	
155	893	ビット 6	流	5	E-11	胴部			ナテ	ナテ							P6	中厚式、沈腐	
	902	ビット 278	流	5	-	胴部			ミヤキ、ナテ	工具ナテ							P278-1	中厚式	
	903	ビット 681	流	5	H+7-31	底部	30.6	4.8	35.0	工具ナテ、ミヤキ	工具ナテ、ミヤキ、釉ナテ						P681-1	中厚式、管底、管口磨、管底	
	904	ビット 535	流	5	C-6	胴部			ミヤキ	ミヤキ、ナテ								P535	中厚式、管口、沈腐
	905	ビット 637	流	5	-	胴部			ミヤキ、ナテ	ミヤキ、ナテ								P637	中厚式、沈腐
	908	ビット 638	流	5	-	胴部			ナテ、ミヤキ	ナテ								P638	中厚式、沈腐
	907	ビット 638	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ								P638	中厚式
	908	ビット 609	流	5	B-5	胴部			ナテ	ナテ								P609	中厚式
	909	ビット 820	流	5	C-4	胴部			ナテ	ナテ								P820	中厚式
	920	ビット 312	流	5	D-3	胴部			ミヤキ	ナテ								P312-2	中厚式
	911	ビット 283	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ								P283	中厚式、沈腐、四角
	159	912	ビット 608	流	5	-	胴部			ミヤキ、ナテ	ミヤキ、ナテ								P608-2
913		ビット 502	流	5	-	底部			ナテ	ナテ、ハナ貝								P502-1	中厚式、沈腐、刺突文
914		ビット 313	流	5	D-3	胴部			ミヤキ	ナテ								P313-1	中厚式、沈腐
915		ビット 517	流	5	C-6	胴部			ナテ	ナテ								P517	中厚式
916		ビット 638	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ								P638	中厚式、管突
917		ビット 669	流	5	-	底部			ナテ	ナテ								P669-1	中厚式
918		ビット 424	流	5	-	胴部			ナテ	ナテ								P424-4	中厚式、沈腐、底残片
919		ビット 693	流	5	-	底部	14.2		ミヤキ	ミヤキ								P693	中厚式

第 11 表 縄文時代早期土器観察表

検出番号	図録番号	器種	分型	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整		胎土				取上番号	備考
							口径	底径	器高	器底	内面	外面	自然	焼成		
38	31	深鉢	1	D-3	Ⅲ	口縁部	28.0							26658 Ⅲ	中層式、貝殻釉	
	35	深鉢	1	E-5	Ⅲ	胴部								26420 Ⅲ	中層式、貝殻釉	
	36	深鉢	1	E-4	Ⅲ	底面								26337 Ⅲ	中層式、貝殻釉	
	37	深鉢	2-1	C-4	Ⅲ	口縁部								25736 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	38	深鉢	2-1	D-3	Ⅲ	口縁部								25722 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	39	深鉢	2-1	F-3	Ⅲ	口縁部								27965 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	40	深鉢	2-1	C-5	Ⅲ	口縁部								26535 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	41	深鉢	2-1	C-6	Ⅲ	口縁部								26521 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	42	深鉢	2-1	D-3	Ⅲ	口縁部								26676 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	43	深鉢	2-1	F-3	Ⅲ	口縁部								27130 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
39	44	深鉢	2-1	C-6	Ⅲ	胴部								26525 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	45	深鉢	2-1	G-11	Ⅲ	胴部								27739 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	46	深鉢	2-1	H-2	Ⅲ	胴部								27632 Ⅲ	下層式、沈澱	
	47	深鉢	2-1	E-3	Ⅲ	胴部								26917 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	48	深鉢	2-1	D-5	Ⅲ	胴部								26730 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	49	深鉢	2-1	B-4	Ⅲ	胴部								27498 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	51	深鉢	2-1	C-5	Ⅲ	底面								26538 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	52	深鉢	2-1	E-3	Ⅲ	底面								27441 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	53	深鉢	2-2	D-5	Ⅲ	口縁部								26278 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	54	深鉢	2-2	F-2	Ⅲ	口縁部								27067 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
40	55	深鉢	2-2	E-3	Ⅲ	口縁部								26912 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	56	深鉢	2-2	C-5	Ⅲ	口縁部								26522 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	57	深鉢	2-2	D-4	Ⅲ	口縁部								26864 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	58	深鉢	2-2	D-3	Ⅲ	口縁部								27353 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	59	深鉢	2-2	F-3	Ⅲ	口縁部								27025 Ⅲ	下層式、又付着、貝殻釉	
	60	深鉢	2-2	D-4	Ⅲ	口縁部								26456 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	61	深鉢	2-2	C-5	Ⅲ	口縁部								26259 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	62	深鉢	2-2	D-5	Ⅲ	口縁部								26220 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	63	深鉢	2-2	H-2	Ⅲ	胴部								27869 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	64	深鉢	2-2	D-3	Ⅲ	胴部								26672 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
41	65	深鉢	2-2	E-6	Ⅲ	胴部								27075 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	66	深鉢	2-2	D-3	Ⅲ	底面								26936 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	67	深鉢	2-3	E-4	Ⅲ	口縁部								27077 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	68	深鉢	2-3	D-4	Ⅲ	口縁部								26211 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	69	深鉢	2-3	D-5	Ⅲ	口縁部								26252 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	70	深鉢	2-3	F-3	Ⅲ	胴部								26997 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	71	深鉢	2-3	C-5	Ⅲ	胴部								26327 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	72	深鉢	2-3	E-6	Ⅲ	口縁部								27076 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	73	深鉢	2-3	D-3	Ⅲ	口縁部								26938 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	74	深鉢	2-3	E-3	Ⅲ	口縁部								26904 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
42	75	深鉢	2-3	D-3	Ⅲ	口縁部								26924 Ⅲ	下層式、線状貝殻釉	
	76	深鉢	2-3	D-4	Ⅲ	口縁部								26192 Ⅲ	下層式、線状貝殻釉	
	77	深鉢	2-3	H-1	Ⅲ	口縁部								27653 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	78	深鉢	2-3	C-3	Ⅲ	口縁部								25702 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	79	深鉢	2-3	C-5	Ⅲ	胴部								25951 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	80	深鉢	2-3	C-3	Ⅲ	胴部								26108 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	81	深鉢	2-3	C-3	Ⅲ	胴部								26635 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	82	深鉢	2-3	H-1	Ⅲ	胴部								27882 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	83	深鉢	2-3	E-4	Ⅲ	底面								27004 Ⅲ	下層式	
	84	深鉢	2-3	D-4	Ⅲ	底面	15.0	13.0	23.0					26977 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
43	85	深鉢	2-3	H-2	Ⅲ	口縁部								27692 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	86	深鉢	2-3	H-2	Ⅲ	底面								27835 Ⅲ	下層式、貝殻釉	
	87	深鉢	2-b	B-6	Ⅲ	胴部								26600 Ⅲ	下層式、沈澱	
	88	深鉢	2-b	B-6	Ⅲ	胴部								26885 Ⅲ	下層式、北タイプ、貝殻釉	
	89	深鉢	2-b	B-6	Ⅲ	胴部								24314 Ⅲ	下層式、北タイプ、貝殻釉	
	90	深鉢	2-b	E-6	Ⅲ	胴部								26254 Ⅲ	下層式、北タイプ、貝殻釉	
	91	深鉢	2-b	B-4	Ⅲ	胴部								26046 Ⅲ	下層式、北タイプ、貝殻釉	
	92	深鉢	2-c	H-2	Ⅲ	胴部								27882 Ⅲ	糸ノ丸式、糸網	
	93	深鉢	2-c	C-3	Ⅲ	胴部								25686 Ⅲ	糸ノ丸式、糸網	
	94	深鉢	2-c	D-6	Ⅲ	口縁部								26374 Ⅲ	糸ノ丸式、扉面付縄文	
44	95	深鉢	2-c	C-5	Ⅲ	口縁部								26971 Ⅲ	糸ノ丸式、扉面付縄文	
	96	深鉢	2-c	C-6	Ⅲ	胴部								26509 Ⅲ	糸ノ丸式、縄文	
	97	深鉢	3-a	C-4	Ⅲ	口縁部								25752 Ⅲ	無ノ神式、貝殻釉、熱赤	
	98	深鉢	3-a	C-4	Ⅲ	口縁部								26594 Ⅲ	無ノ神式、貝殻釉、熱赤	
	99	深鉢	3-a	B-4	Ⅲ	胴部								25284 Ⅲ	無ノ神式、貝殻釉、熱赤	
	100	深鉢	3-a	B-4	Ⅲ	胴部								26650 Ⅲ	無ノ神式、貝殻釉、熱赤	

第 11 表 縄文時代早期土器観察表

観覧番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整		胎土				取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白灰	黒点	石灰		
101	深鉢	3-a	B-4	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				26763 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、熱赤
102	深鉢	3-a	E-3	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				26682 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、熱赤
103	深鉢	3-a	B-4	Ⅲ	胴部				ナデ	ナデ				25854 集	瓶ノ埴式、目隠条痕
104	深鉢	3-c	C-4	Ⅱ	底面	10.4			ナデ	ナデ				26577 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、熱赤
105	深鉢	3-b	B-5	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				27431 集	瓶ノ埴式、目隠条痕
106	深鉢	3-b	B-4	Ⅱ	胴部	10.0			ナデ	ナデ				26033 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、熱赤
107	深鉢	3-b	B-3	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				25812 集	瓶ノ埴式、目隠条痕
108	深鉢	3-b	B-4	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				26627 集	瓶ノ埴式、目隠条痕
109	深鉢	3-b	B-4	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				25279 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文
110	深鉢	3-c	B-4	Ⅱ	胴部	10.4			ナデ	ナデ				26405 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、目隠網痕
111	深鉢	3-c	B-4	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				25431 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文
112	深鉢	3-c	B-4	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				27197 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文
113	深鉢	3-c	B-C3/4	Ⅱ	胴部	10.0			ナデ	ナデ				25267 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文
114	深鉢	3-c	C-5	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				25532 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文
115	深鉢	3-c	B-C4/6	Ⅱ	胴部	10.0			ナデ	ナデ				25761 集	瓶ノ埴式、目隠条痕、磨目文

第 12 表 縄文時代後・晩期土器観察表

観覧番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整		胎土				取上番号	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	白灰	黒点	石灰		
348	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21649 集	磨目式、内面文、四点文
349	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				22080 集	磨目式、内面文、四点文
350	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				22135 集	磨目式、内面文、四点文
351	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21766 集	沈線
352	深鉢	4	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				23073 集	沈線
353	深鉢	4	F-11	Ⅱ	胴部	10.0			ナデ	ナデ				22071 集	磨目式、内面文、四点文
354	深鉢	4	F-11	Ⅱ	胴部	10.0			ナデ	ナデ				22022 集	沈線、内面文、四点文
355	深鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21283 集	磨目式、四点文、沈線
356	深鉢	5	F-5	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21215 集	磨目式、沈線、四点文
357	深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21805 集	磨目式、沈線、四点文
358	深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				28357 集	磨目式、沈線、四点文
359	深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				23942 集	磨目式、沈線、四点文
360	深鉢	5	F-18	Ⅱ b	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				28039 集	磨目式、沈線、四点文
361	深鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				23575 集	磨目式、沈線、磨目文
362	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式、沈線、内面文、磨目網痕
363	深鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				23458 集	磨目式、沈線
364	深鉢	5	E-8	-	胴部	10.4			ナデ	ナデ				-	磨目式
365	深鉢	5	-	-	口縁部	10.4			ナデ、ミダキ	ナデ				2010-21 集	磨目式、沈線
366	深鉢	5	C-4	-	胴部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				210-12 集	磨目式
367	深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				20259 集	磨目式、沈線
368	深鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21841 集	磨目式、沈線
369	深鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				24563 集	磨目式、沈線
370	深鉢	5	E-8	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				28092 集	磨目式、沈線
371	浅鉢	5	D-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式、沈線
372	深鉢	5	G-10	Ⅱ b	口縁部	10.0			ミダキ、ナデ	ナデ				25328 集	磨目式、沈線、内面文、沈線
373	深鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21043 集	磨目式、沈線
374	深鉢	5	G-100	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				25748 集	磨目式、沈線
375	深鉢	5	C-5	Ⅱ b	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式
376	浅鉢	5	C-4	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				510 集	磨目式、沈線
377	浅鉢	5	G-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				24201 集	磨目式、沈線
378	深鉢	5	C-5	Ⅰ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式
379	深鉢	5	-	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				土量 2-19	磨目式
380	浅鉢	5	-	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				510-181	磨目式、沈線、内面文、磨目網痕
381	深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				25034 集	磨目式
382	深鉢	5	F-10	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式
383	深鉢	5	E-12	Ⅱ b	口縁部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				26942 集	磨目式
384	深鉢	5	F-5	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				21180 集	磨目式、沈線
385	深鉢	5	G-100	-	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式、沈線
386	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式
387	深鉢	5	C-4	Ⅰ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式
388	深鉢	5	E-9	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				25185 集	沈線、磨目
389	深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				24888 集	磨目式
390	深鉢	5	B-5	Ⅰ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				-	磨目式、ヌス付着
391	深鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				24177 集	磨目式
392	深鉢	5	F-5/2	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ	ナデ				24932 集	磨目式、沈線、ヌス付着
393	深鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				25633 集	磨目式
394	浅鉢	5	E-9	Ⅱ	口縁部	10.0			ナデ、ミダキ	ナデ				-	磨目式、沈線

第12表 縄文時代後・晩期土器観察表

検出番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)	調整		胎土				取上番号	備考	
							口縁	底縁	白灰	灰白	黒石	黒石			解石
305	深鉢	5	G-12	Ⅲ	口縁部		褐色	ナテ						2183A	中岳式式、沈瀬
306	深鉢	5	B-5	Ⅲ	口縁部		褐色	ナテ						1869B	中岳式式、沈瀬
307	深鉢	5	B-6	Ⅲb	口縁部		ナテ	ナテ						2100C	中岳式式、沈瀬
308	深鉢	5	G-100	Ⅲ	口縁部		ナテ	ナテ						2755A	赤木式、沈瀬
309	深鉢	5	F-2	Ⅰ	口縁部		ナテ	ナテ						-	中岳式式、沈瀬
400	深鉢	5	F-12	Ⅲ	口縁部		褐色	ナテ						21736	上加賀田式、沈瀬
401	深鉢	5	E-9	Ⅲ	口縁部		ナテ、褐色	ナテ、褐色						2525S	中岳式式
402	深鉢	5	G-12	Ⅲ	口縁部		褐色	ナテ						2186A	中岳式式、沈瀬
403	深鉢	5	H-19	Ⅲa	口縁部		褐色	ナテ						-	中岳式式
404	深鉢	5	E-5	Ⅲ	口縁部		褐色	ナテ						1844S	中岳式式、スス付着
405	深鉢	5	G-11	Ⅲ	口縁部	器底	褐色	ナテ						24367	中岳式式、スス付着、沈瀬
406	深鉢	5	C-6	V	口縁部	器底	褐色	ナテ						21433	中岳式式、スス付着
407	深鉢	5	D-8	-	口縁部		ナテ	ナテ						2028S	中岳式式
408	深鉢	5	-	-	口縁部		ナテ	ナテ						320-311集	中岳式式、遺構認定せず
409	浅鉢	5	C-4	-	口縁部		ナテ	ナテ						510	中岳式式、遺構認定せず
410	深鉢	5	D-8	-	口縁部		ナテ	ナテ						20356集	中岳式式
411	深鉢	5	D-8	-	口縁部		ナテ	ナテ						20217	中岳式式
412	浅鉢	5	D-8	-	口縁部		褐色	ナテ						20398	中岳式式
413	深鉢	5	C-3	I	口縁部		ナテ	ナテ						-	中岳式式
414	浅鉢	5	B-5	I	口縁部		ナテ	ナテ						-	中岳式式、口縁部欠損
415	深鉢	5	E-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						24531集	中岳式式、黒石、黒目
416	深鉢	5	B-5	I	器底		ナテ	ナテ						-	中岳式式、沈瀬、磁砂文
417	深鉢	5	C-4	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						18431	中岳式式、沈瀬、黒目突帯
418	浅鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						24961	中岳式式、黒目
419	深鉢	5	F-7	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ、工具ナテ						22965	中岳式式、沈瀬、黒目
420	深鉢	5	G-12	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						-	中岳式式、沈瀬、四角文
421	深鉢	5	F-3	Ⅲ	器底		ナテ	褐色	ナテ					20134	中岳式式、黒目
422	深鉢	5	B-6	I	器底		ナテ、褐色	ナテ						-	中岳式式、黒目、口縁部付着
423	深鉢	5	F-10	Ⅲb	器底		ナテ	ナテ						20300	中岳式式、三日月文
424	深鉢	5	F-11	Ⅲb	器底		褐色	褐色						29244	中岳式式、スス付着
425	深鉢	5	F-12	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						24983	中岳式式、沈瀬
426	深鉢	5	C-4	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						25772	中岳式式、沈瀬
427	深鉢	5	E-8	Ⅲ	器底		工具ナテ	ナテ						19171	中岳式式、沈瀬
428	深鉢	5	E-11	Ⅲ	器底		工具ナテ	工具ナテ、褐色						24333	中岳式式、沈瀬
429	深鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						25659集	中岳式式、沈瀬
430	深鉢	5	B-5	I	器底		工具ナテ	ナテ						-	中岳式式
431	深鉢	5	F-11	Ⅲb	器底		ナテ	工具ナテ						28221	中岳式式、磁粒粘着帯
432	深鉢	5	E-10	Ⅲ	器底		工具ナテ、褐色	褐色						23336	中岳式式、沈瀬
433	深鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						25006	中岳式式、沈瀬
434	深鉢	5	G-12	Ⅲ	器底		工具ナテ、褐色	ナテ、褐色						24216	中岳式式、沈瀬
435	深鉢	5	D-5	I	器底		ナテ、褐色	ナテ						-	中岳式式
436	深鉢	5	E-10	Ⅲ	器底		ナテ、褐色	褐色	ナテ					21211	中岳式式、沈瀬
437	深鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						24923	中岳式式、沈瀬
438	深鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						24992	中岳式式、沈瀬
439	深鉢	5	C-5	I	器底		褐色	ナテ						-	中岳式式
440	深鉢	5	D-8	-	器底		褐色	ナテ						20670	中岳式式、沈瀬
441	深鉢	5	H-11	Ⅲ	器底		ナテ、褐色	ナテ、褐色						27723	中岳式式、スス付着
442	深鉢	5	F-18	Ⅲb	器底		ナテ、褐色	ナテ、褐色						28663	中岳式式、スス付着
443	深鉢	5	D-8	-	器底		ナテ、褐色	ナテ						20291	中岳式式、スス付着
444	深鉢	5	G-18	Ⅲb	器底		ナテ	ナテ						28903	中岳式式
445	深鉢	5	F-11	Ⅲ	器底		ナテ、褐色	ナテ						25025	中岳式式
446	深鉢	5	E-8	Ⅲa	器底		ナテ	ナテ						19112	中岳式式
447	深鉢	5	E-11	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						23742	中岳式式
448	深鉢	5	B-5	I	器底		工具ナテ	工具ナテ						-	中岳式式、沈瀬
449	深鉢	5	E-10	Ⅲ	器底		工具ナテ	ナテ						23332	中岳式式、沈瀬
450	深鉢	5	C-6	I	器底		工具ナテ、褐色	ナテ、褐色						-	中岳式式、沈瀬
451	深鉢	5	F-9	Ⅲb	器底		褐色	ナテ						29114	中岳式式
452	深鉢	5	E-10	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						23998	中岳式式、沈瀬
453	深鉢	5	E-9	Ⅲ	器底		ナテ	ナテ						34679	中岳式式
454	深鉢	5	D-6	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						19948集	中岳式式、スス付着
455	深鉢	5	E-12	Ⅲb	器底		工具ナテ	ナテ						29008	中岳式式
456	深鉢	5	E-12	Ⅲb	器底		ナテ	ナテ						29224	中岳式式
457	深鉢	5	C-6	I	器底		ナテ	ナテ						-	中岳式式
458	深鉢	5	E-11	Ⅲ	器底		ナテ	工具ナテ						24817	中岳式式、沈瀬
459	深鉢	5	-	I	器底		褐色	ナテ						-	中岳式式、沈瀬
460	深鉢	5	E-11	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						24790集	中岳式式
461	深鉢	5	D-10	Ⅲ	器底		褐色	ナテ						23607集	中岳式式、スス付着

第12表 縄文時代後・晩期土器観察表

探検番号	図録番号	器種	分期	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土				取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白灰	灰白	黒目	石英		
92	462	深鉢	5	D-8	Ⅰ	胴部				ナデ	ナデ					20234 他	中倉Ⅱ式、スス付着
	463	浅鉢	5	F-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○	○		22985	大倉式、沈濁
	464	浅鉢	5	D-8	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ミダキ		○	○		20249	晩期、沈濁
	465	横梨瓦鉢	5	E-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○	○		20314	晩期、沈濁
	466	横梨瓦鉢	5	E-10	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ					23209	晩期、沈濁
	467	横梨瓦鉢	5	D-7	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ		○	○		19957	晩期
	468	横梨瓦鉢	5	D-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○		20196	晩期、沈濁
	469	横梨瓦鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ					20160	晩期、沈濁
	470	横梨瓦鉢	5	B-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ		○	○		-	晩期、沈濁
	471	横梨瓦鉢	5	G-12	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ		○	○		24875	晩期
	472	横梨瓦鉢	5	C-6	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		22022	晩期、沈濁
	473	横梨瓦鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		22756	晩期、沈濁
	474	横梨瓦鉢	5	F-18	Ⅱ b	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		20679	晩期、沈濁
	475	横梨瓦鉢	5	F-11	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		27283	晩期、沈濁
	476	横梨瓦鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○		27045	晩期、沈濁
	477	横梨瓦鉢	5	D-8	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		20302	晩期
	478	浅鉢	5	-	-	-	口縁部			ナデ	ナデ					1.3-2-15	中倉Ⅱ式、沈濁、遺構固定ナデ
	479	横梨瓦鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		-	晩期、沈濁
	480	横梨瓦鉢	5	G-18	Ⅱ a	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		-	晩期、沈濁、黒川式
	481	横梨瓦鉢	5	E-11	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		-	晩期、沈濁
	482	横梨瓦鉢	5	D-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○		-	晩期、黒川式
	483	横梨瓦鉢	5	E-8	Ⅱ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		19669	晩期、沈濁
	484	横梨瓦鉢	5	E-8	Ⅱ a	口縁部				ミダキ	ミダキ			○		19105	晩期、沈濁
	485	横梨瓦鉢	5	E-8	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ					19697	晩期
	486	横梨瓦鉢	5	F-10	Ⅱ b	胴部				ミダキ	ミダキ			○		20261	晩期、沈濁
	487	鉢	5	C-5	Ⅱ	底部		0.4		ナデ	ナデ					26747	晩期
	488	鉢	5	F-18	Ⅱ b	底部		14.6		ミダキ	ミダキ					28212	晩期
	489	壺	5	E-8	Ⅱ a	胴部		6.7		ナデ	指摺り痕			○	○	19114	晩期
	490	不明	5	H-19	Ⅱ a	底部		7.0		ナデ	ナデ					-	一基
	491	不明	5	E-11	Ⅱ	底部		14.4		ナデ	ミダキ					21499	晩期
	492	不明	5	F-11	Ⅱ	底部		6.0		ナデ	ナデ			○	○	20813	晩期
	493	不明	5	D-9	Ⅰ	胴部		7.7		指摺り痕	ナデ					-	一基
	494	不明	5	B-4	Ⅰ	底部		0.6		ナデ	ナデ					-	一基
	495	不明	5	B-4	Ⅱ	底部		0.0		工具ナデ	工具ナデ			○	○	22636	晩期
	496	不明	5	F-18	Ⅱ b	底部		7.0		指ナデ	ナデ					27984	晩期
	497	不明	5	F-7	Ⅱ	底部		10.8		ナデ	ナデ					22006	晩期
	498	不明	5	F-10	-	底部		14.2		ナデ	ナデ					-	一基
	499	横梨瓦鉢	6	G-12	Ⅱ	胴部	3.4			ミダキ	ミダキ					21837 他	玉縁口縁
	500	横梨瓦鉢	6	G-12	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	21836	玉縁口縁
	501	深鉢	7	C-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ナデ					-	口唇から認めに下がる三角突起
	502	深鉢	7	H-19	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ					27941	三角突起
	503	深鉢	7	E-5	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ナデ					-	指目突起
	504	深鉢	7	C-6	Ⅱ	胴部				ナデ	ミダキ			○		21013	中倉Ⅱ式、三角突起
	505	深鉢	7	D-4	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ナデ			○	○		口唇に割入、突起
	506	土製加工品	縄文前期	F-18	Ⅱ b	-	-	-	-	ナデ	ナデ					20664	-
	507	土製加工品	縄文前期	F-18	Ⅱ b	-	-	-	-	ナデ	ミダキ					28251	スス付着
	508	土製加工品	縄文前期	F-11	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ミダキ					25957	-
	509	土製加工品	縄文前期	E-11	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ナデ			○	○	24512	-
510	土製加工品	縄文前期	C-4	Ⅰ	-	-	-	-	ナデ	ミダキ			○	○	-	-	
511	土製加工品	縄文前期	E-10	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ナデ			○	○	25272	-	
512	土製加工品	縄文前期	F-11	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ナデ			○	○	23933	-	
513	土製加工品	縄文前期	D-10	Ⅱ	-	-	-	-	ミダキ	ミダキ			○	○	-	-	
514	土製加工品	縄文前期	E-10	Ⅱ	-	-	-	-	ナデ	ナデ			○	○	23294	-	
515	土製加工品	縄文前期	F-4	Ⅰ	-	-	-	-	ミダキ	ミダキ			○	○	SK156	-	

第13表 弥生時代土器観察表

探検番号	図録番号	器種	分期	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整		胎土				取上番号	備考
							口径	底径	器高	外面	内面	白灰	灰白	黒目	石英		
105	551	甕	弥生初期	G-18	Ⅱ a	口縁部				ナデ	ナデ	ミダキ				2703 他	-
	552	甕	弥生初期	D-7	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ナデ			○	○	-	-
	553	甕	弥生初期	F-18	Ⅱ b	口縁部				ミダキ	ナデ			○	○	28033	-
	554	甕	弥生初期	G-19	Ⅱ b	口縁部				ミダキ	ミダキ			○	○	27942	-
	555	甕	弥生初期	B-5	Ⅰ	口縁部				ミダキ	ミダキ			○	○	-	-
	556	甕	弥生初期	E-11	Ⅱ	口縁部				ナデ	ナデ					23738	-
	557	甕	弥生初期	F-5	Ⅰ	口縁部				ナデ	ハナ目			○	○	-	-
	558	甕	弥生初期	F-18	Ⅱ b	口縁部				ナデ	ナデ				○	28032	スス付着

第 13 表 弥生時代土器觀察表

総目録番号	図類	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)	調整		胎土				取上番号	備考
							外面	内面	白灰	灰白	石灰	頁石		
559	甕	煎物甕	C-5	I	胴部		ナデ	ナデ						
560	甕	入来	F-11	Ⅱ	口縁部	6.1	ナデ	ナデ		○			21700	三角尖嘴
561	甕	入来	E-11	Ⅱ	口縁部	5.1	ナデ	ナデ		○			22961 缶	
562	甕	入来	E-11	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ					21720	
563	甕	入来	F-10	Ⅱ b	口縁部	5.1	ハナ目	ナデ			○		29162 浅鉢	
564	甕	山ノ口	E-11	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		22085	
565	甕	山ノ口	F-12	Ⅱ	口縁部	2.0	ナデ	ナデ		○			25516 缶	三角尖嘴
566	甕	入来	F-10	Ⅱ b	口縁部	18.6	ナデ	ナデ		○	○		26686 缶	浅鉢、スス付着
567	甕	山ノ口	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		24725	尖嘴
568	甕	山ノ口	D-9	I	口縁部	2.1	ナデ	ナデ			○		-	三角尖嘴
569	甕	山ノ口	E-10	Ⅱ	胴部	2.0	ナデ	ナデ			○		22329 缶	三角尖嘴、スス付着
570	甕	山ノ口	F-10	Ⅱ b	胴部	2.0	ナデ	ナデ、ハナ目		○	○		26481 缶	三角尖嘴、スス付着
571	甕	弥生	G-11	Ⅱ	底部	6.6	ナデ	ナデ		○	○		21280	中器
572	甕	弥生	G-11	Ⅱ	底部	5.8	ハナ目	ナデ		○	○		S313-3	スス残存
573	甕	弥生	G-11	Ⅱ	底部	5.8	ナデ	ナデ		○	○		21972	中器
574	甕	弥生	F-10	Ⅱ b	底部		ナデ	ナデ			○		28465	中器
575	甕	弥生	E-11	Ⅱ	底部	5.6	ナデ	ナデ		○	○		-	中器
576	甕	弥生	D-10	Ⅱ	底部	6.7	ハナ目、工具ナデ	工具ナデ		○	○		24763	中器
577	甕	弥生	E-12	Ⅱ b	底部	8.4	ナデ	-		○	○		26344	中器
578	甕	弥生	E-10	Ⅱ	底部	8.0	ナデ	-		○	○		24608	中器
579	甕	弥生	E-8	Ⅱ a	底部	4.3	工具ナデ	ナデ		○	○		19272	中器
580	甕	弥生	D-8	Ⅱ	底部	5.5	ナデ	-		○	○		21514	中器
581	甕	弥生	F-11	Ⅱ	口縁部	26.0	ナデ、ハナ目	ハナ目、ナデ			○		25766 缶	三角尖嘴
582	甕	弥生	F-11	Ⅱ	口縁部	26.0	ナデ、ハナ目	ハナ目、ナデ			○		21769 缶	三角尖嘴
583	甕	弥生	F-11	-	口縁部		ナデ、ハナ目	ハナ目、ナデ			○		26570	三角尖嘴
584	甕	弥生	E-9	Ⅱ	胴部		ナデ	ナデ			○		25110	三角尖嘴
585	甕	山ノ口	F-18	Ⅱ b	口縁部	26.0	ナデ	ナデ		○	○		28038 缶	三角尖嘴
586	甕	弥生	E-12	Ⅱ b	口縁部	26.2	ナデ	ナデ			○		28356	M字状尖嘴
587	甕	弥生	E-12	Ⅱ b	口縁部	23.3	ナデ	ナデ、煎餅付着			○		28348 缶	
588	甕	弥生	E-11	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		22737	
589	甕	弥生	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	煎餅付着、ナデ		○	○		22595	三角尖嘴
590	甕	弥生	E-10	Ⅱ	胴部		ナデ	ハナ目、ナデ		○	○		22673	M字状尖嘴
591	甕	弥生	E-9	Ⅱ	胴部		ナデ	ナデ			○		23414	三角尖嘴
592	甕	弥生	D-9	Ⅱ	胴部		ナデ	ナデ			○		22440	三角尖嘴
593	甕	弥生	E-12	Ⅱ b	胴部		ナデ	ナデ		○	○		29248	M字状尖嘴
594	深鉢	弥生	C-6	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ					2109 釜	尖嘴
595	深鉢	弥生	E-8	Ⅱ a	口縁部		ナデ	ナデ			○		-	三角尖嘴
596	深鉢	弥生	H-1	-	口縁部		ナデ	ナデ					-	一底
597	鉢	弥生	E-7	I	口縁部		1.5ギキ	ナデ			○		-	三角尖嘴
598	鉢	弥生	H-1	-	口縁部		1.5ギキ	ナデ			○		-	一底
599	鉢	山ノ口	F-12	-	口縁部	2.6	ナデ	工具ナデ		○	○		26522	三角尖嘴
600	鉢	弥生	D-6	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		19946	尖嘴
601	鉢	弥生	D-7	I	口縁部		1.5ギキ	ナデ			○		-	三角尖嘴
602	鉢	入来	D-6	I	口縁部		1.5ギキ	ナデ			○		-	尖嘴
603	深鉢	弥生	B-5	I	口縁部		1.5ギキ	ナデ			○		-	尖嘴
604	鉢	弥生	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		24728	三角尖嘴
605	鉢	弥生	E-12	Ⅱ b	胴部	11.4	ナデ	ナデ		○	○		28342	尖嘴、中器
606	高坏	弥生	F-3	Ⅱ	胴部	2.0	ナデ	ナデ			○		20107	尖嘴
607	甕	山ノ口	E-11	Ⅱ b	口縁部	2.0	ナデ	ナデ			○		28628	
608	甕	弥生	E-11	Ⅱ h	口縁部	2.1	ナデ	ナデ			○		28622 缶	
609	甕	弥生	G-11	Ⅱ	口縁部	2.0	ナデ	ナデ			○		21267	
610	甕	弥生	F-10	Ⅱ b	口縁部	2.1	ナデ	ナデ			○		20336	スス付着
611	甕	弥生	E-12	Ⅱ b	口縁部	2.1	ナデ	ナデ			○		28349	
612	甕	弥生	E-10	Ⅱ	口縁部	2.1	ミナギ、ナデ	ナデ			○		22248	
613	甕	山ノ口	F-12	-	口縁部	2.6	ナデ	ナデ			○		20470	
614	甕	弥生	G-F-12	Ⅱ	口縁部	2.4	煎餅付着、ナデ	ナデ			○		24392 缶	
615	甕	弥生	G-12	-	口縁部	2.4	ナデ	ナデ			○		-	
616	甕	山ノ口	F-10	Ⅱ b	口縁部	2.2	煎餅付着、ナデ	煎餅付着、ナデ			○		28443	
617	甕	弥生	F-5	I	口縁部		ナデ	ナデ			○		-	口縁部割丸
618	甕	山ノ口	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		22174	轆轤状文
619	甕	山ノ口	F-10	-	口縁部		ナデ	ナデ			○		-	一底
620	甕	弥生	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		22228	浅鉢
621	甕	山ノ口	E-10	Ⅱ	口縁部		ナデ	ナデ			○		22160	轆轤状文
622	小笠形	弥生	E-8	I	口縁部	2.0	ナデ	ナデ			○		-	
623	小笠形	弥生	E-11	Ⅱ b	口縁部	2.4	ナデ	ナデ			○		28424	
624	甕	山ノ口	D-8	Ⅱ	口縁部	2.8	ナデ	ナデ			○		21512	轆轤(蒭曲文)
625	甕	弥生	E-10	Ⅱ	胴部		ナデ	ナデ			○		22652	尖嘴

第13表 弥生時代土器観察表

群別 番号	図録 番号	器種	分期	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整		胎土				取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	自然	焼目	赤目			石灰
109	627	甗	山ノ口	F-11	Ⅲ b	底部				ナデ	ナデ			○	○	28820	繩直底式文
	628	甗	山ノ口	E-10	Ⅲ	底部				ナデ	ナデ			○	○	28968	丹塗リ・縦比線
	629	甗	山ノ口	F-12	Ⅲ	底部				ナデ	ナデ			○	○	29496	縦斜
	630	甗	弥生 E-10	Ⅲ	器一部					ナデ	ハタ目・ナデ			○	○	22185 集	比線
	631	甗	弥生 E-10	Ⅲ	底部					ハタ目・ナデ	ハタ目・顔線瓦葺			○	○	23153 集	三角尖底
	632	甗	弥生 F-10	Ⅲ b	底部	6.8				ナデ	ナデ	○	○	○	○	28270	中期・コテ残存
	633	甗	弥生 F-11	Ⅲ b	底部	6.9				器ナデ・ナデ	器ナデ・顔線瓦葺			○	○	28426	中期
	634	甗	弥生 F-11	Ⅲ	底部	18.0				ナデ・ミヅキ	常規			○	○	28118	中期
	635	甗	弥生 E-5	I	底部	19.4				常規	ナデ			○	○	-	-
	636	甗	弥生 E-8	Ⅲ a	底部	19.5				工具ナデ	ナデ			○	○	19062	-
	637	甗	弥生 D-4-5	I	底部	7.6				ミヅキ	常規	○	○	○	○	-	-
	638	甗	弥生 G-11	Ⅲ	底部	6.4				ナデ	器ナデ・顔線瓦葺			○	○	21968	-
	639	甗	弥生 E-11	Ⅲ	底部	25.0				器ナデ・ナデ	ナデ			○	○	22794	-
	640	甗	弥生 E-8	Ⅲ	底部	18.4				ナデ・工具ナデ	ナデ			○	○	19703	-
	641	甗	弥生 G-12-II	Ⅲ	底部	19.0				ナデ	ナデ			○	○	21231 集	中期
	642	甗	弥生 I-19	-	底部	5.0				ミヅキ・ナデ	工具ナデ			○	○	一基	中期
	643	甗	弥生 E-10	Ⅲ	底部	4.2				ナデ・工具ナデ	ナデ・工具ナデ			○	○	22289	中期
	644	甗	弥生 B-5	I	底部	0.9				ナデ	ナデ			○	○	-	中期
	645	甗	弥生 D-8	-	底部	0.9				ナデ	ナデ			○	○	20234	-
	646	甗	弥生 F-18	Ⅲ b	底部	16.8				工具ナデ・顔線瓦葺	ナデ			○	○	28250	中期
	647	甗	弥生 C-6	Ⅲ	底部	17.6				器ナデ・ナデ	ナデ			○	○	21446	中期
	648	甗	弥生 E-12	Ⅲ	底部	5.4				ナデ	ナデ			○	○	25254	-
649	甗	弥生 F-11	Ⅲ b	底部	16.0				器ナデ	器ナデ			○	○	25236	-	
650	甗	弥生 D-8	-	底部	16.0				ナデ	ナデ			○	○	20245	-	
651	甗	弥生 F-11	Ⅲ b	底部	9.6				工具ナデ	工具ナデ			○	○	28836	中期	
652	甗	弥生 E-12	Ⅲ b	底部	7.6				ナデ	ナデ・顔線瓦葺			○	○	28284	-	
653	甗	弥生 F-12	Ⅲ	底部	0.8				ナデ・ミヅキ	工具ナデ			○	○	20683	-	
654	甗	弥生 F-11	Ⅲ	底部	5.4				ナデ	ナデ・顔線瓦葺			○	○	21436 集	-	
655	甗	山ノ口	F-12	-	底部	16.0			ナデ	ナデ			○	○	20533	-	
656	甗	弥生 F-9	Ⅲ b	底部	16.0				ナデ	ナデ・ミヅキ			○	○	28865	-	
657	小型甗	弥生 D-4-5	I	底部	3.2				ナデ・顔線瓦葺	工具ナデ			○	○	-	中期	
658	甗	弥生 F-4	I	底部	3.2				ナデ・工具ナデ	-			○	○	-	中期・コテ残存	
659	甗	弥生 E-12	-	底部	3.2				ナデ	ナデ			○	○	-	一基 中期	
660	小型甗	弥生 E-4	Ⅲ	底部	11.0				ナデ	ナデ			○	○	18377	-	
661	小型甗	弥生 F-11	-	底部	2.0				ナデ	ナデ			○	○	20666	中期	
662	甗	弥生 G-12	Ⅲ	底部	5.6				ナデ・ハタ目・ミヅキ	ナデ			○	○	21409	-	
663	小型甗	弥生 F-18	表土	底部	16.0				ナデ	ナデ			○	○	-	一基 中期	
664	小型甗	弥生 E-11	I	底部	11.8				ナデ	ナデ			○	○	-	中期	
665	小型甗	弥生 E-8	Ⅲ a	底部	2.6				ナデ	ナデ			○	○	-	中期	
666	短期甗	弥生 E-9	Ⅲ	底部	10.2	3.8	7.5		工具ナデ	工具ナデ・器ナデ			○	○	22546	-	

第14表 古墳時代土器観察表

群別 番号	図録 番号	器種	分期	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整		胎土				取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	自然	焼目	赤目			石灰
132	708	甗	成川	F-12	-	口縁部	38.5			ナデ	ナデ			○	○	20403 集	スス付着・眉目突起
	709	甗	成川	E-12	-	口縁部	38.5			ナデ	ナデ			○	○	20415	眉目突起
	710	甗	成川	F-12-13	I-Ⅲ	口縁部	38.5			ナデ	ナデ			○	○	20537 集	眉目突起
	711	小型甗	成川	F-11	Ⅲ b	口縁部	38.4			ナデ	ナデ			○	○	28297	眉目突起
	712	甗	成川	F-12	Ⅲ a	表土	底部			ナデ	ナデ			○	○	一基	眉目突起
	713	甗	成川	E-6	Ⅲ	底部				ハタ目	ハタ目・ナデ			○	○	19924	三角尖底
	714	甗	成川	E-8	Ⅲ	口縁部	38.4			ハタ目・ナデ	工具ナデ			○	○	18842	スス付着
	715	甗	成川	E-10	Ⅲ	口縁部	38.5			ナデ	ナデ			○	○	23295	スス付着・比線
	716	甗	成川	D-9	Ⅲ	口縁部	38.2			ナデ・ハタ目	ナデ・ハタ目			○	○	25127	スス付着
	717	甗	成川	F-9-10	表土	口縁部	38.7			ナデ	ナデ・ハタ目			○	○	一基	-
	718	甗	成川	E-3	I	口縁部	38.3			ナデ・ハタ目	ナデ			○	○	-	比線
	719	小型甗	成川	E-10	Ⅲ	口縁部	29.0			ナデ	ハタ目・ナデ			○	○	-	スス付着
	720	甗	成川	E-10	Ⅲ	口縁部	38.2			ハタ目・ナデ	ナデ			○	○	23306	-
	721	甗	成川	D-7	I	口縁部	38.1			ハタ目	ナデ			○	○	-	スス付着
	722	甗	成川	F-11	Ⅲ b	口縁部	37.3			工具ナデ・ハタ目	ナデ・ハタ目			○	○	28842 集	-
	723	甗	成川	D-8	Ⅲ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○	19384	-
	724	甗	成川	E-5	I	口縁部				ハタ目・ナデ	ハタ目・ナデ			○	○	-	-
	725	甗	成川	F-11	Ⅲ b	口縁部	37.4			工具ナデ	工具ナデ			○	○	28948	スス付着
726	甗	成川	E-11	Ⅲ b	口縁部				ハタ目・ナデ	ハタ目・ナデ			○	○	2606 集	-	
727	甗	成川	E-10	Ⅲ	口縁部	28.8			ナデ	ナデ			○	○	22320	スス付着	
728	甗	成川	F-12	Ⅲ	口縁部				ハタ目・ナデ	ハタ目・ナデ			○	○	30927	-	
729	甗	成川	F-11	Ⅲ b	口縁部	38.0			工具ナデ・ハタ目	工具ナデ・ハタ目			○	○	28491 集	-	

第14表 古墳時代土器観察表

種別番号	墳墓番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)		調整			胎土			取上番号	備考	
							口径	底径	器高	外面	内面	白灰	礫石	石灰			磁石
133	730	甗	成川	F-11	Ⅰ	胴部				胎土	胎土				一括		
	731	甗	成川	E-10	Ⅱ	底部				工具十ナ	工具十ナ				39612		
	732	甗	成川	E-11	Ⅱ	胴部				ナデ・ハク日	ナデ				23653	スス付巻	
	733	甗	成川	F-10	Ⅱ	表面				ナデ	工具十ナ				一括	スス付巻	
	734	甗	成川	D-9	Ⅲ	胴部				ナデ	ナデ・器蓋付巻				22495	スス付巻	
	735	甗	成川	E-7	Ⅰ	胴部				ナデ	工具十ナ				一括	スス付巻	
	736	甗	成川	E-11	Ⅱ	胴部				ハク日・ナデ	ナデ				23665	スス付巻	
	737	甗	成川	F-11	Ⅱ	Ⅱ b	胴部			ナデ	ナデ				38407	スス付巻	
	738	甗	成川	E-10	Ⅱ	胴部				ナデ	工具十ナ				22592	スス付巻・黒敷	
134	739	甗	成川	E-11	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ				22745	焼	
	740	甗	成川	F-11	Ⅱ	胴部				ハク日・ナデ	ツギキ・工具十ナ				35774	スス付巻	
	741	甗	成川	D-9	Ⅲ	胴部付巻				工具十ナ・器蓋付巻	器蓋付巻				23472	スス付巻	
	742	甗	成川	E-12	Ⅱ a	胴部付巻				ハク日・ナデ	ナデ				一括	スス付巻	
	743	甗	成川	E-9	Ⅱ	胴部付巻				ナデ	工具十ナ				23538	スス付巻	
	744	甗	成川	E-12	Ⅱ b	胴部付巻				ナデ	ナデ				28339	コケ残	
	745	甗	成川	F-11	Ⅱ a	胴部付巻				ナデ	ナデ				27362		
	746	甗	成川	E-11	Ⅱ	胴部付巻				ハク日・ナデ	ナデ				23673		
	747	甗	成川	E-11	Ⅱ	胴部付巻				ナデ・器蓋付巻	工具十ナ・器蓋付巻				25115		
	748	甗	成川	F-11	Ⅱ a	胴部付巻				ハク日・器蓋付巻	器蓋付巻				一括	コケ残	
	749	甗	成川	E-12	Ⅱ b	胴部付巻				ナデ	ナデ				28358		
	750	小型甗	成川	E-10	Ⅰ	胴部付巻				ナデ	ナデ				-	-	
	751	甗	成川	E-11	Ⅱ	底部	7.8			ハク日・ナデ	ハク日・ナデ				24258	コケ残	
	752	甗	成川	E-7	Ⅰ	底部	9.8			工具十ナ	器蓋付巻				-	-	
	753	甗	成川	F-11	Ⅱ b	底部	6.8			ハク日・ナデ	ナデ				39612	コケ残	
754	甗	成川	E-11	Ⅱ	底部	7.2			ハク日・ナデ	ナデ				25878	焼		
755	甗	成川	E-10	Ⅰ	底部	6.6			ナデ	工具十ナ				25593	コケ残		
135	756	甗	成川	F-11	Ⅱ	底部	9.2			ナデ・器蓋付巻	ナデ				23830	焼	
	757	甗	成川	E-11	Ⅱ	底部	9.6			ナデ	ナデ				22744		
	758	甗	成川	E-11	Ⅱ	底部	8.0			工具十ナ	工具十ナ・器蓋付巻				22708		
	759	小型甗	成川	D-3	-	底部	6.7			ナデ	ナデ				-	-	
	760	小型甗	成川	E-10	Ⅰ	底部	6.8			ナデ	ナデ				22315		
	761	甗	成川	F-11	Ⅱ	底部	10.8			工具十ナ・ナデ	工具十ナ・ナデ				21719		
	762	甗	成川	E-8	-	胴部	8.0			工具十ナ	ナデ・工具十ナ				18880		
	763	甗	成川	D-9	-	胴部	25.4			器蓋付巻・ナデ	器蓋付巻・ナデ				23448		
	764	舞台付甗	成川	D-12	Ⅱ	胴部	28.0			ハク日・ナデ	ハク日・ナデ・器蓋付巻				24774	焼	
136	765	甗	成川	D-9	-	胴部	27.2			ナデ	ナデ				25124		
	766	甗	成川	E-10	-	胴部	38.4			ナデ	ナデ				23206		
	767	甗	成川	F-12	Ⅱ	胴部	38.0			ナデ	ナデ				29423		
	768	甗	成川	F-10	Ⅱ	Ⅱ b	底部			工具十ナ	ハク日				一括	スス付巻	
	769	甗	成川	F-8	-	胴部				ナデ	ナデ				33015	三角突巻	
	770	甗	成川	F-4	-	胴部				ナデ	ナデ				-	三角突巻	
	771	甗	成川	F-10	Ⅱ	Ⅱ b	底部			工具十ナ	工具十ナ				38465		
	772	甗	成川	D-10	-	底部	16.0	9.4	17.8	工具十ナ	工具十ナ・器蓋付巻				24699	スス付巻	
	773	甗	成川	F-11	Ⅱ	Ⅱ b	底部	10.0	7.6	9.6	工具十ナ・器蓋付巻	工具十ナ・器蓋付巻				28004	焼
	774	甗	成川	E-10	-	底部	15.5			ハク日・器蓋付巻	ハク日				22204		
	775	小型甗	成川	D-6	Ⅳ	底部	7.5	5.2	6.8	工具十ナ・器蓋付巻	工具十ナ・器蓋付巻・器蓋付巻				19000		
	776	小型甗	成川	E-10	-	底部	6.6	3.8	7.1	工具十ナ・器蓋付巻	工具十ナ・器蓋付巻				23599	スス付巻	
	777	甗	成川	D-9	-	底部	5.8			器蓋付巻・ナデ	ナデ				23294		
778	甗	成川	F-11	-	底部	5.2			ナデ・器蓋付巻	ナデ				20770	コケ残		
137	779	手控石	成川	D-9	Ⅲ	胴部	6.0			器蓋付巻	器蓋付巻				-		
	780	手控石	成川	E-8	Ⅰ	胴部	9.4			器蓋付巻	器蓋付巻・ナデ				-		
	781	手控石	成川	E-9	Ⅲ	胴部				器蓋付巻	器蓋付巻				25111		
	782	手控石	成川	D-8	Ⅰ	底部	2.8			ナデ	ナデ				-		
	783	手控石	成川	E-9	Ⅲ	底部	2.2			ハク日・ナデ	ハク日・ナデ				25333		
	784	壺	成川	F-10	Ⅱ	胴部				ハク日	ハク日・器蓋付巻				29217	黒敷	
	785	壺	成川	F-11	Ⅱ	底部	13.2	4.3	31.4	工具十ナ・器蓋付巻	工具十ナ・器蓋付巻				28817	焼	
	786	壺	成川	F-11	Ⅱ	Ⅱ b	胴部	12.4			器蓋付巻・ナデ	器蓋付巻・ナデ				38386	
	787	壺	成川	E-11	Ⅱ	Ⅱ b	胴部	12.0			ナデ	ナデ				29015	
138	788	壺	成川	-	-	胴部	12.2			ハク日・ナデ	ナデ				307		
	789	壺	成川	E-10	Ⅱ	胴部	19.4			七郎キ・ナデ	ナデ				22251	焼・黒敷	
	790	壺	成川	E-9	Ⅰ	胴部	12.8			ナデ	ナデ・七郎キ				25332	内面黒色	
	791	壺	成川	E-10	Ⅱ	胴部	12.4			ナデ	七郎キ・ナデ				24660	袋帯・黒敷	
	792	壺	成川	F-11	Ⅱ	Ⅱ b	胴部	16.0			工具十ナ	工具十ナ				38903	胴部黒縁成状文
	793	壺	成川	F-11	Ⅱ	Ⅱ b	胴部			ハク日・ナデ	器蓋付巻・ナデ				28900	焼	
	794	壺	成川	E-10	Ⅱ	胴部				ハク日・ナデ	ナデ				23305		
	795	壺	成川	E-10	Ⅱ	胴部				ハク日・ナデ	ナデ				23291		
	796	壺	成川	F-G-11	Ⅱ	胴部				ナデ	ナデ・ハク日				28672	焼・袋帯	

第 14 表 古墳時代土器観察表

探検番号	図録番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整				取上番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白灰	灰白			雲母	石英
138	797	甕	成田 E-10	Ⅲ	胴部								○	○	2275 他	横式甕	
	798	甕	成田 G-11	Ⅲ	胴部								○	○	2126	袋甕	
	799	甕	成田 E-8	Ⅲ a	胴部								○	○	-	袋甕	
	800	甕	成田 F-11	Ⅲ b	胴部								○	○	29616	頸肩突起	
	801	甕	成田 F-10-11	Ⅲ	胴部								○	○	2723 他	頸肩突起	
	802	甕	成田 E-7	Ⅲ	胴部									○		18662	頸肩突起
	803	甕	成田 D-8	I	胴部									○		-	頸肩突起
	804	甕	成田 C-6	Ⅲ	胴部									○	○	-	頸肩突起
	805	甕	成田 I	-	胴部									○	○	-	横式甕
	806	甕	成田 E-11	Ⅲ	胴部									○	○	24529	横式甕
807	甕	成田 E-11	Ⅲ	胴部	4.8								○	○	22759 他	頸肩突起・底淺	
808	甕	成田 E-8	Ⅲ	胴部	18.2								○	○	19905	コゲ残存	
809	甕	古瀬 F-11	Ⅲ	胴部	7.4								○	○	29093 他	スス付者	
810	甕	成田 E-8	Ⅲ a	底部	16.8								○	○	19230 他	底淺	
811	甕	成田 E-10	Ⅲ	底部	7.0								○	○	24719 他	スス付者・コゲ残存	
812	甕	成田 F-10	Ⅲ b	底部	14.2								○	○	29081	コゲ残存	
813	甕	成田 F-10	Ⅲ b	底部	5.2								○	○	26880	-	
814	小型甕	成田 E-9	Ⅲ	底部	14.0								○	○	23240	-	
815	甕	成田 F-10	Ⅲ b	底部	3.8								○	○	25313	スス付者	
816	甕	成田 D-9	Ⅲ	底部	5.5								○	○	25577	コゲ残存	
817	甕	成田 E-8	I	底部	12.8								○	○	-	底淺	
818	甕	成田 D-7	I	底部	16.0								○	○	-	-	
819	甕	成田 F-11	-	底部	3.8								○	○	30357	-	
820	甕	成田 E-12	Ⅲ b	底部	14.4								○	○	26317	-	
821	平底甕	成田 E-6	I	底部	3.4									○	○	-	-
822	小型甕	成田 D-10	Ⅲ	底部	3.2										24778	-	
823	甕	成田 -	I	底部	3.6								○	○	○	-	底淺
824	甕	成田 E-8	I	底部	14.0								○	○	○	-	-
825	甕	成田 F-11	Ⅲ	底部	3.8								○	○	○	29043	-
826	甕	成田 D-8	-	底部	12.2									○	○	-	-
827	甕	成田 C-4	Ⅲ	底部	3.4								○	○	○	18675	コゲ残存
828	甕	成田 H-19	Ⅲ a	底部	3.2								○	○	○	-	一基
829	小型甕	成田 F-8	Ⅲ	底部	14.0								○	○	○	22663	-
830	丸底甕	成田 E-10	I	胴部									○	○	○	-	-
831	甕	成田 E-11	Ⅲ	底部	6.0								○	○	○	22746	-
832	甕	成田 E-6	Ⅲ	胴部									○	○	○	18925 他	内面網彫・スス付者
833	丸底甕	成田 E-10	Ⅲ	胴部									○	○	○	23306	底淺
834	甕	成田 E-9	Ⅲ	胴部									○	○	○	25406	-
835	甕	成田 E-10-11	Ⅲ	底部	6.0								○	○	○	22236 他	底淺
836	高坏	成田 E-6	Ⅲ	坏面 (3:4)									○	○	○	19922 他	-
837	高坏	成田 E-12	Ⅲ	坏面									○	○	○	23842 他	円形透少し
838	高坏	成田 F-11	Ⅲ	坏面 (2:3)												23952 他	-
839	高坏	成田 E-6	Ⅲ	坏面 (2:7)									○	○	○	18883	-

第 15 表 古代土器・須恵器観察表

探検番号	図録番号	器種	分類	出土区	層位	部位	法量 (cm)			調整				取上番号	備考		
							口径	底径	器高	外面	内面	白灰	灰白			雲母	石英
162	929	埴	土師器 F-11	Ⅲ	底部	6.4										24140	-
	930	埴	土師器 E-7	I	胴部									○	○	-	-
	931	埴	土師器 D-4	I	胴部											-	-
	932	埴	土師器 E-8	Ⅲ	胴部									○	○	19600	-
	933	埴	須恵器 G-18	Ⅲ a	胴部									○	○	27915	粘輪
	934	埴	須恵器 G-17	-	胴部											27770-8	青黄皮文
	935	埴	土師器 F-10	-	底部											-	一基

第 16 表 弥生時代裝飾品観察表

探検番号	図録番号	器種	出土区	層位	分類	法量 (cm)			胎土				取上番号
						最大長	最大幅	最大厚	白灰	灰白	雲母	石英	
111	667	土製玉	D-9	Ⅲ	-	3.0	1.6	1.6	○	○	○	○	22991

第17表 縄文時代早期石器観察表

編年 番号	図録 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
20	1	砥石	砂岩	D-E-6	-	7.20	5.90	3.20	161.0	集石1	1号集石遺塊
22	11	磨石	安山岩	B-4	-	7.60	7.30	4.00	319.0	集石3-19	3号集石遺塊
24	13	磨・砥石	安山岩	B-3	-	10.30	9.70	5.20	659.0	集石3-25	5号集石遺塊
26	14	打製石	ホルンフェルス	B-4	-	10.45	7.45	3.50	385.0	集石12-2	12号集石遺塊
31	20	石錐	チャート	F-3-4	-	2.70	1.50	0.45	1.6	集石14-S-1	14号集石遺塊
33	31	磨・砥石	安山岩	F-3-4	-	6.10	5.10	3.68	170.0	集石14-13	14号集石遺塊
32	32	磨・砥石	安山岩	G-1	-	9.05	7.61	4.38	496.0	集石2-19	19号集石遺塊
33	33	磨・砥石	安山岩	G-1	-	12.00	10.12	6.00	897.0	集石2-22	19号集石遺塊
116	石錐	安山岩	B-6	Ⅳ		2.60	2.05	0.75	4.0		26538
117	石錐	チャート	A-4	Ⅳ		2.30	1.90	0.55	1.5		265216
118	石錐	チャート	C-3	Ⅳ		2.50	1.85	0.51	1.4		25761
119	石錐	黒曜石Ⅰ類	C-5	Ⅳ		2.40	1.30	0.45	2.0		26628
120	石錐	黒曜石Ⅰ類	D-4	Ⅳ		2.00	1.20	0.30	0.4		26200
121	石錐	黒曜石Ⅰ類	C-3	Ⅳ		1.90	1.40	0.45	0.7		26102
122	石錐	黒曜石Ⅰ類	D-4	Ⅳ		1.80	1.20	0.40	0.9		26720
123	石錐	安山岩	B-4	Ⅳ		1.50	1.50	0.32	1.0		25380
124	石錐	珩質頁岩	G-10	Ⅳ		1.20	0.90	0.30	0.4		27879
125	石錐	黒曜石Ⅰ類	B-4	Ⅳ		1.65	1.05	0.40	0.5		27458
126	石錐	珩質頁岩	C-5	Ⅳ		1.90	1.55	0.30	0.5		25880
127	石錐	黒曜石Ⅰ類	D-6	Ⅳ		2.90	1.50	0.50	1.4		26293
128	石錐	チャート	E-4	Ⅳ		2.15	1.00	0.40	0.9		26694
129	石錐	珩質頁岩	D-6	Ⅳ		2.40	1.10	0.30	0.8		26416
130	石錐	安山岩	E-5	Ⅳ		2.80	1.50	0.40	1.8		26436
131	石錐	黒曜石Ⅰ類	F-7	Ⅳ		2.65	1.50	0.35	1.0		27028
132	石錐	石錐	D-4	Ⅳ		1.75	1.50	0.35	1.2		26457
133	石錐	安山岩	B-4	Ⅳ		1.85	1.55	0.30	0.7		25822
134	楕円形	黒曜石Ⅰ類	F-4	Ⅳ		2.55	2.45	1.15	6.0		26899
135	楕円形	黒曜石Ⅰ類	B-4	Ⅳ		2.89	1.91	1.25	6.0		25830
136	楕円形	珩質頁岩	F-3	Ⅳ		3.30	1.90	1.30	5.0		27061
137	機石	チャート	F-3	Ⅳ		3.00	1.70	1.00	6.9		27064
138	機石	石錐	D-4	Ⅳ		3.80	2.25	1.00	13.0		25784
139	加工機削片	チャート	B-3	Ⅳ		1.60	3.00	0.80	4.0		25713
140	加工機削片	黒曜石Ⅰ類	C-5	Ⅳ		2.12	1.70	0.70	2.0		26084
141	加工機削片	珩質頁岩	C-4	Ⅳ		1.60	1.90	0.70	5.0		25774
142	加工機削片	ホルンフェルス	D-7	Ⅳ		6.60	9.45	1.70	123.0		27035
143	石核	黒曜石Ⅰ類	D-5	Ⅳ		2.37	4.67	2.01	18.0		25809
144	石核	黒曜石Ⅰ類	D-4	Ⅳ		2.10	3.11	1.45	9.0		25741
145	石核	黒曜石Ⅰ類	C-3	Ⅳ		2.00	3.92	1.22	8.0		26019
146	元端状石器	砂岩	A-4	Ⅳ		7.06	2.91	1.10	28.0		27491
147	磨製石斧	ホルンフェルス	B-4	Ⅳ		6.50	2.30	1.90	34.0		27480
148	磨製石斧	ホルンフェルス	D-4	Ⅳ		5.70	4.30	1.10	37.0		26159
149	磨製石斧	ホルンフェルス	B-5	Ⅳ		9.10	5.10	1.60	101.0		25875
150	磨製石斧	ホルンフェルス	B-5	Ⅳ		6.80	3.90	0.90	31.0		27410
151	打製石斧	ホルンフェルス	B-4	Ⅳ		7.04	3.95	1.88	58.0	44-3398	
152	打製石斧	ホルンフェルス	C-5	Ⅳ		8.35	4.40	2.20	84.0		25893
153	椎形	砂岩	C-4	Ⅳ		11.00	9.90	3.20	447.0		26573
154	打製石斧	ホルンフェルス	D-4	Ⅳ		14.35	6.90	0.14	140.0		26277
155	椎形	ホルンフェルス	C-3	Ⅳ		10.60	13.20	4.90	800.0		25775
156	磨・砥石	安山岩	B-3	Ⅳ		7.64	7.52	3.31	307.0		26630
157	磨・砥石	安山岩	F-3	Ⅳ		9.10	8.47	3.93	449.0		26805
158	砥石	砂岩	B-3	Ⅳ		11.80	7.70	5.30	625.0		27280
159	磨・砥石	安山岩	B-3	Ⅳ		7.55	6.30	4.80	320.0		25820
160	磨・砥石	安山岩	C-4	Ⅳ		8.60	7.10	4.30	337.0		26336
161	磨・砥石	花崗岩	D-7	Ⅳ		6.10	9.80	6.80	566.0		27034
162	砥石	安山岩	C-5	Ⅳ		9.00	8.30	3.70	376.0		26555
163	磨・砥石	安山岩	D-3	Ⅳ		10.00	9.00	6.20	792.0		26661
164	磨・砥石	安山岩	C-3	Ⅳ		13.35	13.15	5.10	119.3		25724
165	磨・砥石	安山岩	D-4	Ⅳ		5.40	8.60	5.80	394.0		26454
166	磨・砥石	安山岩	C-4	Ⅳ		16.50	17.00	5.90	2439.0		26579
167	磨・砥石	砂岩	C-4	Ⅳ		6.90	5.24	1.80	91.0		26186
168	砥石	砂岩	B-5	Ⅳ		11.10	8.21	2.04	256.0		27001
169	砥石	砂岩	B-4	Ⅳ		10.90	8.50	3.00	470.0		27362
170	砥石	ホルンフェルス	B-4	Ⅳ		15.45	2.70	2.50	187.0		27463
171	砥石	砂岩	B-5	Ⅳ		12.90	5.80	3.55	310.0	44-4031	
172	石錐	安山岩	D-4	Ⅳ		12.80	18.20	14.50	2960.0		26720
173	石錐	安山岩	D-4	Ⅳ		44.00	53.70	11.85	20000.0		27009
174	石錐	砂岩	E-3	Ⅳ		4.20	3.80	1.60	105.0		26910
175	石錐	砂岩	F-3	Ⅳ		5.10	6.40	1.20	55.0		27074
176	石錐	砂岩	D-5	Ⅳ		5.70	6.60	2.00	186.0		25811
177	石錐	砂岩	E-5	Ⅳ		5.20	8.20	1.70	176.0		26435
178	石錐	安山岩	D-4	Ⅳ		6.50	7.50	2.20	299.0		44-1147
179	石錐	ホルンフェルス	D-4	Ⅳ		5.20	6.80	2.20	190.0		26520
180	石錐	ホルンフェルス	C-5	Ⅳ		6.20	8.00	2.10	220.0		26568
181	石錐	ホルンフェルス	C-5	Ⅳ		6.10	10.40	1.92	210.0		27424
182	磨・砥石	安山岩	D-4	Ⅳ		6.40	6.50	2.50	149.0		27300
183	石錐	黒曜石Ⅰ類	C-6	Ⅳ		1.80	1.30	0.23	1.0		21001
184	石錐	安山岩	D-5	Ⅳ		2.20	1.70	0.35	0.8		25777
185	石錐	チャート	B-5	Ⅳ		2.20	1.40	0.45	0.9		25481
186	石錐	砂岩	B-4	Ⅳ		1.30	0.85	0.30	0.5		25327
187	石錐	砂岩	B-5	Ⅳ		2.80	1.95	0.40	1.4		25300
188	石錐	黒曜石Ⅰ類	C-3	Ⅳ		2.10	1.45	0.35	0.7		25262

第17表 縄文時代早期石器観察表

採取番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
180	加工痕目片	鉄石英	C-4	VI	2.00	2.25	0.64	2.0	26124	
189	磨片	粘板岩	C-5	VI	5.60	5.30	0.40	22.0	磨板一括	
191	打製石斧	ホルンフェルス	B-4	VI	7.30	7.50	2.70	153.0	1498	
192	磨・礮石	安山岩	G-1	III~IV	11.20	8.60	4.70	713.0	-	

第18表 縄文時代後・晩期遺構内出土石器観察表

採取番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考	
212	石鏃	安山岩	E-5	IV上	1.40	1.00	0.30	0.3	8号住一括	1号竪穴住居跡	
213	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	5.44	3.10	0.75	9.0	8号住 94	2号竪穴住居跡	
214	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	14.00	6.61	2.13	176.0	8号住 88	1号竪穴住居跡	
215	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	IV上面	8.00	5.70	2.00	106.0	8号住 130	1号竪穴住居跡	
216	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	9.01	5.92	1.40	90.0	8号住 124	1号竪穴住居跡	
217	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	4.95	8.45	0.92	45.0	8号住 117	1号竪穴住居跡	
218	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	5.92	10.92	1.02	78.0	8号住 123	1号竪穴住居跡	
219	スクレイパー	ホルンフェルス	E-5	-	5.67	9.24	0.54	35.0	8号住 40	2号竪穴住居跡	
220	磨・礮石	凝灰岩	E-5	-	10.10	8.80	3.70	432.0	8号住 59	2号竪穴住居跡	
221	磨・礮石	花崗岩	E-5	-	9.30	6.60	5.50	480.0	8号住 229	1号竪穴住居跡	
222	磨・礮石	安山岩	E-5	-	12.60	5.70	7.20	673.0	8号住 142	1号竪穴住居跡	
223	磨・礮石	安山岩	E-5	-	5.70	4.80	3.10	120.0	8号住 214	1号竪穴住居跡	
224	石鏃	凝灰岩	E-5	-	18.10	27.70	10.28	6510.0	8号住 173	1号竪穴住居跡	
225	石鏃	凝灰岩	E-5	-	21.20	16.30	10.70	3340.0	8号住 162	1号竪穴住居跡	
227	打製石斧	ホルンフェルス	E-5	-	8.80	7.75	1.90	150.0	12号住 66	2号竪穴住居跡	
248	打製石斧	ホルンフェルス	F-5	III上	6.25	5.10	1.20	49.0	12号住 21	2号竪穴住居跡	
249	磨・礮石	砂岩	F-5	-	5.75	5.20	4.30	193.0	12号住 81	2号竪穴住居跡-後期	
250	石鏃	凝灰岩	F-5	-	9.40	9.20	5.50	498.0	12号住 98	2号竪穴住居跡-後期	
278	石鏃	黒曜石種類	F-G-18	III上	1.60	1.00	0.20	0.3	竪穴住居跡1(74)	3号竪穴住居跡	
279	石鏃	ホルンフェルス	F-G-18	III上	2.00	1.50	0.30	0.9	竪穴住居跡一括	3号竪穴住居跡	
280	磨製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	11.60	5.00	2.10	168.0	1号住 198	3号竪穴住居跡	
281	磨製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	7.75	2.10	3.1	10.0	1号住	3号竪穴住居跡	
282	打製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	10.10	5.05	0.95	51.0	1号住	3号竪穴住居跡	
283	打製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	2.80	4.60	0.69	15.0	1号住 52	3号竪穴住居跡	
284	打製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	10.80	6.40	2.00	105.0	1号住一括	3号竪穴住居跡	
285	打製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	III上	8.80	5.42	1.50	100.0	1号住 169	3号竪穴住居跡	
286	スクレイパー	ホルンフェルス	F-G-18	-	7.70	12.50	1.16	109.0	1号住一括1	3号竪穴住居跡	
287	磨・礮・閃石	安山岩	F-G-18	-	9.10	9.85	6.10	820.0	1号住 258	3号竪穴住居跡	
288	磨・礮石	砂岩	F-G-18	-	7.75	5.25	3.60	250.0	1号住一括1	3号竪穴住居跡	
69	磨・礮石	安山岩	E-8	-	8.53	5.45	1.80	123.0	埋設 15	1号埋設土壌	
71	磨製石斧	ホルンフェルス	D-4	III上	8.10	5.20	2.20	96.0	土坑9-1	土坑3	
303	打製石斧	ホルンフェルス	G-100	III上	5.70	4.10	1.75	51.0	土坑2-10	土坑9	
76	304	打製石斧	ホルンフェルス	G-100	III上	8.50	5.60	1.70	98.0	土坑2	土坑9
77	305	磨・礮石	花崗岩	C-5	8.20	6.10	3.30	217.0	土坑82-1	土坑 15	
307	加工痕目片	黒曜石H C類	C-7	-	3.00	1.81	1.31	7.0	SK150-2	土坑 17	
308	石鏃	安山岩	C-7	-	19.50	13.80	13.30	950.0	SK150-7	土坑 17	
309	磨製石斧	凝灰岩	C-7	-	33.65	26.15	15.40	1200.0	土坑150-8	土坑 17	
310	磨片	凝灰岩	C-7	-	10.60	9.20	9.70	990.0	SK150-4	土坑 17	
311	閃石	凝灰岩	C-7	-	24.50	11.70	6.90	1860.0	SK150-6	土坑 17	
312	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	14.55	6.93	2.04	235.0	礮石11-026)	石部集積遺構	
313	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	12.16	5.73	1.85	133.0	礮石11-54 (H26)	石部集積遺構	
314	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.46	6.41	1.62	95.0	礮石11-143 (H26)	石部集積遺構	
315	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.95	5.01	2.06	93.0	礮石11-5 (H26)	石部集積遺構	
316	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	7.47	5.58	2.10	110.0	礮石11-27 (H26)	石部集積遺構	
317	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	6.71	6.82	2.30	118.0	礮石11-116 (H26)	石部集積遺構	
318	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	10.80	6.98	1.68	132.0	礮石11-77 (H26)	石部集積遺構	
319	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	9.04	7.03	1.51	97.1	礮石11-13 (H26)	石部集積遺構	
320	打製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	6.82	5.42	1.67	64.0	礮石11-31 (H26)	石部集積遺構	
321	スクレイパー	ホルンフェルス	E-9	-	4.15	8.62	1.06	50.0	礮石11 (H26)	石部集積遺構	
322	スクレイパー	ホルンフェルス	E-9	-	12.45	6.96	1.74	135.0	礮石11 (H26)	石部集積遺構	
323	磨・礮石	安山岩	E-9	-	7.04	8.94	3.61	232.0	礮石11-68 (H26)	石部集積遺構	
324	軽石加工品	軽石	E-9	-	7.80	6.60	2.90	70.0	礮石11-97 (H26)	石部集積遺構	
325	磨・礮石	安山岩	E-9	-	12.40	9.80	6.50	1088.0	礮石11-9 (H26)	石部集積遺構	
326	磨・礮石	花崗岩	E-9	-	6.60	10.60	5.85	660.0	礮石11-82 (H26)	石部集積遺構	
327	石鏃	凝灰岩	E-9	-	38.75	17.40	10.20	7350.0	礮石11-64 (H26)	石部集積遺構	
328	石鏃	凝灰岩	E-9	-	21.20	18.40	10.50	4150.0	礮石11-35 (H26)	石部集積遺構	
329	打製石斧	ホルンフェルス	D-9-10	II	12.45	6.96	1.74	135.0	-	遺物集積中城1	
330	打製石斧	ホルンフェルス	D-9-10	II	14.50	7.61	1.56	156.0	-	25231	
331	打製石斧	ホルンフェルス	D-9-10	II	14.30	6.40	1.80	188.0	-	25206	
332	打製石斧	砂岩	D-9-10	II	15.10	8.00	1.50	200.0	-	25200	
333	打製石斧	ホルンフェルス	D-9-10	II	13.40	7.30	2.60	186.0	-	25205	
334	スクレイパー	ホルンフェルス	D-9-10	II	5.60	10.90	0.74	60.0	-	25229	
335	スクレイパー	ホルンフェルス	D-9-10	II	5.96	8.49	1.19	97.0	-	25208	
336	打製石斧	ホルンフェルス	D-9-10	II	12.45	6.96	1.74	135.0	-	25207	
337	磨・礮石	安山岩	D-9-10	II	6.33	5.56	3.12	143.0	-	25202	

第 19 表 弥生時代遺構内出土石器観察表

図記 番号	図帳 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考	
	99	531	石皿	砂岩	D-E-5	-	10.80	15.50	4.70	1002.0	7号住 21	1号墓穴住居跡
		548	磨石	砂岩	D-E-10	-	15.50	11.10	9.40	2437.0	土集4-34	遺物集中区
104	549	磨石	砂岩	D-E-10	-	14.30	12.00	3.84	1116.0	土集4-10	遺物集中区	
		550	磨・磨石	安山岩	D-E-10	-	15.30	11.40	4.40	1657.0	土集4-1	遺物集中区

第 20 表 古墳時代遺構内出土石器観察表

図記 番号	図帳 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考	
	115	673	打製石斧	ホルンフェルス	F-G-18	埋土	7.20	4.95	1.50	60.0	地下式横穴墓 90	2号地下式横穴墓
	117	676	スクレイパー	ホルンフェルス	F-18	-	6.54	10.97	1.45	112.0	地下式横穴墓 92	4号地下式横穴墓
	129	703	磨・磨石	安山岩	I-19	-	10.30	8.95	5.90	655.0	土集3-115	土器凝結部米遺構

第 21 表 II層遺構内出土石器観察表

図記 番号	図帳 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考	
	146	841	スクレイパー	ホルンフェルス	E-10-11	-	4.18	8.92	0.95	39.0	P712-1	1号組Ⅰ柱建物跡
		842	軽石加工品	軽石	E-10-11	-	7.30	4.80	4.86	38.0	P738-一括	2号組Ⅰ柱建物跡
		849	打製石斧	ホルンフェルス	E-10-11	-	12.70	6.60	2.10	230.0	P633-9	2号組Ⅰ柱建物跡
		850	打製石斧	ホルンフェルス	E-10-11	-	12.20	6.95	2.00	153.0	P633-8	2号組Ⅰ柱建物跡
		851	打製石斧	ホルンフェルス	E-10-11	Ⅱ	7.70	5.10	2.10	97.0	P633	2号組Ⅰ柱建物跡
		852	スクレイパー	頁岩	E-10-11	-	6.90	9.60	1.00	61.0	P633-1	2号組Ⅰ柱建物跡
		853	磨・磨石	砂岩	D-E-9-11	-	15.70	9.00	7.10	1100.0	P733	3号組Ⅰ柱建物跡
		856	スクレイパー	ホルンフェルス	E-11	-	8.30	3.75	1.03	34.0	P631-10	4号組Ⅰ柱建物跡
		857	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	-	5.00	5.00	2.40	113.0	P631-21	4号組Ⅰ柱建物跡
		858	砥石	砂岩	E-11	-	10.90	7.70	3.00	246.0	P631-22	4号組Ⅰ柱建物跡
		859	磨・磨石	花崗岩	E-11	-	12.30	6.70	9.10	797.0	P631-20	4号組Ⅰ柱建物跡
		860	レキ	頁岩	E-11	-	17.80	5.40	3.00	362.0	P631-30	4号組Ⅰ柱建物跡
		861	磨・磨石	安山岩	E-11	-	10.40	12.95	6.30	886.0	P631-15	4号組Ⅰ柱建物跡
		862	軽石加工品	軽石	E-11	-	7.30	10.50	6.50	103.0	P631-27	4号組Ⅰ柱建物跡
		868	磨石	安山岩	E-11	-	14.00	7.10	6.30	790.0	P721-30	4号組Ⅰ柱建物跡
		869	磨・磨石	安山岩	E-11	-	8.30	7.50	3.90	333.0	P721-34	4号組Ⅰ柱建物跡
		870	磨・磨石	花崗岩	E-11	-	10.60	9.65	5.80	760.0	P721-3	4号組Ⅰ柱建物跡
		871	磨・磨石	安山岩	E-11	-	10.20	10.30	6.50	946.0	P721-9	4号組Ⅰ柱建物跡
		872	磨・磨石	ホルンフェルス	E-11	-	4.00	6.50	4.20	114.0	P721-20	4号組Ⅰ柱建物跡
		877	砥石	ホルンフェルス	E-11	-	4.90	9.55	1.75	102.0	P632-1	4号組Ⅰ柱建物跡
		878	石皿	砂岩	E-11	-	9.00	7.80	6.80	400.0	P632-8	4号組Ⅰ柱建物跡
		881	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	-	8.50	5.40	2.40	150.0	P740-59	4号組Ⅰ柱建物跡
		882	砥石	安山岩	E-11	-	5.82	7.24	5.60	290.0	P740-7	4号組Ⅰ柱建物跡
		883	軽石加工品	軽石	E-11	-	5.80	4.40	2.50	11.0	P740-18	4号組Ⅰ柱建物跡
		884	軽石加工品	軽石	E-11	-	6.80	7.40	3.80	29.0	P740-10	4号組Ⅰ柱建物跡
		885	軽石加工品	軽石	E-11	-	9.40	4.70	4.70	42.0	P740-12	4号組Ⅰ柱建物跡
		886	磨石	安山岩	E-11	-	6.40	8.10	6.90	573.0	P740-54	4号組Ⅰ柱建物跡
		887	花崗岩	花崗岩	E-11	-	26.20	21.50	12.70	8200.0	P740-30	4号組Ⅰ柱建物跡
		894	磨・磨石	砂岩	E-11-12	-	6.40	9.88	4.82	446.0	伊-3	5号組Ⅰ柱建物跡
		895	砥石	ホルンフェルス	D-8	-	13.70	6.55	5.45	722.0	P462-2	P462
		896	磨・磨石	安山岩	E-8	-	8.31	7.24	5.56	456.0	P504-2	P504
		897	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	-	10.60	4.90	1.00	77.0	P463-3	P463
		898	磨・磨石	安山岩	D-6	-	10.10	9.00	3.30	363.0	P430-5	P430
		899	石皿	花崗岩	E-8	-	31.50	20.10	9.60	5095.0	P463-7	P463
		900	磨・磨石	安山岩	E-7	-	9.80	8.60	6.10	846.0	P455	P455
		901	磨・磨石	安山岩	F-8	-	13.60	12.00	4.00	736.0	P407	P407
		920	打製石斧	ホルンフェルス	-	-	11.90	7.50	1.15	108.0	P638-一括	P638
		921	磨製石斧	ホルンフェルス	-	埋土	7.30	5.08	2.70	139.0	P195	P195
		922	磨製石斧	ホルンフェルス	-	埋土	7.40	5.20	1.60	76.0	P195-2	P195
		923	磨製石斧	ホルンフェルス	-	-	4.00	3.60	1.25	23.0	P486-一括	P486
		924	磨・磨石	讃岐青磁岩	-	-	7.00	5.90	3.10	139.0	P411	P411
		925	磨・磨石	頁岩	D-3	-	7.60	6.80	1.75	102.0	P296	P296
		926	磨・磨石	安山岩	-	-	13.70	10.90	4.10	912.0	P195-1	P195
		927	砥石	ホルンフェルス	C-7	-	9.70	6.90	5.60	362.0	P561	P561
		928	砥石	ホルンフェルス	D-4	-	10.70	7.25	4.85	589.0	P552	P552

第 22 表 V層出土の石器観察表

図記 番号	図帳 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
	936	加工痕有り	紫耀石ⅡC組	-	-	1.80	1.30	0.50	2.0	遺物集中心 258	遺構認定せず
	937	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	14.74	6.04	1.60	165.0	10号住 90	遺構認定せず
	938	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	10.50	5.70	2.50	165.0	10号住 73	遺構認定せず
163	939	打製石斧	ホルンフェルス	C-4	V	5.40	8.90	1.22	65.0	10号住 93	遺構認定せず
	940	打製石斧	ホルンフェルス	C-4	V	6.36	5.58	1.10	49.0	10号住 147	遺構認定せず
	941	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	9.50	6.70	2.20	117.0	10号住 127	遺構認定せず
	942	打製石斧	ホルンフェルス	-	V	5.20	3.80	1.50	33.0	10号住 92	遺構認定せず

第 23 表 IV層出土の石器観察表

図録番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取土番号	備考
943	石鏃	安山岩	B-4	IV	1.80	1.20	0.50	0.7	18681	
944	石鏃	黒曜石片類	D-6	IV	1.30	0.92	0.21	0.2	19001	
945	石鏃	黒曜石片類	D-8	IV	1.50	0.90	0.40	0.6	19983	
946	使用痕跡片	D-7	IV	1.30	1.37	2.04	2.0	19987		
947	打製石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	9.25	6.05	1.35	109.0	19912	
948	磨石	安山岩	G-100	IV	8.25	7.60	4.90	447.0	27841	
949	磨石	安山岩	H-2	IV	12.60	10.60	6.10	1093.0	27542	

第 24 表 II層他出土の石器観察表

図録番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取土番号	備考
950	石鏃	珪質頁岩	H-19	II b	2.20	1.60	0.50	2.0	28307	
951	石鏃	チャート	B-5	-	1.35	0.80	0.20	0.3	一括	
952	石鏃	安山岩	B-4	-	1.10	1.00	0.25	0.4	カクラン一括	
953	石鏃	黒曜石片類	B-4	-	1.55	1.20	0.25	0.5	一括	
954	石鏃	安山岩	E-10	II	1.45	1.90	0.35	0.7	24551	
955	石鏃	G-18	II b	-	1.00	0.70	0.30	0.2	28383	
956	石鏃	黒曜石片類	D-3	-	1.20	1.25	0.20	0.3	ゴボトレ	
957	石鏃	安山岩	A-4	-	1.45	1.15	0.25	0.4	カクラン一括	
958	石鏃	ホルンフェルス	C-4	-	1.55	1.15	0.15	0.3	トレンチ	
959	石鏃	粘板岩	C-6	II c	1.95	1.38	0.21	0.5	30999	
960	石鏃	珪質頁岩	C-3	-	1.80	1.40	0.40	1.0	カクラン一括	
961	石鏃	黒曜石片類	C-4	-	1.25	0.90	0.15	0.2	トレンチ	
962	石鏃	黒曜石片類	E-10	II	1.20	0.95	0.23	0.5	25137	
963	石鏃	黒曜石片類	B-4	-	1.40	0.95	0.20	0.2	ゴボトレ	
964	石鏃	黒曜石片類	E-9	II	2.00	0.70	0.20	0.3	一括	
965	石鏃	水晶	C-D-4	-	1.25	1.20	0.20	0.4	一括	
966	石鏃	黒曜石片類	E-6	-	1.85	0.80	0.35	0.5	一括	
967	石鏃	黒曜石片類	B-4	II	1.83	0.66	0.29	1.0	18639	
968	石鏃	黒曜石片類	B-4	II	1.30	1.10	0.15	0.2	表土一括	
969	石鏃	ホルンフェルス	E-9	II	3.35	1.90	0.25	2.6	24707	
970	磨製石鏃	粘板岩	D-10	II	5.75	2.70	0.35	7.2	24620	
971	磨製石鏃	頁岩	C-7	II b	3.15	1.80	0.35	2.7	21002	
972	磨製石鏃	頁岩	C-5	-	3.50	2.00	0.30	3.1	表土一括	
973	磨製石鏃	頁岩	D-8	-	1.65	1.65	0.20	0.8	カクラン一括	
974	磨製石製用工具	頁岩	E-8	II a	2.60	1.70	0.20	2.0	19131	
975	石鏃	頁岩	E-9	II	3.87	3.40	0.65	7.0	25216	
976	石鏃	木燧	D-10	II	2.55	1.40	0.75	2.8	23510	
977	加工痕跡片	黒曜石片類	D-4	-	1.85	1.25	0.65	1.1	カクラン一括	
978	加工痕跡片	黒曜石片類	E-8	II	1.90	1.45	0.60	1.7	19000	
979	加工痕跡片	黒曜石 II C 類	C-5	-	2.45	1.65	0.75	3.2	カクラン一括	
980	加工痕跡片	黒曜石片類	F-3	II	2.25	1.15	0.80	1.8	20130	
981	加工痕跡片	黒曜石 I 類	C-4	-	2.15	1.05	0.75	2.0	ゴボトレ C-1 トレンチ	
982	加工痕跡片	黒曜石片類	G-11	II	4.25	1.45	0.59	3.0	24570	
983	使用痕跡片	チャート	C-4	-	3.66	0.88	0.83	2.0	カクラン C-4 一括	
984	加工痕跡片	黒曜石 II C 類	D-4	-	2.30	1.10	0.95	2.0	カクラン D-4 一括	
985	加工痕跡片	黒曜石 II C 類	B-5	-	2.05	1.75	0.98	2.0	ゴボトレ B-5 トレンチ	
986	使用痕跡片	黒曜石片類	B-4	-	1.43	2.35	1.12	4.0	ゴボトレ	
987	加工痕跡片	チャート	F-2	I	1.55	2.40	1.29	5.0	F-2 トレンチ	
988	使用痕跡片	木燧	B-4	-	2.37	1.85	0.63	2.0	ゴボトレ B-1 トレンチ	
989	加工痕跡片	黒曜石 II C 類	F-3	II	2.95	1.85	0.60	3.5	一括	
990	使用痕跡片	チャート	E-11	II	2.45	3.14	0.79	4.0	23864	
991	加工痕跡片	チャート	E-10	II	4.50	2.15	1.15	9.0	24580	
992	加工痕跡片	黒曜石片類	E-7	-	1.50	1.35	0.45	2.0	E-7 一括	
993	石核	黒曜石 I 類	A-4	-	1.80	2.01	1.20	4.0	カクラン一括	
994	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	11.70	6.50	1.90	235.0	25089	
995	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	5.00	4.90	1.80	63.0	25082	
996	磨製石斧	ホルンフェルス	F-3	II	5.11	5.56	1.31	57.0	20086	
997	磨製石斧	ホルンフェルス	F-18	II b	3.70	6.00	1.10	24.0	26217	
998	磨製石斧	ホルンフェルス	F-18	II b	3.40	3.20	1.33	10.0	26889	
999	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	7.50	5.50	3.10	182.0	25248	
1000	磨製石斧	砂岩	F-11	II	6.70	4.45	2.95	75.0	26910	
1001	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	12.40	4.90	3.60	337.0	25138	
1002	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	-	10.20	3.70	3.70	230.0	カクラン一括	
1003	磨製石斧	ホルンフェルス	G-18	II b	10.00	4.70	2.45	173.0	26106	
1004	磨製石斧	ホルンフェルス	E-9	II	7.50	5.10	3.60	163.0	25314	
1005	磨製石斧	ホルンフェルス	D-8	II	5.00	3.80	2.30	47.0	19595	
1006	石包丁	ホルンフェルス	H-5	-	4.25	8.40	0.70	32.5	カクラン B-5 一括	
1007	石斧	ホルンフェルス	E-8	II	12.90	3.70	1.60	103.0	20280	
1008	石斧	ホルンフェルス	D-10	II	8.50	3.20	1.40	52.0	25331	
1009	石斧	ホルンフェルス	E-9	II	8.90	2.50	2.80	65.0	25178	
1010	石斧	ホルンフェルス	F-4	II	6.60	3.70	1.75	61.0	21248	
1011	石斧	ホルンフェルス	E-8	II	7.15	3.80	1.80	61.0	19838	
1012	打製石斧	ホルンフェルス	E-12	II	14.60	6.95	1.50	210.0	24099	
1013	打製石斧	ホルンフェルス	D-8	II	12.25	6.90	1.00	107.0	20351	
1014	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	II	7.80	7.70	1.10	64.0	19245	
1015	打製石斧	ホルンフェルス	G-12	II	8.90	5.10	0.93	54.0	21345	
1016	打製石斧	ホルンフェルス	F-11	II a	9.00	4.90	1.50	65.0	22255	

第 24 表 II 層他出土の石器観察表

採出 層位 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備考
1017	打製石斧	ホルンフェルス	C-6	Ⅱ	11.80	5.00	1.20	69.0	21023	
1018	打製石斧	砂岩	E-8	-	16.30	9.00	2.30	249.0	カタラン	
1019	打製石斧	ホルンフェルス	C-5	Ⅱ	17.30	9.20	2.00	298.0	18394	
1020	打製石斧	ホルンフェルス	E-11	Ⅱ	13.50	9.20	1.60	173.0	24467	
1021	打製石斧	ホルンフェルス	D-3	I	15.90	8.50	2.60	392.0	-	
1022	打製石斧	砂岩	F-11	Ⅱ	9.10	10.40	2.10	119.0	21742	
1023	打製石斧	ホルンフェルス	F-11	Ⅱ	7.50	5.30	1.30	63.0	24997	
1024	打製石斧	頁岩	F-12	Ⅱ	11.60	7.60	2.00	174.0	24889	
1025	打製石斧	砂岩	F-12	Ⅱ	9.40	5.70	2.00	133.0	24985	
1026	打製石斧	ホルンフェルス	E-8	Ⅱ	6.00	5.50	1.50	67.0	19691	
1027	打製石斧	ホルンフェルス	E-10	Ⅱ	9.10	4.70	1.90	104.0	23156	
1028	打製石斧	ホルンフェルス	D-8	Ⅱ	5.60	6.30	1.52	53.0	21101	
1029	打製石斧	砂岩	E-10	Ⅱ	4.10	3.50	0.80	12.0	23117	
1030	打製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅱ	6.00	5.70	1.30	84.0	23711	
1031	打製石斧	ホルンフェルス	-	-	7.40	6.30	1.90	111.0	不明一括	
1032	打製石斧	ホルンフェルス	D-9	Ⅱ	8.60	7.20	1.50	114.0	25123	
1033	打製石斧	ホルンフェルス	B-6	Ⅱ	4.60	4.50	1.20	43.7	21010	
1034	スクレイパー	砂岩	D-10	Ⅱ	5.50	10.20	0.91	52.0	23328	
1035	磨・敲石	安山岩	E-10	Ⅱ	12.60	10.70	6.10	1127.0	24647	
1036	磨・敲石	花崗岩	E-10	Ⅱ	7.40	8.40	4.90	505.0	23278	
1037	磨・敲石	砂岩	I-19	-	8.40	4.70	2.83	123.0	磨輪 8	
1038	磨・敲石	砂岩	C-6	Ⅱ	3.40	2.90	1.90	28.0	21050	
1039	磨・敲石	安山岩	D-8	Ⅱ	10.20	6.10	5.90	577.0	21304	
1040	磨・敲石	安山岩	E-10	Ⅱ	10.20	8.70	5.60	716.0	24645	
1041	磨・敲石	安山岩	E-10	Ⅱ	7.60	6.60	4.85	349.0	23328	
1042	磨・敲石	安山岩	F-18	Ⅱ b	11.90	11.10	6.70	1127.0	28216	
1043	磨・敲石	安山岩	F-12	Ⅱ	10.00	8.90	2.90	347.0	21544	
1044	磨・敲石・凹石	安山岩	E-9	Ⅱ	12.00	10.20	5.45	825.0	25252	
1045	磨・敲石	安山岩	F-10	Ⅱ b	10.00	8.50	4.90	628.0	27296	
1046	磨・敲石	安山岩	F-10	Ⅱ b	9.30	8.80	5.17	660.0	29169	
1047	磨・敲石	花崗岩	E-10	Ⅱ	7.40	10.30	5.20	573.0	22594	
1048	磨石	花崗岩	E-11	Ⅱ	6.80	6.10	3.40	194.0	24830	
1049	磨・敲石	砂岩	C-7	Ⅱ	9.70	6.60	4.30	395.0	21471	
1050	敲石	ホルンフェルス	E-11	Ⅱ	12.60	4.80	3.30	308.0	23770	
1051	敲石	砂岩	F-10	Ⅱ b	11.30	4.80	4.40	359.0	28688	
1052	敲石	粘板岩	F-11	Ⅱ b	12.00	4.70	3.00	233.0	28390	
1053	敲石	砂岩	E-10	Ⅱ	19.50	5.00	4.30	722.0	24394	
1054	石錘	砂岩	D-9	Ⅱ	4.60	6.30	1.80	77.0	22456	
1055	砥石	砂岩	E-10	Ⅱ	6.90	2.00	2.00	29.0	22153	
1056	砥石	砂岩	F-10	Ⅱ b	5.50	4.90	1.30	47.0	28588	
1057	砥石	砂岩	E-8	Ⅱ	12.30	4.80	2.80	361.0	20083	
1058	石錘	凝灰岩	D-10	Ⅱ	28.30	22.34	14.30	8990.0	22276	
1059	石錘	凝灰岩	F-8	Ⅱ	19.60	20.60	17.00	6590.0	24357	
1060	石錘	凝灰岩	E-10	Ⅱ	14.90	14.30	11.80	3610.0	23381	
1061	石錘	凝灰岩	F-11	Ⅱ	14.90	13.70	7.10	2160.0	25326	
1062	石錘	凝灰岩	F-3	Ⅱ	20.00	25.30	11.20	6500.0	20083	
1063	異形石器	黒曜石産物	C-4	-	2.10	0.70	0.35	1.1	10号住一括	遺構認定せず
1064	異形石器	黒曜石産物	A-4	-	1.40	0.70	0.30	0.4	カタラン一括	
1065	碧玉	結晶片岩緑色岩	C-4	-	1.20	0.70	0.30	0.6	一括	
1066	石製加工品	砂岩	E-10	Ⅱ	5.90	20.00	4.15	872.0	23997	
1067	石製加工品	ホルンフェルス	E-11	Ⅱ b	8.80	5.20	5.10	327.0	28421	
1068	原標	石英	E-9	Ⅱ	3.00	1.90	1.67	15.0	25191	
1069	原標	石英	F-11	Ⅱ	2.65	2.30	2.15	19.9	21608	
1070	原標	石英	E-9	Ⅱ	3.60	3.00	2.10	30.0	22535	
1071	原標	石英	F-11	Ⅱ	2.90	1.65	1.60	13.0	21746	
1072	原標	石英	B-4	-	2.25	2.00	1.20	8.0	カタラン	

第 25 表 古墳時代遺構内出土鉄器観察表

採出 層位 番号	遺構名	器種	部位	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
114	668 (1号墓下被褥室)	刀子	刃部・基部	I-19	-	(6.5)	1.4	0.3	5.79	副墳下式墓内遺物番号

※ () は推定

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林祐一・Zaur Lomtadize・黒沼保子

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市に位置する町田堀遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、1号住居跡から出土した炭化材 (試料 No. 1: PLD-34470) と、2号住居跡から出土した炭化材 (試料 No. 2: PLD-34471)、3号住居跡から出土した炭化種実 (試料 No. 3: PLD-34472)、中岳Ⅱ式土器近辺から出土した不明炭化物 (試料 No. 4: PLD-34473)、弥生1号住居跡から出土した炭化材 (試料 No. 5: PLD-34474)、弥生遺物集積域から出土した炭化材 (試料 No. 6: PLD-34475) の、計6点である。炭化材4点のうち、1号住居跡の試料 No. 1 (PLD-34470) は最終形成年輪が残存していたが、それ以外の2号住居跡の試料 No. 2 (PLD-34471) と、弥生1号住居跡の試料 No. 5 (PLD-34474)、弥生遺物集積域の試料 No. 6 (PLD-34475) は最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

調査所見では、1号住居跡と2号住居跡、3号住居跡、中岳Ⅱ式土器近辺が縄文時代後期、弥生1号住居跡が古墳時代～古代?、弥生遺物集積域が弥生時代中期と推測されている。

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年代正結果を、図1に暦年代正結果をそれぞれ示す。暦年代正結果に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年代正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代正を行うために記載した。

¹⁴C年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34470	遺構: 1号住居跡 試料 No. 1	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34471	遺構: 2号住居跡 試料 No. 2	種類: 炭化材 (スダジイ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34472	遺構: 3号住居跡 試料 No. 3	種類: 炭化種実 (イチイガシ子葉) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34473	遺構: 中岳Ⅱ式土器近 辺 試料 No. 4	種類: 炭化物 (不明) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34474	遺構: 弥生1号住居跡 試料 No. 5	種類: 炭化材 (ツバキ属) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34475	遺構: 弥生遺物集積域 試料 No. 6	種類: 炭化材 (クスノキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については宮地(2008)を、弥生時代の暦年代については藤尾(2013)を参照した。

1号住居跡から出土した炭化材(試料No. 1: PLD-34470)は、1386-1340 cal BC (15.3%)、1310-1194 cal BC (79.2%)、1141-1134 cal BC (0.9%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

2号住居跡から出土した炭化材(試料No. 2: PLD-34471)は、1421-1293 cal BC (95.4%)であった。

これは、縄文時代後期後葉に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

3号住居跡から出土した炭化種実(試料No. 3: PLD-34472)は、1410-1261 cal BC (95.4%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

中岳Ⅱ式土器近辺から出土した不明炭化物(試料No. 4: PLD-34473)は、1404-1265 cal BC (95.4%)であった。これは、縄文時代後期後葉～晩期に相当し、遺構の推定時期である縄文時代後期に対して整合的である。

弥生1号住居跡から出土した炭化材(試料No. 5: PLD-34474)は、54 cal BC-30 cal AD (92.0%)および37-51 cal AD (3.4%)であった。これは、弥生時代中期後葉～後期前半に相当し、遺構の推定時期である古墳時代～古代?よりも古い暦年代を示した。

弥生遺物集中域から出土した炭化材(試料No. 6: PLD-34475)は、99 cal BC-23 cal AD (95.4%)であった。これは弥生時代中期後葉～後期前半に相当し、遺構の推定時期である弥生時代中期に対して整合的である。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築, 275p, 吉川弘文館.
- 宮地総一郎 (2008) 黒色磨研土器, 小林達雄編「総覧縄文土器」: 790-797, アム・プロモーション.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34470 試料 No. 1	-29.12 \pm 0.20	3019 \pm 24	3020 \pm 25	1367-1365 cal BC (1.5%) 1291-1220 cal BC (66.7%)	1386-1340 cal BC (15.3%) 1310-1194 cal BC (79.2%) 1141-1134 cal BC (0.9%)
PLD-34471 試料 No. 2	-27.45 \pm 0.21	3095 \pm 21	3095 \pm 20	1410-1381 cal BC (29.7%) 1343-1306 cal BC (38.5%)	1421-1293 cal BC (95.4%)
PLD-34472 試料 No. 3	-25.39 \pm 0.17	3065 \pm 25	3065 \pm 25	1389-1338 cal BC (40.0%) 1321-1285 cal BC (28.2%)	1410-1261 cal BC (95.4%)
PLD-34473 試料 No. 4	-24.94 \pm 0.15	3066 \pm 22	3065 \pm 20	1389-1338 cal BC (40.6%) 1321-1286 cal BC (27.6%)	1404-1265 cal BC (95.4%)
PLD-34474 試料 No. 5	-25.39 \pm 0.19	2016 \pm 19	2015 \pm 20	44 cal BC-5 cal AD (68.2%)	54 cal BC-30 cal AD (92.0%) 37-51 cal AD (3.4%)
PLD-34475 試料 No. 6	-26.92 \pm 0.11	2035 \pm 19	2035 \pm 20	53 cal BC-2 cal AD (68.2%)	99 cal BC-23 cal AD (95.4%)

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M. and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

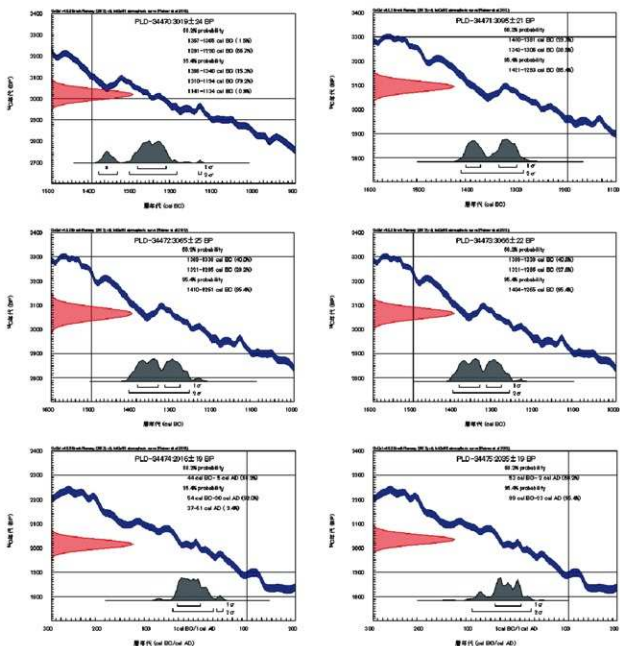


圖 1 曆年校正結果

第2節 町田堀遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン (パレオ・ラボ)

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市申良町に所在する町田堀遺跡は、標高約90mの笠野原台地の北縁辺部に位置し、申良川が遺跡の北側と東側を蛇行する、縄文時代後期～古代の複合遺跡である。ここでは、縄文時代後期のと推定された竪穴住居跡や埋設土器、土器集中などから出土した炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、肉眼で確認・採取された炭化種実2袋(1号住居跡、遺物集中域2)と、放射性炭素年代測定のために抽出された炭化物2点(3号住居跡、中岳Ⅱ式土器近辺)である。遺構の時期は、いずれも縄文時代後期と推定されている。年代測定の結果、3号住居跡と中岳Ⅱ式土器近辺から採取された炭化物は、縄文時代後期後葉～晩期に相当する年代を示した。また、1号住居跡から採取された炭化材も同様の年代を示したため(放射性炭素年代測定の項参照)、炭化種実も同じ時期の試料として扱った。

抽出・同定・計数は、現生標本と比較して、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、公益財団法人鹿児島県文化振興財団に保管されている。

3 結果

同定の結果、木本植物のイチイガシ炭化子葉とコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)炭化子葉、コナラ属炭化子葉、オニグルミ炭化核、ムクロジ炭化種子の5分類群が得られた。また、科以上の詳細な同定ができなかった不明炭化植物が得られた。これ以外に不明の炭化材も得られたが、同定の対象外とした。同定結果を表1と2に示す。

以下に、出土傾向について試料別に記載する。

1号住居跡: イチイガシとアカガシ亜属、コナラ属、

表1 町田堀遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

分類群	採取方法	時期	
		縄文時代後期後葉～晩期	縄文時代後期
イチイガシ	炭化子葉	(4)	(1)
コナラ属アカガシ亜属	炭化子葉	(2)	(1)
コナラ属	炭化子葉	※1※	<1※
オニグルミ	炭化核	(1)	(1)
ムクロジ	炭化種子	(6)	(1)
不明	炭化材	(+)	(+)

表2 町田堀遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

分類群	採取方法	時期	
		縄文時代後期後葉～晩期	縄文時代後期
イチイガシ	炭化子葉	(1)	(1)
不明	炭化植物	(1)	(1)

オニグルミ、ムクロジがわずかに得られた。コナラ属の完形換算個体数は1点であった。

土器集中1号: イチイガシとコナラ属がわずかに得られた。コナラ属の完形換算個体数は1点未満であった。3号住居跡: イチイガシが1点であった。

中岳Ⅱ式土器近辺: 不明炭化植物が1点得られた。次に、炭化種実の記載を示し、図版に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 プナ科

楕円体～長楕円体で、側面観は楔形。先端の突出はあまりない。縦方向に明瞭な溝が1本確認できたが、溝が浅いものや複数あるもの等、変異の幅が大きい。高さ12.4mm、幅8.9mm(PLD-34472)と、高さ12.5mm、幅8.0mm。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 炭化子葉 プナ科

楕円体。上下端はやや平坦。表面は平滑でやや縦皺があるが、深い溝が認められない一群をアカガシ亜属とした。イチイガシの可能性もある。高さ12.1mm、幅10.2mm。さらに遺存度が悪い個体をコナラ属とした。

(3) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

1/2未満の破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に浅い縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖る。内部は二室に分かれる。残存高12.0mm、残存幅9.2mm、残存厚5.4mm。

(4) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 炭化種子 ムクロジ科

完形ならば球形。上部は突出せず、やや平坦。表面は平滑。線状の着点の痕跡がある。残存長7.5mm、残存幅10.8mm。

(5) 不明 Unknown 炭化植物

いくつかの破片に分かれており、年代測定に用いた試料は残存長16mm、残存幅12.9mm(PLD-34473)。扁平で、いくつかの植物遺体が融着したように見える。一部に同心円状の構造が確認されるため、鱗葉類の可能性が考えられたが、鱗葉に特徴的な細胞は観察されなかった。

4 考察

炭化種実を同定した結果、縄文時代後期の遺構および

縄文時代後期後葉～晩期の遺構からは、食用可能なイチイガシとアカガシ亜属、オニグルミ、ムクロジが得られた。イチイガシは2種の住居跡と1つの遺物集中域から得られた。イチイガシは生食可能なドングリ類であり、縄文時代の常緑広葉樹林帯では最もよく利用されている(小畑, 2011)。産出した部位は、食べられる部位である子葉であった。ただし、ドングリ類の果皮は薄く、炭化すると取れやすくなるため、果実の状態では炭化したのか子葉の状態では炭化したのかは不明である。今回は肉眼で確認され、採取された試料であったため検証は難しいが、土壌ごと取り上げて乾燥篩かけを行うか、もしくは土壌水洗を合わせて行くと、果皮の残存の有無を確認できる可能性がある。なお、状態が悪く、コナラ属アカガシ亜属とコナラ属の同定に留めた個体もイチイガシの可能性がある。

ムクロジはアクの成分であるサポニンが含まれているが、種子を煎って食べることもできる。ムクロジは近現代の民俗例で洗剤や薬用としても用いられている(長沢, 2012)。今回、住居跡から炭化した状態で得られたため、何らかの用途に利用されたと考えられる。

中岳Ⅱ式土器近辺から見出された炭化物は、土器に付着したような扁平な炭化植物遺体ではあった。一部が同心円状の構造を呈するため、鱗茎類の可能性が考えられたが、鱗茎に特徴的な細胞は観察されなかったため、科以上の詳細な同定はできなかった。

今回検討したのは肉眼で取り上げられた炭化種実のみであったが、野生植物で利用可能な堅果類が確認され、同定できた個体は遺存状態も良好であった。今後、郊やその周辺など、炭化種実が堆積しやすい土壌に含まれる微細な炭化種実もあわせて検討すれば、当時の食生活や利用植物について、より具体的に明らかにできると考えられる。

引用文献

- 長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑. 443p, ほおずき書籍.
- 小畑弘己 (2011) 東北アジア古民族植物学と縄文農耕. 309p, 同成社.
- 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList). <http://ylist.info>



スケール 1-9.5mm

図版1 町田掘遺跡から出土した炭化種実

1. イチイガシ炭化子葉 (3号住居跡, No. 3, PLD-34472), 2. イチイガシ子葉 (現生: 大分県), 3. イチイガシ炭化子葉 (1号住居跡, No. 8), 4. コナラ属アカガシ亜属炭化子葉 (1号住居跡, No. 8), 5. オニグルミ炭化核 (1号住居跡, No. 8), 6. オニグルミ核 (現生: 東京都), 7. ムクロジ炭化種子 (1号住居跡, No. 8), 8. ムクロジ種子 (現生: 東京都), 9. 不明炭化植物 (中岳Ⅱ式土器近辺, No. 4, PLD-34473)

第3節 町田堀遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1 はじめに

鹿児島県鹿屋市に所在する町田堀遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

試料は、古墳時代～古代？と推定されている弥生1号住居跡と、弥生時代中期と推定されている弥生遺物集中域、縄文時代後期と推定されている1号住居跡から出土した炭化材で、計6点である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、広葉樹のクスノキ、クスノキ科、クリ、クマノミズキ類、ツバキ属の5類群が確認された。結果の一覧を表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl
クスノキ科 図版1 1a-1c (No.6)

やや大型の道管が単独ないし2～4個複合して散在し、晩材部で徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは亜熱帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は、やや軽軟なものから中庸程度まで幅があるが、切削加工は容易で、耐水性や耐朽性、耐虫性は極めて高い。

(2) クスノキ科 *Lauraceae* 図版1 2a-2c (No.7-1)

表1 樹種同定結果一覧

試料番号	遺構名	樹種	形状	年代測定番号
5	弥生1号住居跡	ツバキ属	破片	PLD-34470
6	弥生遺物集中域	クスノキ	破片	PLD-34471
7-1	1号住居跡	クスノキ科	破片	-
7-2		クリ	破片	-
7-3		ツバキ属	破片	-
7-4		クマノミズキ類	破片	-

やや小型の道管が、単独ないし2～4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

クスノキは熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属がある。

(3) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科
図版1 3a-3c (No.7-2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(4) クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall
ミズキ科 図版1 4a-4c (No.7-4)

やや小型で丸い道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は3～4列幅で、縁辺部に方形もしくは直立細胞が2～4細胞ある異性である。以上の特徴からクマノミズキかヤマボウシと思われるが、これ以上の同定は困難であるため、クマノミズキ類とした。

クマノミズキおよびヤマボウシは暖帯から温帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが一般に加工は容易である。

(5) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版1 5a-5c (No.5)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

4 考察

弥生1号住居跡から出土した炭化材は、ツバキ属であった。調査所見では古墳時代～古代？と推測されていたが、年代測定の結果、炭化材は弥生時代中期後葉～後期前半の暦年代を示した。

弥生遺物集中域から出土した炭化材は、クスノキであった。調査所見では弥生時代中期の遺構と推測されており、炭化材の年代測定でも弥生時代中期後葉～後期前半の暦年代を示した。

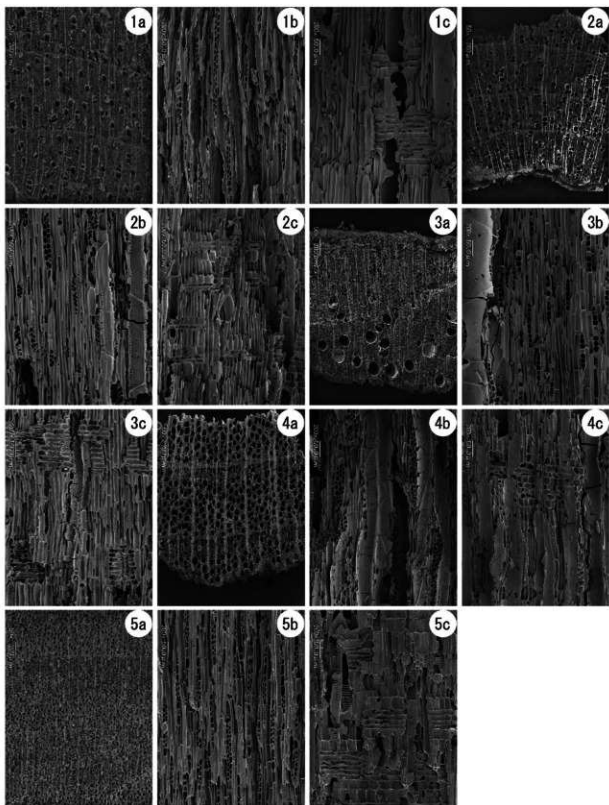
1号住居跡から出土した炭化材では、クスノキ科とク

り、ツバキ属、クマノミズキ類の4分類群がみられた。遺構の時期は、調査所見から縄文時代後期と推定されている。

いずれも試料の用途は不明であるが、住居跡の炭化材は建築部材や燃料材、器具材など、土器集中の炭化材は燃料材の可能性が考えられる。今回の分析で確認された樹種は、いずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木が利用されたと推測される。

参考文献

- 平井信二（1996）木の大自然。394p。朝倉書店。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品
用材データベース－。449p。海青社。



図版1 町田堀遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クスノキ (No. 6), 2a-2c. クスノキ科 (No. 7-1), 3a-3c. クリ (No. 7-2), 4a-4c. クマノミズキ類 (No. 7-4),
5a-5c. ツバキ属 (No. 5)

a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面

第4節 町田堀遺跡出土の赤色顔料について

鹿児島県立埋蔵文化財センター 武安雅之

1 試料

3号地下式横穴墓内から出土した赤色顔料塊

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

以下の機器を使用して、形状を観察し撮影を行った。

双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）による
10～80倍観察

金属顕微鏡（ニコン製 ECLIPSE L150）による
100～200倍観察



図2 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）

(2) 成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000, X線管球ターゲット：ロジウム, X線照射径 100 μ m）を使用し、次の条件により分析を行った。

X線管電圧：15/50kV 電流：自動設定

測定時間：200秒 X線フィルタ：なし

試料セル：なし パルス処理時間：P3

定量補正法：スタンダードレス



図3 形状観察結果（金属顕微鏡）

3 結果

試料の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）とFPM定量結果、金属顕微鏡による形状観察結果の1例である。

(1) 左室左側

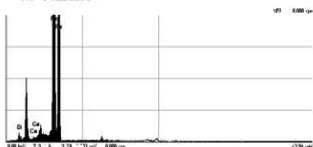


図1 スペクトルチャート

表1 FPM 定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
ケイ素	K	8.97	2.39
カルシウム	K	2.66	0.11
鉄	K	11670.44	97.51

(2) 左室中央



図4 スペクトルチャート

表2 FPM 定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
ケイ素	K	20.29	6.31
カリウム	K	2.21	0.14
カルシウム	K	1.12	0.06
マンガン	K	22.44	0.21
鉄	K	9082.15	93.28



図5 形状観察結果（双眼実体顕微鏡）



図6 形状観察結果（金属顕微鏡）

4 考察

蛍光X線分析の結果から、鉄 (Fe) の強いピークが見られる。また、形状観察の結果から針状結晶が多数見られる。これらのことから、この赤色顔料は鉄 (Fe) を主な成分とするパイプ状ベンガラの可能性が高い。

第6章 総 括

第1節 発掘調査の成果

平成26年度以降の町田堀遺跡の調査をもとに、各時代の成果を概観してみたい。なお、平成25年度調査の成果(註1)も適宜織り込むことにより、町田堀遺跡の全体像を浮かび上がらせていきたい。

1 縄文時代早期

町田堀遺跡での最も古い遺構・遺物は縄文時代早期のものである。本遺跡の西側の台地縁線で20基の集石遺構が検出された。集石遺構は、平成27年度に調査を行った第1調査区の中でも西側に寄った地域、なかんづく北側部分と、平成28年度に調査を行った第3調査区の中央部付近に位置していた。この遺構の立地を考える場合に参考となるのは区層上面のコンターである。それによると、第1地点の北側のほぼ中央部に径5m程度の凹みが見られ、その凹みを取り囲むように集石遺構が所在し、南側の低くなった部分には見られない。また、第3地点では、調査区のほぼ中央の最も高い部分よりも一段低い南東側に列状に所在し、北側の急傾斜で谷に向かって下がる部分には見られない。これらのことから、最高所を避けて、それほど急傾斜でない比較的稳定した場所に設けていることがわかる。

この遺構の構成礫数は、平均で53.4個、多いものは225個であった。また、明確な掘り込みが見られるものはなく、平坦に置かれたような状況である。礫の広がる範囲は50cmから4m程度と差が大きい。高低差は10cmから20cm程度である。炭化物やタールの付着はあまり見られなかった。熱破砕確や赤色化した礫がそれほど多くない、平坦地に集まっていることなどから、調理場として活用された場所か、調理場の使用前後の礫を集めた場所かは明確にできなかった。なお、使用された礫は、安山岩や砂岩が多かった。

次に、この時期の土器について見てみよう。縄文時代早期の土器は、第4章第1節で述べたように、1類から3類に分類した。1類土器は円筒形平底の土器で、口唇部は丸みを持つ。外面は全体が貝殻条痕によって施文されている。口縁部付近は横方向、それより下部は右下がりの地文の上に重ねた左下がりの条痕文を間隔置いて施している。内面はナデ調整である。円筒形条痕文土器とか中原式土器とか呼ばれているものである。

2類土器も円筒形平底の土器である。口縁部は直立あるいは内湾し、口唇部は丸みを持つものと平坦面をなすものがある。外面にはさまざまな文様の貝殻刺突文が付され、内面はナデ調整である。下刺式土器と考えら

れる。同じ系統として、外面に単節の斜線文が施され、内面にはミガキの見られるものもあり、それらは桑ノ丸式段階のものと考えられる。

3類土器は円筒形平底で、口縁部がラッパ状に外反する土器である。外面に沈線と捺糸文が施されるもの、貝殻刺突文や貝殻条痕文、沈線の間を捺糸文で満たすものなどがある。中には貝殻引文の見られるものもある。内面は丁寧なナデである。塞ノ神式土器と考えられる。

図示した石器は遺構内出土の遺物も含め、石鏝25点、部分磨製の尖頭状石器1点、彫器1点、搔器3点、楔形石器1点、加工痕・使用痕のある剥片5点、石核3点、磨製石斧4点、打製石斧5点、剥片1点、礫器2点、磨・敲石類(蜂の巣石1点含む)18点、石鏝8点、砥石類6点、石皿2点の計85点である。

石鏝は浅い凹基の三角形鏝、楕形鏝が多く、サスカイト類似の緻密な安山岩、チャート、珪質頁岩、黒曜石Ⅲ類(熊本県人吉市桑ノ木留産)、黒曜石Ⅳ類(大分県姫島産)が利用されている。

彫器、搔器、楔形石器などその他の小型剥片石器には、黒曜石Ⅰ類(薩摩川内市上牛鼻・いちき串木野市平木場産)、黒曜石ⅡC類(鹿児島市三船産)、珪質頁岩、チャートなどが利用されている。

磨製石斧は扁平小型の刃部磨製石斧が主体で、小型の斲状のものもある。いずれも10cm未満の小型型で加工具とみられ、伐採具とみなしうる資料がない。打製石斧としたものは、磨製石斧の未製品等の可能もある。いずれもホルンフェルス製である。

磨・敲石類は、自然円礫を利用するものが多い。石材は粗面の安山岩がほとんどで、花崗岩、砂岩が各1点のみ含まれる。

石鏝はいずれも粗略な打ち欠きの石鏝で、安山岩、砂岩、ホルンフェルスの扁平な凹円礫を用いている。

2 縄文時代後期・晩期

後・晩期の遺構としては、堅穴住居跡4軒、埋設土器3基、土坑22基、石器集積遺構1基、石斧を多く含む遺物集中域1か所が検出された。この時期の広がり、第1調査区から第2調査区までまっせんなく及ぶが、特に西側からは遺構が密に検出された。

堅穴住居跡は第1地点の西側で2軒、東側で1軒、第2地点で1軒それぞれ検出された。円形や楕円形を呈しており、1号住居跡が2.55m×2.53mのほぼ円形で、5類の中岳Ⅱ式を多く含む遺物が出土した。堅穴の内外からは柱穴を確認することができなかった。2号住居跡

は $3.50(+a)m \times 3.41m$ の楕円形である。遺物の出土も多かったが、土器のほとんどは5類の中岳Ⅱ式である。竪穴内に1基のピット、竪穴住居を囲むように5基のピットが検出されたが、竪穴住居に伴うものか否かは明確にできなかった。3号住居跡は3.2m程度の円形を呈すると考えられる。3軒の住居跡から出土した土器から、これらは、後期中岳Ⅱ式期の所産と考えられる。それに対して4号住居跡は $2.25m \times 1.80m$ の楕円形である。柱穴もなく、深さもわずかに9cmである。遺構内出土の土器はなかったが、埋土の状況よりこの期の竪穴住居跡と判断した。

3基の埋設土器は、いずれも掘り込みの底面に若干の余裕があるもの、胴部付近は、ぴったりと納まるように埋設されていた。残念ながら、後世の耕作等により口縁部など土器上部を欠くものも見られた。これらの土器は、肥厚した口縁部に沈線が1条巡ること、胴部の屈曲部の上部に1条の沈線の溢るものと見られないものがあることなどから、5類の中岳Ⅱ式土器と考えられ、時期も縄文時代後期と考えられる。

22基の土坑は大きく4つのタイプに分類でき、それらはさらに2つに分けられるものもある。a類は縦横長に比較して深さが相対的に浅いもの、b類は縦横長と深さが相対的にほぼ同じのもの、c類は縦横長と比較して深さが相対的に深く、柱穴状の断面形状を呈するもの、d類は縦横長と比較して深さが相対的に浅く、全体形状が皿状や不定形のものである。

a類は8基が含まれる。深さは10~30cmである。b類は4基が含まれる。深さは40~70cm程度である。c類は5基が属する。深さは40~50cm程度である。d類は5基が含まれる。深さは5~15cm程度である。これらの土坑の埋土中から出土した土器が中岳Ⅱ式土器であることから、これらの土坑はこの時期の遺構と捉えておきたい。

石器集積遺構は、 $2.26m \times 1.90m$ の広がりを持ち、高低差は20cmほどである。掘り込みは見られない。形態的には大小2つの集中域からなっており、礫構成には自然礫の割合が少なく、石皿や台石、磨石、敲石、石斧などの石器片が多いことが大きな特徴である。

石斧がまとまって出土した集中域(註2)が1か所検出された。石斧だけが集積していたのではなく、土器や礫などが集中して出土した中に、石斧が別状に見られたものである。1.75m \times 1.56mの範囲に広がっており、高低差は約26cmである。全てが石斧というわけではなく、破砕した自然礫や磨石、土器などの中に、幅約0.6m、長さ約2mの北西-南東の帯状の範囲にあり、北西端と南東端にそれぞれまとまっている状況であった。検出の状況からは、意図的なものが感じられる。打製石斧が6点出土し、内訳は撥形のもの4点、短冊形1点、靴

形1点、スクレイパー2点それぞれ磨・敲石1点であった。このほかに、土器が合わせて105点出土している。土器はいずれも中岳Ⅱ式であることから、これもその時期のものと考えられる。

土器は、後期・晩期のものを合わせて4類~7類に分類した。4類土器は、外面の口縁部下部あるいは胴部にかけて沈線を付す深鉢で、鈎手状繫ぎ文などから考えて指筒式に比定できる。

5類土器は、深鉢は胴部から口縁部にかけて全体的に外反し、口縁部は肥厚して内湾・直行、あるいは外反する。口唇部は平らに面取りされたものが多く、口縁部の内面に明瞭な段のあるものもないものがある。口縁部に沈線の溢るものや刺突文・凹点のあるもの、無文のものなどがある。胴部は張り、胴部の屈曲点の上部に沈線が付されるものもある。底部には平底のほか、上げ底も見られる。浅鉢も口縁部は外反し、胴部が張り、底部は平底であることから、概ね中岳Ⅱ式土器に比定できる。本遺跡の中心をなすものである。

6類土器は器壁が薄く、口縁部が大きく外反し、胴部にかけては大きく膨らむ浅鉢である。黒川式土器に比定できる。数は少ないが、非常に精緻な作りである。

7類土器は口縁部に突帯が付くもので、突帯に刻目が見られるものもあり、一つの類型としてまとめた。刻目突帯文土器と考えられる。

これらのほかに、土器片の周囲を円形に加工した円盤状土製加工品も10点ほど出土した。

3 弥生時代

遺構や遺物の広がる範囲は第1調査区に限られており、中でも東側の遺構密度が濃く、相対的に西側は薄いといえる。検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立住居跡1棟、土坑1基である。

竪穴住居跡のうち第1調査区の西側で検出された1号住居跡は、 $2.44m \times 2.18m$ の隅丸方形で、大量の遺物が出土した。深さ50cmほどの4本の主柱穴を持ち、3方向にベッド状の張り出しがある。一段低い中央部には大型の土坑が見られる。東側の2号住居跡は $2.11m \times 1.74m$ の小型の遺構で、竪穴内部と周囲には柱穴は見られないが、竪穴内に土坑が見られる。両住居跡は60mほど離れている。時期は、1号住居跡から出土した土器が中津野式土器であることから、少なくともこの住居跡は弥生時代後期の終末に位置づけられる(註3)。

この2基については本文中でも示したように、検出面が低いことから、本来はまだ周囲に広がりがあった可能性も考慮しておきたい。

掘立住居跡は、第1調査区の東端で検出された。検出された部分は1間 \times 2間であるが、柱穴が調査区域外に延びる可能性が考えられる。2号竪穴住居跡の10m

ほどの場所に位置していることから、2つの遺構の間には何らかの関連性があることも考えられる。

土坑は1基検出された。場所は第1調査区の東側で、Ⅱ層中で検出された掘立柱建物跡が集まる区域である。2.06m×1.30mの楕円形であり、深さは32cmである。

遺物が集中して出土した場所があり、遺物集中域として捉えた。山ノ口式土器の甕や鉢、壺などとともに砥石や磨石が出土したことから、調査に際しては竪穴住居跡の可能性を考えたが、明確な掘り込みがなかったことから、遺構としては認定できなかった。

土器は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器のほか、土製品として土製勾玉が出土した。

甕形土器は、口縁部や口縁部の下部に刻目突帯の付くものが見られる。口縁部は外反ないし内湾しており、時期的な差異のあることが考えられる。刻目のない突帯も見られる。前期に位置づけられる可能性が大きい。次に、逆「L」字状の口縁部を持つものがあり、引き続いて「く」の字状の口縁部を有するものが見られる。逆「L」字状、「く」の字状のものともに口唇端部が浅く凹んでいるものとそうでないもの両方が見られる。胴部に細い沈線が巡るものや、頸部を含めて三角突帯が巡るものも見られる。底部は充実した脚台を持つものである。また、「く」の字状の口縁部を持つものには、大型の甕形土器もある。

鉢形土器は、口縁部あるいはその下部に突帯を巡らすもので、口縁部は直立のほか、外反、内湾するものなど、変化に富む。

壺形土器にはいくつかのタイプが見られる。1つは口縁部が逆「L」字状に折れ曲がったもの、もう1つは大きく外反した口縁部の口唇端部が浅く凹んでいるもの、いま1つは小さく外反した口縁部を持つものである。逆「L」字状のものの中には、口唇部に刻目や沈線、櫛波状沈線が描かれるものも見られる。胴部上部に、幾重もの沈線や波状の沈線が描かれるものもある。そのほかにも、頸部や胴部に沈線で文様が描かれているものもある。また、胴部の上部に三角突帯が付されているものも見られる。底部は、基本的に安定した平底で、脚台気味に厚いものや若干上げ底となるものもある。

これらの土器は弥生時代中期に位置づけられるもので、逆「L」字状の口縁部を持つ甕形土器は入来式土器、「く」の字状の口縁部を持つ甕形土器や壺形土器・鉢形土器の大半は山ノ口式土器(註4)であると考えられる。

1点出土した土製勾玉は尾部を欠くが、頭部は丁字頭であり、全体的に丁寧な作りで整ったものである。2kmほど西側に位置する田原原ノ上遺跡(註5)から出土しているものと、極めて類似している。

4 古墳時代

古墳時代の遺構や遺物が検出された範囲は第2地点を中心とする。この区域は、平成25年度に調査が行われ、地下式横穴墓や円形周溝墓、溝などが集中して検出された部分の隣接地である。遺構は、地下式横穴墓4基、溝4基(平成25年度に検出されていたものを含む)のほか、破砕された土器片が集中して出土した祭祀に係わると考えられる遺構(土器破砕祭祀遺構)も見つかった。

1号地下式横穴墓は市道部分で検出されたが、道路の敷設工事により大部分は破壊されており、残存部分ごくわずかであった。それでも竪坑部分と支室部分が明確に検出されたことの意義は大きいと考えられる。狭い羨道も検出され、支室は平入りで極めて小規模なものであることが判明した。竪坑は0.53m×0.32m、羨道は0.47m×0.20m、支室は1.48m×0.7mであった。支室内から鉄製の刀子が1点出土した。2号地下式横穴墓は、竪坑が2.08m×1.13m、支室は2.10m×1.32m、平入りで竪坑と支室がほぼ平行な作りといえ、羨道は確認できない。3号地下式横穴墓は竪坑が1.27m×0.62m、支室は1.12m×0.58mで、床面は竪坑の最下部よりも13cmほど高い位置に、段を設けるようにして作られている。支室中央から南側にかけて見られた赤色顔料は、分析の結果、パイプ状ベンガラであることが判明した。4号地下式横穴墓は、竪坑は1.95m×1.20m、羨道は0.96m×0.56m、支室は2.03m×0.60mであった。支室の天井は約30cmと極めて低い。

4基検出された溝のうち、平成25年度の調査で確認されていたのは1号溝と2号溝であり、そのうちの2号溝は地下式横穴墓を間に挟んだ状態で検出されたことから、A・B2つに分岐した溝としてとらえられていた。平成28年度の調査で、地下式横穴墓を挟みながらも一連の溝として繋がったことから、一つの溝として改めて2号溝と呼称することとした。

1号溝は、平成25年度の調査で1号溝状遺構として掲載されていたが、今回、平成28年度の調査でこの溝の2つの端が確認されたことになる。溝の南側端の部分の埋土の中ほどから壺形土器が出土した。2号溝の西側は市道の敷設工事によって失われている。今回検出した南側の埋土中ほどから、2点の壺形土器がほぼ完全に復元される形で出土した。この中の1点の中ほどには穿孔が見られ、意図的に開けられたものと考えられる。3号溝は南側の端は確認されたものの、西側は市道の敷設工事により失われている。南側の端付近では、2か所の埋土中から壺形土器と鉢形土器が出土している。4号溝は1号溝の南側に隣接しており、北側の端部が検出されたものの、大部分は市道の敷設工事により失われている。

1号溝の南側から4号溝の東側端部にかけての上部で、土器片がまとまって出土した。これらの土器片は器

壁が一様に厚く小片の土器が多かったため、接合により完全に復元することはできなかったが、図上では大型の壺形土器として復元することができた。大型の壺形土器を中心とした意図的破壊が考えられたことから、平成25年度調査でも検出された土器破壊祭祀遺構として捉えておきたい(註6)。この遺構は、土器片群の下部や近辺に地下式横穴墓が見られないことから、墓域全体に対して行われた祭祀である可能性も考えられる。

土器は、壺形土器、鉢形土器、壺形土器のほか、高坏や手捏ね土器も出土した。

壺形土器は、口縁部が外反し、口唇端部が丸みを帯びていたり、平らに面取りされていたり、中央部が幾分凹んでいたりと変化が見られる。内面には明確な稜が見られるものと鈍い稜のあるものがある。器面調整にはハケ目調整が多く見られ、外面には頸部から口縁部に向けてハケ目を跳ね上げて調整するものもあり、東原式土器の特徴といえる(註7)。頸部のやや下部に特徴状突起が巡るものも見られる。底部は中空脚台の付くもので、低い上げ底から高い上げ底まで見られる。

鉢形土器は、壺形土器に類似したものやそうでないものがある。壺形土器に似ないものは、口縁部が大きく開くものやコップ形のものがある。手捏ね土器は、鉢形土器を模したものが多く見られるように感じられる。

壺形土器は、口縁部がそれほど広がらずに長く立ち上がるものと、大きく広がるものが見られる。底部は丸底や丸底気味の狭い平底が多く、全体的な形状は砲弾型となるものと、球形状となるものがあるほか、高さの割に胴部が大きく膨らむものなどがある。胴部に、板による刻目を付す突帯や沈線の浅くのものもある。

高坏は、坏部が比較的浅く、口縁部が外反するものである。内面に鈍い稜の見られるものがあるほか、外面に明確な稜を持ち、口縁部が内湾気味に外反するものも見られる。1点のみの出土であるが、裾広がり気味の脚部には3か所に孔が開けられている。

5 古代以降と時期不詳の遺構・遺物

Ⅱ層をベースとした埋土を有し、Ⅲ層上面以下で検出された遺構として、掘立建物跡5棟と道跡1条がある。

5棟の掘立建物跡は、1棟が1間×3間の建物で、それ以外の4棟は2間×2間の総柱建物である。また、その4棟のうち2棟には、中央部または両側部に複数の柱穴があり、同時併存であるか建て替えてあるのか、同時併存であった場合でも、いずれかが東柱であったのか、または、屋根の加重を考えて柱を2本にして重圧の拡散を図ったのか、不明である。

1号掘立建物跡は2間×2間の総柱建物であり、東側及び西側の柱穴が2基ずつ見られる。5棟の掘立建物跡の中で、この1棟のみ柱筋がほぼ東西方向で、ほか

の建物とは異なっている。柱間の距離は、東西方向の中央の列をもとにする東側の手前のもので1.55m～1.71m、奥のもので1.84m～1.90m、西側の手前のもので1.65m～1.82m、奥のもので1.90m～2.02mとなる。また、南北方向は1.48m～1.67mとなる。

2号掘立建物跡も2間×2間の総柱建物であるが、柱筋が1号掘立建物跡とは異なり、他の3号～5号とはほぼ同じである。柱間の距離は、東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.88m～2.03m、西側で1.75m～1.92mとなり、南北方向は1.83m～2.22mとなる。

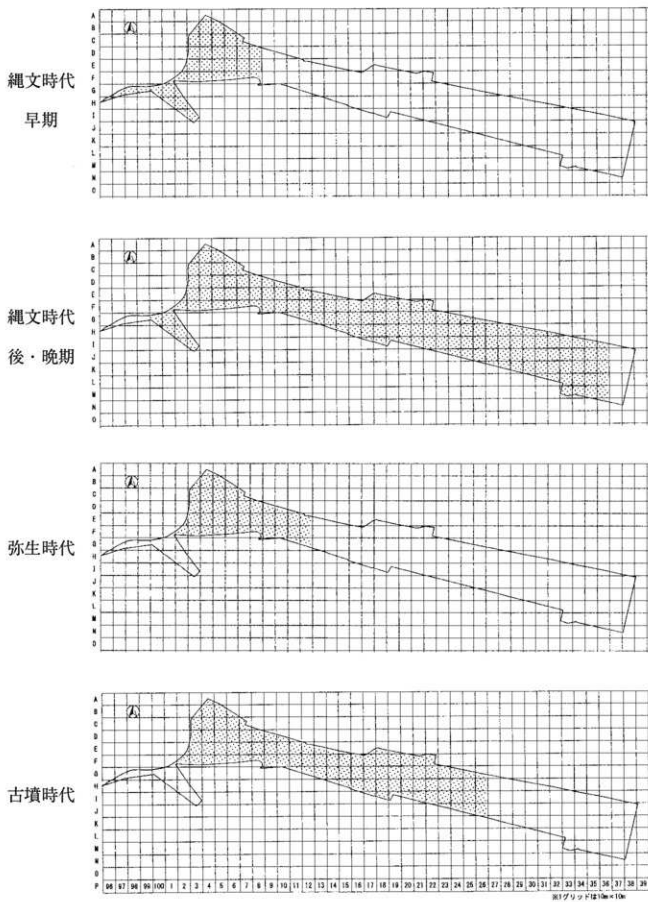
3号掘立建物跡も2間×2間の総柱建物で、2号などと柱筋を揃えている。東西方向の中央部にそれぞれ2基ずつの柱穴が見られる。東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.76m～2.00m、西側で1.96m～2.13mとなり、南北方向は1.73m～1.96mとなる。

4号掘立建物跡は2間×2間の総柱建物で、2号などと柱筋を揃えている。東西方向の中央の列をもとにすると、東側で1.33m～1.38m、西側で1.36m～1.47mとなり、南北方向は1.55m～1.65mとなる。

5号掘立建物跡は1間×3間の建物で、1号を除く2～4号建物と東西方向の柱筋を揃えているように思われる。また、4号に近接して建てられている。柱穴の位置関係には、若干、揃わないところも見られる。また、パイプの敷設工事によるものと思われ掘削により、柱穴が検出できなかったところもある。柱間の距離は、北側で1.12m～1.30m、南側で1.15m～1.80m(検出されなかった部分の推定値は除く)となり、南北方向は推定値も含め2.40m～2.5mとなる。

この掘立建物跡の配列は、1号が柱筋が異なっているものの、それ以外の建物は同じである。総柱建物間の距離は2号～3号間約5.3m、2号～4号間約5.6mとほぼ等距離にあるとみなして良い。4号と5号の間は約1.1mほどであるが、この2種類の建物は、形状から機能が異なるものと考えられる。5号以外の建物が全て総柱建物であることは、この掘立建物跡群の特色である。また、1～3号については、柱穴列が複数になっている。発掘調査時は、どの建物跡も建て替えてという解釈であった。しかし柱穴の深さや位置関係等を考慮すると、2号は建て替える可能性が残るものの、1号と3号は重複する柱穴は添え柱になると判断した。これらの総柱の建物跡は倉庫群、5号建物跡は、それを管理する建物として捉えることも可能であろう。

これらの掘立建物跡の時期については、検出面が低いということもあり明確ではない。柱穴の埋土のベースとなるⅡ層は、縄文時代後期から古代までの遺物包含層であることから、ここではその時間幅を考慮しておきたい。ただし、住居内出土の土器はほぼ中岳Ⅱ式土器期の



第178図 時期別変遷図

ものであったので、縄文時代後期の所産である可能性も視野に入れておきたい。遺構周辺の遺物包含層内出土の土器は、古代の資料が少なく、縄文時代後期・弥生時代・古墳時代のものが多かった。

次に、1条の道跡であるが、平成25年度調査で検出されていた1号古道の延長線にあるものと考えられる(註8)。東側からG-25区まで延びて来ていた1号古道をそのまま延長すれば、平成28年度に検出されたG-18区にはほぼ繋がるようであることから、そのように考えて大過はないであろう。

古代及びそれ以降の遺物の出土は少ない。土師器の轆や坏が出土したほか、須恵器の甕の破片、それに中世と考えられる焙烙の柄の部分が出土した。

II層出土の遺物として図示した出土土器は、遺構内出土のものも含め、石鏃23点、磨製石鏃4点、磨製石製加工品1点、石匙1点、石鏢1点、加工痕・使用痕のある剥片17点、石核1点、石斧5点、磨製石斧19点、打製石斧57点、石包丁1点、スクレイパー12点、磨・敲石類56点、石錘1点、砥石類8点、石皿15点、石皿破片の可能性のある礫片1点、台石1点、軽石加工品6点、原礫5点のほか、異形石製2点、管玉1点、石製加工品2点の総計240点である。

石鏃は小型の資料が主体を占め、黒曜石IV類(佐賀県伊万里市腰岳産)、サスカイト類似の緻密な安山岩、ホルンフェルス、黒曜石III類(熊本県人吉市桑ノ木津産)、珪質頁岩、水晶などが利用される。磨製石鏃は頁岩及び粘板岩製で、根柢み部分を薄身に加工する特徴がある。

その他的小型剥片石器の石材には、黒曜石II C類(鹿児島市三船産)、チャート、黒曜石IV類(佐賀県伊万里市腰岳産)、玉髄などがみられる。

磨製石斧には両凸刃の乳房状を呈する資料が多く、石材は砂岩製の2点を除きホルンフェルス製である。打製石斧は、基部が細く括れ刃部が幅広い凹刃のラケット形が多く、撥形、短冊形のほか、有肩石斧、分銅形も出土している。石材は、横刃形の粗製のスクレイパーも併せ、大多数がホルンフェルス製である。

磨・敲石類には磨面、敲打痕の顕著でない資料も含まれる。本文中で指摘したように石器製作具の可能性の高い資料もある。石材は約半数を粗面の安山岩が占め、花崗岩・砂岩・凝灰岩、粘板岩がこれに続く。

砥石類には多様な形態がみられ、一部は古代以降の遺物が含まれる可能性がある。石材は砂岩が多数を占め、ホルンフェルス、安山岩が各1点ずつ含まれる。

石皿・台石は大多数が被熱・破砕しており、全形を知りうる資料は少ない。石材は凝灰岩が多数を占め、花崗岩がこれに次ぎ、砂岩、安山岩が各1点みられた。

石包丁はホルンフェルス製で、擦り切りにより穿孔されている。前記の磨製石鏃同様、一般的には弥生時代に

類出する石器である。

異形石器2点は黒曜石V類(大分県姫島産)、黒曜石IV類(佐賀県伊万里市腰岳産)を素材とする。

管玉の石材は前回報告例と同じ、結晶片岩緑色岩(クロム白雲母岩)の可能性がある。

石製加工品として報告した1066は、「石冠」に類似する特徴をもつ。縄文時代後・晩期に中部山岳地域を中心に近畿から東北地方南部に分布する「石冠」は、呪術的・儀器的遺物ともされる。近畿以西の西日本は分布の空白域とされてきたが、福岡県、熊本県、宮崎県で出土が報告されている。本県でも本例のほか、干迫遺跡(始良市加治木町)、株原貝塚(重水市)で出土している。市ノ原遺跡第5地点(日置市東市米町)、藤平小田遺跡(南種子町)の「三角鋸形石製品」として報告された資料も含め、伝播や受容の背景、隣接地域及び遠隔地との交渉のあり方について検討する必要がある。(註9)

第2節 町田堀遺跡全体の遺構配置

町田堀遺跡の縄文時代後期検出主要遺構を第180図のようにまとめた。刊行済みの町田堀遺跡報告書(註1)と本報告の遺構を合わせて、堅穴住居跡7軒、埋設土器15基、石斧集積遺構2基、集石遺構12基、土坑48基となる。これらの遺構の大半が、東南部九州の縄文時代後期後半の中岳Ⅱ式期に帰属するものであるが、一部鳥井原式や御旗式期のものも含まれることから、集落は複数の土器型式期の幅の中で営まれたものと考えられる。

ここでは堅穴住居跡と埋設土器との関係を見ていきたい。前回報告分では、堅穴住居跡と埋設土器とは10m~35m離れて位置していた。本報告書掲載分で見ても10m~20mの距離を置いている。埋設土器15基すべてが正位置ということも鑑みると、埋設土器を活用して子どもの埋葬もしくは再葬を行った可能性が高く、居住域と墓域とをやや離して形成していたことが推測される。

次に、古墳時代の墓域について第181図で見る。遺跡全体がこの時期は墓域であり、地下式横穴墓が92基、円形周溝墓が7基確認されている。前回報告分での形態分類に基づき、地下式横穴墓の細分類を行う。

大分類

- 1類: 玄室が中規模(1.5m前後)
- 2類: 玄室が大規模(1.7m以上)
- 3類: 玄室が1m以下の極小
- 4類: 玄室が極小で羨道部の取り付けが堅坑の短辺に付く

小分類

- ①: 羨門が堅坑とはほぼ同じ幅
- ②: 羨門が堅坑より幅が狭い



第179図 遺跡の残存範囲図

細分類

- A：玄室床面が堅坑床面と平坦
- B：玄室床面が堅坑床面から傾斜する
- C：玄室が堅坑の一部から段落する
- D：玄室が堅坑より一段上にある

それぞれの組合せで分類すると、18類に細分される。

- 1-①-A類：14基
- 1-①-B類：11基
- 1-①-C類：1基
- 1-②-A類：14基
- 1-②-B類：4基
- 1-②-C類：5基
- 2-①-A類：7基
- 2-①-B類：1基
- 2-①-C類：7基
- 2-②-A類：12基
- 2-②-B類：2基
- 2-②-C類：4基
- 2-②-D類：1基
- 3-①-A類：1基
- 3-①-C類：2基
- 3-②-A類：2基
- 3-②-C類：2基
- 4-②-A類：2基

1類が49基、2類が34基、3類が7基、4類が2基となった。前回報告から4基増えただけなので形態分類の概要に大差はないが、今回の細分類ではDが新たに加わった。漢道より一段高い場所に玄室が設けられている。町田堀遺跡では92基中21基が漢道より玄室が段落しているという特色があったが、1基だけは逆である。埋土より堅坑の掘りすぎによるものとは考えられない。同じ鹿屋市に所在する立小野堀遺跡の地下式横穴墓には、この形態が数基存在している。

第3節 遺跡の残存状況

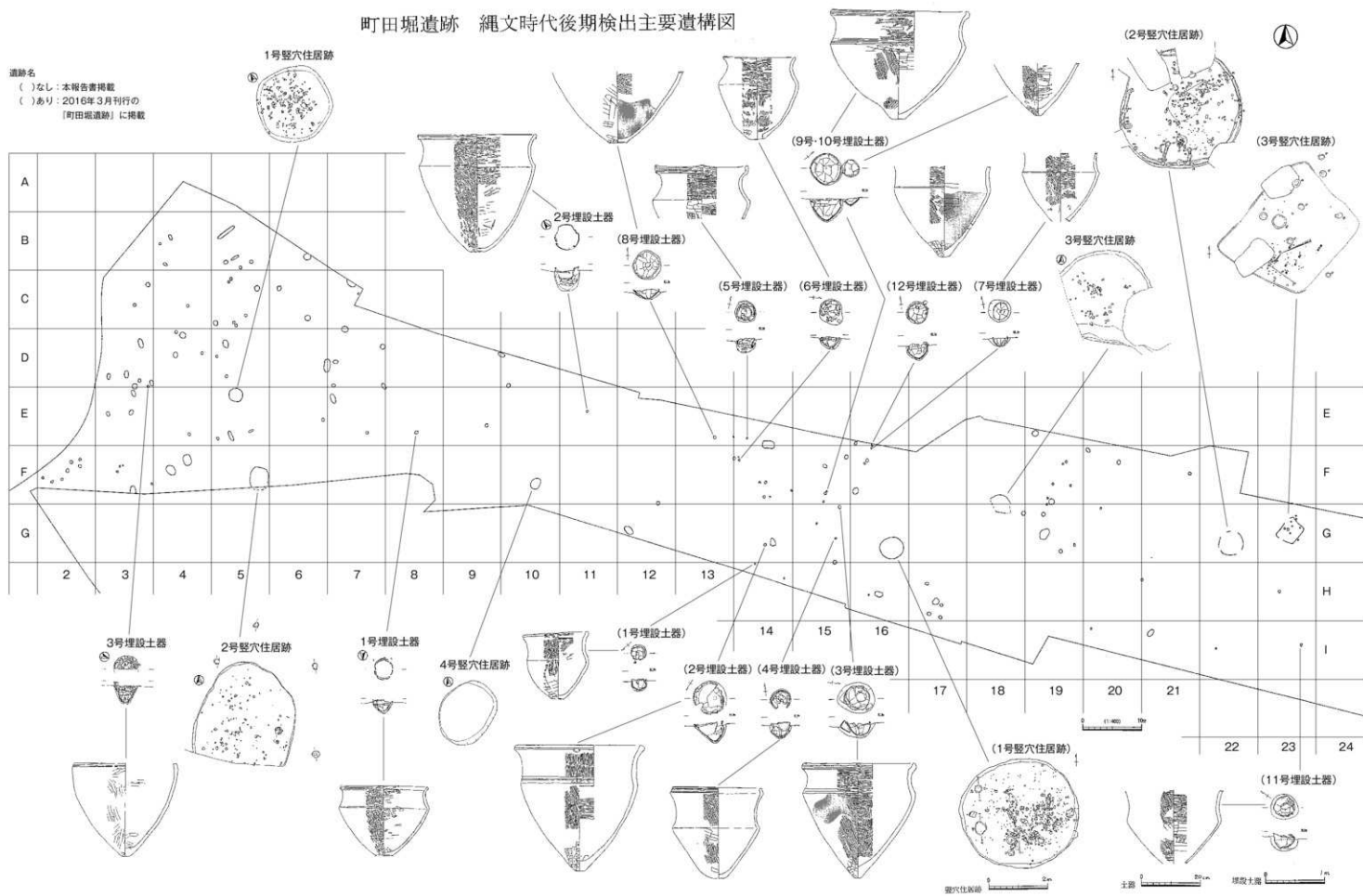
第179図は町田堀遺跡の残存状況を示したものである。東九州自動車道建設に伴って調査が行われた区域の外側には、まだ、埋蔵文化財包蔵地が広がっていることから、遺跡が残存している可能性が高い。

【註】

- 1 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(7)
- 2 石斧だけの集積ではなかったことから遺物集積域として整理した。
- 3 中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ？-鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器-』鹿児島大学総合研究博物館 2015
- 4 註3に同じ
- 5 鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016『田原迫ノ上遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(5)
- 6 註1に同じ。なお、縄文時代後期中の中岳Ⅱ式土器も多く出土しているが、大型の壺形土器がほぼ完形に復元できたことから、この大型壺を墓前で粉々に破砕していたことが考えられたため、このような位置付けを行った。3号溝付近に中岳Ⅱ式土器の堅穴住居跡が検出されたことから、この付近は中岳Ⅱ式期の集落跡であり、中岳Ⅱ式土器もそれを裏付けているものと考えられる。
- 7 註3に同じ
- 8 註1によると、東側に続くと考えられている。この道(跡)をさらに東に伸ばしていくと、現在調査中で古代の掘立柱建物跡などが多く検出されている川久保遺跡方面へと延びる可能性がある。
- 9 中島栄一「石冠・土冠」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』1995 雄山閣
小島俊彰「三角埴形土製品」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』1995 雄山閣
九州縄文研究会鹿児島大会実行委員会事務局『第22回九州縄文研究会鹿児島大会 縄文時代における九州の精神文化発表要旨資料集』2012 九州縄文研究会・南九州縄文研究会

町田堀遺跡 縄文時代後期検出主要遺構図

遺跡名
 ()なし：本報告書掲載
 ()あり：2016年3月発行の
 『町田堀遺跡』に掲載



第180図 縄文時代後期検出主要遺構図

写 真 图 版



① 1号集石検出状況 ② 4号集石検出状況 ③ 5号集石検出状況
 ④ 6号集石検出状況 ⑤ 2号集石検出状況 ⑥ 3号集石検出状況
 縄文時代早期の遺構 1

図版 2



① 7号集石検出状況 ② 9号集石検出状況 ③ 10号集石検出状況
④ 11号集石検出状況 ⑤ 12号集石検出状況 ⑥ 13号集石検出状況
⑦ 14号集石検出状況 ⑧ 15号集石検出状況

縄文時代早期の遺構 2



① 16号集石検出状況 ② 17号集石検出状況 ③ 18号集石検出状況
 ④ 19号集石検出状況 ⑤ 20号集石検出状況 ⑥ B-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 173)
 ⑦ D-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 182) ⑧ A-4区 遺物出土状況 (遺物 NO. 146)
 縄文時代早期の遺構 3

図版 4



① 1号竪穴住居跡検出状況 ② 1号竪穴住居跡断面状況
③ 1号竪穴住居跡遺物出土状況 ④ 1号竪穴住居跡完掘状況
縄文時代後期の遺構 1



① 2号竪穴住居跡検出状況 ② 2号竪穴住居跡断面状況 ③ 2号竪穴住居跡完露状況
 ④ 3号竪穴住居跡検出状況 ⑤ 3号竪穴住居跡断面状況 ⑥ 3号竪穴住居跡完露状況
 ⑦ 4号竪穴住居跡検出状況 ⑧ 4号竪穴住居跡完露状況

縄文時代後期の遺構 2